碧い空に向かって

泡泡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
碧い空に向かって

【Ｎコード】
Ｎ７１６４Ｗ

【作者名】
泡泡

【あらすじ】
血塗られた戦場から帰って来た青年が、久しぶりに会う顔馴染みとの日常と事件。
はたして彼らの行く末は・・・・。現在“零の軌跡”へ

登場人物その1（前書き）

懲りずに書く

登場人物その1

主人公＋オリキャラ

名前：クロウ（偽名）理由は名前なんて名乗る必要のなかったから。

性別：男性　身長１８０ｃｍ　体重７５ｋｇ

容姿：肩まで伸びている白髪を雑に革紐で結ぶ。顔はきつね顔の細い顔つきをしている。

性格：困っている人を助ける基本的にいい人。戦闘では冷静で変わりつつある戦況にも対処できる。

年齢：原作時２４歳（本当は違うが）

戦闘能力：一対数千という圧倒的不利な状態でも擦り傷で帰ってくることができる。武器は２ｍほどの大剣だが切るというより叩き潰すので鋭利ではなく鈍器に近いものを使用していた。

今は二丁拳銃になっている。本人曰く「非力な人が撃とうとしたら肩が骨折する」だそうだ。イメージ的にマグナムのような威力にデザートイーグルのような外見。

大まかな履歴

１０代の初め頃から傭兵として戦場を駆け回りほとんど無傷で敵を倒していく様から沈黙の死神と恐れられた。その途中に“赤い星座”や“西風の旅団”との交わり（たたかい）を持って知り合っている。傭兵を

休業していたときに遊撃士のアリオス、ロイドの兄ガイ、カシウスなどと出会うことになった事件を一緒に解決した。
また結社とも何気に知りあいだったり、黒月（ヘイユエ）にも顔馴染みがいるなど不明な点がちらほらと存在。

ロイド・バニングス
武器：トンファ
本当の主人公。捜査官の資格を持つためリーダー的な存在となる。兄弟には優秀な捜査官のガイがおり憧れて同じ捜査官の資格を持つ。

エリィ・マクダエル
武器：導力銃
クロスベル州の市長の孫娘。それゆえに政治に関する知識や国際情勢に詳しい。また市長の孫娘ということもあり多方面の友人を持つ。

ティオ・プラトー
武器：魔導杖
新型の魔導器の実践テストの為にエプスタイン財団から来た少女。とある事件の生存者でロイドの兄ガイに救出される。休養中にガイとクロウと出会う。

ランディ・オルランド
武器：スタンハルバード
元警備隊の出身。クビになった理由は女性関係とされているが本当は訓練でライフルの使用を拒否したため。
本名「ランドルフ・オルランド」猟兵団の一つ“赤い星座”の一員。その時クロウと出会っている。

登場人物その1（後書き）

書いちゃった・・・・

第1話「とある出会い」（前書き）

完全オリジナル
シリアス＆「零の軌跡」に対するネタバレ少々
題名変更

第1話「とある出会い」

オレが戦場に出たのはいつのことだろうか。多分数えで１０になったくらいだろう。あの時は周囲の大人に知らずのうちに傭兵として登録されていたんだからな。

気が付いたら自分の手は血塗られ人間の皮を被った機械（マシン）になっていた。二つ名も付けられた時は諦めにも似た笑いが込み上げたもんだ。

そんな時だったオレと同じように戦場で活躍しているランドルフに会ったのは……。

「よお、元気か？」

ちょっと場違いな問いかけに驚いたのは覚えている。

「誰？」

そっけなく返事して早く出たかったのに“アイツ”ときたら

「一緒に共同戦線張らねえか？」だって。

「はぁ？」って聞き返したら相手は西風の旅団だから保険掛けたいって本心言うんだ。

ようはオレの力を借りて堅実に勝ちたいってことらしい。了承し

てランドルフと背中預けて闘った。

結果は、聞かなくても分かるかもしれないが勝った。今回の戦闘には“キリングベア”と呼ばれる人が手負いだったらしくそれもあって大勝になった。これでランドルフと別れた。

数年経って、とある事件が世間をにぎわせていた。それは子供たちが誘拐されるという事件だ。とても大きな事件だったらしく遊撃士、警察、軍隊が協力して挑んだ。

そこで、会ったのが遊撃士のカシウス、警察官のセルゲイ、ガイ、アリオスらと出会い一緒に事件を解決へと向かうことが出来た。そのころには傭兵を一時休業していたおかげもあり、少しは人間らしく行動することが可能になっていた。

この事件はとても後腐れの悪い展開で終了した。行方不明になっていた子どもたちはほとんど全て亡くなりガイが助けることが出来た女の子も何年の間病院で休ませなければならなかった。

突入し犯人たちを確保しようとすると持っていた劇薬を飲んだり舌を噛み切ったりして自害する人が多かったのだ。助けられた子供は一人だけ、とカシウスらは思っていたようだがオレはもう一人助かった女の子に会っていた。

それは、仲間とは別の気配を二つ感じたからであって逃走する犯人かと思い斬りかかった時にわかった。“結社”に所属している二人が偶然、事件現場にいて衰弱した子供を保護したというのだ。

「あんたらは。犯人か？」

警戒し武器を構えた状態で尋ねた

「違う、この子を保護した」

黒髪の少年が言い、銀髪の青年も同意した。

「分かった、ここにいた子供は二人を除いてすべて亡くなった。だからその子を早く安全な場所で保護してくれ」

そう言うと一瞬息をのんだ様子を見せ頷いてくれた。

名前を聞くと黒髪の少年がヨシュアと言い銀髪の青年はレオンハルトと告げたことには驚きすぎた。だって“漆黒の牙”と“剣帝”にあったからだ。ついでにオレは自分の名前を言う。すると……。

「闘わなくて本当に良かった」

だってさ。オレ……何かしたかな。本人は気づいていませんが、異名が裏の世界では有名だったためそういう反応を示したらしかった。

続く

第1話「とある出会い」（後書き）

誤字・脱字や意見があればどうぞ

第2話「無理！だから逃げる」（前書き）

オリキャラの過去です。
少し“空の軌跡”や“零の軌跡”のネタバレやクロスがあります。
あと時間軸が都合良いようになってますが目をつぶってください

第2話「無理！だから逃げる」

そのあと、カシウスの元に戻るとどこに行っていたか聞かれたが犯人の残党を探していたと誤魔化した。そして、ガイが助けた女の子をレミフェリア公国まで一緒に付き添っていったがやっぱり家族のもとには戻れなかった。

悲しいことに助けた女の子ティオには、常人には感じ取ることが出来ない感応力を持って“しまった”ので家族と元の鞘には戻れなかったのだ。家族に避けられたことで感情をなくしてしまったティオの休養のために聖ウルスラ医科大学に入院させた。ガイの看病によって少しずつ感情を取り戻しつつあった。

オレには無理だった。当たり前だよ。少しの間傭兵から遠ざかっていたって人間の根本が普通と違うんだから、ガイがティオを少しずつ元に戻していくのが眩しかったから適当な理由付けて逃げた。

ティオとガイを前にして

「オレ、明日から仕事出来た。だから一緒にウルスラにいれないんだ、ごめん」

無表情で言った。ガイには上手く言えたみたいだけどティオは分かったような顔をしていた。それも、見たくなかった。機械（マシン）みたいに傭兵やっていたころよりも人間になれていたのかと自分で驚いていた。悔しいと羨ましいが混沌していた。

――別れてから数年経った頃だった。ガイが殉職したのは……。

慌てて葬式に着いた時、アリオスやロイド、ガイの婚約者を見た。自分にはどうすることもできないと思っていたがあの時、別れずにいたら違う結末もあったんじゃないかと自分を責め続けた。

これからという時に亡くなったみたいだが、証拠が無く未解決事件として終わりそうだというもの、すごく悔しかった。

だからクロスベルを離れてリベールに旅に出た。理由？理由は自分探し！！

あっ笑った？まぁ傭兵で転々と人を殺しそして遭遇した生存者を救った男に一方的な悔恨を抱いてその男が亡くなったら、自分探しって……。自分でも嫌になるよ。でも、リベールで何か起こりそうな予感があるんだよ。

続く

第2話「無理！だから逃げる」（後書き）

過去編ですがちょっと長くなりそうです。
ご感想をお気軽にどうぞ

第3話「その出会いは・・・・」（前書き）

リベールで出会う主要人物とは・・・・？

第3話「その出会いは・・・・」

リベールに着いて行きたかった場所が二つある。一つは王都グランセルでもう一つはカシウスの家だ。カシウスから『良いところだから是非おいで』とも言われていたしね。

それで王都に最初に行くことに決めた。それは古代の城壁に囲まれ政治と文化の中心地だったからだ。それに闘技場もできることなら参加してみたいとか思っちゃったりして。

まぁ結果から言えば闘技場は開催されていなかったので、グランセル城を見て感激しただけで終わってしまった。リベールの地方はとても風景が良く散策にうってつけだったので、何を考えたかカシウスの家まで歩いて行こうとした。

――そんな中クロウが知らないだけで思わぬところで事件は進展しているとは思ってもいなかった。

ちなみにクロウは本来はあり得ないことだが、カシウスと一緒に誘拐事件を解決へと導いたことでA級の正遊撃士（実際にはS級）になっていたりする。これは傭兵よりも遊撃士という職の方が何かと便利だと言い切られていたに過ぎなかったがクロウは信用されていることに驚きつつも嬉しかった。

海港都市ルーアンにたどり着くと海の匂いとともに魚介類の料理を堪能したり港の倉庫にたむろっていた不良とひと悶着あったりと、

とても有意義だった。

珍しいことに空高くにハヤブサがいたことに何か良いこと起きそうだと、足を速め郊外へと歩いて行った。すると、街の人に何となく聞いたエリート校のジェニス王立学園の生徒らしき女の子が足早に出てくるのとぶつかった。

女の子「す、すみません、急いでいたものですから……」

上品な立ち振る舞いから、上層階級の出だと思ったが凝視するのも悪いと思い手を差し出した。

クロウ「こっちこそ、前をよく見ていなくてごめん。どこか痛いところない？」

女の子「平気です。では失礼致します」

このまま別れるのはなんだかもったいないと思ったので。

クロウ「オレ、遊撃士だから送って行くよ。どこまで？」

なーんて、下心が殆んどを占める俺の声……。迷う少女。

女の子「じゃあお願いします。私の名前はクローゼ・リンツと申します」

女の子は微笑みながら挨拶してくれた。その表情にドキっとしたのは仕方がないと思う。

クロウ「クロウだ。B級の正遊撃士をやっている」

意味も無いのに恥ずかしかったので、顔を見れずそっぽを向いて返事を返したのはしまったと感じた。

行先はマーシア孤児院って所だ。ここにはクローゼがいつもお世話になっているところと言ってた。いきなり頭上からハヤブサが降ってきたら驚くって。クローゼが飼っているジークって言うシロハヤブサで警護？みたいな存在、あぁ……オレ必要なかったかもってちょっと落ち込んだら大丈夫って言ってくれて安心したのは秘密だ。

クローゼ「着きました。ここがマーシア孤児院です。送ってくださったお礼にどうぞ中に入って休んでください。何か御馳走しますので。それとも何か用事がほかにありますか？」

不安そうに上目＋涙目で見る。おいおい、これは反則だろ。こうならないようにわざと不器用に送ったってのに。

クロウ「分かり……ました。一緒に少し休んでいきます」

楽しそうに言わなきゃならなかったのにあまり人と交わったことがないものだから、また不快にさせかねない返事をした。

孤児院やこの少女との出会いでクロウは変わることができるのだろうか？

続く

第3話「その出会いは・・・・」（後書き）

恋愛要素を少し含みますがはじめてですのでこれがいまの限界です。
零の軌跡にはまだ至りませんがどうぞご覧ください

第４話「ある意味運命の・・・・・」（前書き）

マーシア孤児院でのひと時です

第４話「ある意味運命の・・・・」

こじんまりとした畑が敷地内に広がり、木造建ての孤児院が見えてくる。外の畑では孤児院でお世話になっている子供たちが見えた。オレにはこんな時代あったっけ?って考えても思い出すのは傭兵時代しか思い出さず自分が嫌になった。

クローゼ「あの～大丈夫ですか?」

ふと、我に返ると不思議そうにクロウの顔を覗き込むクローゼの顔が至近距離まで近づいていた。かあっと、顔が赤くなっていくのが自分でもよくわかった。

クロウ「なんでも、ない。ただ、自分って子供の時何してたかなって考えていただけだ」

赤くなった顔を隠してクローゼの問いをかわした。

クローゼ【あれっ、今のクロウさんの顔なんだか寂しそうだったな。これは聞かない方がいいよね】

クローゼはそう判断し孤児院へと足を向けた。

クローゼ「みんな～来たよ!元気にしているかな?今日は遊撃士のお兄さんも一緒に来てくれたよ。」

そう言うと、畑にいた子供たちのところに走って行った。

クロウ【ははっ、今の顔に出ていただろうな。クローゼって案外人の感情に鋭いのかもしれない。でも助かった。子供の時から傭兵で何万人も倒してますって、言えないもの。今だけは平和を満喫してもいいよね？】

難しい思考を一時的に消してクローゼのところに行く。

男の子の声「なあなあ、兄ちゃん強いの？」

少女の声「えへへへ、いらっしゃい」

子供たちのパワーに圧倒され、たじたじになっている時優しそうな声が奥から聞こえてきた。

優しい声「お客さんを困らせていけませんよ。クローゼそして初めていらっしゃった方を歓迎します」

そう言って中からエプロン姿の女性が現れた。

中に通され大きなテーブルについて自己紹介することになった。エプロン姿の女性が責任者らしく最初に紹介した。

優しい声「私はここで子供たちの世話をしています。テレサと言います。そしてクラム、ダニエル、マリィ、ポーリィの四人がここにおります」

第一印象は家庭的で、ほんわか良い雰囲気の場所だと思った。

クロウ「自分はクロウと言います。B級の正遊撃士を務めております。ここには通りすがらクローゼに誘われたので来ました。家庭

的で良い場所ですね」

ここの平和はほかでは類を見ないかもしれないとまで思うようになった。

テレサ「ありがとう、クロウさん。あなたがそう思って下さるなんて」

テレサは微笑みクローゼも花が咲いたように笑った。

クロウ【可愛いな。この子と一緒にいると気分が落ち着く。この感情は一体……】

ここの孤児院で少しでも長く時間を過ごしていたいから。

クロウ「何か困っていることなんてありませんか？」

普段は言わない遊撃士らしいことをしようと思ったのも魔が差したのかな。用事がないか聞くと隣村のマノリア村に用事があるって言うのでクローゼと子供たちが一緒に来た。

クロウ【子供邪魔って言えないでしょ！】

クラム「兄ちゃん、兄ちゃん。クローゼお姉ちゃんに惚れてる？」

って聞かれた時は顔に出てたかなって思いながら恥ずかしくて追いかけた。マノリア村に着き、気がつくとクラムがいなくなっていた。

ほかの子供たちはいつものことって決めつけていたけど仕方がな

いから探すことにした。すると、前から来た男女二人組に出会った。女性の方は太陽のように笑顔が素敵な女の子で男性の方は落ち着いた様子を見せながらも、談笑しながらこっちに向かっていた。

―ある意味、運命の出会いをするまであと少し―

クロウ「すみません。ここらで帽子をかぶった男の子を見ませんでしたか？ちょっと探しているんだけれども」

黒髪の男子「いや、見てないよ。エステルはどう？」

ポニーテールの女の子「ん～、あたしも見てないよ。ごめんね。一緒に探そうか？いいよねヨシュア」

まあ、一人で探すより良いだろうと考えて三人でクラムを探していた。

エステル「さっきも白い服着た女の子に同じようなこと聞かれたんだよ～。知り合い？」

クロウ「そうだよ。だとしたらまだ見つかっていないのか。クラムのヤツめ～！」

エステル「わわっ、キミ大丈夫？」

頷いてエステルが前をむいたとき一人の男の子とエステルがぶつかった。

男の子「ああ、大丈夫。でもアンタたちここらで見ない顔だね。

どこから来たの……？あっ、クロウ兄ちゃん。やばっ」

クロウに気づくとエステルの持ち物を何かサッと盗って逃げていった。

クロウ【あいつ、今盗ってったな。懲らしめないと】

ヨシュア「ねえ、エステル大丈夫？」

ヨシュアがエステルに起き上がらせながら尋ねる。

エステル「うん、平気平気！」

ヨシュア「そうじゃなくて何か無くなったものない？」

自分の持ち物を一つずつ確かめていってふと気づいたように大きな声をあげた。

エステル「あーっ、遊撃士の紋章がないーっ。どこかに落としたかな？」

ヨシュア「さっきまでは持っていたでしょ。って事は考えられる原因は一つだけど分かる？」

ヨシュアは自分で答えを出そうとするのではなくエステルに結論を出させるつもりなのだろう。

エステル「ま、まさか。さっきぶつかった時に盗られた？」

ヨシュア「そうとしか考えられないよ。クロウさん、さっきの子

がどこに行ったかわかりませんか？」

ヨシュアは落ち着いた様子でクロウに聞く。

クロウ「ああ、分かる。マーシア孤児院ってところだろうよ。そこが家だから」

エステルはそれを聞くと意気込んで、大股でずかずかと歩いていきヨシュアは苦笑を浮かべながらそれに着いていく。クローゼにも途中で会ったので先に孤児院に戻っていると伝えてエステル達を追いかけた。

クロウ【だれかに雰囲気が似ているなエステルっていう子……】

クロウ「ねえ、君たちのフルネームってなんて言うの？」

エステル「あたしたちはブライトっていうんだよ。エステル・ブライトとヨシュア・ブライト。血は繋がっていないけれど、どうかした？」

こんなところで絆は繋がるのかと目頭が熱くなるのをこらえきれなかった。

クロウ「あとで教えるよ。それにしてもヨシュア、君とどこかで過去に会っていない？見覚えがあるのだけれども」

多分、誘拐事件の時の黒髪の少年と予想していたのだけれども……。

ヨシュア「……えっと、すみません。初対面だと思います」

きっぱり言われると違うのかなと少し残念だった。

マーシア孤児院でのいざこざはクラムが一方的に悪いって事でテレサから懲らしめをもらった事で終了した。さて、クロウがエステルに過去を話す時が来た。さあエステルはどんな反応を示すのだろう。

続く

第４話「ある意味運命の・・・・・」（後書き）

伏線作りすぎたかな。

第5話「カシウスは仲間で恩人」（前書き）

カシウスとの出会い

第5話「カシウスは仲間で恩人」

クロウ「あれは仕事がひと段落して休業している時だった。クロスベルとリベール地方で大掛かりな事件が勃発していたんだ。それにはとても大勢の人手が必要でその時には軍隊・警察官・遊撃士が一緒になって解決に当たらなければならなかったんだ」

エステル「その時クロウは何の仕事をやっていたの？」

エステルは空気読めない子らしく過去の傷をえぐった。ヨシュアとクローゼは何か直感的にクロウの過去は深いものと判断してあとで聞こうよ、と話題をそらしてくれた。

クロウ「話を続けよう。ちょうど、カシウスと出会ったとき少しでも人手が必要と分かったので事件解決に協力した。それはそれは大掛かりで緻密な計画を立て実行した」

クローゼ「それで事件は解決したんですよね？でも、どうしてクロウさんの表情は暗くなっているのです？」

恐る恐る聞いてきたクローゼだったが次に発した返事を聞いて真っ青になった。

クロウ「事件は一応解決という形をとったよ。だけどね、数百人の子供が生体実験の犠牲になって助からなかったし、犯人はほとんど全員が自決。薬を飲んだり舌を噛み切ったりして死んでいたんだよ。そして助かった子供は報告によればたったの一人だけ。病院での療養を強いられている。こんなのが結末だよ。誰も助からなかっ

たに変わりないといってもおかしくはない……」

クロウ自身もあまり話したくない過去の話だ。少し昔の怒りがフツフツと沸いてきていた。

クローゼ「っ。そ、そんな。生体実験なんて許されてはならないことです。罪もない子供たちが犠牲になったなんて……」

声を震わせながら涙を隠すことなく流すクローゼ、エステル。ヨシュアはぐっと唇を噛んで悔しさをあらわにした。

クロウ「暗い話はそこまでだ。カシウスはその事件に協力してくれたお礼にと遊撃士への紹介状を書いてくれて晴れて遊撃士という職に着くことが出来たんだ。前は放浪者みたいな感じだったよ」

クロウ【傭兵なんて言えない。まだ心が純粋なのに言う必要もないだろう】

ほっとした様子の三人だったが、エステルとヨシュアの様子には笑顔の裏に暗い表情が見え隠れしていた。

クロウ「ところでカシウスは元気か？」

クロウは軽く言ったつもりだったのだがその言葉にエステルとヨシュアは息を詰まらせた。

ヨシュア「行方不明なんです。それで真相を確かめるために準遊撃士から遊撃士になるための旅も兼ねてお父さんを探そうかと思っています」

暗いながらも確固とした意志をもって伝える二人がいた。

クロウ「そうか、カシウスなら大丈夫だと思うが二人とも頑張って遊撃士になるんだよ」

クローゼ「お二人とも頑張ってください。応援しています」

～その後～

いったん三人とは別れて一人で行動することにした。着いて行っても良かったかもしれないが太陽のように眩しいエステルと純粋な花のように明るいクローゼとは世界が違うとまた逃げた。一緒にいればいるほど自分の闇がじわじわと心を蝕み感情に鍵をかけなければ闇で押しつぶされそうになったからだ。

自分はなんて弱い人間なのだろうか。改めて再認識させられた。消極的な感情が足元から浸食を始めていた。ガイの時のように後悔するんじゃないだろうかと思って一緒にいようとも考えたが駄目だった。光と闇。水と油のように相容れぬ存在なのだから。

ここから先は過去を伝えようにもどこをどう歩いて旅をしたのかよくわかっていない。だが、王都が危ない時に再び戦場へと向かうクロウだった。

続く

第5話「カシウスは仲間で恩人」（後書き）

次は主人公無双入るかも。
戦闘シーンがんばります

第6話「気持ちの変化」（前書き）

戦闘少し。
オリキャラとクローゼの気持ちが……

第6話「気持ちの変化」

三人と別れてからの話を少ししよう。何のトラブルにも巻き込まれなかったのでカシウスの家に辿り着くことが出来た。でも、家主がいないので外から雰囲気を満喫した。ロレントで一泊することにしたのだが、食事をしようと立ち寄った食事処に酒豪が二人いたことには驚いた。しかも遊撃士とその受付嬢が酒豪だったのだ。浴びるように飲む姿は一見の価値ありとしておこう。

でも、周りは動じることなく食べたりしていたのでこの風景はいつものことなのか、と自分で納得していた。次の日にロレントの遊撃士協会に顔を出すと二日酔いなんてどこ吹く風のように笑顔の受付嬢がいた。自分の名前と階級(A級)を言ってカシウスの事を聞いてみた。

しかしエステルたちから聞いた情報と大差なかった。違うのは、船に乗っていなかったんじゃないかということだった。あと、エステルたちが色々な事件を解決していて正遊撃士になるのも時間の問題ということを聞いてさすがカシウスの子供と自分のことのように嬉しかった。

でも、最近王都の方が騒がしいので気をつけるように忠告された。心配になったクロウは王都に向かうことにした。脳裏に浮かぶのはクローゼの事。

情勢を知ろうとリベール通信『情報誌』を見た。すると、エステルとヨシュア、A級の遊撃士ジンと聞いたことないオリビエと言う四人で闘技場で行われた試合に勝った事が載せられていた。ひとまず安心だろうと思ったが王都を包む違和感が漂っていたので注意し

て潜んでいた。

するとリベール軍の「情報部」に所属するリシャール大佐がクーデターを起こそうとしていた。何が起きるかわからない中でクローディア王女たる人が“エルベ離宮”に軟禁されていることを情報部が漏らしていたのを聞いた・・・いや正確には拷問して聞いたというのが正解になる。

少数精鋭で人質救助作戦を行っていたエステルたちに秘密裏に援護しようと思って、着いて行った場所にクローゼが……いた。正式な名をクローディア・フォン・アウスレーゼと言い王位継承者第一位の立場だった。

そんな表舞台に立つ人ならば自分は無理だ、この思いを秘めたままにしておこうと思っていたがまだ拘束されていない犯人が五人いたらしくクローゼに向かっていった。この状態では誰も間に合わない。と思っていた時……。

クローゼサイド

私は少し気が抜けていたのかもしれません。エステルさんやヨシュアさんに会えて。もう犯人がいないと思っていたせいもあったのかもしれません。雑談をしていると重斧を振り上げて向かってくる敵二人と銃を構え今にも撃とうとしている敵三人に気づきませんでした。エステルさんたちも間に合いそうにありません。ここで死ぬのかな?最後に会いたかったな……クロウさんに。

目をつぶって衝撃が来るのを待っていましたがいつまで経っても訪れません。目を恐る恐る開けてみると会いたかった人が守るよう

に立っていました。その後のことは一瞬でした。

クローゼサイド終

振り上げた重斧を素手で叩き割り、抜き手で心臓部分を貫き絶命させるともう一方の斧を持っている敵に肘打ちで昏倒させ両手両足の骨を砕いたのだ。銃を持っている三人に対しては小刀を投げ怯んだすきをついて、首を捻ったり骨を砕け散らせ、残った一人は銃を乱射したが無命（むみょう）とつぶやくと一瞬のうちに命の鼓動を止めていた。

つい、傭兵時代の冷血さが戻って殺したようだ。一人は尋問用に残すことが出来たが一人残らずであればここにいる全員が吐くなり嫌悪感を抱くことになっただろう。また自分に対して、劣等感を抱いていると後ろから抱きつかれたような感触があった。

クローゼ「よ、良かった。ぐしゅ、また会えた……もう会えないかと思った」

クローゼはクロウの背中に顔をうずめて涙を流した。人前だから恥ずかしいんだけどな。と思いながら守れて良かったと思う自分がいて満足した。

ピューイと鳴くジークに気が付くとユリアという王室親衛隊の人がじとーっとした目で見ていた。エステルやヨシュアも気まずそうにしていた。あははは……。と、誤魔化してみたものの誤魔化しきれずにクローゼに離れてもらった。

クローゼに会ったのは偶然であることと王族であっても何か関係を変えようと思っていないことを誠実に伝えるとユリアの信頼は得られたようだ。クーデターが終わったら改めてグランセル城を訪ね

ることを約束してその場を去った。

加わらなかった理由？クローゼ達には後方からの援護に回るよって言ったけど本当は、血の匂いを嗅いでいたら過去の傭兵時代に戻りそうになったからだ。傭兵の時に全滅させる任務を繰り返した影響で変わったのさ。血の湖を歩くが如く人を亡き者にしていたからね。

遊撃士と言うのはトドメをささないで無力化して逮捕のような形をとるけれどそれが無理なんだ。だからいったん、自分を自制するうえでも表舞台から消えないとね。エステル達は強くなっているから解決するでしょ。

クローゼサイド

もう会えないと思っていた人が間近で守ってくれたことに嬉しさを隠せなかったけど、あの時クロウの目は濁った眼をして人を殺すのに躊躇いを持っていなかったな。ちょっと怖いけど私を守ってくれたんだもの。気が付いたら走って背中に抱きついちゃった／／あー恥ずかしかったけど私の気持ち少しは気づいてくれただろうか？これが好き……って事なのかな。

一緒に闘えないのは残念だけど終わったらグランセル城に来てくれるって言ってたから告白……しようかな。

クローゼサイド終

第6話「気持ちの変化」（後書き）

これが限界です。
ご意見はお気軽にどうぞ。

登場人物その2（前書き）

オリジナルと原作が混じっていますのでご注意を。

登場人物その2

エステル・ブライト
武器：棒術具
ロレント地方出身の遊撃士。最初は準遊撃士となったばかりの新米だった。父カシウスの行方不明をきっかけにヨシュアと一緒に旅に出る。口癖は「あんですってぇ～」

ヨシュア・ブライト
武器：双剣
エステルの義弟にあたる遊撃士。幼いころにカシウスに拾われて養子となった。リベール地方では珍しく漆黒の黒髪に琥珀色の瞳をもった少年。“漆黒の牙”と言う異名は結社にいたころの通り名。

クローゼ・リンツ
武器：剣
王立ジェニス学園の生徒。シロハヤブサのジークがいつも近くにいる。偽名を使い素性を隠して学園に通うが本当はクローディア・フォン・アウスレーゼと言う王位継承順第一の姫殿下。この物語では主人公クロウのヒロイン。

～これから出るか未定の人物紹介～

オリビエ・レンハイム
武器：導力銃
エレボニア帝国から来た自由気ままな演奏家。クローゼと同じように素性を隠しているが本名はオリヴァルト・ライゼ・アルノール。庶子であり皇位継承権からは離れているが帝国の皇子だ。

ジン・ヴァセック
武器：手甲
不動（ふどう）のジンの異名を持ち大陸全土で２０数名しかおらず公式には最上級とされるＡ級の正遊撃士。

ユリア・シュバルツ
武器：剣
族の護衛を務める王室親衛隊の中隊長という立場。またクローゼの護衛兼養育係でもある。この物語ではクロウとクローゼが仲良くなっていくのをハラハラしながら見守ろうとしている様子。

レン
武器：大鎌
犯罪者組織で虐待を受けていたところを結社の任務で組織を壊滅させた剣帝とヨシュアに助けられて結社の一員になる。この物語でクロウとどう関わってくるのか？

カシウス・ブライト
エステルの実父で、大陸全土に４人しかいないＳ級遊撃士の一人。この物語ではクロウを含めて５人という設定。《剣聖》と呼ばれる剣の達人であったが、遊撃士になった折に剣を捨てて棒術を扱うようになる。軍・遊撃士・警察が協力して解決した事件の総指揮者でもありそのときにクロウと出会う。

登場人物その2（後書き）

書いているうちにワクワクが止まらない。

歴史表（前書き）

おおまかな歴史を載せます。作者の妄想暴走中もありますが見逃してください。
オリジナルには※をつけます。
年代は七耀暦（しちようれき）と読みます

歴史表

七耀暦以前
　古代ゼムリア文明の破局により謎の現象大崩壊が起きる。
※クロウがこの地にいるようになる。本名：クロー・シュツッツ・リベール

七耀暦０年頃
　リベール王国誕生。諸説は不明だが、大崩壊後に誕生したのが有力な諸説だ。
※クローが名付け親。自分の名前を使いリベールとした後、クロウと名乗ることにした。

七耀暦１１５０年
　導力革命と呼ばれるオーブメント技術の開発。そして生活は一変する。
※クロウただの眠りにつく。
七耀暦１１５７年
　カシウス・ブライト誕生。

七耀暦１１６２年
　アリシア?世がリベール王国に即位する。このとき女王２０歳。クローゼは孫にあたる。

七耀暦１１７４年
　アリオス・マクレイン誕生。

七耀暦１１７５年
　ユリア・シュバルツ誕生。

ガイ・バニングス誕生。

七耀暦１１７７年
エレボニア帝国・皇帝の庶子・オリヴァルト・ライゼ・ユーゲント誕生。

七耀暦１１８１年
セシル・ノイエス誕生。のちにガイ・バニングスの婚約者となる。

七耀暦１１８３年
ランディ・オルランド誕生。

七耀暦１１８４年
クロスベル市・ジオフロントを計画、建設

七耀暦１１８５年
ヨシュア・アストレイ誕生。

七耀暦１１８６年
カシウス・ブライトの長女エステル誕生
クローディア・フォン・アウスレーゼ誕生。
ロイド・バニングス誕生。
エリィ・マグダエル誕生。

七耀暦１１９０年
ティオ・プラトー誕生。
レン・ヘイワーズ誕生。
※クロウ目覚めるが全ての感情を失い外見は１０歳ぐらい

七耀暦１１９７年
　カルバード共和国で大規模な誘拐事件発生。カシウス・ブライトが総指揮とる。
※クロウが表舞台へと登場。その後遊撃士になる。１７歳
　ヨシュア・アストレイがブライト家に保護、そののち養子となる

七耀暦１２０１年
　ガイ・バニングスが殉職

七耀暦１２０２年
　エステルとヨシュアが準遊撃士の旅立つ。

歴史表（後書き）

オリジナル要素が少ないですが。
あと資料の元は年表を見ながら書きました。
作品を読むうえで参考にしてください。
クロウの誕生ですがどこかに紛れ込ませるのが難しかったので、だったらいっそのこと七耀暦が始まった時に誕生したことにしてしまおうと思い立ったのでそうした次第です。
温かい目で見守ってください。

第7話「告白と黒幕登場」（前書き）

空の軌跡ＦＣの佳境にクロウを追加させます

第7話「告白と黒幕登場」

クローゼを助けた後のことを話そう。たぎった血を冷ますためにクーデターに参加した特務兵を数百人狩った。普通は冷却効果なんてないのでは、と思うかもしれないが倒すことで我に返れるのだ。

そうこうしているうちに遊撃士のメンバーはグランセル城の地下に隠されている空中回廊へと進んで行ったようだ。最下層にいたのはリシャール大佐だった。激戦になっていったが勝利をおさめた。

しかし、トロイメライと言う自動迎撃兵器が作動。疲れ切った体に鞭打って闘い抜いたが最期にリシャールが捕まってしまう。

リシャール「君たちに負けた時にすでに命運は尽きていたのだよ。最期に君たちを助けられれば後悔は……しない」

諦めにも似たリシャールの呟きが聞こえてくる。

渋い男性「やれやれ、諦めなければ必ず勝機は見えると教えたはずだが」

飄々とした声「全くだ。師匠の教えを忘れるなんて酷い弟子ですね」

―せいっ―

走りこんできたカシウスがリシャールを掴んでいた腕を切断。

クロウが言霊を紡ぐ

クロウ「我に仇名すものの動きを止め敵対せし者に立ち向かう勇敢な者に癒しを」

動こうとしても動けないトロイメライ、そして少しでも体を動かそうとすると激痛が走った体の痛みが全て消えている。

クロウ「諸君！今だ。トドメを刺しなさい」

クロウの声に合わせて一斉攻撃で終わりを迎えた。

クロウ【それにしても、トロイメライが動いて迎撃行動をとるとは……。それに輝く環はどこにいったんでしょうか？まさか“結社”の誰かが盟主の命令を無視して行動しているのだろうか？……でも今日ぐらいは平和になったリベールを堪能するのも良いかもしれないな】

横では呆然としてカシウスが軍を離れたことに対して不満をぶつけているリシャールがいた。それに対しカシウスはリシャールの顔を殴った。

カシウス「甘ったれるな。リシャール。貴様の間違いはいつまでも俺と言う幻想から解き放たれなかったことだ。それだけの才能がありながら、なぜ自分の足で立とうとしなかった？俺はお前がいたから安心して軍を辞めることが出来たんのだぞ！」

カシウスはリシャールがいたからこそ、自分が軍を辞めることができたと思いを吐露した。

こうして情報部によるクーデターは幕を閉じた。計画に加担していた特務兵は各地で次々と逮捕されていったが、何かに脅えてい

る様子には首を傾げるしかなかった。

そして1週間後……。王都では無事生誕祭を始める事が出来ていた。

クローゼ「約束通りおばあ様に会っていただきますよ。クロウさんの事を紹介したいんですもの」

逃げようとしたクロウを王室親衛隊が捕まえ、クローゼと一緒に女王のもとに向かうことにした。

クロウ【前にも言ったが上目＋涙で「私のこと嫌いですか？」って言われてみろ。嫌いじゃないから逃げられないだろう。あ～もうっ、女々しい自分が嫌だ】

とうとう、アリシア女王がいる部屋の前に立つ。

静かな声「どうぞ、お入りになって……」

クロウ「失礼します」

室内には、物柔らかな女性がテラスのほうでクロウとクローゼを待っていた。

女王「クローゼがこんなにも女性の顔をするなんて珍しいことね？ふふっ、王都から離れている時に何か良い事でもあったのかしら……？」

茶化しながらも目は真剣そのものだ。多分、自分とクローゼにとって敵になるのか品定めしているのか。

クロウ「初めまして。私の名前はクロウと申します。アリシア女王にお会いできてうれしく思います」

やはり、自分の本名を言うことには少しの抵抗があった。少し歴史を調べたら分かってしまうことだけれど、今はまだ……。

クローゼ「私が初めて会ったのは学園の前でぶつかった時よ。孤児院に案内したらそこで寂しそうな顔をしているのが気になって、そうしているうちにいつの間にか考え続けていたのよ。あとは離宮で守ってくれた時確信した……の」

最初はハキハキと話していたのが自分の気持ちに気付いたあたりから恥ずかしくなって声が小さくなってきた。

女王「あなたが考えて望んだことにわたしは反対しません」

反対があるだろうと高をくくっていたが、あっさり関係を許可された。

唖然としていたけど、クローゼは嬉しいみたいだ。クロウの手を握って正面から抱きつかれた。女性の小さい体がすっぽりとクロウの胸に収まる。

クロウ【ああ……、付き合って本当に良かった。久しぶりの暖かい心を感じる】

その後のことを少し話そう。初めて経験することになった生誕祭を一人で回ることにした。クローゼが一緒にどうですか？と言ったが思うところがあったので申し訳ないが一人にさせてもらった。

エステルとヨシュアが歩き疲れたのか百貨店の横にある休憩所で休んでいるのを横目で見ながら露店を楽しんだ。

クロウ【さてさて今回の事件に絡んでいるメンバーは誰かなっと。ん……あれは？ワイスマンじゃないいか、やはりアイツが。関与していたのか】

ヨシュアが教授風の男性と話し合っているがどうも好意的ではなさそうだ。ヨシュアが双剣を抜きだし相対する。ワイスマンが指を鳴らすと、隠されていたヨシュアの記憶が元に戻されがっくりと項垂れる。

一言二言呟いてヨシュアのもとから去る。どうせワイスマンはヨシュアに固執していたから組織に戻れとか、勧誘していたんだろうね。おっと、こっちに気付いた。

ワイスマン「お久しぶりです。クロー様。こんなところで会えるとは思ってもみませんでした」

と、近づきながら大仰に礼をしてくる。

クロウ「やめてくれ。それに今はクロウ、だ。それに様は付けなくていい。今回の黒幕はあんただな？」

一瞥してワイスマンに冷たく接する。

ワイスマン「ええ、そうです。何か問題でもありますか？」

クロウ「いや、ただやりすぎだと思う。盟主が望んでいないこと

まで行おうとしている。それは無視できない問題になれば介入する。ただそれだけだ」

ふと思い出したことがあったので尋ねた。

クロウ「あとヨシュアは“漆黒の牙”で間違いないのか」

その問いに対して頷いたのでそれを確認して別れ、城へと戻る。ヨシュアにはヨシュアの問題があるのでこれには口出しできないと思ったからだ。

豪華な夕食の後、クロウはクローゼの隣の部屋に泊まることを許されクローゼと話し合っていた。他愛もない話。おもにクローゼの学園生活についてどんな友達がいるのかを聞いていた。

すると、突然。空中庭園のほうからハーモニカの音が聞こえてきた。

クローゼ「この音は……。ヨシュアさんのハーモニカの音ですね。とても綺麗です」

クロウ「そうだね、でもなんだか物悲しい音が聞こえてくるな。ちょっと、見てくるよ」

クローゼの断りを入れて庭園へと向かう。嫌な予感があったからだ。

着くと眠りかけのエステルがいた。それを眺めているヨシュアも。

クロウ「どうしたの？ヨシュア」

ヨシュアに近づきながら、冷静さを保ちつつ話しかけてみる。

ヨシュア「ああ、君か。やっと思い出したんだ全てを。だから僕を作った魔法使いを止めないとって思ったけどエステルといるわけにはいかないから、ここで別れることにしたんだ」

そう言いながらエステルの髪を優しく撫で、クロウに話す。

クロウ「そうか。いつかこうなるとは思っていたって言ったらヨシュアに失礼かな。でも微力ながら助けにはなるよ」

上着から紙切れを一枚差し出す。

クロウ「これは僕の連絡先だよ。どうにもならなくなったときに連絡してくれ」

ヨシュア「ああ、ありがとう。じゃあ行くね」

早足で庭園から立ち去るヨシュアを見送った。

ここに一つの過去話が終わる。

第7話「告白と黒幕登場」（後書き）

長いですがこれでＦＣ終わります。
最初は零の軌跡だけで終わらせるつもりがどうしてこうなった？
ＳＣは肝心なところだけ書いてクロウ入れて終わらせます。
あとクロウと結社の伏線を入れましたが作者はただ今暴走中です
お便り待っています

第8話「別れは人を強くする」（前書き）

ぐだぐだ感は払拭できません

第8話「別れは人を強くする」

あれからの話を少ししよう。朝、目覚めてヨシュアがいないことに気付きたエステルはヨシュアが旅立ったのをカシウスから聞く。

自暴自棄になりながらもヨシュアがいなくなったことを信じられないエステルは、自分の家まで戻ってくる。ヨシュアがいると信じて……。だけど現実は厳しかった。ヨシュアがいなくなったことは紛れもない現実だったのだ。

カシウスは一度はヨシュアを追いかけるのを止めるように言ったがエステルの決意が真剣なのを知ると遊撃士協会の研修施設に行くように勧めた。そこは実力をつけるのに役立つからである。

それで、エステルはアネラスと言う同じ遊撃士とともにルーロックルにある研修施設へと足を向けた。帰ってくるころには何倍も強くなってくるだろう。

クロウはと言うとグランセル城で仕事が与えられた。どこの馬の骨とも思えないような人物がいきなりクローゼとアリシア女王に認められているのは城で働く人たちが認めなかったからだ。

S級の遊撃士と知っているのはアリシア女王とカシウスしか知らず、A級の遊撃士と発表されていたが活躍した事件も全てが一兵卒が知ることのできないような事件ばかりだったからである。

ハーメルの悲劇が予定より早く終息したことにも関わっていたり

カシウスが総指揮をとった誘拐事件に関わっていたことなどは迂闊に情報を流すならば逮捕という形をとっていたからだ。

だから目に見える形で成果を上げて全ての人に認められるようにしなさいと言うのが女王から出てそれに皆が同意した。断ろうとするとクローゼが出てきてぎゅっと袖を掴み⇒上目づかい⇒涙目というコンボでクロウのＫＯだった。

各地をまわり遊撃士の仕事をこなして人々の信頼を得てゆきなさいと言う、優しい女王の言葉に励まされてクローゼと別れた。クローゼも学園生活に復帰するみたいだしちょうどよかった。

ルーアンから旅を開始しようと思ったらエステルとアガットに出会った。少しの縁があるのかもしれないが同行することにした。

ルーアンでは不気味な噂が人々の間を駆け巡っていた。それは“白い影”が夜な夜な街を徘徊しているという噂だった。これに３人はどう対処していくのだろう。

続く

第8話「別れは人を強くする」（後書き）

～追加人物紹介～

アネラス・エルフィード
武器：刀
ボースを拠点とする新米正遊撃士。祖父から「八葉一刀流」を学ぶ

アガット・クロスナー
武器：大剣
“重剣のアガット”の異名を持つ正遊撃士。カシウスに出会い遊撃士になる。

第9話「白い影前編」（前書き）

白い影前編

第9話「白い影前編」

噂にしかなっておらず、実害も出ていないのでギルドとしても調査と言う形で三人に頼んだ。最初の目撃者は倉庫街にいる不良たちだった。手合わせして買ったら情報を教えるという不良たちにアガットが一蹴。手に入れた情報によると夜中酒を飲んで帰る途中に白い影がクルクルまわっていたのを目撃したというものだった。

二件目、エア＝レッテンの関所にいる兵士だった。上司からは酔っていたと勘違いされて落ち込んでいた兵士だったが遊撃士が調査していると知って驚いていた。ここの兵士からも同じような証言を得た。

三件目、マーシア孤児院の子供たちが目撃者となった。ポーリィと言う子が白い影を見ていた。これもふわふわと浮いていてお辞儀をして消えたという証言を得た。

遊撃士協会に戻って得た証言を纏めてみた。すると面白い共通点が浮かび上がった。それは“白い影が去った方角”だった。共通してジェニス学園に向かっていたのだ。一行は学園へと向かうことにした。

クロウは浮かれていた。もちろん、それはクローゼに会えるためだ。会いに行くのではなく仕事で行くのが正解だが浮かれに浮かれていた。

エステル「どうしたの？クロウ。地に足が付いていないようよ」

アガット「ほんとだぜ。クロウ何か悪いものでも食べたのか？精神科行くか」

この時代に精神科があったのかは分からないが酷い二人だ。それも聞こえていないクロウを加えてジェニス学園に着いた。

ピューイというジークの声が歓迎してくれた。

クロウ「おおっ、ジーク久しぶり。」

ジークはピュイピュイとクロウの周りを飛び、そして肩に捕まる。

横ではエステルとクローゼが抱き合っていた。再会を喜ぶとともにヨシュアがいないことを嘆く二人だった。わたしは大丈夫！そうエステルは言ってヨシュアを追いかける決意を強める。

その後生徒会のメンバーを加え一行は学園長の元へと行く。捜査の協力を得るためだ。許可を得た三人は問題の時間が過ぎるまで生徒会の部屋で会話をしつつ過ごした。

その時クロウがなぜ浮かれていたのかを根掘り葉掘り問い詰められてクローゼと付き合っていることを教える羽目になった。皆は祝福してくれたがエステルの手前、素直に喜べなかった。

エステル「あたしは大丈夫。今我慢して会えたらいっぱい甘えるんだもん」

なんて心の強い女の子なのだろうとエステルを見ていたら嫉妬したのか横にいたクローゼから涙目でギュッと脇腹を抓られた。

ふと外を見ていたエステルがふらっと左右に揺れそして倒れた。
どうしたのかと外を見るとそこには白い影が存在するではないか。
消えた方向を見ると旧校舎の方向へ消えていった。

クロウ【あれは、ブルブラン。やっぱり結社が関わっているのか。
どうして幼稚なのかは聞けばいいかもしれないがエステル達にはど
うしようかな。まあ会ってから決めるかね】

エステル、アガット、クローゼ、クロウの四人で旧校舎へとむか
うことにした。

第9話「白い影前編」（後書き）

説明口調で申し訳ありません

第１０話「白い影後編」（前書き）

白い影後編

第１０話「白い影後編」

ジェニス旧校舎内に魔物の姿はなく謎かけが幾度かあるだけだった。その謎を解いていくと地下に遺跡があることが分かった。恐る恐る中に入って行くとそこには得体の知れない魔物の姿が。

一番奥まで進むとそこには見たことのない機器の前に立つマント姿の男性がいた。よく見てみるとそれは人々の間で噂になっていた白い影の正体だった。

話を聞くと実験の為に投影器として影を生み出しており、それは成功したとのことだった。エステルたちが確保しようとすると機械兵器が隣の部屋から出てきてとびかかってきた。

それを行動不能にするとその影の正体“ブルブラン”は影縫いと言う行動を制限すること技をかけて動けなくした。クロウにはブルブランはかけていないが。

あと少しで命の危険を感じた時、ドロシーというリベール通信の記者がカメラのシャッターを押したことで一瞬、影が消え動けるようになった。

ブルブラン「このようなところであなたに会えるなんて。お久しぶりですね」

去り際クロウに対して親密さを示しつつ言葉を投げかける。

クロウ「ああ、だが俺はＢに会いたくなかったがね。ワイスマン

に伝えろ。ヨシュアに固執すると行く末は身の破滅と。あとこれ警告」

驚く他のメンバーに動じず手のひらに無詠唱で出した氷の槍（アイスジャベリン）を射出してブルブランの体を貫くが虚空に響く声が……。

ブルブラン「了承しました」

聞こえてきて無傷で逃げたことが分かった。

エステル「ど、どういうことよ。今の人は知り合いなの？それにヨシュアのことって」

クローゼ「クロウさん。犯罪者と知り合いなのですか？」

アガット「てめえ、どういうつもりだ。返答次第によっては……」

クロウ「落ち着きましょう。私が旅をしている時に出会っただけです。ヨシュアはブルブランと同じ組織にいたのですよ。だからその関係で知っているだけ。あと返答次第ではって、アガット如きが私に勝てるとでも思っているのですか？」

三者三様に答えを返していきアガットに対して半分にも満たない殺気をぶつけて意識を混濁させるまでにした。苦しそうに何とか意識を保たせようとしたがすぐに抵抗できずに石造りの床に昏倒した。

クロウ「まったく、頭に血が上っていると言うこと言っても聞いてくれませんから。さあ帰りましょう。ここには用はありませんし、アガットは私が持ちます」

と、詠唱を始め重力操作してゼロに等しいまで軽くして運んだ。

第１０話「白い影後編」（後書き）

～登場人物追加～
怪盗紳士ブルブラン
身喰らう蛇に所属する執行者？？。
大都市を中心に盗みを働く怪盗。
「美とは誇り高くあること」という美学をもつ。
芝居がかった言動だが武術の達人でもある。

原作にオリジナリティを出すのが難しいです。
作者にとってこれが限界です。
感想待ってます。

第１１話「盟主は女性？」（前書き）

オリジナルです。結社になぜ知り合いが多いのかあたりを書けたらと思います。

第11話「盟主は女性？」

ルーアンでの白い影の調査を終えた三人は次に向かったのはツァイス。ここでは頻繁に地震が起きているということだった。いままでは起きたことのない地震。そして局地的すぎる地震に違和感を覚えつつも向かうことにした。

だが、クロウは戦線離脱した。それは盟主から会わないかと誘われたためだった。このままでは敵ではないかと疑われると伝えると偽装したクエストを出すからそれを引き受けてほしいとのことだった。

ルーアンに一度戻ると非公式ながらもA級以上のクエストが発生していた。エステルたちは何の疑いもなく別れることができたが問題はクローゼだった。

クローゼ「大丈夫？怪我・・・・しないでね。やっぱり私も行こうか」

返事から分かるように、最後までごねたのだ。今はたくさんの人からの信頼を得てそれから一緒になれるよ！と言った手前、嘘をついていることに良心が痛んだ。

クエストを引き受けてルーアンの郊外に行くと執行者？0の姿が。道化師カンパネルラだ。神出鬼没で戦闘には加わらず傍観者を決め込んでいるがいつも交渉を引き受けている。

道化師「お待ちしておりました。クロウ様。どうぞこちらへ。盟

主がお待ちです」

海岸に行くと飛行艇が止まっておりそれに乗りこむように案内した。乗るとかなりの勢いで空高く舞い上がって行った。

雲の上には戦艦クラスのグロリアスの姿が。ここが一時的な滞在場所となっているらしく結社のメンバーも多数見受けられた。

道化師の案内で星辰の間（せいしんのま）に通された。

道化師「アクセス」

その言葉とともに盟主と通信が繋がった。

道化師「では私はこれで失礼します。どうぞごゆっくりお話し下さい」

カンパネルラは炎に消えそこには盟主とクロウの二人だけになった。

盟主「お久しぶりです。通信でしか会えないことを申し訳なく思っております」

何だか堅苦しい口調が通信から聞こえてきて笑った。

盟主「あーっ、今笑いましたね？どうしていつもいつも・・・・」

少しずつ結社を作った当時の雰囲気が出てきた。

クロウ「ああ、久しぶりだな。盟主。いや●●●よ。でも堅苦し

いことには相変わらずだと思っているよ」

クロウは、誰もが知らず知っていたとしても言うことのできない隠された本名を言う。

盟主「っ、ようやく私の名前を呼んでくれました。」

通信から聞こえる声がくぐもって聞こえすぐ泣いている声に気が付いた。

クロウ「泣いているところ悪いんだが俺を呼んだ理由を説明してくれ。仲間に疑われてしまう」

自分の体裁ばかりを気にしているのにも人間らしくなってきた証拠なのだろうか。だが、ある意味で後戻りはできない状態まで陥っているのに。

盟主「そうでした。えーっと、会いたいから呼んだ。では駄目ですか?もう私と対等に話せるのはあなたしかおらず寂しいんです」

トップともあろう者が・・・・。と思って一番上だから弱みを隠さなきゃならず疲れていたのかと考えると親しみが湧いてきた。

クロウ「少しの間ならいいよ。それでお前の疲れがとれるなら」

その日一日盟主と会談で終えた。

盟主「ところで風の噂で聞いたんですがグランセル城の次期王女と付き合っているのは本当ですか?」

クロウ「えっ、どこからそんな噂を」

汗が滝のように滴り落ちてきた。これはヤヴァイと本能が告げている・・・・。

盟主「本・当・な・ん・で・す・ね？」

クロウ「・・・・そうだ」

言った瞬間通信がブツっと切られたのは言うまでもない。

クロウ「はぁ・・・・。どうしよっかな～。●●●ってば、嫉妬してるのか」

第１１話「盟主は女性？」（後書き）

盟主との関係は設立時に一緒にいたこと。その時はクロウが実質一位だったこと。

この作品では盟主は女性です。異論はあると思いますが女性で決定です。その方が面白そうだからです。

感想をお待ちしております。

第１２話「力の片鱗」（前書き）

クロウは敵側ではありません。自分の計画の前に敵も味方も利用できるものは利用してしまおう的な考えです。

第１２話「力の片鱗」

通信が切られた後、ガクッと床に両手を付き失言だったなと思いつつその部屋を後にした。でも去り際に声かけてみようと思った。

クロウ「じゃあな。また来るよ●●●」

短い一言を告げると一瞬モニターが瞬いて

盟主「はいっ！お待ちしております」

星辰の間から出ると道化師がいて今日は遅いので泊まって行くことを勧めた。他の幹部クラスのメンバーも集まっているらしくクロウがいることを知ると会いたいと言ったそうだ。

了承して食事をとるために大広間に行く。そこにいたのは執行者（レギオン）と呼ばれる実行部隊だった。欠員もいるが全部で、１５人存在しその中には昔ヨシュアも含まれていた。

グロリアスの中にいたのはカンパネルラ、レーヴェ、レンの三人だった。

レーヴェ「お久しぶりです。最後に会ったのはヨシュアとロッジを壊滅させていたときでしょうか」

レン「うふふふ、おにーさん。久しぶり。元気だった?」

クロウ「ええ、二人とも変わりないですね。ここにヨシュアがい

たらよかったのかもしれないが。今ここにいる執行者で楽しみましょう。ところで他の人たちは計画実行中ですか？」

道化師「はい。そうですが。あまりクロー様には伝えることはできませんよ。曲がりなりにも遊撃士と言う立場なのですから」

と道化師が言うとレーヴェとレンは寂しそうに俯いた。

クロウ「そうだったね。ここにいるとすっかり忘れてしまいそうになるから可笑しなものだよ。遊撃士と言ってもあなたたちが私の大切な人を傷つけない限り中立を保っています。ですからその一つだけを守るなら敵対することはありません」

執行者たち「「「・・・・えっ？大切な人がいるんですか？」」」

呆然として聞き間違いかと思って聞きなおす。

クロウ「おいおい、失礼な。出来たよ、大切と呼べる人がな。今宣言しておくぞ。クロー・シュツッツ・リベールはクローディア・フォン・アウスレーゼを好きだとね」

背筋を伸ばし本名に言霊を乗せて宣言する。宣言したことでクローゼの身に何か生じた場合警告した後敵対行為が許されることになった。

クロウが言霊を含めた宣言は結社のメンバーの心に刻み込まれ宣言されたことに対して、何かしらの逆らった行為をするときに呪いとして身に滅びを招かせる。軽微だと行動不能。重度だと激痛を伴った死を招く。

執行者たち「仰せのとおりにいたします。われらそしてここにいない執行者全員はあなたの宣言を受け、逆らうことをしません」

三人は片膝をつき片手を胸に当てて従順と敬意をあらわす態度をとる。

ひとまず安心だ。この後は重苦しい雰囲気を無くして食事と交わりをともに取り楽しむことが出来た。それにしても世を騒がす組織と一緒にいるのに良心が傷つかないこともあるんだな。

クロウ「ところでほかの人たちはどんなことをしている？」

道化師「簡単に言いますとヴァルターが最初です。次にレン。ルシオラ。レーヴェとなっております。クロウ様はどこかで友人とご一緒されますか？」

クロウ「うーん。そうだな。一番楽しそうな所に行くかもしれないが今回は極力遊撃士と一緒には行動したくないよな。でも、成果を出さないと女王に認められないし。うーん・・・・」

道化師「でしたら、こちらで計画を練って一石二鳥の案を出しましょうか？もちろん傷つけることは致しません」

クロウ「分かった。だが、傷つけた場合警告後に容赦はしない」

と言うと自分にあてがわれた部屋へと戻った。

道化師「ふぅ。生きた心地がしません。あの方が伝説の方ですか。絶対に敵対したくありません。計画に不備が無いか完璧にしないと・・・・」

レン「ホントーに大切な人が出来たんだね。良かったぁ、おにーさんも荒んでいたものね・・・・」

レーヴェ「荒んでいると言う言葉はいつ覚えたんでしょうか。まぁクロウ様の喜ばしいことですから、祝福しましょうか・・・・」

レン「そうね！あ～あっ、それでも早くヨシュアおにーさんに会いたいなぁ・・・・・」

レーヴェ「会えますよ。こちらが計画を進めているならいつかは・・・・」

続く。

第12話「力の片鱗」（後書き）

クロウの優先順位は1位クローゼ。2位盟主とその仲間。3位エステルたちとなっております。

性格が分かりづらいのでぶれる恐れがあります。見逃してください。

感想お待ちしております

第１３話「出番は狙い通り？」（前書き）

色々と飛ばしての悪役？と思う場面もあります。
が、全て計算ずくでやっている主人公でした

第１３話「出番は狙い通り？」

次の日、自分に与えられた部屋の中で起きる。昨日、船の中を覗いてみたら色々と設定が弄られていておかしくなっていたので、そこらにいた雑兵に聞いてみた。

すると、ヨシュアに忍び込まれてギルバートと言う下っ端が応戦したがあっさり負けたこと。レーヴェが捕まえようとした時にヨシュアが機能の設定を弄っておかしくしその間に逃げのびたことを聞いた。

クロウ「へえ～、ヨシュアがね。ふふっ良い仕事してるじゃない。ってことはヨシュアとエステルは一緒になったのかな。そろそろカンパネルラのところに行くか。計画でも建てたころでしょう」

道化師「お待ちしておりました。計画はこれです」

カンパネルラはクロウに紙を渡してきた。そろそろ、執行者の四人が王都に攻め込もうとするらしい。そこにクロウが女王と王女を守るために立ち向かうというものだ。

作者≪何度も言いますが敵側ではありません≫

レン、ブルブラン、ルシオラ、ヴァルターが攻め込もうという時間が迫ってきている。

クロウ「じゃあな、道化師。今回の計画ではもう会うこともないだろうが、元気で。あと見送りは良いよ」

甲板に見送りに来たカンパネルラをそのままにし、飛び降りた。

道化師「な、なんて無茶をする。クロー様ですから心配はしておりませんが・・・・。あっあれは。光の翼でしょうか。綺麗です」

視界の隅でクロウが翼を広げて滑空しているのが見えた。

通常、粒子でクロウの服に纏っているのを展開することで防御や攻撃に使えるほかに、翼として空から安全に滑空することが可能になる。

王都では王国軍を吹き飛ばし悠々と入ってくる執行者の面々がいた。そしてそれを追いかけるようにエステル、ヨシュア、アガット、ティータが走って行った。

火の手が上がる王都の街並み。遊撃士協会では町の人々の避難先となっており城に行く前に、立ち寄って安全を確認しながら足をはやめていた。怪我をしている人も多数いるが命に別条はないような怪我しか負っていない。とりあえず協会の事はほかの遊撃士に任せ城へと急いだ。

グランセル城の大きく厚い門が閉まっている。が、それを全く問題にしないヴァルターが氣を充分に含ませた寸剄で一枚ずつぶち破って行った。

城内では親衛隊との闘いがあり、外ではエステルたちが突入しようとした時に機械人形兵器の足止めをくらっていた。が、ようやく勝利し遅れながらも城内へ入って行ったエステルたちの目に入ったものは守れずに傷つき倒れた親衛隊の人たちだった。命に別条はな

いようなので急ぎ空中庭園へと向かう。

そこで見た者は女王と王女を人質に取る執行者の四人だった。クロウもそれを超高高度から確認。ピキっと青筋とともに殺気が滲み出るのは仕方がないこと。

クロウは道化師に連絡を取り。

クロウ「あーカンパネルラ？どのくらいやっちゃっていいの？」

道化師「えっと・・・・。適度な傷であれば良いと執行者にも伝えてありますが」

道化師【もしかしてこの計画には大きな欠点があったのかも。あーこれが終わったら他の人から袋叩きにされるんじゃなかろうか】

クロウ【あー、久しぶりのクローゼだ。少しっていうかかなり騙しているようで良心が痛むなあ。全て終わったら正直に打ち明けてやろうっと】

滑空しながら庭園の様子を確認した後、傷は付けていないから予定通りでいいか。

殺気を2割開放して上空から誰かに見られていると認識させた後、そのままの勢いで落下＋着地。そして執行者に斬りつけ全員の両肩の関節を一瞬で外していった。

～茶番中～

ルシオラ「あら？新手かしら。良い一撃だったわね」

ヴァルター「ああん？邪魔しやがって」

レン「おにーさん、結構やるわね。さすがＡ級遊撃士」

ブルブラン「あなたには美しさが足りない」

「「「「危なかった。道化師から聞かされなかったら命の危険大だったのでは」」」」

～茶番終了～

クロウ「もう君たちに勝ち目はありません。立ち去りなさい」

ルシオラ「ふう。分かりました。が、次なる試練はもう目の前に来ています。気を抜かないように」

言葉の後に四人とも消えていった。

次なる試練とはいったい。そして疑われるクロウ。さあどうする？

続く

第１３話「出番は狙い通り？」（後書き）

結社との茶番は最初で最後です。
あとは協力するにしてもすべて善人行為です

第１４話「クローゼの気持ち」（前書き）

完全に・・・・。
あとオリジナルです

第１４話「クローゼの気持ち」

その後の事を話そう。何事もなかったように立ち去ろうと・・・・は出来ませんでした。万力のような強い力でクローゼに服を掴まれていましたから。二人きりの部屋で恋人同士のようなこと？そんなのことはありません。あるのは尋問に似た時間でした。

クローゼ「ねえクロウ？あなたは一体どこに行っていたのかしら？狙ったようなタイミングで来て。結社の人たちと親しそうに話していたし。秘密が沢山あるみたいね。私に言えない事なの？」

最初は背中に般若が見えても可笑しくはないぐらい烈火の如く怒り、そして言葉は尻すぼみに小さくなってゆき最後には・・・・まあ分かるよね。泣き落としさ。はあ・・・・。

～言い訳タイム～

クロウ「ええっと、前にも話したようにクエストに行っていました。結社に関するＡ級の仕事に出かけていました。結果は外れで成果はありません【ごめんクローゼ、これは言えない】狙ったようなタイミングでもありません。跳躍していてちょうど間にあったんだよ。親しそうに話していたのは昔、剣帝とよばれるメンバーに会っていたからであって問題ないと思うんだけど」

誤魔化し半分だけど秘密について言っても良いものだろうか・・・・。すごく悩んだ。

～言い訳終了～

クローゼ「ねえ、クロウ。私ね一つだけ決めたことがあるの。怒らない？」

クロウ「勿論」

クローゼ「私、次期女王になったんだ。略式の儀で立太女になったの。１６歳で心配だけど力を借りて行って行こうと思っているんだ。その中にはあなたもいるのよ」

クロウ【ああ、この子はなんて強い心を持っているんだろう。自分が秘密を教えて駄目って言う事は無いだろうな。まあ駄目でも最初から味方はいないと思って存在して来たから、出来そうになった味方がいなくなる・・・って思えばいいか】

クロウ「クローゼ。俺には誰にも行っていない秘密が一つある。それは俺の本名と年齢なんだ」

クローゼ「えっ、本名？」【どういうこと？】

クロウ「ああ、ふ～っ、俺の本当の名前はクロー・シュツッツ・リベール。年齢は１２００歳以上。ゼムリア大陸の大崩壊前から生きている古代人なのだよ」

クローゼ「・・・・」

クロウ「言葉もないだろうが歴史に関する資料を調べると出てくるはず、人とは異なる理（ことわり）で生きている。だから一人で生きていこうとして・・・・」

クローゼ「ふざけないでっ・・・・！」

クローゼ「私はそんなこと気にしない。そんな小さな事であなたの元から離れることなんてできないしやろうとも思っていない。ただ愛おしいだけ。寂しそうにしている横顔が切ない気持ちを呼び起こして支え手になっていたいという気持ちしか湧き上がらない。だからそんな事言わないで」

そこまで一気にまくし立てると、泣き崩れクロウの胸に飛び込んできた。そしてギュッと腕を掴み離れない。

クロウ「・・・・。うん、分かった。俺が悪かった。そしてクローゼの命ある限り離れないことを誓おう」

そしてクローゼを強く強く抱き返しそのままキス・・・・。

クロウ【ん?あれっ、いままで伴侶はいないから分からなかったけど一緒の夫婦になったら相手も年齢長寿になるのか?どうなんだろう・・・・】

第１４話「クローゼの気持ち」（後書き）

クローゼファンの方、申し訳ありません。ヒロインを作ろうと思った時エステルにはヨシュアが。ティータにはアガットがいるじゃないと思いまして。だったらオリキャラには誰かいるかなぁ～・・・・。あっ、そうだ！クローゼにしよう。クローゼなら秘密を打ち明けても全部包み込んで理解してくれるだろうと思ってオリ＋クローゼにしました

原作ではエステルにクローゼが「ヨシュアが好きでした」みたいな事を行っていたと思います。ですがハーレムや略奪愛と言うのは作者の好みではないのでクローゼをヒロイン化しようと！思ったわけなんです。

オリ主の詳細（前書き）

矛盾していると指摘して下さったのでオリ主の詳細を載せます

オリ主の詳細

？なぜ１２００歳となったのか？

・最初からあやふやに考えており、少し前に載せたかと思いますが作者がズボラで年齢計算が面倒くさいと言う考えからいっそのこと七耀暦が始まった頃に誕生でいいじゃないと思ったのが初期設定でした。

・そして、ここからは後付けという形をとっての詳細な点ですが文明の大崩壊の時にアーティファクトに触れてしまいそれが原初と世界の理（ことわり）と呼ばれる二つのもので呪いを受けてしまったこと。それによって死ねない体になり１２００年という長い年月を生きてきたという設定を思いつきました。

？それを踏まえて～過去編～その１で、１０歳にも満たない頃傭兵を生業とし感情を持たない少年と言う設定はどうなのか？

・それに関しては初期設定の時にメモ帳に入れて考えていたのですが、忘れて書かなかったというおっちょこちょいが発動してしまいました。メモ帳には【七耀暦が始まった頃は普通の子供。が、古代文明の崩壊中に死ねない体になったかわりに眠って時代を過ごす。そして起きるたびに年齢があやふやで目覚める】とありました。これが初期設定でしてここからが後付けになります。

・眠って時代を過ごすという表現はコールドスリープのように冬眠と言った形を言いましょうか。それとも封印と言う形で古代遺跡

で眠るというどちらかを考えています。

・起きる度に年齢が定まらないというのは成長→老化→眠る→起きる→成長を繰り返す過程で何かしらの異常に見舞われて年齢と感情や思い出もあやふやと後付けしました。

これが今の作者の限界です。読者の皆様の思考を混乱させてしまったことに申し訳なく思っております。次の話では作中に出てくる専門用語を資料から抜粋して書きたいと思います。

オリ主の詳細（後書き）

次は作中の専門用語とこれから出てくる用語も一緒に載せます

作中の専門用語（前書き）

原作を知っているなら飛ばしてもかまいません。
オリジナルは入っていません。

作中の専門用語

・世界背景

人々の生活は導力器（オーブメント）と呼ばれる技術によって支えられている。５０年前の導力革命によってもたらされた導力器は、飛行船をはじめとするさまざまな技術に応用され、人々の生活を飛躍的に豊かにしていった。しかし一方で兵器にも用いられるために大陸は混迷の様相を示していた。

・導力器（オーブメント）

神秘のエネルギー《導力》で動く機械仕掛けのユニット。内部には七耀石（セプチウム）を加工した回路が格納されており、その機構に応じて様々な現象を起こすことができる。５０年前に発明されてから、またたく間に大陸全土に広がり、照明・暖房・通信・兵器・魔法・飛行船など様々な技術に応用されていった。

・黒の導力器

黒い半球体をした導力器（オーブメント）。周囲のオーブメントを無力化する導力停止現象を引き起こすなど、現代の技術では不可解な現象を引き起こす。

・遊撃士協会

大陸各地に支部を置く遊撃士（ブレイサー）のギルド。民間人の安全と、地域の平和を守ることを第一の目的とし、魔獣退治・犯罪防止などの要請

に応じて遊撃士を派遣する。

・情報部によるクーデター事件

リベールの軍事力強化を求める王国情報部が企てた反逆事件。情報部は王国の重要人物の家族を人質に取り、軍備拡張に反対する女王アリシア?世の退位を要求。グランセル城を占拠して王城地下に眠る古代の秘宝を手に入れようとするも、遊撃士や親衛隊など多くの人々の活躍によって阻止された。情報部の中心人物であったリシャール大佐は逮捕されたが、その残党はいまだリベール各地に潜んでいるという。

・身喰らう蛇（ウロボロス）

情報部の企てたクーデター計画をはじめとし、リベール各地で起きた不可解な事件の背後に見え隠れする謎の結社。その存在も目的も謎に包まれているが、ヨシュアの過去と深い関わりがあるようだ。

・ハーメル村の惨劇

エレボニア帝国とリベール王国の国境近くにあった村。百日戦役を起すための口実作りのために襲われ、一方的虐殺ののち壊滅させられた。実際に襲ったのはリベール兵を装った猟兵団であり、完璧な濡れ衣作りに利用された事になる。

登場人物のヨシュア、レオンハルトはこの村の遺児。

・以下途中介入の登場人物と変更した点、新たに判明した点

シェラザード・ハーヴェイ

武器：鞭

銀閃（ぎんせん）のシェラザードの異名を持つランクBの正遊撃士。鞭の使い手だが併行してアーツの使い手でもある。幼い頃はスラム街で暮らしており荒んだ生活を送っていたが旅芸人の一座に拾われた。そしてある事件で解散した時カシウスに助けられたことから「先生」と慕っている。的中率の高い占いが得意。

アリシア・フォン・アウスレーゼ（アリシア?世）

６０歳。リベール王国第２６代女王。巨大な軍事力を誇る帝国と大量の人口を持つ共和国に挟まれながらもしたたかな外交力で五分以上の政治力を発揮する女傑であり、慈愛を以て国政に励む姿から国民に慕われている。

アラン・リシャール

武器：刀

かつてのカシウスの部下であり、カシウスより剣術の指南を受けた居合いの達人。事件全般の黒幕に当たり、その愛国心の強さ故にリベールの将来に不安を覚え、その心の隙を《結社》につかれてクーデター事件を引き起こし、エステル達によって阻止された。

ユリア・シュバルツ

武器：レイピア

王室親衛隊の女中隊長で階級は中尉。クローディア姫の護衛兼養育係も兼務しており、クローゼがレイピアを使うのもそのため。生真面目な性格で、姫の護衛兼養育係としての職に誇りと愛着を持っている。

ティータ・ラッセル

武器：大型の動力砲、火薬式のガトリング銃。

世界的に有名な導力学者アルバート・ラッセル博士の孫娘であり、

中央工房の見習い技師。エステルとヨシュアをお姉ちゃんお兄ちゃんと呼び、兄姉のように慕っている。また、アガットの不器用な優しさを身を持って知り、彼を「大切な人」と呼び好意を寄せている。

アルバート・ラッセル
ティータの祖父で、導力器を発明したエプスタイン博士の直弟子の1人。導力器の普及はリベールに中央工房（当初は技術工房）を設立したラッセルの功績に因る部分が大きく、「導力革命の父」と呼ばれる偉人。

テレサ
マーシア孤児院の院長で、優しさと包容力を持った女性。幼少時のクローゼを一時期保護していた。

クラム
マーシア孤児院にいる少年。イタズラ好きで反抗期らしい性格。テレサ院長に泣かれると弱い。

マリィ
マーシア孤児院にいる少女。しっかりした性格で、孤児達の中ではリーダー的存在。

ポーリィ
マーシア孤児院にいる少女。言動はゆっくりしているが独特のカンを有している。

ダニエル
マーシア孤児院にいる少年。やや気が弱くおっとりしている。クラムの子分的な存在。

レグナート
１２００年前のゼムリア文明崩壊より生き続ける竜。２０年前に眠りに付く直前に、当時剣の道を極めんとしていたカシウスに戦いを挑まれたことがあり、彼とはその頃からの「友人」である。

身喰らう蛇のメンバー

ゲオルグ・ワイスマン
クーデター事件を含め黒幕。当初は貧乏考古学者「アルバ教授」としてエステル達の前に現れ、護衛を受ける振りをしながらエステル達の様子を観察していた。武器は《盟主》より授かった杖で、戦闘では空間を操作した攻撃を行う。また、七耀教会時代の研究結果から、対象の記憶と認識を操作する異能の力も持つ。

カンパネルラ
道化師の異名を持つ。炎を使った幻術を使う。姿や言葉遣いは少年のものだが、「ヨシュアが結社にいた頃と容貌が変わっていないことが指摘されており、外見と実年齢が一致していない。実力はヨシュアと同じぐらい。

レオンハルト
剣帝の異名を持つ。《剣帝》の異名のとおり、その剣技は他の追随を許さない。また、強力なアーツも駆使する。素性はヨシュアと同じハーメル村の惨劇での生き残り。

ルシオラ
幻惑の鈴の異名を持つ執行者。扇を使って風を操り、宙を舞うように戦う。鈴の音を利用した幻術が得意。戦闘時には風と炎を伴う攻撃を主に使用し、更には強力な式神まで召喚する。かつてシェラザードと同じ旅芸人一座におりシェラザードにとっての姉貴分、エ

ステルとも顔見知りであった。一座の解散後、行方が分からなかったが身喰らう蛇の執行者となっていたことが判明した。

ブルブラン
怪盗紳士の異名を持つ執行者。大陸に「怪盗Ｂ」の名で知れ渡っている怪盗でもある。自称・美の探究者。戦闘時にはマジック（手品）を駆使したトリッキーな攻撃を繰り出す。

ヴァルター
痩せ狼の異名を持つ執行者。リベールでは見かけないサングラスが特徴。リベール王城正門を寸勁で破壊するなど常人離れした業を見せている。

ヨシュア・アストレイ
昔、漆黒の牙と言う異名を持つ執行者だった。

レン
壊滅天使の異名を持つ執行者。１１歳～１２歳ぐらい。身の丈ほどもある巨大な鎌を振るい、容姿に似合わぬ強烈な一撃で敵対者を殲滅する。「十三工房」で開発された巨大戦闘人形パテル＝マテルを操る。周囲の状況を瞬時に受け入れ、教えられた技能を瞬く間に自分のものにできる天才。化学、数学、情報理論の博士号を習得しており、代理人を通じて定期的に論文も発表している。

盟主
身喰らう蛇を統べる最高権力者で名前を含め全てが謎の人物。

ケビン・グラハム
七耀教会の巡回神父として登場したが星杯騎士団に所属していること及び輝く環の調査のためにリベールに来たことをエステル達に

明かした。ただし本当はそれ以外に使命を帯びていることが後に判明する。　その正体は長らく空席であった星杯騎士団の守護騎士第五位。外法狩りの異名を持ち、その異名の通り教会より外法と認定された存在の抹殺を主な任務としている。

作中の専門用語（後書き）

纏めるのに難儀でした。
説明文はコツコツと書くに限る・・・・。

第１５話～クローゼの交渉～（前書き）

原作どおりです

第１５話～クローゼの交渉～

それからのことですか？良い雰囲気だったのにそれを邪魔する輩が出てきた。いや、次なる試練が生じたと言うべきでしょうか。リベール国境付近に帝国軍の蒸気戦車が登場し一触触発の状態へと移行しつつあるという事です。

クローゼはエステル達と一緒に国境付近へ交渉に行きました。私ですか？ええっと、心配させたからという理由でお城から出ることを許されませんでした。私が何をしたというのでしょうか？と言ったらキッと鋭い眼をむいて

クローゼ「私を心配させたからここにいなさいっ！」

嫌われたくありませんからここでおとなしくしていましょうか。でも暇ですね。何が起きていたのでしょうか。

第三者視点

クローゼは次期女王として帝国軍と交渉するため、ハーケン門へ！！エステルたちも王太女殿下をハーケン門まで送り届けるため付き添うことになりました。

ハーケン門ではモルガン将軍と「隻眼のゼクス」ことゼクス・ヴァンダール中将が話し合っていて、帝国側は、王国に突然浮遊都市が現れてから南部の街で導力停止現象が起きてて困っていると主張しこの弱みにつけこむ姿勢が目に見えている。そこでクローゼに交渉役チェンジする。

次期女王にふさわしい見事な交渉術です。っと思ったら、帝国側も交渉役チェンジ。現れたのはエレポニア皇帝ユーゲントが一子オリヴァルト・ライゼ・アルノール皇子登場。

オリビエの交渉シーンはつけいる隙がないくらい完璧な交渉術。

『リベールが導力を停めてしまう新兵器を実用化し１０年前の復讐しようとしている噂。それが誤解だと証明できるか？』

浮遊都市を何とかできる可能性を提示できるまで猶予をくれるよう頼むクローゼ。

オリビエ『可能性を提示できたら一時的に撤退することを約束する』

交渉をしたところに狙ったように上空からアルセイユに乗ったカシウスが登場。

どうやら帝国軍を撤退させるためにカシウスとオリビエがグルになって芝居をした結果がこれだよ。

無事、帝国軍がハーケン門から退き、今回の事件も終息。アルセイユからケビン・グラハムが合流し帝国の視察としてオリビエがミュラーさんと共に乗り込むことになりました。

輝く環（オーリオ・オール）を見つけ出し、結社の目的を阻止するため浮遊都市へ向かうということがクロウ抜きで起きた出来事だったようです。

第三者視点終

続く

第１６話～浮遊都市への道～（前書き）

説明。クロウ出番無し

第１６話～浮遊都市への道～

帰って来たクローゼはスッキリした表情を見せていた。何と言うのかな、憑き物が落ちたようといえばいいのだろうか。ともかくオリビエとミュラーが帝国側の視察と言う形をとってアルセイユに乗り込んだ。クロウもアルセイユに乗せられた。

出発して間もない頃、紅蓮の飛行艇やグロリアスからの猛攻を受けた。だが、アルセイユは高速飛行を繰り返し難なく逃げ切ることに成功した。このアルセイユには従軍記者として二人同行していたが一人が遠くから近付いてくる機械兵器に気付く。

が、アルセイユの翼を切り取り不時着と言う形を取らざるを得なくなった。皆に怪我が無くて一安心。ここを拠点として動くことに決めたのだがラッセル博士によるとここでは導力停止現象は起きていないことが判明。パーティを組んで行動しアルセイユに残る他の人は船の修理に回ることで話し合いは終わった。

エステル達はさっそく船から離れて行動することに決めたがなにやらヨシュアとケビンがこそこそ話しているのを遠目で確認した。何やらカシウスからもらった手紙が関係しているようだったが、クロウはそのまま無関心を決め込むことに決めた。

クロウはエステルたちに着いて行くこと無く浮遊都市を探索する。理由は何となく懐かしい気持ちに襲われたからだ。ここの空気は懐かしくて落ち着く。ぶらぶらと歩くと住宅らしき家も見かける。

ここに何か手掛かりのようなものが無いだろうか。と思いつつも

探索を続けていた。

第三者視点

浮遊都市は公園地区（カルマーレ）、居住地区（クレイドル）とわかれていた。そして途中に山猫号を発見。ジョゼットとその兄を救出することに成功した。

続けて探索をしていると工場地区（ファクトリア）、中枢塔（アクシスピラー）を発見。目の前には高くそびえ立つ塔が・・・・。

２層目に突入するとそこでは執行者との戦闘が開始された。ブルブランが待ち構え前よりも強くなっているがやっとのことで退けることに成功した。ブルブランが今回の件に拘る理由は・・「盗む価値のある美しい物がある」かだけで。最後には逃げられてしまった。

３層目にはヴァルターが登場。ジンがヴァルターと闘いたい理由があるらしく闘った。ヴァルターも戦闘能力が上がっており倒すのは大変だがジンが勝つと知りたかった師匠との仕合の真相について語った。そして改めてジンＶＳヴァルターの真剣勝負が始まり結果はヴァルターが気絶してジンの勝利となった。

４層目、ルシオラとの対決。ルシオラとのバトルに勝利すると「座長を殺した本当の理由」を話し始めました。ルシオラは座長のことが好きで思いを告げたものの、想いには応えられないと言われ自分のもとから離れていくのが嫌で、永遠に自分のモノにしようとしたため座長を殺したというのだ。

これが解散の理由だった。語ったルシオラは終わったと言わんばかりに塔から身を投じてシェラザードが手を伸ばして助けようとし

たがそれを振り切って落ちて行った。なんと悲しい結末だろう。

5層目、レンとの対決。身の丈ほどある大鎌を振り回して戦闘する様は執行者らしい戦いとなったがこれにも勝利することが出来た。戦闘終了後、エステルはレンに平手打ちをしその後優しく抱きしめ、結社にいたいかどうか考えるように語りかけた。エステルにも思うところがあったのだろう。

さあ屋上には誰が待っているのだろうか。そしてこの物語の結末はどのようなものになるのだろうか。

第１６話～浮遊都市への道～（後書き）

ここはオリジナル入れられなかったです。多分ここのくだりも最後の方にならないとクロウは出てきません。

そして駄文ゆえに説明口調になってしまって申し訳なく思っております。

このような私ですが、どうぞごらんになってください

第17話～屋上そして急展開～（前書き）

原作では最初の鬱展開だったのを覚えています。

第17話～屋上そして急展開～

やはりというか予想はしていたが屋上にいたのは剣帝と呼ばれているレオンハルトだった。思い出すのはあの時、エステルたちはグランセル城のテラスで闘ったが手加減されていても強かったのを思い出す。

分け身＝分身を作りだし戦闘をかき乱してゆく。強力な必殺技を繰り出し手加減をしないレーヴェはただひたすら剣をふるい続ける。そして戦闘はレーヴェとヨシュアの一騎打ちに。

どうして結社に入ったの?というヨシュアの問いかけに“人の可能性を試したくなった”と答える。人は大きな存在に翻弄されがちで時には身動きできぬまま消えてゆく、そうハーメル村のように。

欺瞞を抱える限り人は同じことを繰り返す、それを防ぐために結社に入った。これがレーヴェの答えだった。ヨシュアはどうこたえるのか?

レーヴェが考えているそれこそ欺瞞だ、と伝え動揺させた時ヨシュアがレーヴェの剣を弾き一騎打ちに勝つことが出来た。ヨシュアの指摘に心を打たれ結社を抜けると言いやっとあるべき姿である兄弟に戻ったのも束の間、ワイスマンがそこに現れた。

レーヴェに不意打ちを食らわせ気絶させるとヨシュアの深層心理に埋め込まれた暗示に訴えワイスマンはヨシュアを連れていこうとする。

クロウ「それが答えとみてよいのだな？ワイスマン」

その戦闘に入っておらずアルセイユから姿を消した後姿が見えなくなっていたクロウがワイスマンに問いかける。仲間はいつの間にか現れたクロウに驚いているが。

ワイスマン「はい、そうですね。私は行ない続けてゆきます」

と言うとヨシュアとともに消えていった。

早く教授（ワイスマン）を追いかけて行きたいのに上空から巨大機械兵器（トロイメライ）が複数降りてくる。万事休すと思いきや、アルセイユに待機していたメンバーが駆け付けエステルたちは屋上から下層に降り輝く環がある根源区間へと急いで行った。

エステル、アガット、ケビン、クローゼに襲いかかる衝撃の戦闘とは・・・・？そして操られたままのヨシュアの運命やいかに・・・・？

第17話～屋上そして急展開～（後書き）

戦闘を入れたいのに擬音が難しくて入れにくい。
頑張ります

第１８話～最悪な黒幕～（前書き）

オリジナル＋原作です

第１８話～最悪な黒幕～

エレベーターシャフトで行くエステル、アガット、ケビンを見送る暇もなく3体の機械兵器が襲いかかってきた。ここにいる仲間は８人＋クロウで９人。４人で１体の機械を相手にしクロウだけ単独で戦闘した。

クロウは傭兵時代使っていた大剣を振るって機械の突きを捌いて行く。そして隙が出来たら牙突≪片手で剣を握り突きの状態で刺し貫く技≫を使って片手を断ち切る。他の仲間にも死傷者はおらず大丈夫な様子。

近くには機械兵器しかおらず大技を繰り出せる状態だったので剣に電撃を纏わせ頭部分のパーツから地面にめり込むぐらい一刀両断しそこから横に斬りつけに斜めに切り上げ切り下げと繰り返すうちにパーツはバラバラに分解していた。もう二度と起き上がることもなく終わった。

クロウ「呆気なかったな」

と思っていたらほかにも数体、上空から舞い降りてきたのでレーヴェが撃退しようとしたから

クロウ「先に行け！ヨシュアの元に行って助けてあげなさい。こちらは少し本気を出して止めよう」

大剣を地面に突き刺し詠唱を始めた。言霊に影響力を持たせる詠唱なのであまり隙が無くすぐに詠んで強力なのだ。

「自然の理から外れた物の上に絶望の如く無慈悲な煉獄の炎を持って焼き貫かん」

と、呟くと降り立った機械を炎が囲み段々と行き場を無くし檻のように閉じ込めて焼き尽くして行った。さあエステルたちはうまくいったのかね。

エステルたちの事を少し述べよう。根源区画に着いた3人を待っていたのは自分の益の為には沢山の人を不幸にさせるワイスマンだった。

ワイスマンはエステルたちに輝く環について述べるがエステルの反応に呆れたワイスマンが操ったヨシュアとエステルを闘わせることにした。

一瞬で無力化に成功したヨシュアはエステルに馬乗りになり剣を振りかざす。

ワイスマン「このままヨシュアに君の息の根を止めてもらう。しかる後、暗示を解いて元に戻してあげると言う事さ。はたしてヨシュアはどんな表情をするかな?ゾクゾクするとは思わんか」

エステル「っ、そ、そんなことをしたらヨシュアは・・・・」

ワイスマン「はは、今度こそ完全に心が砕け散ってしまうかもしれないね。だがそうなったら私がまた新しい心を造ってやれば済むことだ。そしてもう一度同じように、人に戻るチャンスを与えるとしよう。今から楽しみだよ」

エステル「やめて、そんなの・・・・酷すぎるよ。」

ワイスマン「それではヨシュア、止めを刺してあげたまえ・・・・」

もう一度剣を振りかざして今にもエステルに刺し貫こうとしているヨシュア。

エステル「ヨ・・・シュ・・・ア。ごめんね、絶対に死なないって約束したのに。ごめんね、一緒に歩くって約束したのに」

アガット「ヨシュア！とっとと目ぇ覚ましやがれ～！」

エステル「でもあたしは、信じているよ。ヨシュアは絶対に負けないって。あたしが居なくなっても現実から逃げたりしないって・・・」

ヨシュアは一度目を瞑り

ヨシュア「ごめん、ちょっと自信はないかな」

エステル「！」

刹那、エステルに馬乗りになっていたヨシュアが消えワイスマンに刃を向けた。

エステル「ヨ・・シュ・・・ア？」

ヨシュア「ごめん、エステル。ずいぶんと辛い思いをさせちゃったね」

ワイスマン「ば、馬鹿な。あの状態から意識を取り戻せるはずが。・・・待て。お前、肩についていた“聖痕”はどうした？」

ヨシュア「もう僕の深層心理に貴方が刻んだ“聖痕”はない。たった今、砕け散ったからね」

ワイスマン「な、なにっ？」

ヨシュア「“聖痕”のある一点に暗示の楔を打ち込んでもらったんだ。そしてそこに負荷がかかった時“聖痕”が崩壊するような自己暗示をずっと繰り返してきた」

エステル「あ、暗示の楔？」

ヨシュア「このままだと君との約束が果たせなくなりそうだったから、年に不時着した直後にケビンさんにお願いしたんだ」

ケビン「やあ～相談された時はどないしようかと思ったわ。正直その一点を外したら取り返しのつかないことになる可能性が高かったからな。でもヨシュア君見事、賭けに勝ったやないか」

エステル「あははは、そうだったんだ」

ワイスマン「ケビン・グラハム。騎士団の新米と侮っていたが小癪なまねをしてくれる」

ケビン「ま、これも女神（エイドス）の導きやろ。教会から脱けたアンタには分が悪かったかもしれんな。それに俺は助けただけや。助言者は他にもおる」

ワイスマン「な、なに?ま、まさかカシウス・ブライトの入れ知恵か」

ヨシュア「うん、手紙にはこうあったんだ。“お前の呪縛を解くカギはケビン神父が持っているだろう。だがその鍵をどうやって使いこなすかはお前自身の問題だ。ワイスマンとやらの行動を見抜いて自由を勝ち取ってみろ”とね」

アガット「へっ、あのオッサンらしいや」

エステル「まったくもう、ほんとお父さんらしいわ」

ヨシュア「さすがに迷ったよ。再び僕を操ったあなたが何をやってくるか。そして僕は一点に全てを賭けてみた。貴方が僕の最も恐れることを僕自身の手で行わせる可能性にね。そしてあなたはその通りに命じ結果的に“聖痕”は砕け散った。もう僕は貴方から完全に自由だ!」

ワイスマン「愚かな。そのまま操られていれば更なる進歩を遂げられたものを」

ヨシュア「残念ながら僕はエステルと同じようにそんなものに興味はない。それに道と言うものは他人から与えられるものではない。暗闇の中で足掻きながら自分自身で見出していくものだ」

ワイスマン「人間の歴史は闇の歴史。どう足掻いたって何も変わらない」

ヨシュア「違う!人は暗闇の中でもお互いが放つ光を頼りにして共に歩んでいくこともできる。それが今ここにいる僕たちの力だ!」

エステル「ヨシュア・・・・」

ワイスマン「出来そこないの執行者の分際でずいぶんと大きな口を叩くものだ。ならば見せてみるがよい！」

最終決戦へと続く

第１８話～最悪な黒幕～（後書き）

ヨシュアの“暗闇の中でもお互いが放つ光を頼りにして歩むことが出来る”っていう台詞好きなんですよね。
次も頑張ります。
その前に寝ますがｚｚｚ

第１９話～悲しい結末～（前書き）

碧の軌跡ももうすぐ発売。キーアが見たいっ

第19話~悲しい結末~

さてあとの事に着いて話そう。ヨシュアが自分の心を取り戻しワイスマンとの最終決戦へと挑む事が出来た。一度目の戦いではワイスマンと横を飛ぶピットのような機械が相手した。

アガット「これで決める。ドラゴンダイブ！」

闘気を身に纏い上空から地上の敵に向かって剣とともに叩きつける。機械は壊れワイスマンの動きを少し止めた。

ワイスマン「ほうこれは驚いたぞ。まさか貴様らがここまで食い下がるとは……」

エステル「はあはあ……教授ってばどんどん口調がぞんざいになってるんじゃない？」

アガット「へっ、余裕が無いんじゃねえのか？」

ワイスマン「ククク、哀れな事だ。自分たちがすでに死地にいることすら気付かないとは」

エステル「えっ……？」

ヨシュア「どういうことだ？」

ワイスマンの姿がエステルたちの前から輝く環の真下へと移動する。嫌な予感がした。

ワイスマン「このまま“盟主”に献上するつもりだったが気が変わった。貴様らが歯向かった相手がどのような存在かを思い知るがよい」

というとワイスマンの姿が輝く環と結合してゆく。光り輝く様が辺り一帯を満たして満たす。

エステル「これは？」

ケビン「まさか輝く環と融合しているのか？」

光が収まると、そこにはワイスマンと言う人の姿は無く得体のしれない存在へとなっていた。

ワイスマン「この感覚は……悪くない。まずは試させてもらおうか。人を新たな段階へと導く“天使”の大いなる力を」

ワイスマンはアンヘイルワイスマンとなってエステルたちの前に立ちふさがる。攻撃をいくら与えても障壁が張っていて効かない。もう駄目だ、とみんなが思った瞬間上空からドラギオンに乗ったレーヴェの姿が……。

ワイスマン「止めを刺し損ねたか。しかしドラギオンとはいえ障壁を破ることなどできん」

レーヴェ「だろうな。ところでワイスマン一つ聞きたい事がある。“ハーメルの悲劇”貴様はどの程度関与していた？」

ワイスマン「どうしてそれを聞く？」

レーヴェ「それは貴様が“蛇”だからだ。弱みを持つ人の前に現れて破滅をもたらす計画を囁く。そして自分の手を汚すことなく自らの目的を遂行する……。それが貴様のやり口だろう」

ヨシュア「あ……」

レーヴェ「実際、首謀者たちは当時の戦争に敗れて家を失った者が多いと聞く。もし１０年前の戦争が貴様の仕込みだと言うのなら全ての事に説明が付くと思ってな」

ワイスマン「ククク、なるほどな。まあおおむね指摘通りということだ。もっとも私が行ったのはハーメルの名を囁いただけだが。それだけのことで事は動きだし戦争へと発展した。まあ人間の業（ごう）の実験には最適だったよ」

アガット「貴様……。貴様のせいで俺の妹、ミーシャは……」

ケビン「……」

エステル「吐き気がしてきた……」

レーヴェ「なるほど、大方予想通りというところか」

ワイスマン「おや、ずいぶんと冷静なものだ。私としてはもう少し憤ってほしかったが」

レーヴェ「フフ、俺の心はもう冷め切っているからな。しかし借りだけは返させてもらう」

ワイスマン「なに？」

そういうとレーヴェは持っていた剣で障壁にヒビを入れた。エステルたちがどうやっても傷一つ入れることのできなかった障壁に……。

ワイスマン「ば、馬鹿な。環の障壁に傷をつけるとは。！そうか、その剣は……」

レーヴェ「そう、これは“盟主”より授かった剣、貴様の杖と同じく外の理（ことわり）で造られた魔剣だ」

ワイスマン「くっ、離れろ。この痴れ者め」

ワイスマンから放たれる光の帯が次々とレーヴェの体に突き刺さる。苦痛に耐えながらレーヴェは障壁に傷を大きく入れて行く。

レーヴェ「もう、遅い……」

最後に放たれた光で壁際へと大きく吹き飛ばされた。しかしワイスマンを覆っていた障壁の姿かたちはもうどこにもない。

ヨシュア「レ、レーヴェ？」

レーヴェ「俺に構うな。道は拓いた。あとは……お前たちが道を切り拓け！」

ヨシュア「くっ」

ワイスマン「やってくれたな。だが絶対障壁は環の力の一端に過

ぎない。全ての力を開放して貴様らに絶望を味わわせてやる」

アガット「それはこっちの台詞だ」

エステル「遊撃士として、リベール市民として、そして何よりも人として！」

ヨシュア「ワイスマン、僕らは貴方を倒す」

屋上組はと言うとやっと迫り来る機械兵器をすべて倒し終えたところだった。だが、エレベーターシャフトは上がってこないのでまだ下層へ行くことが出来ないでいた。

クロウ「ふう、ようやく一段落したか。だがこの都市はもう終わりを迎えるだろうな。ワイスマンの暴走によりすべての物事に歪みが生じ失敗に終わったのだから……」

盟主の悲しそうな表情が目に浮かぶようだったので、それを思って表情を歪めていた。

クローゼ「クロウが何か考えている。まだ私に教えてくれない事柄があるみたい。いつになったら全てを話して本当の意味で一心同体になれるのかしら?でも今はこの事件を終わらせるまでは考えないでおこう」

クロウの全てを聞きたいが、今はもっと大事なことに目を向けたクローゼだった……。

「エレベーターシャフトが上がってきたぞ」

誰かの声に目を向けるとそこには下層へ降りる手段が来ていた。
この物語の終盤へと進む。狂った歯車はどのような結末を生むのだろうか。それはまだ分からない。

3戦ののち環は消えワイスマンも狼狽しつつどこかに行ってしまった。

エステル「あんなやつどうでもいいわ。そ、それよりも」

ヨシュア「レーヴェ！」

みんながレーヴェに駆け寄る中なにかを考えているケビンだけがどこかに立ち去る……。

ヨシュア「レーヴェしっかりして。今手当てをするから」

目をつぶっていたレーヴェがヨシュアの方向を向く。

レーヴェ「その必要は……ない。お前なら分かるはずだろ。もう助からない傷だと言う事が」

無理だと言う事が分かっているのか諭すように伝える。

ヨシュア「イヤだ。そんなのイヤだ。レーヴェまでお姉さんみたいに。そんなの、そんなの酷すぎるよ……」

レーヴェ「フフ、そんな顔をするな。幼い頃の泣き虫に戻った様だぞ」

ヨシュア「そうだよ、僕は弱くて甘ったれで。まだまだレーヴェ

が必要なんだ、だからお願いだから」

レーヴェ「やれやれ、納得できないならヨシュア、お前は俺のようになるな。大切なものを守るために死ぬのではなく守るために……生きろ。エステル・ブライト頼みがある」

エステル「うん……何？」

これが遺言になるのだろう、エステルは分かっていた。

レーヴェ「こいつは強いようで芯が脆いところがある。全ての呪縛が解けた今本当の意味で強くなる必要があるだろう。だから頼む、これからもこいつを俺たちの弟を支えてやってくれ」

エステル「えへへ、言われなくてもそうするつもりだったけど。でも今ここでちゃんと約束する。だからどうか安心して」

ヨシュアと一緒に歩むとの約束をレーヴェとも交わす。

レーヴェ「すまない。ふふ、しかし……やっとわかったぞ。あの時カリンがなぜ微笑むようにして……逝ったのか。こんなにも満たされた気持だっ……たんだ……な……」

パタリと少し力がこもっていた腕が力無く床に落ちた。

レーヴェ「……」

ヨシュア「レ、レーヴェ……？じょ、冗談はやめてよね。ちゃんと聞こえているんでしょ？返事してったら。だってそうだろ、やっと会えたのに。やっとまた笑顔で話せるようになったのに。頼むか

ら、頼むから返事してよ！」

アガット「勝ち逃げされちゃったな……」

女性の声「おーい、みんなー」

エステル「あ……」

ユリア「無事だったのか。ひょっとして彼は……？」

エステル「……うん」

ラッセル博士「ワイスマンと輝く環は？」

エステル「うん。輝く環はどこかに消えちゃって。ワイスマンも逃げたけどやたらと慌ててたな」

ラッセル「なに。消えたじゃと？ううむ、それは少しマズいかもしれない」

話している最中にも地響きが生じている。どうやら輝く環が消えたことによって浮遊する力も消えたことで崩壊の危機に面しているようだ。一刻も早くここから脱出しなければならない。

エステル「ヨシュア、その辛いとは思うけど早く脱出しないと……」

ヨシュア「ごめん。エステル、頼むから先に行ってて。僕の事は気にしないで良いから」

エステル「……」

無言でヨシュアの元に行き

≪パンッッッ≫

と平手打ちをする。

エステル「ヨシュア、しっかりして。レーヴェが言ってたこと全然理解していないじゃない。守るために生きろって言われたじゃない？あたしは忘れない。ヨシュアを支えるって、この人と約束した事を。絶対に忘れないんだから……！」

ヨシュア「エステル、ごめん僕は本当に弱虫だな。」

そう言うとレーヴェのそばに置いてあった剣を取り

ヨシュア「レーヴェ、これはハーメルにお姉さんにちゃんと届けるから……」

ユリア「早く脱出を！」

エステル「う、うん」

ヨシュア【さようなら、レーヴェ……】

第１９話～悲しい結末～（後書き）

次回ケビンの暗躍……。感想お待ちしております

第２０話～ケビンの暗躍～

よたよたと足を引きずりながら通路を歩くワイスマンの姿がある。

ワイスマン「馬鹿な、馬鹿な。このようなこと“盟主”の予言の中には無かった。ま、待てよ試されていたのは私も同じだったという事か。くっ、戻ったら問いただされないと」

青年の声「残念やけど、それは無理ちゅう話や」

反対側から歩いてくる神父。

ワイスマン「ケビン・グラハム、いつの間にこんな所に。どけ、貴様のような雑魚に構っている暇はない」

術をかけて動きを止めようとする。が、しかし効かない。

ワイスマン「馬鹿な。いくら星杯騎士とはいえ新米ごときに防げるわけが……」

ケビン「あースマン。ちょっと三味線弾いてたわ。オレは騎士団の第五位、それなりに修羅場は潜っとる。ま、それでも本調子のあんたに勝つのは難しかったけど今なら付け入る隙があるからな」

ワイスマン「なに？」

ケビンのボウガンから弾が発射されワイスマンに当たる。

ケビン「オレの本当の任務は“輝く環”の調査やない。最悪の破戒僧ゲオルグ・ワイスマン、あんたの始末と言う事や」

ワイスマン「くくく、なるほどな。だがこの程度の事で体の自由を奪うなど……！な、なんだ。これは“塩の杭”かつてノーザンブリアを北部を塩の海に変えた禁断の呪具。私一人を始末するのにこんなものまで持ち出したのか！」

ケビン「あんたは少々やりすぎた。いくら教会が中立でも、もはや見過ごすわけにはいかない。大人しく滅んどき」

ワイスマン「おのれ！狗がぁぁ……」

足元から進む塩化は完全にワイスマンを滅した。

ケビン「狗か……。まっ本当の事なんだけれどね……。ヨシュア君、君は運が良い。まだあと戻り出来るんだから」

諦めにも似た表情を浮かべるケビン。

少年の声「うふふ、それってジェラシー？」

炎とともにワイスマンの横に姿を現すカンパネルラ。

カンパネルラ「星杯騎士第5位、“外法狩り”ケビン・グラハム。噂に違わぬなかなかの冷酷ぶりじゃない？」

ケビン「君は確か“道化師”だっけ。悪いけど彼のほうはもう手遅れや」

カンパネルラ「聞いているかもしれないけど今回は見届け役なんだ。計画の全プロセスを把握し一片の例外も無く“盟主”に報告する。教授の自滅も単なる結果であって防ぐべき事態じゃないんだ」

ケビン「なるほどな。“身喰らう蛇”、まだまだ謎が多そうだ」

カンパネルラ「それは君たち騎士団にも言えること。さてと僕の役目も終わり、落し物も回収できたしそろそろ帰るとしよう」

優雅にお辞儀をし教授の持っていた杖を持ち去って消える道化師。

ケビン「さっきの落し物ってまさか……。まあここからは管理外の事柄。早くエステルちゃんたちと合流しないと」

ケビンも任務を終えそこを立ち去った。

物陰から現れるクロウ。ワイスマンがいた場所に膝をつき

クロウ「結末は避けられなかったか。ヨシュアに加担し続けたら身の破滅と警告したし、私も合流しますか。それにしてもケビン……あなたはその若さで沢山の業(ごう)を背負っているのですね」

一筋の閃光ののち、そこには誰の姿も見えなかった。クロウは≪転移≫したのだ。

第２０話～ケビンの暗躍～（後書き）

碧の軌跡で蛇の使徒らが転移していたのでクロウも出来ます。

第２１話～一つの終わり～（前書き）

感動のシーンが書ければいいのですが、あとオリ主はいますが空気です。

第２１話～一つの終わり～

慌てて中枢塔から脱出を図る。それはもちろん真剣に。輝く環が無くなった今この浮遊都市を支えているものはなくなったのだから。ユリアやクローゼを先頭にして走る。最後尾にはケビン、クロウ、ヨシュア、エステルの順で走っていたがヨシュアが足をもつれさせてうずくまる。

ヨシュア「くっ……」

エステル「ど、どうしたの？」

駆け寄って心配そうに顔を眺めると、脂汗を流して顔面蒼白になっているヨシュアが見えた。

ヨシュア「大丈夫だよ。ちょっとめまいがしただけだから」

ケビン「無理もない。聖痕を取り除いた副作用ってやつだ」

ヨシュアの元に戻ってきてどうしてそうなったのかを説明していた。

クロウ「眩暈、頭痛、吐き気が当分の間付き纏うよ。だがヨシュアは覚悟して本当の心を手に入れた。その代償だと思って」

クロウもヨシュアの元に駆け寄って言うが何故か全てを知っているかのような表情にヨシュアは疑問を感じた。だがそれを今聞く時間など無い。早く脱出しないと。

少し皆から離れて通路を走るヨシュア、エステル。

ヨシュア「っ、危ない！」

上から大きな岩が落ちてくることに気付いたのでエステルを両手で抱えて思いっきり後ろへとダッシュ。その瞬間通路が砕け散った。

ケビン「大丈夫か……？」

慌ててケビンが二人の方へ向かう。それに合わせて先に逃げていたメンバーも分断されたことに気付いて戻ってくる。

エステル「そっちに行くことができなくなったよ」

ヨシュア「僕たちの事は放っておいて先に逃げてください」

クロウ「そう言えば緊急用の通路があったはずです。ヨシュアとエステルはそちらの通路を通ってください」

ヨシュアが少し消極的な事を言い出したので探索していた時に見つけた通路の事を話して合流を促す。

ヨシュア「分かりました。ではまた後ほど」

そして二人は緊急用通路を目指し駆けあがる。リベル＝アーク地下道に入り更に揺れが激しくなりつつあるが“もう間に合わない”なんて言葉は呑み込んで一心不乱に走り続けた。

走るのを止めたくなってもレーヴェの“生きろ”の言葉を心に刻

み込んでひたすら走り続けようやく地下から抜け出た。

が、ひときわ大きな揺れが襲い行こうとしていた通路が崩れ落ちる。

エステル「えっ……」

ヨシュア「なに……」

だが、来た通路も崩れて戻れなくなった。結果として細い柱が一本支えるだけの足場しか無くなったというわけだ。

エステル「戻れなく……なっちゃったね」

崩れた通路を呆然と眺め話しかける。

ヨシュア「うん、多分下の細い梁ではここの足場を支えることも難しいだろう」

強気に言ってみるが出てくる言葉は自分がはっきり分かるほど震えていた。

エステル「そっか……」

ヨシュア「ごめんねエステル。僕が足をもつれさせなきゃ間に合ったのに」

エステル「そういうことは言いっこなし、あたしだって危ないところをヨシュアに助けてもらったんだし」

ヨシュア「でも……」

エステル「えへへ……。でもどうしてだろう、こんな状況なのにちっとも怖くないんだよ。ヨシュアはどう？」

ヨシュア「僕は……。うんそうだね。怖くないかも」

さっきまで震えていた声が消えていつもと同じ声を出すことが出来ている。やっぱり僕にとってエステルは“太陽みたいな女の子”なんだね。

びしっ……。とうとう梁にヒビが入って足場が不安定になる。

エステル「ねえ、ヨシュア。二つ……お願いしても良い？」

ちょっと顔を赤らめてヨシュアに聞いてみる。これは今言わないと、うん。

ヨシュア「うん、いいよ」

真剣なエステルの表情にヨシュアも気持ちを引き締めて答える。

エステル「一つ目はあたしの事抱きしめてくれる？」

自分の顔がもっと赤く染まり熱を帯びてくるのが分かる。

ヨシュア「喜んで」

そう言うとエステルの正面に立ってお願い通り抱き締める。

エステル「エヘヘヘ……」

ようやく一つ目の想い叶った……。

ヨシュア「それから？」

エステル「あのね、しつこいって思われたらイヤなんだけど、やっぱりその……後悔は残したくないって言うか……」【あー自分ってば積極的にならなきゃいけないんだけど】

ヨシュア「ごめん、その続きは僕から言わせて。キス……しても良いかな？」

多分ヨシュアの顔もエステルに負けないぐらい赤くなっているはずだ。

エステル「あっ……うん！」

抱き締めたままキスをして願いが叶う二人。そしてそのまま……。二人の下にあった足場が完全に崩れ落ち回転しながら雲の間に落ちて行く。

それをきっかけに浮遊都市全体の崩壊が始まってくる。執行者と闘った中枢塔も、必死になって駆けた通路も、船が不時着した近くにある庭園も岩屑に姿を変え真下にある湖へと落下してゆく。

誰もそれを止めることすらできない。そこを縫うように上昇する飛行艇が二艇、空に白い軌跡を残してゆく。

～山猫号～

ジョゼット「お願い、キール兄。このままじゃヨシュア達が……」

キール「駄目だ、ジョゼット、あの様子じゃ二人はもう……」

ジョゼット「そんな……」

ドルン「くそっ、最後の最後でなんで。こんな時に女神は一体何をやってやがる」

～アルセイユ～

シェラ「そ、そんな……」

ケビン「間に合わへんかったか……」

クローゼ「お願いです。ユリアさん。避難通路の方向からしてエステルさんたちは北西にいる筈です。どうかそこにアルセイユを！」

ユリア「申し訳ありません、いくら殿下の命令でも従いかねます」

ユリアにとっても仲間は大事。でも行けない理由があった。それは……。

ミュラー「アルセイユの導力が完全に戻っていないときにもう一度近づけば間違いなく崩壊に巻き込まれます」

そうなのだ。導力が不安定なため戻ると一緒に巻き込まれてしまうのだ。

オリビエ「はは、参ったな。この場を和ませようとしても言葉が……出てこない」

ドロシー「エステルちゃん、ヨシュア君……あれ～」

ドロシー≪同行記者≫が何かに気付いたかのように声を上げる。

ドロシー「いや～ジークが嬉しそうに飛んで行くなーって思って……」

ジークの方向を見ると雲の間から古代竜が見えるではないか。それに乗っている三人の姿・・・・。ん?三人。カシウスが竜の背中に乗っているのが確認できる。カシウスのことだから“友人だ”とか言いそうだな。でも本当に良かった、あの二人が無事で。段々と感情が普通になってきたのかな。ブライト一家には助けてもらってばかり。

これで浮遊都市の問題は解決だろう。少し表舞台から遠ざかろう。少し……疲れたし。

“エステル、ヨシュアお疲れ様!”

第２１話～一つの終わり～（後書き）

駆け足でしたがＳＣ編終わらせました。３ｒｄは原作で進んだという事で“零の軌跡”からクロウも活躍?させることが出来ればと思います。

少しの補足を入れてから零編に進みます。

零の軌跡時のオリ主（前書き）

ケビンの物語はカットします。合計１６人の仲間なんて到底無理です。
登場人物を紹介していますが最初なのでネタバレはしていません。

零の軌跡時のオリ主

名前
クロウ・シュツッツ・リベール

年齢
２４歳、男性。

容姿
肩まで伸びている白髪を革紐で結ぶ。顔はきつね顔の細い顔つきをしている。体つきはがっしりとした筋肉質に鍛え上げられている。

性格
基本良い人。戦闘時は冷静かつ合理的に考えて行動。

武器
二丁拳銃を一丁を右の腰のベルトにはさみ、もう一丁を背中に隠し持つ。威力は片手で撃つと肩が骨折するぐらいの威力。有効距離は１０セルジュ。（１ｋｍ）

※距離について
１セルジュは１００メートル。
１アージュは１メートル。

武器詳細

右の拳銃名：シレトコ【地の果て】

左の拳銃名：カムイ【神】

以下説明していなかった登場人物

ヨルグ
ローゼンベルク工房の工房長。高名な人形師として名高く、製作される人形は一体数万ミラ以上の高値が付けられる。職人気質な老人で、自分が気に入らない仕事は請け負わない。イメルダいわく「偏屈ジジイ」。

イメルダ
クロスベル市の裏通りでアンティークショップを営む老婆。多数の私有地をクロスベルに有する富豪で、所有する土地の経営管理が本業であり、アンティークショップは半ば道楽で行っている。裏社会の事情にも通じており、過激な発言でロイド達に冷や汗をかかせることも多い。

セルゲイ・ロウ
特務支援課の課長で、ロイド達の上司。３８歳。　優秀な捜査官だが、アクが強すぎるので上層部から煙たがられており、左遷同然に特務支援課の課長職に就かされた。基本的に放任主義（と言うより、不真面目）で、ロイド達にも最低限の助言しか与えない。

キーア
ロイドが保護した記憶喪失の少女。推定年齢９歳。人懐っこく、天真爛漫。

ツァイト
各地で神狼とされている動物。

～捜査一課～

アレックス・ダドリー
クロスベル警察の捜査一課に所属する捜査官。２７歳。武器は軍用の大型導力銃。　エリート意識が強く遊撃士協会やロイドたち特務支援課を快く思っていないが、必要であれば支援課と協力し、闇ブローカーのアシュリーと情報交換する柔軟性はあり、堅い性格だが分別は出来る。
警察としての使命感と正義感は本物であり（セルゲイも正義感の強さは認めている）、それゆえに上層部の圧力で満足に捜査できない状況に苛立っていた。

ガイ・バニングス
ロイドの兄であり、セシルの婚約者。殉職した捜査一課の捜査官。享年２５。　両親を早くに亡くして以降、男手ひとつでロイドを育てた。ダドリーなどによれば破天荒な性格であるものの、捜査手腕は非常に高く、誰もが認めていたほど。警察官時代のアリオスとはコンビを組んでいた。

～その他警察関係者～

フラン・シーカー
警察本部のオペレーターでノエルの妹。１７歳。　特務支援課のバックアップも担当しており、各種連絡や報告書の処理などを行う。お姉ちゃんっ子で、ノエルに甘えることが多い。

ピエール
典型的な小役人タイプの人間で、上司には媚びへつらい、目下の者には尊大に振舞う。特務支援課の存在を疎ましく感じており、こ

とあるごとにロイド達にネチネチと小言を言ってくる。一方で重度の恐妻家。

～クロスベル警備隊～

ノエル・シーカー

クロスベル警備隊に所属する少女でフランの姉。１８歳。若輩ながら曹長の階級に就いており、サブマシンガンを2丁同時に使用するなど、高い戦闘力を持つ他、戦闘車輌の操縦にも長ける。警備隊ではライフルとスタンハルバードの習得が必須なのでその実力も相当だと思われる。　妹に負けず劣らず姉妹愛が強い。

ソーニャ・ベルツ

警備隊副司令の女性で階級は二佐（中佐）。タングラム門の責任者。　優秀だけでなく、警察などに情報提供する柔軟性と思い切りの良さを備えている。セルゲイとは昔馴染みで、司令と対立してクビになりかけたランディを紹介した。

ミレイユ

警備隊准尉の女性。ベルガード門に勤務している。　ランディのかつての同僚で、彼が警備隊に所属していたときは曹長だった。司令が事あるごとに外出して不在のため、彼女がベルガード門の事実上の責任者となっている。

～遊撃士協会～

アリオス・マクレイン

遊撃士協会クロスベル支部に所属するＡ級遊撃士。３０歳。武器は刀。　「八葉一刀流」の剣士で剣の腕は“剣聖”カシウス・ブライトをも凌ぐ。月に百件以上の依頼をこなすなど精力的に活動して

おり、クロスベル市民からは絶大な支持を受けて“風の剣聖”と呼ばれている。
その卓越した能力により、遊撃士協会本部からはS級への昇格をも打診されているが、元S級のカシウスとでは役者が違いすぎると断り続けている。妻サヤは故人、シズクという娘がいる。かつては警察官で、セルゲイの下でロイドの兄ガイとコンビを組んでいたが「一身上の都合」で警察を辞める。

ミシェル
クロスベル支部の受付。おネエ言葉を話す男性。

スコット
銃を使う遊撃士。

ヴェンツェル
エレボニア帝国出身の遊撃士。スコットと共に行動することが多い。

エオリア
レミフェリア公国出身の女性遊撃士。医師免許を持つ。

リン
エオリアと共に行動することが多い女性遊撃士。男っぽい言葉遣いをする。「泰斗流」という流派の武術家でジンの後輩に当たる。

～聖ウルスラ医科大学～

セシル・ノイエス
ロイドの兄ガイの婚約者で、姉代わりの存在の女性。２３歳。
聖ウルスラ医科大学の看護師チーフ。働き者で穏やかな女性だが、

ロイドと一緒にいる人は誰でも付き合っていると思ってしまうほどの天然ボケをかます。

シズク・マクレイン
アリオスの娘。５年前に起こった事故で失明する（この時に母サヤは死亡、アリオスはサヤの死を切っ掛けに警察を辞めてしまう）、聖ウルスラ医科大学で療養生活を送っている。失明しているが聴覚は鋭く、足音で誰が来ているのか把握できる。

ヨアヒム・ギュンター
聖ウルスラ医科大学准教授で年齢は３０代半ば。レミフェリア出身。　薬学に詳しく優秀なのだが、仕事を研修医のリットンに押し付けては何処かへ行ってしまうので、度々周囲を困らせている。

～マフィア～

マルコーニ
マフィア組織「ルバーチェ商会」の５代目会長。５６歳。　成金趣味丸出しの小柄な男で、服装のセンスはイマイチ。しかし、マフィアのボスに相応しい貫禄を持ち、逆らうものには情け容赦しない冷酷さを持つ。帝国系移民の出身で、共和国にもコネクションを持つしたたかさを持つ。

ガルシア・ロッシ
「ルバーチェ商会」の若頭で、マルコーニの側近。４２歳。大陸西部最強の猟兵団の一つ、《西風の旅団》の元部隊長で軍隊式格闘術で敵を瞬時に屠ったことから「キリングベア」と呼ばれている。商会の武闘派の筆頭であり、組織の武力強化に余念がない。

ツァオ・リー

カルバード共和国の犯罪組織黒月（ヘイユエ）の幹部で、「黒月貿易公司」のクロスベル支社長。２５歳。　クロスベルの裏社会の覇権を「ルバーチェ商会」から奪うために派遣されてきた。目的の為には手段を選ばず、時にはロイド達を利用する事もある。頭脳派ではあるが、武術も非常に優れている。

銀（イン）

東方の裏社会で伝説とまで言われる暗殺者で、「ルバーチェ商会」の牙城を切り崩すためツァオに雇われている。

～アルカンシェル～

リーシャ・マオ

劇団「アルカンシェル」に入団したばかりの新米団員。１７歳。元々は諸国を放浪する旅人だったが、とある切っ掛けでイリアに才能を見出され、強制的に入団させられた挙句に新作の準主役に大抜擢されてしまう。気立ての良い頑張り屋で、イリアの猛特訓にも文句一つ言わずに付いて行っている。胸が大きい。

イリア・プラティエ

劇団「アルカンシェル」のトップスター。２２歳。　情熱的なダンスと神懸り的な演技力で観客を魅了する事から「炎の舞姫」と呼ばれている。豪快でパワフルな性格をしており、舞台以外の細かいことを気にせず、行きずりの旅人であるリーシャを強引に劇団に引きずり込む程。

～財政界～

ヘンリー・マクダエル

エリィの祖父でクロスベル市長。中立派で市民からの支持は高い。

警察官としての道を歩むエリィのことを見守っている。

ハルトマン
クロスベル自治州議会の議長で、マクダエル市長と並ぶ自治州代表。自治州代表だが帝国派である。

アーネスト・ライズ
マクダエル市長の第一秘書。エリィの幼少時の家庭教師だが、エリィが留学してからは疎遠となっていた。警察官の道を歩むエリィが迷っている様を見て、政治の道に戻ってくるよう説得するが、後日、迷いが消えたエリィを見て最終的には彼女のことを見守ることにした。

ディータ・クロイス
ＩＢＣグループ総裁で、世界一の資産家。マリアベルの父。マクダエル市長の長年の友人であり、娘・マリアベルの幼馴染かつ親友であるエリィに対しては、「身内も同然」と様々な協力をしてくれる。

マリアベル・クロイス
ディーターの娘で、ＩＢＣグループの運営に携わる才女。エリィの幼馴染かつ親友であり愛称は「ベル」。髪型は縦ロール状のツインテール。

零の軌跡時のオリ主（後書き）

登場人物紹介は次にも続きます

登場人物紹介“後編”（前書き）

明らかになる詳細についてはその時に応じて紹介します

登場人物紹介“後編”

～その他の住民～

ワジ・ヘミングス

知性派を気取る不良チーム「テスタメンツ」のリーダー。１７歳。中性的な容貌を持つ皮肉屋だが高いカリスマ性を持ち、手下達からは神のように崇拝されている。見た目通りフットワークが軽く、空中戦を主体にした格闘術を得意とする。

ヴァルド・ヴァレス

武闘派の不良チーム「サーベルバイパー」のリーダー。２０歳。「テスタメンツ」とは対立しており、幾度も抗争を行ってきた。武闘派らしく高い腕力と凶暴な性格の持ち主だが、意外と面倒見も良いので大勢の手下に慕われている。鎖付きの木刀を得物としている。

アッバス

「テスタメンツ」のナンバー2を務める、スキンヘッドの大男。普段はたまり場であるプールバー「トリニティ」でバーテンをしている。　大陸中東部の出身であるということ以外の経歴は不明で、彼に関する詳細はワジですら知らないという。

イアン・グリムウッド

クロスベル市の西通りで「グリムウッド法律事務所」を営んでいる弁護士。　気さくで人当たりがよく「熊ヒゲ先生」の愛称で親しまれている。市民、商人の他に警察とも懇意であり、生前のガイ、ダドリー、セルゲイとは度々情報交換を行ってきた間柄。

ハロルド・ヘイワース
アルモリカ村で特務支援課と知り合うことになる、貿易商を営む商人。住宅街地区に自宅がある。　堅実な商売を信条とし、妻ソフィアや息子コリンにも優しい好人物。アルモリカやマインツの人々からも信頼は厚く、周囲の評価は高い。

グレイス・リン
クロスベルタイムズの女性記者。２４歳。　強引かつ体当たりの取材が得意で、性格はかなりずうずうしい。

ヨナ・セイクリッド
元エプスタイン財団所属の少年。　悪戯が過ぎてトラブルを起こして財団を出奔し、得意のハッキングで様々なデータを盗んで「情報屋」紛いのことを行っていた。態度が悪い。

～エレボニア帝国～

レクター・アランドール
オズボーン宰相の二等書記官で帝国軍情報局の大尉。

～カルバート共和国～

キリカ・ロウラン
リベールの異変後、その洞察力と問題解決能力を買われてカルバード大統領直属の情報機関“ロックスミス機関”への誘いを受け、共和国へと帰国。同機関の室長となる。

登場人物紹介“後編”（後書き）

次話から“零の軌跡”が始まります。
ここでクロウがどのような立場なのか補足しますとセルゲイ課長に誘われて特務支援課に初日から合流すると言う形を取りたいと思います。
ランディ、ティオとは知り合い。ロイドのことはガイを通して知っている。エリィは深く知らない、ぐらいでしょうか。

第２２話～特務支援課と彼～（前書き）

やっと零編に来ました。投稿連日にして１０００文字以下か投稿をなるべく毎日にして１０００文字～２０００文字にするか模索中。
オリ主の名前は本文で書かれている名前にします。
電話の音はＰＰＰＰです。

第２２話～特務支援課と彼～

セルゲイ課長「ちょっとお前の手が借りたい」

連絡があったのは昨日の事。いやいや自分リベールにいるんだけれど、拒否することは不可能ですかっ！もうお前の立場を用意したって……セルゲイさんは何をしたいんだろう？

警察署の受付に聞いたらここにいるって話だけど。

クロウ「失礼します！たった今セルゲイさんに誘われて来ま……した……よ、と。はっ？」

そこにいたのは血塗られた戦場で闘った戦友と自分のふがいなさから逃げ出した時に出会った青い髪の少女が部屋の中にいた。

セルゲイ「遅かったじゃないか。ほらお前で最後のメンバーだ。自己紹介でもしようか？」

何事もなかったように進行させようとするセルゲイを横目で見ながらクロウの心中は暗くなる一方だった。

セルゲイ「あとはお前だけだぞ、クロウ？」

いつの間にか他の人の紹介は終わっていたようだ。ふと眼を上げるとティオと目があったが直ぐに逸らされた。そりゃあそうだよな別れ方が気まずかったもんな。セルゲイさんが何を期待しているのかは分からないけどここでやるっきゃないな。

クロウ「名前はクロウ・フォン・リベルと言います。２４歳です。よろしくお願いします」

当たり障りのない普通な自己紹介しかできなかった。早く元通りにしないと……。

ロイド「えっと、特務支援課っていったい何をするところなんですか？」

やはり顔ぶれが若い気がするのは気のせいなんかじゃないってことだろう。

セルゲイ「まあ、色々とあってだな。ここにいる全員はお前と同じ期待のルーキーだ」

それって質問に答えてないよっ！初日から問題ありすぎ……。

ＰＰＰＰ　セルゲイ「おおご苦労さん」

ロイド【あれは携帯用の端末。そんなものまで実用化されているのか】

いきなり鳴った端末に時代を感じさせる。

セルゲイ「喜べ、ルーキーども。特務支援課がどんな場所なのかこれから素敵な場所でじっくりと体験させてやろう」

なーんか嫌な予感しかしないのは自分だけだろうか。

ロイド「ここは？」

エリィ「駅前通りの外れ。一体何があるのかしら」

セルゲイの後に着いてゆくと重そうな扉の前まで来た。

セルゲイ「ここから先はクロスベル市の地下に広がる“ジオフロント”区画となる。今からここに潜ってもらう」

ロイド「ええっ」

エリィ「潜るって……」

ランディ「一体どういう事っすか」

セルゲイ「お前たちの総合能力及び実践テストって言うわけだ。ジオフロント内部はそれほど強くはないが魔物が徘徊している。それらを排除しながら一番奥まで行ってもらう」

ロイド「ちょ、ちょっと待って下さい。テストはともかく捜査官の仕事ではないですよね？」

確かにそうだ。と言うかガイの弟は粗削りながらもよく気づくなぁ……。

セルゲイ「まあ普通はそうなんだが、特務支援課に属するお前たちには訳があってな。ともかくこれを受け取れ」

と言うと四人に渡したのは。

ロイド「携帯端末？」

見るからに洒落た端末が渡された。

セルゲイ「クロウのは無いんだがお前のオーブメント端末はどうする？」

クロウ「問題無いです。一応ラッセル博士からもらっていますから」

懐に装着していた端末を見せる。少し傷ついているがロイドたちがもらった者と大差なさそうだ。

ティオ「第五世代戦術オーブメント通称ＥＮＩＧＭＡ（エニグマ）ようやく実践ですか」

セルゲイ「ああ、財団から届いたばかりの新品だ。お前たちの特性に合わせて調整もすでにされている」まさに至れり尽くせりって所でしょうか。

セルゲイ「こいつの扱い方はティオから説明を受けてくれ」

ティオ「面倒ですが仕方がありませんね。クォーツはありますか？」

本当にめんどくさいのは嫌だと言わんばかりにやる気が感じられない。

セルゲイ「ほら、少ないがこれをやる」

渡されたのは新人用の各七耀石の欠片だ。本当に少ないと言うのは心にしまっておこう。

セルゲイ「それじゃあ一通り掃討したら帰って来い。あとロイドは捜査官の資格を持っているからリーダーな」

もう用は無いと言わんばかりに背中を向けて去ってゆく。

クロウ「あの人は変わらないな。ってか変わってるセルゲイがどうしても想像できない」

やれやれと両手をあげてセルゲイを見送っているとあとの四人がこっちを見ている事に気付かなかった。

ロイド「セルゲイ課長とは知り合いですか？」

クロウ「ああ、長きにわたって知り合いだよ。ちょっとした事件に携わる事が出来てね、その時に知り合っただけさ。早く潜らないの？」

もう少しで余計な過去まで言いそうになった。

エリィ「それにしても捜査官の資格を持っている人がいて心強いです。ロイドさんよろしくお願いしますね」

ロイド「あ、いや呼び捨てでいいよ。見たところ歳も近そうだし」

エリィ「そう？ちなみに私は１８だけど……」

ロイド「ああ、それなら同い歳だ。えっとあなたたちは？」

ランディ「オレは２１だけど堅苦しいからタメ口でいいよ」

クロウ「さっきも言ったけど２４。でも敬語は無しの方向でお願い」

ティオ「１４ですが」

ロイド「ふーん……？えっ１４歳？警察官になるには１６歳以上だったはずだし」

困惑するロイドにティオは警察官ではなく財団から出向したテスト要員であることを明かした。

それはティオの武器によるものだが魔導杖（オーバル・スタッフ）と言う機械仕掛けの杖の実践要員と言う話だった。そしてメンバーの武器紹介は続く。

ロイド「俺の得物はこれさ」

トンファーを出す。これがしっくりくるそうだ。機動性と防御性を重視した警察官らしい武装と言える。

エリィ「私のはこれね」

競技用に改造された導力銃。狙いもばっちりというので遠距離は任せても大丈夫そうだ。

ランディ「俺のはこれだ」

スタンハルバートを持ちだす。重量はあるが敵の動きを止めるの

には役立つだろう。

クロウ「最後はオレだな」

腰と背中から銃を出す。

エリィ「私のと違って重そう。それに威力もありそうだし」

ロイド「そうだな。あまり対人用には使えそうにないけれど一体どうしてこんな武器を」

クロウ【本当にどうしてだろうな、でも過去に使っていた武器も殺傷能力が高い武装だしどうしようもないんだがな。いつかは話さなきゃならないときが来そうだ】

クロウ「まっ、色々と考えるところがあってだな、ん？ランディどうしたん？」

目線を感じてそちらの方に向くとランディがいた。

ランディ「んにゃ、なんでもない。趣味が合いそうだからちょっと熱く視線を向けただけさ」

クロウ「じゃあ行きましょうか、リーダー殿！」

はりきってジオフロント区画に行く5人にはこれからどのような事が待ち受けているのだろうか。

第２２話～特務支援課と彼～（後書き）

ぐだぐだそして矛盾が起きそうな展開・・・・はぁ～。お便り待っています

第２３話～ぐらまーさんと～（前書き）

オリジナルの話です

第２３話～ぐらまーさんと～

ジオフロントに潜ろうとした５人だったがクロウにセルゲイ課長から電話が。

セルゲイ「あーもしもし、クロウ？やってもらいたい仕事が出来た。住民の新たな住居探しを手伝ってくれ。行政区の噴水のところで待っているから。じゃーあとよろしくー」

プツッと電話は切れた。

クロウ「えーっと、これでいいのか課長っていう仕事は……。ロイド、他に仕事が出来たから外れるね～」

一応、許可を取ってからその場を立ち去る。

ロイド「分かった。気をつけてね」

ロイドとほかの三人も手を振ってクロウを見送った。

～クロウが立ち去ってから～

ランディ「なあなあ、クロウに来た仕事の内容に女性が関係している気がする。こりゃああとで問い詰めないと……」

どうでもいいことで鋭い勘が働くランディだった。四人は地下へと潜って行った。

～ここでは原作と同じ経験をするのでカット～

ふぃ～着いたけど噴水の近くって……おっいたいた。パーカーのような服を着た女性がそこに立っていた。

クロウ「あの～……貴女が住居を探しているって言う方ですか？」

あまりの美貌にドギマギしながらも聞いた。

女性「はい。そうですけれども貴方は？」

疑惑の目で見られていた。まあ自分の目はあり得ない方向へと向いていたからだ。その～……胸が普通よりおっきい。

クロウ「……はっ！えーっとあまりの美しさに驚いていました。私はクロスベル警察署の特務支援課に所属するクロウと言います。依頼に応じて来ました」

少しボーっとしてしまったが仕方が無いと思いたい。

？「申し遅れました。私の名前はリーシャ・マオと言います。突然の依頼ですがよろしくお願いします」

満開の花が咲いたかのような笑顔を見せてくれた。

クロウ「では候補を一緒に回りましょうか？最初は住宅街です」

俺には相手がいるのにこれは反則だろランディあたりが喜びそうだ。紳士な態度で真摯に振舞わないと。はぁ～精神的に疲れる……。

クロスベルに来て右も左もわからない時に遊撃士を頼るのが一番とみんなは言う、だけど勘が働いて今回は警察の方に頼むことにした。皆が警察を頼ろうとしないのには何か訳があるんだろう。

～リーシャ視点～

少し待っていると挙動不審な青年が私に声をかけていた。最初は警察官じゃないと思った。どこかのファンか何かだろうと……。特務支援課に所属しているクロウと自己紹介してくれた。そして大抵の男性は第一に私のおっきくなった胸を凝視しているけれど、クロウさんも見てる……。

嫌ではないんだけど皆、私の本心じゃなくて外見しか見ないんだろうか……。少し寂しいな。でも少し聞こえてきた言葉に“相手がいる”って聞こえた。この人には恋人いるのかな。それなら安心かも、私も少し落ち着いた。そうこうしているうちに最初の候補地へと辿り着いた。

第２３話～ぐらまーさんと～（後書き）

リーシャって良いですよね？何がって、そりゃあ……ね～。
ですが、作者もクロウもクローゼ一筋です。
次もオリジナルです

第２４話～出された条件～（前書き）

オリジナルです

第２４話～出された条件～

最初に来たのは、高級住宅街が立ち並ぶ場所だった。さすがにここは無理だろうなと思いながら候補地の中に載っていたので案内した。

クロウ「ここが最初の地区です。少しと言うかかなり高級感があふれる地区で議員や市長の住居があります」

リーシャを見ると呆気に取られていた。そしてこっちを少し睨み両手を胸の前でブンブンと振り回しながら言う。

リーシャ「無理ですっ！この街には来たばかりですし前は旅を転々としていただけなので貯えと言うものは無いんですよ。もっと安いところはありませんか？」

どうでもいいが胸が震えて……。気を取り直して次の候補へと向かう事にした。

クロウ【俺の恋人はクローゼ……クローゼ……】

次の候補地は西通りだった。ここには書店やパン屋やハイツが二棟建っていた。一つは庶民的な建物。そしてもう一方はなんと“アルカンシェル”の看板を背負っているイリア・プラティエが住んでいる住宅街より少しグレードは落ちるものの高級感あふれる建物が建っていた。あれ？

クロウ「間違っていたらすみませんがリーシャって仕事は芝居や

ってる？」

ちょっと気になった事があった。それは候補を回っている時に、リーシャに向けられる視線が有名人を見るような視線だった事。そして極めつけは住宅地から西通りに進む時に見た“アルカンシェル”のパンフレットだった。

リーシャ「えーっと今まで気が付かなかったんですか？そうです。“アルカンシェル”で踊っています。クロウさんは演劇に興味が無いんですか？」

やっと気付いてくれたことに嬉しさを滲ませるリーシャは可愛いとは口に出して言えない。

クロウ「あ、ああ。最近見てないよ。リーシャの事だからきれいに踊るんだろうな～見てみたい！」

ポロっと本音が丸聞こえ。クロスベルでは有名な二枚看板とまで言われている二人なのだから幻想的なのだろう。ちょっと想いにふけっていたようだ。気が付くとリーシャの顔が間近にあった。

リーシャ「もしよろしければ今度遊びに来ませんか？」

クロウ「えええっいいの？」

リーシャ「ええ、ですが条件があります」

その時クロウ曰く何を求められるのだろうかと不安に思っていたようだが、リーシャの条件は至極簡単なものだった。

リーシャ「普通に話せる友達でいてほしいんです。歩いていても見られるのは“アルカンシェル”の踊り子という肩書きが着いてまとわりつくんです。だから外では普通に話せる相手が欲しいんです」

真剣なそして、真摯な気持ちが伝わってくる。この子の相談相手になってあげようとそう決めて出した答えは……。

クロウ「うん、わかった。俺はリーシャに外で会う時は普通の少女と接して、相談相手になり友人であり続けるよ」

クロウの言葉が冷やかしたものや、なにか裏があるような言い方ではなかった事に本当に感謝を繰り返し目に薄っすらと涙を浮かべるリーシャがいた。

リーシャ「っ……。本当にありがとうございます。嬉しいです」

第２４話～出された条件～（後書き）

日付が変わると２９日。“碧の軌跡”が発売される日だ。小説を疎かにしないようにします。
続きもオリジナルです

第２５話～決まった新住居～（前書き）

初日はクロウとロイドたちを別にしてみました

第２５話～決まった新住居～

ぐずついた顔を手で拭いてクロウに向き直るリーシャ。目の周りが赤くなっていて周りからは痴話喧嘩と見られていたようだ。慌ててリーシャの手を取りそこから走り出した。

リーシャ「す、すみません。すごくうれしくて涙が出ちゃいました……」

エヘヘと笑って髪の毛をかき上げた仕草にもドキッとさせられるのには参った。罪悪感が湧いてくる。夜に電話しようと思ったクロウだった。

そうこうしているうちに中央広場を通って東通りへと来た。ここには料理店や遊撃士協会、露店が立ち並ぶ場所であった。

リーシャ「さっき警察署に相談に来る時言われたんですが、どうしてここの人たちは何かあると遊撃士に頼るのでしょうか？」

ふと思い出したようにクロウに質問して来た。

クロウ「ああ、あんまり俺も分からないんだけれども遊撃士の方が信頼にあたいするらしい。逆に警察官は、あまり市民の助けにもならなかったりして信頼度が低いって訳さ……」

答えていて自分がおかれた状況が、あまりにも危うい事にどんどんと気分が落ち込むのがリーシャにも分かったのだろう。

リーシャ「ご、ごめんなさい。何もクロウさんが頼りないって言ってるわけではないんです。ただ少し気になったものですから」

クロウの肩に手で軽くたたき励ますように言葉を紡ぐ。

クロウ「大丈夫です。この状況を打破するために特務支援課が作られたみたいです。最後の候補地に行きましょうか……。少し治安が悪いのですが一番格安です」

気を取り直して旧市街へと足を運んだ。ここは二つの不良グループが存在して何かと問題を起こすどうしようもない状態が続いていた。

かなり古い建物が立ち並んでいたがリーシャの足が止まり即決ではないが決めたらしい。

リーシャ「ここにします。少しでも家賃を安いところに惹かれました」

リーシャがそういうならいいんだけれども……。何か釈然としないものを感じた。女性と言うのは普通治安が良いところに住もうというのではなかろうか？なのにどうして……。この疑問は明らかにならなかった。

行政区で居住が決まった事を紙面に纏めて正式に登録した頃にはお昼近くになっていた。下心は無いがこのまま別れるのはちょっと……と思い食事を取ることにした。場所は東通りの料理店。魚料理がおいしいとの評判を聞いてやってきた。値段も手頃、味も美味しい言い事づくめだ。

～ロイド達は旧市街のいざこざに巻き込まれ、法律事務所に行ったり大変な様子～

リーシャ「美味しかったですねクロウさん？」

満面の笑顔を浮かべ心から良かったと思えるような様子でこちらを向く。

クロウ「そうだね、ここは皆にも教えておこう」

みんな？と聞くので支援課の仲間の事と付け加えておく。

クロウ「これからクロスベルに来て一番行きたかったところに行くけれどリーシャの予定はどう？」

大丈夫だと頷き、一緒に行くと言うので教会に行った。

リーシャ「どうしてここに来たんですか？」

少し雰囲気が変わったクロウに驚きながらも控えめに尋ねる。

クロウ「うん。ここには大切な親友が眠っているんだ。俺はあいつから気まずさを感じて逃げてしまった。そしてその後悔が無くなる事は無い。だけれども、もう後悔しないために報告しようかと思ってね」

リーシャ「そう…ですか」

やはりリーシャは連れてこなかった方がよかっただろうか。後悔話を聞かせたとしても自分も相手も晴れやかになる訳ではない。

食事の後で別れたほうが良かった……って思っても無駄。帰り道は二人とも言葉少なめでリーシャが決めた住居まで送った。

リーシャ「今日は本当にありがとうございました。家も見つかって友人を作ることが出来ました。えっと……どうしてクロウさんが後悔しているのか分かりませんが落ち込まないでくださいね！」

着いてからの言葉はこれだけだった。が、リーシャは本当に良い子らしい。少し気持ちを落ち着かせる事が出来た。

クロウ「……ありがとう。リーシャの言葉で少し気持ちが晴れたよ！」

旧市街から出るともう夕方になっていた。セルゲイから連絡があって中央広場にあるビルに来るように言われた。ここが支援課の住むところになったみたい。

クロウの部屋は階段からロイド、ランディ、クロウの順になった。少し建物内が暗いのはロイドたちが今日、経験したことに起因していた。このまま支援課をやっていくのか、ロイドも自分の進むべき道に混乱していた。

クロウの部屋の扉がノックされた。

クロウ「はい、どちらさん？」

ロイド「あっ、ロイドです……」

クロウ「どうした?浮かない顔をして」

招き入れたがロイドの表情は暗いままだった。優秀な捜査官だった兄に憧れていたようだが自分の将来に不安を感じているらしい。

ロイド「クロウはどうして特務支援課に来たんですか?」

クロウ「セルゲイさんに誘われたってのが一番の理由だ。今はそれしか言えない。何かの事で悩む少年にアドバイスだ。逃げるのは簡単だが立ち向かうのには勇気が必要だ。そして何か問題があってもロイド一人じゃないさ。それを忘れるな」

両手を落ち込むロイドの肩に載せ励ます。

ロイド「考えてみます。失礼しました」

少しは暗い表情も無くなったが、明るいとは言えない。

~回想~

クロウ【今日君の弟に会ったよ。あと君が一緒にいたティオにも。最初に会った時より表情が付いてきたな。ガイのおかげだ。ロイドにはカッコいい事言ったけど俺は楽になりたかったからお前から逃げたんだぜ。今の姿を見たらどう思うだろうか……?】

第２５話～決まった新住居～（後書き）

オリジナル難しいです。これが限界。駄文ですがご覧ください

閑話～夜の会話～（ランディ）（前書き）

オリジナルです

閑話～夜の会話～（ランディ）

コンコンとクロウの部屋の扉がノックされた。

クロウ「どうぞ」

返事の後に入ってきた人物は。ランディだった。

ランディ「よぉ。久しぶりだね、元気だったか？」

手に酒を持ってクロウの部屋に来たみたいだ。会話には柔らかい口調で本当に再会を願っていたふうに見受けられた。

クロウ「ああ。元気だったさ。ランディは？」

椅子を勧めて座るように促しながら聞く。

ランディ「変わらず傭兵続けていたが一応見切りをつけて辞めた。で、国境近くの警備隊に配属になったがしょうもない理由でクビになってセルゲイさんに拾われた……クロウはどうだった？」

ワハハ……と豪快に笑いながら酒を一口飲む。

クロウ「ああ、こっちも傭兵の後、共和国のほうで起きていた子供の誘拐事件をカシウス・ブライトと一緒に解決に向けて力を尽くしていたらいつの間にか遊撃士になっていた。それなりに楽しかったけどな……」

クロウもランディとグラスを合わせて酒を小量飲む。

クロウ「そういえば親父と妹は元気かい？あれから手合わせしていないからどうしてっかな～」

懐かしむように空中を眺め聞いてみた。

ランディ「どうだろう。別れてからは連絡も取っていないが元気にやってんだろ！」

また一口。ちょっとペースが上がったろうか……。

クロウ「そっか……。支援課での仕事続ける？」

今日の事は少しロイドから聞いていたためランディにも聞いてみた。

ランディ「うーん、セルゲイさんに拾われた借りがあるし何より自由にできそうだから続けるよ。クロウも続けるっしょ？」

クロウ「ああ、続けるさ」

ランディ「そっか。そう言えば別件で入った仕事って何だったんだ？」

思い出したように問うランディに女性を案内していたと言うと俺にも紹介しろーって絡んできた。

見ると持ってきた酒はほとんど飲んで空に近かった。４０％もあるのにがぶ飲みに近いペースで飲んでたもんな。メンドーだけど部

屋に置いてくるか……。

自分の部屋の扉を開けてランディの部屋に向かう。

ランディ「俺は……後悔なんてしてないさ。だって……ううううう。気持ち悪ううううう」

ずるずると千鳥足のまま意味の分からない絡んでくるのでイラっとして鳩尾に肘打ちで眠った……？

何も言わなくなったランディを連れて隣のランディの部屋のベッドにドサッと置く……。

ほんっと変わらないな～。やっと平和な町に戻ってこられたんだー。やれやれと言わんばかりに自分の部屋のドアに手をかけたら。

？？「クロウさん？ちょっと話さないですか？」

気がつくと、クロウに向かって小声で話しかけてくるネコミミの飾りを付けた少女の声が……。

おいおい、今度はキミか……？今晩は来客の多い夜だなぁ。好きだけどさ。

閑話～夜の会話～（ランディ）（後書き）

“碧の軌跡”買いました。間を開けないように小説も書きます。

次も閑話です。

閑話～夜の会話～（ティオ）

ティオ「こうして間近で話すのは、初めてか数えるぐらいしかありませんでしたね？」

数年前よりは少し感情の起伏を感じられるようになったティオだが、最初は無表情を地でいっていた。

クロウ「そうだね。あの時はガイが近くにいた。そして段々と年齢相応の少女に戻って行くティオを見て俺に出来る事は無いと考えて逃げた……我ながら少年だったというわけだ」

身をすくませて、少し自虐的にティオに話す。そんなクロウをティオは少し顔を歪めて聞いていた。

クロウ「廊下ではゆっくり話せないから俺の部屋に来るか？」

招くように自室の扉を開けて迎える。

ティオ「……襲わない？」

クロウ「襲わないってば。俺には相手がいるし！」

ティオ「そう……残念だわ」

本気なのか冗談なのか分からない表情でクロウを誘惑？していた。

まあ人間らしくなってきたのが少し嬉しかった。

クロウ「それで聞きたい事何かある？」

冷やす目的で、窓辺に吊るしてあったカゴから飲み物を取りだす。未成年用にジュースをティオに渡した。聞きたい内容の、大体の予想はつくけれども。

ティオ「あれからどうしていたの？ガイさんも、探していたけど見つからなかったって言ってたし私も少し気になっていた」

ジュースを飲もうとして口をつけず俯き加減で聞いてきた。

クロウ「笑うなよ？あー自分探しの旅だ」

指で頬を掻きながら答える。数秒後聞こえてきたのは。

ティオ「プッ……」

クロウ「笑った……」

ティオ「いえ別に……。では、そのあとのことを話してください」

今絶対笑ったろ。って思いながら話をした。

カシウスの家に行く途中に可愛い女の子に会ったこと。準遊撃士の二人に会ったこと。そのままリベールで起きたクーデターに少し助力して解決したこと。浮遊都市での冒険、そして恋人の誕生までを抜粋しながら伝えた。

冒険のところでは目をキラキラ輝かせて耳を傾け、女性の話にな

った瞬間、ジト目で見られたのには百面相でティオを見ているのが楽しかった。

ティオ「良かったです。音信不通になってから最悪の事を考えたりもしていましたが、こうして無事で再会できたのでそれだけで胸がいっぱいです。でも恋人が出来たんデスネ……？」

ものすごい笑顔を向けているはずなのに冷や汗が止まらない。

クロウ「えーっと、ティオさんや？何かしでかしただろうか？」

ティオ「いえ、別に……。心配していた相手が相手を作っていた事にちょっと腹が立っているとかいうわけではありません」

クロウ「嘘だね」

ティオ「半分くらいは本当です……」

ジョークを言えるまでに感情がはっきりして来た様子に更に嬉しさが込み上げてきた。

ティオ「それでは明日からよろしくお願いします」（ペコリ）

頭を下げて部屋から去っていく。

何だか異常に疲れた……。これは電話して英気を養わねば……。

スキップしながら屋上を目指していくのをエリィが見ていた。

エリィ「なにかしら……これ？」

料理を作って失敗したわけではなさそうです。

閑話～夜の会話～（ティオ）（後書き）

最後のエリィのセリフはゲームをプレイしている方なら分かるセリフです。

閑話～電話～（前書き）

□ 電話での会話

閑話～電話～

ＰＰＰＰ［もしもし？クロウ久しぶりね、元気だった？］

弾むような声が聞こえて来て初日で疲れたぶんが一気に吹き飛んだ。

クロウ［ああ、元気だよ。いきなり電話してごめんね？でも声聞きたかったんだ］

クローゼ［ううん、大丈夫だよ。私も聞きたかったし・・・そっちの仕事はどう？特務支援課ってきいたけれど］

クロウ［うーん。一言で言えば遊撃士の二番煎じ的な雰囲気があるよ］

クローゼ［アハハ、駄目だよぉ～、勤務先の悪口言っちゃあ］

クロウ［いやー遊撃士を経験した後に支援課に配属されてやったことと言ったら新住居を探している市民を案内することだもの、遊撃士と大差ないよ］

クローゼ［そっか、そっか。あまり危ないことしていないなら貴方のコト信じているから］

クロウ［嬉しい事言ってくれるね。そうそう、ケビンに巻き込まれた事件はどうなったの？ちょっと心配だったんだよー］

クローゼ［あれは解決したよ、でも・・・・］

クロウ［ん?どうしたの］

クローゼ［本当に貴方はケビンと会ってないよね?すごく似た人に出会ったんだ、不思議な気分だった］

クロウ［いや、行ってないし。クローゼと会っていないときにケビンが経験したことだろう?どこでオレそっくりな人と会ったの?］

クローゼ［うん、あれは・・・・グランセル城にそっくりに作られた場所を探索していた時だったんだけれども闘技場で戦闘したあとに出てきた人物が貴方にそっくりだったのよ。最初は少し似てるなあぐらいだったけれ段々と本物?っておもうようになったの・・・・］

クロウ［へぇー不思議なこともあるもんだね。こっちもケビンに聞いてみるよ、でも嬉しかった、クローゼの声を聞けたんだから・・・・］

クローゼ［うん、私も。もう遅いから寝るね。他に分かった事があったら連絡します。おやすみなさい貴方・・・・］

クロウ［ああ、おやすみ・・・・］

ふう、それにしてもオレそっくりの敵とは・・・・。俺の知らないところで何かが起きているのは確実だ。今日会ったリーシャって子も何かを隠しているようだったし。いつか教えてくれるといいな。さて戻るか・・・・。

閑話～電話～（後書き）

３ｒｄは外伝と言う形で煮詰まったら書くかもしれません。
書くなら黒騎士に対(つい)となる白騎士とかがいいかもしれません。その場合も作者の妄想が暴走します。
リーシャのことは最初から疑っています

外伝～もうひとつの始まり～（前書き）

煮詰まりました。少しは外伝を続けようかな。

外伝～もうひとつの始まり～

ここは・・・？いつものように自分の部屋で起きたのではない。周りが上下左右の固定されていないいわば無重力空間のような場所で目覚めた。微かな人？の気配がする。

クロウ「誰だ。っ、お、お前は？」

疑惑の目で気配がした方を向くとそこにはレーヴェの姿があった。見慣れない黒い甲冑を着てクロウの横に佇んでいた。

レーヴェ「お久しぶりです、クロウ。このような形で再び会えて嬉しいです」

少し違和感があった。ここにいていないような雰囲気が漂っていた。

クロウ「ここは・・・？そしてレーヴェの存在が希薄なのはなぜ？」

疑問点を聞いてみると思いもよらない答えが返ってきた。

レーヴェ「ここは隠者の庭園となりつつある場所です。そして希薄な理由は私が記憶の中から再創造されたからです。ここに貴方を呼んだのは浮遊都市崩壊時にケビンの近くにいたからです」

クロウ「それで単刀直入に言うと何がしたい？」

腹の探り合いはしなくていい、と言わんばかりに問う。

レーヴェ「それは・・今のところわかりません。一つだけ言えるのは私とあなたの役割です」

困惑したような表情を見せながら続けて言う。

レーヴェ「ケビンの周りにいた他の仲間に敵対すると言う事です。私は作られた存在なので拒否はできませんがあなたには一応拒否することもできます」

クロウ「レーヴェと共闘してみたいから了承した」

深く考えずに答えを出した。

レーヴェ「ここの上司は影の王と呼ばれる存在です。この存在も浮遊都市崩壊が影響しているようです」

クロウ「そうか・・・。でもケビンらに敵対するって事はクローゼも間違いなく出てくるよな。レーヴェのように顔を隠すしかなさそうだ。レーヴェが黒騎士なら俺は白騎士の甲冑で作ってみよう」

その後すぐに隠者の庭園が創造されていった。あとはここにケビンらが来ると準備は整うようだ。

さて本当は存在しないはずのクロウがケビンの物語に入ることによってどんな語りがなされるのだろうか・・・？

外伝～もうひとつの始まり～（後書き）

連日投稿できなくて申し訳ありません。理由は一つだけ。
碧の軌跡をやっておりました。キーアにクローゼ可愛いです。あとシャーリィ・オルランドも可愛いデス

第２６話～支援課の日常？～（前書き）

間が空くと色々な意味で悪い方向へ行きます。どうしよう・・・・

第２６話～支援課の日常？～

夜が明けてセルゲイ課長にこれからどうするのか決める時が来た。
クロウ他四人は残って支援課を続けることに決めたみたいだ。

セルゲイ「さあ、お前はどうする？このまま古巣（遊撃士）に戻っても将来有望な身だ。その方が良いとか考えてそうだが・・・・」

クロウ「一晩悩みました。そして自分の身のあり方をもう一度考えた末、支援課でお世話になることを決めました」

晴れ晴れとした表情を見せながら課長に報告した。

セルゲイ「そうか、残ってくれて嬉しいよ。俺が誘ったのにリベールに戻られたらどうしようかと思った。まあ俺は放任主義だから勝手にやってくれ。あとそこの端末から支援要請が来ているか確認すること」

煙草に火をつけあとは任せたと言わんばかりに自分の部屋に戻る。

ロイド「えーっと、これでいいのか？」

他のみんなも同様に呆れていた。

クロウ「それはともかく端末を見てみようぜ」

五人で端末に向かうと警察署で“支援要請の補足説明”と言うのが載っていた。

クロウ「ふーん、端末を確認してここから仕事を請け負うと言うことなのかな。近代的でなによりだ」【前は掲示板を覗いてから仕事に行くだったから楽になったもんだ】

セルゲイ「あーっと、ロイド。これから仕事をしていく街を皆に紹介してきな。警察署に行く途中で良いから・・・・」

扉からひょいと顔を出して一言呟きまた、中へと消える。

ロイド「・・・・分かりました。警察署に行きがてら散策に行ってきます」

もう諦めたのか突っ込まないでそのまま流して外へ通じる扉を開けた。

まずは中央広場の武器屋に行く。ここでは許可が無いと売ってくれないがセルゲイが造った部署である事が分かると武器を売ってくれることになった。

次にオーブメントのショップ。ここはロイドの幼馴染が勤めていて新型エニグマにも対応して改造してくれる。

そののち百貨店に行くとここの支配人がエリィのことを“お嬢様”と呼ぶ事に一同驚いた。どこかのお嬢様なのだろうか。ってかロイド気付こうよ、名字は・・・・であることに。面白そうだから気付くまで放っておこう。

東通りは異国を思わせる店が並ぶ。中華料理店や魚屋。商工会の会長の家や遊撃士協会が立ち並ぶ。

クロウ「あーちょっと、知り合いのところに行っても良いか？」

ロイド「ああ、いいけど。どこ？」

クロウ「そこの遊撃士協会だよ」

ロイド「へえー・・・・えっ。クロウって遊撃士だったのか？」

クロウ「言ってなかったっけ？前は遊撃士だよ。リベールではね」

ティオ「・・・・」

エリィ「意外ね。同僚になって間もないから知らないこと沢山あると思うけどこれから分かってくればいいよね」

ランディ【傭兵の次の事を言っているのか？クロウも表に出られる仕事してたんじゃん！】

クロウ「ちわーッス」

四人の言葉を聞き流して遊撃士協会の扉を開く。

？「あら、いらっしゃい。随分と懐かしい人が来たわね～」

ここの受付は男性だが言葉使いがどうも怪しい・・・・。

クロウ「あんたも変わらず元気だね。今日はクロスベルに来た事と新しい仕事先の人と一緒に来たわけだが、あんまりいじめるなよ。ここでは何かと騒がれている警察の面々だからさ」

ミシェル「そうなの？へえークロウ、警察に入ったんだ。その選択肢は思いつかなかったな」

クネクネと体を揺するのだけはどうも見慣れないし慣れたくもない！

ロイド「はは・・・どうも。ロイド・バニングスと言います」

一応挨拶は大事だと思ったらしく驚きを隠して自己紹介する。

ミシェル「バニングスってあの・・・・？」

クロウに向かって自分の知っている人物と同一人物なのか確かめる。

クロウ「ああ、そうさ。“あの”バニングスだ。ミシェルの考えている事で正解さ」

ロイド「兄貴の事を知っているんですか？」

ミシェル「知っているよ。っていうか有名だもの。でもこの話はまた今度」

受付が変わっている遊撃士を後にして旧市街へと行く。ここは発展しているクロスベルからは離れ二つの不良グループが存在し何かと荒れている場所だ。エリィやティオは長居したくない様子で直ぐに離れて行った。ロイドとランディも続くようにして立ち去った。クロウも去ろうとしたところ・・・・

？「あれ、クロウさんではないですか・・・・昨日ぶりですね！」

弾むような声が聞こえて来て後ろを振り向くと昨日案内したリーシャがそこに立っていた。

クロウ「そうだね。あれから大丈夫だった？」

片手をあげて挨拶してここの治安が悪いので心配しているんだよ、と付け足した。

リーシャ「ええ、みなさん良い人たちばかりですよ。ここを紹介して下さってありがとう」

それは下心があって親切にしてるんだよと思いつつ「そうですか」としか言えなかった。

リーシャ「今おられた人たちは誰ですか？」

クロウ「支援課にいる他の人たちだよ。旧市街は治安が悪いから長居したくないみたいで。そう言えばリーシャはどこか仕事は決まったのか？」

リーシャ「ええ、アルカンシェル本採用が決まりました」

クロウ「アルカンシェルって・・・・。前聞いたときはまだだったの？」

リーシャ「そうでしたね。あの時も採用されていたかのように言っていましたが、見習いという立場だったんです・・・・」

クロウ「そうか。踊るときには見に行くよ！それじゃあ仲間を追いかけないといけないから失礼するね」

リーシャ「ええ、お待ちしております。足を止めてしまって申し訳ありません」

深々と頭を下げるリーシャに手を振って旧市街から立ち去った。

ランディには遠目で女性と話していたのが見えたのか追及されたが・・・・。教えないよ！

第２６話～支援課の日常？～（後書き）

オリジナルを入れたら何故かリーシャが出やすい。

第２７話～支援課の日常？～（前書き）

区画の紹介が説明口調になるのは申し訳ないです

第27話～支援課の日常？～

ランディの追及をかわし次に向かったのはロイドが捜査官になる前にお世話になった、西通りだ。ここにはもう一人の幼馴染が勤める美味しいと評判のパン屋がある。ここでは料理手帳をもらった。これでレシピを書く事が出来る。

次に住宅街に行く。すると落ち着きを無くすエリィがいた。クロウは名字を覚えていたし市長の家がどこにあるのかも知っていたので落ち着きがなくなるのは分かるがロイドは鈍感なのだろうか。

閑静な家が立ち並び門自体に鍵がかかって、大きな家の前に五人は着いた。

エリィ「ねえ、鍵がかかっているみたいだからそのまま違うところに行こうよ」

ロイド「？、そうしようか。次は歓楽街でも・・・・」

エリィ「ふう・・・・」

その様子を見ていたクロウは。

クロウ「良かったね？ロイドがエリィの名前に気付かなくてさ」

クロウは小声でエリィに囁く・・・・。

エリィ「っ！ああ、クロウなの。私の家について知ってたんだ・・

・・」

クロウ「エリィが何を考えているかは知らないが自然と明らかになるまではそのままにしておくよ」

あまり興味が無いようにそのまま皆と歩調を合わせて歓楽街へと向かった。

ここは高級ホテル、カジノ、アルカンシェルがあり遊べるところとなっている。

ランディ「なあなあ、息抜きにカジノ寄ってこうぜ～？」

何を言うかこの遊び人！

ロイド「駄目だよ。今は仕事中だからさ」

クロウ「そうそう、休日行けばいいっしょ？」

ランディ「ったく、お堅い連中だコト・・・・。分かってるってば」

クロウ「じゃあ、次はどこに行く？」

ロイド「裏通り・・・・かな？」

クロウ「名前の響きからして嫌な感じになるんだけれど・・・・」

ここにはカクテルバーとルバーチェ商会、それと怪しい店がある。

ここも女性陣が敬遠して近づきたくなかったのか、ロイドから説明

を受けて直ぐに去って行った。これでめぼしいところはまわったはず。警察署に向かう事にした。

ここでは支援課に届く要請をどのように受け達成した後に、どのように報告するかについてレクチャーを受けた。これで支援課に戻って報告することで最初の要請説明は終わるらしい。

戻って報告した後に端末を見てみると新たに要請が更新されていた。その中にはジオフロント内での魔獣退治が含まれていたのでロイドは皆でやれば出来るさ、と熱血を発揮。ジオフロントに行く事になりましたがクロウだけは断った。

第２７話～支援課の日常？～（後書き）

“零の軌跡”は書きたかったので長編になると思います。
“碧の軌跡”を書くかもしれません。
読者の方々が少しずつ増えていることに感謝です。

第２８話～暗躍？～（前書き）

オリジナルです

第２８話～暗躍？～

クロウ「ジオフロントに行こうとしたのに誰？仕事の電話を入れてきたのは？」

？［もしもし貴方は“沈黙の死神”でよろしいですか］

クロウ［聞こえてるよ。それでどんな仕事？あと依頼主は誰？］

？［質問ばかり・・・。私は黒月（ヘイユエ）に所属するツァオと申します。暗殺の仕事をお願いしたいのですが、こちらが抱えている暗殺者だけでは戦力が足りないのです］

クロウ［それでこっちに尻拭いをさせようと・・・そういうわけか］

ツァオ［言い方は悪いかもしれませんがそれで合っています］

クロウ［引き受けよう。どこに行けばいい？］

ツァオ［ありがとうございます。黒月は港湾区にあります。立ち番の人には貴方の事を言ってありますのですぐに来てください］

クロウ［分かった。ではあとで・・・・］

ツァオ［はい、お待ちしております］

クロウ「へえ、黒月（ヘイユエ）か。名前だけは聞いたことあるな。今の俺は

警察所属だけれど傭兵も辞められない事情がある。さてと、自分の得物持っていくか」

支援課の自分の部屋に入ってベッドの下から大剣を持ちだす。そして人に見られないように屋上に行きそこから瞬動で屋根から屋根へ跳び黒月にあっという間に着いた。

クロウ「ツァオに言われてきたクロウだ」

立ち番「どうぞお入りください」

ツァオがいるであろう部屋をノックした。

？「どうぞ」

返事があったので入ると全身黒づくめの男性？が佇んでいた。

？「っ！」

一瞬驚いたような表情は見えないがそんな感じがした。

ツァオ「こちらは黒月所属の銀殿です。そして助っ人として来たのは昔“沈黙の死神”として知られているクロウです」

ツァオの机の横に立っている人物が銀というらしい。そして自分も紹介された。

銀「よろしく頼むよ。ひとりでは辛い仕事でね」

クロウ「ん。分かった。よろしく」

誰かと雰囲気が似てるけどまさか、違うよね。

ツァオ「黒月は今ルバーチェとしのぎを削っています。それで一人でも多くのマフィアを倒してほしいのです。暗殺と言うよりも殲滅と言った方がいいでしょうか」

クロウ「分かった。で、いつまでにやればいいんだ？」

ツァオ「早ければ早いほどいいですが貴方には表の顔もあるので忘れなければいいです」

クロウ「甘い依頼内容だが引き受けたからにはやらせてもらおう。元傭兵だから報酬は出来高で良い」

ツァオ「分かりました。成果を待っています」

第２８話～暗躍？～（後書き）

クロウの通り名は昔“沈黙の死神”

第２９話～暗躍？～（前書き）

戦闘は紙です。そして短いっ・・・・・

第２９話～暗躍？～

昼間から殲滅と聞くと無理って思うかもしれないが、クロウは堂々と真正面から突き進んだ。地方の組織員が滞在している場所を潰していく。比ゆ的な意味ではなく物理的に。つまり、クロウのオリジナルアーツである重力で潰す。

組織員Ａ「こんな昼間から何の用ですかー？」

クロウ「死を届けに来た。大人しく死んで？」

右手をかざしてエニグマを通してアーツ発動。たちまち組織員のいた場所に見えない重りが落ちてくるようにじわじわとつぶれる。

Ａ「な、なんだっ。お、重くて動けない。ぎゃあああ・・・・」

両足が複雑骨折。腕から骨が飛び出て激痛にもだえ苦しむそして重圧で目を覆いたくなるような鈍い音が断続的に響き室内にいた他の組織員ＢやＣも同じように潰れてゆく。

銀「“沈黙の死神”とは程遠い殺しだな」

銀は普通に斬って亡くしていた。

クロウ「“元”が付くしそれに闘い方を少し忘れてしまってね。これからの為に思い出しておこうと・・・・」

話している間も一人、また一人といなくなりついに誰もいなくな

った。

銀「こちらが２４人。クロウが３７人。事前に聞いていた人数と合っているから漏れはなさそうだ。ツァオのところに行って報告しないと・・・・」

クロウ「なあ、ちょっと聞いても良いか？」

銀「・・・・なんだ？」

クロウ「あんたと俺は最近会っているよな？」

銀「どうしてそう思う？」

クロウ「雰囲気と仮面で見えないはずの顔の表情が最近会ったやつと同じでね。で、返事はどっち？」

銀「ああ、そうだよ」

仮面を外すとそこには見知った顔が・・・・。

クロウ「やっぱり。〇〇〇なんだな？」

銀？「薄々はバレているんじゃないかなとは思っていたけれどこれだけ早いとは予想もしていなかった・・・・」

クロウ「そうか。で、あんたはどうする？俺はどっちでもいい。だって俺はあんたの正体知っててあんたは俺の正体知ってるから互いに秘密でも持とうか？」

苦笑気味に伝えると。

銀?「うん、それでいい。ありがと・・・・・」

第２９話～暗躍？～（後書き）

銀＝？？？。？は原作通りに明かします。知っている人も知らない人もそこまでおまちください。クロウだけは知っているのはオリ主ですから。

第３０話～可能性～（前書き）

所々の台詞にＡとかＤとあるのはマフィアの総称です。名前まではさすがに勘弁。

第３０話～可能性～

殲滅を終えて支援課に戻るともう夕方が迫っていた。玄関付近で他のメンバーにも会う事が出来た。それでも支援課の仕事はまだまだ続きそうだった。

クロウ「今帰りました」

ランディ「お帰り～どこ行ってたっすか？」

クロウ「ん～。汚物処理だよ！」

ランディ「聞くのが怖いんですが・・・・。まさか傭兵？」

クロウ「そだよ～。今でも時々続けてるさ。支援課の仕事はまだ終わってないんかい？」

ランディ「ええ、そうなんすよ。不良の喧嘩を止めたら背後にマフィアの影があるらしくこれからそっちに行くつもりです。クロウはどうしますか？」

クロウ「一応支援課のメンバーだし、何も仕事していないから行くよ・・・・」

ジオフロント付近に“テスタメンツ”のリーダー、ワジと“サーベルバイパー”のリーダー、ヴァルドを呼び出し今回の襲撃事件が仕組まれた事である事をロイドが伝える。そしてロイドが囮となってマフィアを引っ掛けることにした。

テスタメンツの衣装を着て旧市街を歩いているともう片方のグループが使っている鎖付きの木刀で殴られた。

マフィアA「ったく、最近大人しくなってるからまた裏工作やらないといけなくなったっしょ」

マフィアB「ぼやくなよ、早くやって終わらせようぜ？」

マフィアC「そうだったな。こいつはテスタメンツだからサーベルバイパーの得物でもう一度殴っとけばいいだろう」

後頭部めがけて唸りを上げる木刀。

？「させるかっ」

倒れていたはずの人物が起き上がりざまに木刀をトンファーでたたき落とす。

マフィア「「「なっ、なに！」」」

驚きを隠せない様子で今殴って昏倒させた人を見る。

ロイド「まさかここまで見事に引っかかってくれるとは」

A「こ、こいつっ」

ロイド「現行犯逮捕と行きたいところだけど微妙に囮捜査くさいし、今回は勘弁しておくか」

B「まさか、警察の人間か？」

ワジ「フフ、彼はあくまで助っ人と言う立場さ」屋根の上から種明かしをする。

ランディ「おーおー。本当に引っ掛かるとは」

ティオ「なかなかの読みですね」

エリィ「ロイド、大丈夫？」

ロイド「ああ、無傷だよ。念の為防護クッションを頭巾に仕込んでおいて助かった」

D「まさか、俺たちの存在を嗅ぎつけられていたとは・・・・」

C「二手に分かれて逃げるぞ」

脱兎の如く脱出を試みる犯人ら。

ワジ「二人付いてきて」

ロイド「分かった。じゃあエリィ着いてきて。残りはもう片方をよろしく」

エリィ「分かったわ」

ワジとロイドとエリィが片方を追いかけランディとティオとクロウが片方を追い詰める。

ロイドたちは逆上したマフィアと戦闘になるが見事勝ちランディ達の方も先にヴァルドが捕まえていた。最後は悪あがきをするマフィアたちにグレイスが写真を取ってなあなあで終わらせた。一応決着はついたと言えるのかな。

だが、ロイドは少しすっきりとしない表情を見せていた。するとこちらに向かってきたグレイスが言った。

グレイス「必要とあらば他人の力も借りてより大きな真実を掴み取る。これが出来て一人前の捜査官じゃないの?あなたのお兄さんみたいに」

ロイド「なっ・・・・?」

グレイス「これで私は退散しようかな。そろそろお肌の年齢が気になる年頃なのよね~」

陽気に場をかき乱すだけかき乱して立ち去る行動派の記者。

ランディ「お前の兄貴・・・・結構知られているみたいだな」

エリィ「何だかとっても優秀な人だったみたいね?」

ロイド「はは・・・・。押しの強さと行動力はピカイチだったみたいだけどね。」

ティオ「・・・・・」

クロウ「・・・・・」

ロイド「任務終了だ。帰ってセルゲイ課長に報告しよう」

～支援課、課長の部屋～

セルゲイ「無い知恵絞ってなかなかの出来じゃないか」

ロイド「はぁ・・・・」

セルゲイ「だがこの一件で見えてきただろう。このクロスベルの厄介な側面が・・・・」

ランディ「まあ確かに」

ティオ「様々な暗部やしがらみ・・・大人の事情の温床って感じです」

セルゲイ「中には賄賂を受け取っている馬鹿野郎もいるだろうが多くの警察官はそこそこ優秀で自分なりの正義感を持っている連中だ。だが・・・・有形無形の“壁”がある。マフィアの利権と繋がっている議員や役人どもがな。」

ロイド「・・・・・」

セルゲイ「どうだ、ロイド？警察官辞めて遊撃士にでもなりたくなったか？」

ロイド「いえ、そんな事情があっての“特務支援課”でしょう？」

セルゲイ「ほう・・・・」

ロイド「“人を守る”遊撃士の理念は確かに素晴らしいけれどそれだけじゃあ解決できない問題もある。密貿易に違法な武器取引。盗品売買にミラ・ロンダリング。そしてマフィアと政治家の癒着。どれも遊撃士が直接的には介入できない問題ばかりです」

ランディ「確かに」

ティオ「“支える籠手”の力にも限界があると言う事ですか」

クロウ「へえ・・・・」

ロイド「でも警察なら、本来はそれが可能なはずです現実として様々な“壁”が立ち塞がっていたとしてもそうした壁を突破できる可能性はゼロじゃないはずだ」

エリィ「なるほど。支援課（ここ）ならその可能性を見出せるかもしれない、つまりそういうことね？」

ロイド「ああ、ちょっと楽天的すぎるかな？」

ティオ「現実はそこまで甘くは無いと思いますけどただ、どんな可能性でもゼロではないのは確かです」

ランディ「やれやれ、不良の頭（ヘッド）とタイマン張ったり危険な囮役を買って出たり真面目で大人しそうなツラして大した熱血野郎じゃないか」

クロウ「これからも熱血さに引っ張られて行くんだろうな～」

ロイド「別に熱血って言うほどでもないと思うけど。今回このメンバーで仕事して改めて思った。このメンバーだったら力を合わせてどんな壁でも乗り越えてゆけそうだなって」

エリィ「ロ、ロイド？」

ランディ「はは、なんつーか・・・・」

ティオ「かなりクサすぎです」

クロウ「やっぱり熱血野郎だ」

セルゲイ「ククク、アーッハハハハハハ・・・・」

ロイド「そ、そんなに笑わなくたっていいじゃないですか。えっとかなり夢見ですか？」

セルゲイ「クク。いや良いと思う。この特務支援課は色々なしがらみから出来た場所だが、ここをどう使うかはお前ら次第だ。あと俺は直接力を貸す事は無いだろうが、やりすぎちまってもお偉いさんがたをケムにまくことぐらいはしてやるよ」

エリィ「まあ、要するに放任主義ですか」

ランディ「ったく、話が判るんだか、いい加減なだけか」

ティオ「と言うよりただ面倒くさいだけなのでは・・・・？」

セルゲイ「ま、ズルい大人だからな・“特務支援課”がただの遊撃士のパクリで終わるかそれとも新たな可能性を見出すことが出来

るのか、俺は煙草でも吹かしながらせいぜい眺めさせてもらうぜ」

第３０話～可能性～（後書き）

ここで『序章：特務支援課』終わりです。

閑話～昔ノ夢～（前書き）

ガイのイメージ“熱血”からくるオリジナルです

閑話～昔ノ夢～

夢を見た。あれはまだガイがいた時の事だ。ロッジから一人の女の子を救出したのは良かったけど、どうにも感情が乏しくなっていた。無理もないことだった。女の子がいたところは楽園（ロッジ）と名ばかりの生体実験が行われたところだったからだ。

もう一人の女の子も元に戻る可能性が低い剣帝から聞いていた。見ていた夢はウルスラ医科大学でガイとクロウとティオの三人で療養しているところから始まった。

ティオが無表情でベッドに腰をかけてただ何をするでもなくボーっとしていると、ここに来てから日常になりつつある光景がやってくる。

～救出5日目～

ガイ「よっ、ティオ元気か～？ってまた何もしてないのか。やれやれ・・・・」

クロウ「お邪魔するよ・・・・」

ティオ「・・・・」

ガイ「元に戻るにはまだ時間がかかるのかな。クロウはどう思う？」

クロウ「時間が必要なことぐらいしか分からない」

ガイ「だよなー。よしっ、俺が毎日来てティオの感情を戻してみせよう」

クロウ「相変わらず熱血野郎だ・・・・。俺はちょっと外に出てる」

ガイは良くも悪くも諦めると言う事を知らない青年だった。いや俺が諦めているだけなのかもしれない。まだまだ自分の感情表現もままならぬ時があるのに・・・・。壁があってもそれを乗り越え、巨大な壁が立ち塞がろうとしても仲間の手を借りてその壁を打破しようとするのは俺には・・・・無理だ。

～救出１０日目～

ガイ「よっ、来たぜ～。少しは覚えているか？」

ティオ「・・・・ガイ・・・・さん？」

ガイ「おーおー、少し声が戻ってきたかな。良い兆候かもしれない」

クロウ「・・・・・」

ガイ「クロウ、どうした？今度はお前のほうが元気ないんじゃないか？」

クロウ「いや、なんでもないよ。少し考えるところがあっただけ・・・・」

ティオ「・・・・なぜ会いに来るの・・・・・？」

ガイ「ん？そりゃあ元気になって元通りの生活が出来るように援助したいんだ」

クロウ「ティオに元気無いとガイは寂しいんだと、よ！」

ティオ「無理・・・・だよ」

ガイ「あーもうっ、諦めるなよ！大丈夫だって、まだまだ時間をかけて一緒に元気になろっ」

ガイは一直線で問題にぶつかって乗り越え、そして解決に向かう前も思ったが熱血という言葉が良く似合う男だ。俺はこいつに・・・・しているんだろうか？

でも、俺には無理だろうな。人間らしい感情を持つことも人間らしい生活をすることも。だって俺は・・・・なんだから。

～３０日目～

ガイ「ティオ～、お前が好きそうな人形買ってきたよ。みっしぃって言うんだ。可愛いだろ～」

ティオ「・・・・ありがとうございます。ガイさん・・・・」

ガイ「おっ、今少し笑った？」

クロウ「そうかも・・・・しれないですね」

あーあー、早かったな。段々とガイがティオを元通りにして行く工程が。やっぱり俺では無理だったな。ガイがいなくてティオと二人きりだった時会話なんて「おはよう」と「また来るね」しか無かったもんな。ガイがいるときはティオも俺に返事を返してくれるけれど、付属品扱いかな・・・・。

心が虚しい・・・・。いや、俺には最初から器しかなかったんだ。それを誰かに明らかになるのが怖くて器に仮初めの感情で蓋をしていただけ・・・・。ガイといるとそりゃあ楽しいよ。新たな自分を見つける事が出来て。でも、独りだとどうだろうか。決まってる空っぽな器が残っているだけだ。

～35日目～

ガイとティオが楽しそうに笑って喋っているが、俺はそこにいてもいなくても良い存在となりつつあった。これで潮時かな。

クロウ「喋っている時悪いんだが、ガイちょっと話せるか？」

ガイ「アハハハ・・・・。おっ、クロウ。いいよ。廊下の方が良いか」

ティオ「・・・・・」

クロウ「すぐに終わるからここでいい。俺、仕事が出来たからここから出るわ」

ガイ「そうか・・・・？少し寂しくなるな。でもいきなりどうしたんだ？前日までそんな兆候なかったのに・・・・」

クロウ「いやー、少し前からお呼びがかかっていたんだが気持ちの整理もできていないから待たせていたんだ。でも、整理できたから仕事をやろうかと思ってさ」

ガイ「そんなら、引きとめるすべはないな。いつ行くんだ?」

クロウ「今日、これから行く・・・・・」

ガイ「そうか・・・・。今まで楽しかったぜ。体に気をつけてな」

クロウ「ああ・・・・、ティオもサヨナラだ」

ティオ「はい・・・・そうですね。クロウさんも健康に気をつけて」

俺は早く逃げ出したかったのかもしれない。太陽のような熱血に焦がされるのではないかと焦りもあったのだろうか。今となっては分からない。だけれど壁を乗り越えるっていう精神だけは見習おうとした。そして同じような青年に再び会うとは・・・・。

~現在~

?「おはようございます。クロウさん。起きてください」

クロウ「んー?もう朝か。なんか懐かしい夢を見ていたような。そして聞いたことある声が聞こえてくるんだが・・・・あーティオどうやって扉を開けた?」

ティオ「鍵がドアに刺さったままでしたので・・・・それにしても懐かしい夢ってなんですか?」

クロウ「あーお前と初めて会った時のガイとティオの様子だよ」

ティオ「・・・・そうですか。なぜあの時クロウさんは・・？」

クロウ「っ、この話はまた今度。起こしに来てくれてサンキューな。着替えるから外出てて」

ティオ「分かりました。今度聞かせてください」

支援課での新しい朝が始まる。今日はどんな事が待ち受けているのだろうか。少しワクワクしている自分がいた。前はこんなこと考えもしなかったのに

第３１話～期待の遊撃士二人登場～（前書き）

第一章『神狼たちの午後』

原作七割オリ要素三割ぐらいです

第３１話～期待の遊撃士二人登場～

男性の声「お疲れ様、今月も大変だったわね」

アリオス「なに、いつものことだ。それよりも・・・・送金のほうよろしく頼む」

受付ミシェル「分かったわ、ＩＢＣ経由でいいのね？それにしても、依頼を回しているアタシがいうのもなんだけどさ、アナタもうちょっと仕事を減らしたらどう？シズクちゃんだって寂しがっているでしょうに」

アリオス「・・・・」

ミシェル「ゴメン、これ言わない約束だったわね。それはそうとレマン本部から連絡がまた来ていたわよ？『いい加減受けてくれる気はないのか』って」

アリオス「またそれか。その件については何度も断っているはずだろう」

ミシェル「まあ総本部としてはカシウス・ブライトの代わりに揃えておきたいんでしょうね。あなた彼の弟弟子（おとうとでし）なんでしょう？実績だって引けを取らないんだし、いいかげん観念したらどうなの？」

アリオス「残念だが彼と俺とでは役者が違いすぎる・・・・。実績にしたところで彼のように国家的問題を解決したわけではないからな、正直身に余る話さ」

ミシェル「国家的な問題って言ったらレミフェリアの件があるじゃない。大公閣下から勲章を貰ったんだし実績としては十分だと思うけれど・・・・」

アリオス「あの件は本当の意味での解決にはなっていないから。公国での芽は潰したとはいえ一部の黒幕は取り逃がしたままだ。本来なら勲章など辞退したかったんだが」

ミシェル「まったくもう、生真面目すぎるんだから。せめて昇格でもすれば逆に少し落ち着くんじゃない？今月だけでも百件以上。尋常じゃないよ、この仕事量は・・・・」

アリオス「無理をしているつもりはないさ。列車と飛行船の便数も増えて自治州外への出張も楽になった。頼もしい助っ人も来る事だし今後は一息つけるだろう」

ミシェル「あの子たちかぁ。まあ確かに期待の大型新人ではあるね。少なくともあの支援課の坊やたちよりは期待できそうね。ただ・・・・」

アリオス「ただ、どうした？」

ミシェル「“彼”（警察）がいればもっと楽になるんでしょうね。今はこ（遊撃士）じゃなくてあっちにいるんですもの」

アリオス「ああ、そうだな。“彼”がいれば楽なんだろうな。否定はしない」

娘の声「ごめんくださ～い」

ミシェル「あら、さっそく来たみたいだわ。こっちよ、上がってきて」

娘の声「あっ、二階？」

青年の声「失礼します」

ツインテールの娘「こんにちわー、ミシェルさん。ってあれ？アリオスさん」

黒髪の青年「よかった、丁度いらっしゃったんですね」

アリオス「フフ、まあ偶然だが。三か月ぶりになるか。よく来てくれた二人とも」

ミシェル「ホント。あなたたちがウチに来るなんてねぇ。うんうん、これでクロスベル支部も当分安泰だわ？」

ツインテールの娘「あはは、買い被り過ぎだと思いますが」

黒髪の青年「ご期待に沿えるよう頑張ります」

ツインテールの娘「改めまして、正遊撃士エステル・ブライト」

黒髪の青年「ならびにヨシュア・ブライト」

エステル&ヨシュア「遊撃士協会クロスベル支部に正式に所属させていただきます！」

～その後の会話～

ミシェル「あーあ。これで“彼”がいればねえ・・・・」

エステル「“彼”って誰ですか？」

ミシェル「あなたたちと一緒に浮遊都市を攻略した青年がいたじゃない？クローディア殿下の恋人の・・・・」

エステル「クロウさんですか。その人は今どこにいるんですか？」

ミシェル「この街にいるわよ・・・・。アタシからすれば考えられないような新しい職場で働いているらしいわ。どうしてここじゃないのよ～」

ヨシュア「ええっと、どこですか？」

アリオス「警察内に新たに出来た“特務支援課”っていう部署だ・・・・」

ミシェル「早い話遊撃士の真似事をやってる部署よ。まだ評価は低いけれど“彼”が本気になって仕事を始めたらすぐに遊撃士と同等いえ、それ以上になること間違いなしだわ」

エステル「そんなに凄かったっけ・・・・？確かＢ級正遊撃士って言ってた気がするしあまり真面目に行動していなかったような」

ヨシュア「はぁ～、エステルはもっと内部の情報に目ざとくあろうよ。クロウさんの本当の姿はカシウスさんと同じＳ級の正遊撃士だよ。あと過去に悲惨な事件が起きた時にもそれに参加して成果を

上げているんだから・・・・」

エステル「えっ・・・・ホントに？でも、同じような志をもっているんだし邪魔するわけじゃないからいいんじゃないの？」

アリオス「・・・・・」

ミシェル「・・・・・」

ヨシュア「・・・・・」

エステル「アタシ何か変な事言った？」

ヨシュア「いや、君らしいよ、言いたい事は少し違うんだけれどこれがエステルだからね～」

ミシェル「フフ、そうだったわね。気を引き締めて依頼を受けてくれればそれでいいから！」

エステル「なんか腑に落ちないけどここに来たからには頑張ります！」

ヨシュア「そうだね。頑張ろうか」

第３１話～期待の遊撃士二人登場～（後書き）

会話だけ。

エステルは積極的な行動派タイプというイメージが進行しているのですが、『いやこんなのはエステルじゃない』と思われる方がおられれば仰って下さい

第３２話～特別任務～

課長をいれて朝のミーティングを始めようとした時・・・・

課長「今日はお前らに特別任務を引き受けてもらおう！」

全員の頭の上にクエスチョンマークで付きそうなぐらい呆然とした空気が漂った。

ランディ「何だかウサン臭い響きがするんだが・・・・」

クロウ「俺もだ。嫌な予感がプンプンする・・・・」

課長「詳しい事は俺も知らん。まずは警察本部へ行け。お前たちに客人が待っているはずだ」

ロイド「わ、分かりました。いってきます」

～警察本部、三階～

ランディ「またあの嫌味な副局長に呼ばれるなんて・・・・小言でも言われるんか？」

ロイド「小言や嫌味を言うだけで、呼ぶとは思わないけど。それに客が待ってるって言ってたし」

ティオ「どのみち嫌味は言われそうだけれど・・・・」

エリィ「流しておきましょう」

クロウ「ひでぇ、副局長の扱い雑・・・・」

コンコン・・・・

ロイド「失礼します。特務支援課参上しました」

嫌味な声「はいりたまえ」

そこには嫌味ばかりを言う副局長と見慣れぬ制服を着た二人の女性が部屋の中にいた。どうやら呼び出された理由は、見慣れぬ二人にありそうだ。この二人は警備隊の連中らしく、ランディの古巣でもある。というのは、二人を見た瞬間ランディが漏らした「げげっ」という一言が如実に物語っていた。

ティオ「やましいことがありそうな反応ですね・・・・」ジト目でランディを見つめる。

ソーニャ「改めて自己紹介をします。クロスベル警備隊副司令のソーニャ・ベルツよ。今日は貴方達『特務支援課』の力を借りに参上したわ。まずは一通り話を聞いてくれるかしら？」

ロイド「魔獣の被害調査・・・・？」

ソーニャ「ええ、そうよ。ここひと月の間で自治州各地で特定の魔獣被害が続発しているの。その調査の手伝いを貴方達にお願いしたくってね」

支援課面々「・・・・」

ロイド「ちょ、ちょっと待って下さい。クロスベル市内ではなく市外での魔獣被害の調査ですか？」

ソーニャ「あら、不服かしら？」

ロイド「い、いえ。そんな事は・・・・」

エリィ「その、警備隊のほうでもすでに調査されているのですよね？そのうえで私たちが手伝う余地などあるのでしょうか？」

ソーニャ「うーん、それが大アリなのよ。普通の魔獣被害というにはどうも不可解なことが多すぎてね。ウチの調査だけでは手詰まりになってきているのよ。だから別の視点を入れておきたいって所かしら・・・・」

ロイド「別の視点、ですか」

ソーニャ「ええ、警備のプロではなく捜査のプロとしての視点をね。その意味では貴方達に頼まなくても良いのだけれども。例えばエリートが集まる『捜査一課』とか」

副局長「い、いやあ。紹介したいのは山々なのですが、何分忙しい連中なので・・・・ハイ」

ソーニャ「とまあ、色々と事情がありそうなので貴方たちを指名させてもらったわけなの。迷惑だったかしら？」

ロイド「い、いえ判りました。そういう事情でしたら喜んで。そ

れで魔獣被害の調査というと具体的にどうすればいいんでしょうか？」

ソーニャ「ノエル。例のものを」

女性隊員「はっ。どうぞ」

どこかで見た事がありそうな面持ちの茶髪の女性隊員がロイドに資料を渡す。

クロウ「どこかで見たような気が・・・・」

女性隊員「どうかしましたか？」

クロウ「いや、見た事ありそうな顔だったから。気にしないでください」

ソーニャが言うにはこの調書に警備隊で調査した情報が載せられており、余計な先入観を与えないためにも長所だけを見て捜査に当たってほしいとの事だった。ちなみにソーニャの横にいた隊員の名前はノエル・シーカーと言う名前だった。

調書

・三箇所で魔獣被害が出ている事。狼型の魔獣の可能性が高い。

次項より詳細

?アルモリカ村
　発生日時：三週間前の深夜
　場所　　：集落全域
被害・状況：事件発覚は朝。全家屋の農作物、家畜に被害。
目撃情報　：なし“住民は就寝中”
　痕跡　　：村の各地にイヌ科の足跡発見。周辺地域には見当たらず。

?聖ウルスラ医科大学
　発生日時：一週間前の深夜
　場所　　：病院敷地内
被害・状況：魔獣の群れ侵入。研修医一人負傷。
目撃情報　：被害者が黒い狼のようなものを目撃
　痕跡　　：周囲に見当たらず。研修医の勘違い？

?鉱山町マインツ
　発生日時：二日前の夜十時ごろ
　場所　　：宿酒場前
被害・状況：酒場帰りの鉱員一人負傷
目撃情報　：町の人間が逃げる狼目撃する
　痕跡　　：現場付近に多数の足跡
　アルモリカ村での足跡と酷似
※採掘道具の被害など発生しこれで三件目。
　定期的な警備と巡回必要

エリィ「本当に各地で起きているのね。どうしてニュースになっ

ていないのかしら？」

ティオ「狼型魔獣。クロスベルの固有種でしょうか・・・・」

ロイド「さすがにちょっとわからないな。ただ、被害があった場所でははっきりとした足跡が残されているみたいだ。そういう魔獣がいるのは確実だ」

エリィ「でも、警備隊の捜索では未だに確認されていないのよね？それがちょっと気になるんだけれど」

ランディ「ああ、姿を隠しているんなら相当ズル賢い魔獣みたいだぜ。俺たちじゃなくて凄腕のハンターでも雇った方が良いんじゃないか？」

ティオ「私たちに何かできるんでしょうか？」

ロイド「・・・・」

クロウ「どうした。ロイド何か閃いたのか？」

ロイド「閃いたと言うより『捜査』という観点からこの魔獣被害について調べるんだったらどこがポイントになるかなと思って」

エリィ「どういうこと？」

ロイド「例えば一連の魔獣被害を『事件』として捉えるなら、この場合『犯人』は誰になる？」

クロウ「それは調書にも載っているように狼型魔獣って事になる

だろ」

ランディ「個体じゃなくて群れ単位で動いているみたいだが」

ロイド「だったらもう一つ・・・その『犯人』の『プロフィール』と『動機』についてはどうだろう？」

ランディ「そいつは・・・・」

エリィ「この調書からは見えてこないわね」

ロイド「ああ、それに知能が高い魔獣なら普通人里には近づかないはずだ」

クロウ「それにロイドが言った『動機』について飢えているなら病院での出来事が不可解すぎるってことだろ」

ロイド「そう。俺が言いたいのはそれらすべてを説明できる何らかの真実があるんじゃないか？」

ランディ「ふむ・・・・」

ティオ「確かに理屈ではそうなりますね・・・・」

エリィ「そうすると捜査方針は決まったね」

ロイド「ああ、まずは被害に遭った場所で関係者から話を聞いてみよう。少なくとも俺たちの方法でこの調書を補完することぐらいは最低限できそうだ」

エリィ「そうね。少しでも警備隊の役に立てそう」

ランディ「は～、助かったぜ。闇雲に野山を駆け回って魔獣狩りする羽目にならなくて・・・・」

クロウ「ランディはそっちのほうが似合いそうな気がするんだが・・・・」

ランディ「いや・・・・勘弁して下さい」

ティオ「それで、方針は決まったとしてどこから行きますか？」

ロイド「そう・・だな。まずは最初に被害に遭ったアルモリカ村に行ってみようと思う。一番被害が具体的だし少しでも魔獣の特徴を掴んでおいたほうがよさそうだ」

エリィ「なるほど、それはいいかもしれないわね。えっとアルモリカ村へは・・・・」

クロウ「街の東口から導力バスに乗って行けばすぐ着くよ」

ロイド「じゃあ、準備をしてから東口からアルモリカ村を目指そう！」

ティオ「了解です」

第３３話～街の外へ～（前書き）

まったりとした日常

第３３話～街の外へ～

アルモリカ村へ行く用意が出来た五人は、東口にあるバス停から乗ることに決めた。しかし遅れたためにあと少しと言うところでバスに乗る事が出来なかった。

クロウ「バスはどのくらいの頻度で出ているんだ？」

ティオ「時刻表によると・・・・二時間後ですね」

ロイド「一日数本しか通ってないってことか。困ったな、今日中に病院ぐらいまで調べたかったんだが・・・・。かといって先に他の場所を回るのもどうかと思うし」

ティオ「・・・・だったら歩いて行けばいいのでは？」

ロイド「へっ・・・？」

エリィ「ティ、ティオちゃん？」

ティオ「地図で確認するとここからアルモリカ村まで一時間半ぐらい歩けば着きそうです。次のバスで行った場合、待ち時間も考えたら二時間半はかかるはずです。歩いた方が効率的ではないでしょうか？」

エリィ「なるほど、そう考えると効率的だわ。それにアルモリカ村までの途中には田園風景が続く石畳の道が通っているはずだし、ハイキングがてら行ってみるのもいいかもしれないわね」

クロウ「こっちは慣れているからいいかもしれないが、なれないとキツいぞ」

ロイド「どう考えても街道を歩いたことがなさそうな雰囲気だし・・・・」

エリィ「どうしたの。三人とも・・・・・？」

ロイド「いや～、村までの途中には魔獣も出るし体力的に大丈夫かなと思って」

エリィ「う～ん、それを言われると。でも今まで何回もジオフロントに潜っているし最初よりは体力もついたんじゃないかな」

ティオ「それにわたしには魔導杖のテストもありますし、多少の実戦でしたらむしろ望むところですが・・・・」

クロウ「二人の意志は固いみたいだしなにかあればこっちでフォローするってことで、徒歩で行かないか？」

ティオ「疲れたら背負ってくれますか？」

クロウ「はっ・・・・？ティオも冗談を言うまで成長したなぁ」

ティオ「冗談ではないのですが・・・・［小声］」

クロウ「なにか言った？」

ちょっと声が小さくて聞こえなかったので、聞きなおした。

ティオ「いいえ、なんでもありません。アルモリカ村までいきましょう」

街の外へ出ると、そこは青草がどこまでも続く、草原が広がっていた。今までは街の中を探索したり血みどろの仕事をしていたので少し気分が晴れやかになる光景だった。

しばらく道なりに歩いて行くと分岐点に差し掛かった。ここから北に向かうとアルモリカ村へ続く古道となる。

ロイド「分岐点か・・・・。ここから北へ行くと村の方向だな」

ティオ「ハァ・・・・ハァ・・・・」

エリィ「・・・・これは思った以上に大変ね・・・・」

クロウ「二人とも大丈夫か？息も絶え絶えになっているけれど」

ティオ「問題ないです・・・・」

ランディ「少し休んでいくか？」

エリィ「私はもう少し大丈夫だけれど・・・・ティオちゃんはどう？」

ティオ「イチ抜けたと言いたいところですが、提案者は私ですしもう少し頑張ってみようと思います」

ランディ「ま、我慢できなくなったら俺が背負ってってやるよ」

ティオ「いえ、おんぶだったらクロウのほうがいぃ・・・・・」

ランディ「そりゃないよ～。どうしていつもクロウばかり・・・・」

クロウ「ん?二人とも何か言ったか?それにティオ、俺は無理だ。その資格が無い・・・・・」

ティオ「えっ、それはどういう事?」

クロウ「いつか話すよ・・・・。たぶん・・・・・。ティオが歩けるみたいだし村まで行こうか?」

ロイド「・・・・ええ、そうですね」

訝しながらも四人はあまり深くを突っ込まないで徒歩を再開した。

少し雰囲気が変わった道を進んでいると休憩所らしき場所が見えてきた。ロイドが休むことを提案しそれに同意したのでみんな休むことにした。川の横の小高い場所を休憩所にしたらしく、座って談話できる場所と自動販売機が設置されていた。休んでいると村に着いたバスが休憩所の横を通って行った。

ロイド「さて、休憩して体力戻ってきたと思うからそろそろ歩きを再開しないか?」

ティオ「そうですね・・・・」

エリィ「だいぶ、体力が元に戻った感じがします」

クロウ「歩きますか・・・・」

村の近くまで来ると、視界のいっぱいに草原が広がり村で販売されている蜂蜜の匂いも漂ってきた。アルモリカ村ではいったいどんな証言がなされるのだろうか?そして狼型魔獣の正体とは・・・・?

第３３話～街の外へ～（後書き）

数日空いてしまい申し訳ないです。『碧の軌跡』を一週目クリアしたのでこれからは『零の軌跡』の物語を書けると思います

第３４話～アルモリカ村～（前書き）

アルフレッド：トネリコ亭でオムライス食べている客。

ゴーファン：トネリコ亭の料理人

１セルジュ：１００ｍ

第３４話～アルモリカ村～

エリィ「花咲き乱れる田園風景、こんなに綺麗な場所だったのね。それになんだか甘い香りもするけれど、もしかして蜂蜜の匂い？」

ランディ「だな。向こうに蜂蜜の巣箱が置いてあるぜ」

ティオ「データベースによるとアルモリカ村の蜂蜜といえば特産品の一つらしいです。品質も極めて高い為周辺国にも輸出されているとか・・・・」

ロイド「ああそうみたいだな」

クロウ「雑貨屋でもよく見かけるがここで作っていたのか。あとで買って送るか・・・・」

ランディ「女ですか？」

ニヤニヤした表情を見せて突っ込む。

クロウ「ああ、そうだが・・・・」

極めて冷静にランディの問いに答えるクロウ。他のメンバーには聞こえなかったみたいで、ランディだけが呆然としていた。

ランディ「俺にも紹介して下さい！」

顔がずいっと近づいてきて暑苦しい・・・・。

クロウ「あーっ、機会があればな。それはそうと村長の所に行って話を聞かないと」

会う村民みんながスローライフを楽しんでいるかのような光景。このような村にも魔獣被害が報告されていると言う事で皆の気持ちは一つだけ。それは何とかして解決しなきゃと言う思い。

村長宅に着き中に御邪魔するとそこには貿易商らしき男性と交渉している様子。

温和そうな男性「おかげさまで良い取引をさせて頂きました。今後ともよろしくお願いします」

老人「ああ、こちらこそ。それにしても本当にあの価格で良いのかね？他の商人よりも二割は高いぞ？」

温和そうな男性「それだけこの村の特産品が認められていると言う事です。十分儲けさせていただいてますから、どうかご心配なく」

老人「そうか。いや本当に世話になるのう。今度は奥さんやお子さんと一緒に遊びに来なさい。歓迎させてもらいますぞ」

温和そうな男性「はは、ありがとうございます。それでは村長。また寄らせていただきます」

男性は取引を終えたのか老人と話し終えこちらに向かってきた。

男性「おっと、失礼・・・・」

ロイド「今の人は・・・・？」

エリィ「なにかの商人らしかったわね」

ランディ「ま、ここが村長の家なのは確かみたいだな」

老人の声「おや、お前さんたちは・・・・？」

クロウ「失礼します」

エリィ「あなたがこの村の村長でいらっしゃいますか？」

老人「うむ、いかにも。トルタと言う者じゃが観光客かなにかか？」

ロイド「いえ、実はこの村であったという魔獣被害を調べに来まして」

村長「おお、あの件についてか！いやな、警備隊のほうでも何度か調べてはくれたものの結局何も分からなくてな。アンタたちが来てくれれば一安心じゃ」

あーっ、この反応は・・・・。また間違われてるのかな。もう驚かないぞ。

ロイド「すみません。言葉が足りませんでした。わたしたちは遊撃士協会のものではありません。クロスベル警察、特務支援課に所属している者です」

村長「ふむ、警察の方々じゃったか。間違えてスマンのう。この

村に警察官が来る事が滅多になくてな。あのアリオス殿をはじめとする遊撃士なら何度も来ているんじゃが」

ロイド「そ、そうですか・・・・」

ランディ「あのオッサン、売れっ子のくせにマメだよな」

クロウ「遊撃士ってのは街の信頼を受けて行動するからな。ちょっと足を運ぶついでに立ち寄って様子を見たりするからな～」

ロイド「クロウもアリオスさんみたいにマメに通ったりしてたの？」

クロウ「そうだな。遊撃士として仕事に勤しんでいたからなぁ。まっ、今は魔獣被害の事について聞こうよ」

エリィ「そうね・・・・。では村長、私たちが着た経緯は先ほど話した通りです」

ロイド「御手数ですが、被害状況などを聞かせて頂きませんか？」

村長「ふむ、そうじゃな。あれは三週間前の新月の夜。この村に魔獣の群れが忍び込み農作物を荒らしていったのじゃ。どの家も家畜や果物、小麦などが荒らされてしまった」

ロイド「確か、目撃者はいなかったんですよね？」

村長「うむ、クロスベル市とは違ってこの村の夜は早いからのう。朝早くの農作業もあるしほとんどの住民は、夢の中じゃった。そして朝起きてみると魔獣どもの足跡とともに被害が明らかになったと

いうわけじゃ」

ロイド「なるほど・・・・」

ティオ「それで狼型魔獣と判明したわけですね？」

村長「うむ、残された足跡の形状がイヌ科のものじゃったからな。丁度その日に警備隊の巡回パトロールが訪れて、念のため付近を捜索してもらったんじゃが・・・・」

エリィ「狼型の魔獣の痕跡はどこにも見当たらなかった・・・・。なるほど、警備隊の調書どおりですね」

村長「そのとおりじゃ。それから三週間、再び被害に遭う事は無く今に至っておる。正直同じ事は起こらないと高を括っておったが、ううむ。他の場所で被害が起きていたとは」

ロイド「はい・・・・」

ランディ「しっかし、魔獣の被害があったって言うのにこの村は平穏そのものだな。被害額も相当のものだったのでは・・・・？」

村長「いやそれがそれ程でもなかったんじゃ。どの家も少しずつ何らかの被害を受けただけでのぅ」

ロイド「えっ、そうなんですか？」

村長「被害額は総額にして十万ミラってとこじゃろか。被害は被害で落ち込んでいたが、その時良い取引が出来ての。受けた被害が帳消しになったんじゃ」

ロイド「良い取引・・・・」

クロウ「もしかしてさっきすれ違った男性の事ですか？」

村長「うむ、彼はここ数年、ワシらと懇意にしてくれるクロスベル市の貿易商でな。被害の話を聞いて取引額を少し上乗せしてくれたのじゃよ。まあ今のクロスベルの状況を考えるとこの程度の被害はむしろ軽いものかもしれん」

四人「？」

クロウ「・・・・！」

ロイド「あの、それはどういう・・・・？」

村長「おっと、失言だったかの。スマンスマン、この事は忘れてくれ」

ランディ「おいおい、村長さん。そんな言い方されたら余計に気になるっての」

ティオ「それもそうですね」

村長「ハハ、そうかもしれんのぅ。では年寄りの世迷言かもしれんが、それでもいいかね？」

ロイド「どうか聞かせてください。どこにどんな手掛かりがあるか分からない状況ですから」

村長「そうか・・・・。お前さんたちは『神狼』と言う言葉を聞いた事があるか？」

ロイド「神狼・・・・？」

エリィ「神の狼ですか」

ティオ「データベースでも見かけた事のない言葉ですね」

村長「ふむ、そうか。そうなると街でこの話はもう伝わっておらんのじゃな。なんとも寂しい話じゃ・・・・」

ロイド「えっと、その『神狼』というのは一体？」

村長「その昔このクロスベルの地に棲んでいたと言う獣の事じゃ。白い毛並みを持つ狼の姿をしておったという」

ティオ「今回の被害を起こしたのと同じ？」

村長「確証はない。が、そうであっても不思議ではない」

クロウ「・・・古い伝承によるとその狼たちはただの狼ではなく女神が遣わした聖獣だったという話だ。古より血で血を洗うような戦に巻き込まれてきたクロスベルの地。そこで人の愚かさを見守りながら、時に気紛れで無力な人間を助ける・・・そんな存在だと言われている」

ロイド「クロウ、なぜ？」

クロウ「昔の事に興味があってね・・・・。でも図書館にも童話

があるんじゃないか？」

ロイド「そういえば絵本で読んだ事があるような」

村長「その童話は伝承を下敷きにして書かれたのじゃろう。しかしこの数十年でクロスベルの街は変わった。帝国、共和国双方の影響力にあって貿易都市として発展していくにつれ過去の記憶は、忘れされられてしまった」

クロウ「そして、『神狼』は姿を消した・・・・」

ランディ「さしずめ人間に愛想を尽かせたか」

ティオ「・・・・」

村長「そうかもしれない。ただ、そんな時代の狭間で消えて行った『神狼』たちのことじゃ、もし戻って来たとしたら・・・・」

クロウ「何かの警鐘を鳴らしに来たと、そう村長は考えているわけですね？」

村長「うむ・・・・。こう言っては何だがクロスベル市の発展は早すぎる気がしてならないのだ。たまにバスで街に出ると変わりように愕然とするくらいじゃ。誰もが現在（いま）だけに追い立てられ、過去を振り返る余裕などないような・・・・そんなふうに思うんじゃ」

ロイド「・・・・」

村長「説教するつもりではなかったのだが、ただまあそう考えるとこの村が襲われたのも彼らなりの警告そんな風に、捉えられるの

ではないかと思ってな。真面目に受け止めてしまったか。年寄りの世迷言と思って聞き流してくれ」

ロイド「いえ、おかげでこの魔獣被害に関して別の視点がもてた気がします」

村長「それならいいが、他に協力できる事は無いか？」

ロイド「そうですね、住民の方たちに聞き込みをしてもかまいませんか？」

村長「ああ、よかろう。ちょうど昼時で農作業から帰ってくる事じゃ」

ロイド「では失礼します・・・・」

村長の家から出ると昼時だった。住民もちらほらと見受けられる。これなら聞き込みをして少しでも情報を取り入れることができそうだ。

しかし、あまり新たな情報を手に入れることはできなかった。三週間前と日が空いてしまった事と、夜中の寝静まっている時に被害に遭った事が災いして証言を得られなかったのだ。

～宿酒場トネリコ亭～

ロイド「自分たちはクロスベル警察の者ですが、三週間前に起こった魔獣被害について教えてもらっても構いませんか？」

アルフレッド「うん、いいよ。あの時はたまたまどの家も次の日

の仕事が早くてね。みんな早くに寝静まってしまったんだ。そこにまるで狙ったかのようなタイミングで、魔獣が現れてしまった。とにかく運が無かったとしか言いようがないよ・・・・」

ゴーファン「僕も同じようなことしか言えないよ。その日宿泊していた人たちも何も見ていないって言うし」

エリィ「そうですか・・・・」

ランディ「決定的な証拠ってのがなかなか見つからないな」

ロイド「まあ、聞き込みって言うのは地道な作業だし直ぐに成果が表れるものでもないさ」

ティオ「とりあえず休憩にしませんか？」

クロウ「お腹が空いた・・・・」

グギュルルルル。

クロウのお腹が盛大に鳴った。

ゴーファン「なんだ君たち。まだ昼食は食べていないのか。よしせっかくだから当店自慢のオムライスをご馳走してやろう。お近づきのしるしにってことで」

クロウ「いやったぁ～ごちそうになろうぜ。腹が限界だ」

ロイド「じゃあいただきます・・・・」

。

ガツガツガツ、ムシャムシャムシャ、ゴクン、プハーッ・・・・・

クロウ「いや～自慢のって言うだけあって美味しかったね」

ティオ「それにしても食べすぎです。大盛りで三杯も食べるなんて・・・・」

クロウ「美味しかったから仕方がないっしょ！宣伝しておくから～」

ゴーファン「宣伝してくれるし美味しそうに食べてくれてご馳走したかいがあったってもんよ」

ロイド「じゃあ聞き込み再開しようか・・・・？宿泊している人たちにも聞いてみよう」

トネリコ亭の二階は宿泊施設となっている。一番手前の部屋に入るとそこにはさっき村長宅で見た貿易商の男性がいた。

男性「おや？あなた達は・・・・」

エリィ「確かクロスベル市で貿易商をされている方ですね？」

男性「ハハ、村長から聞きましたか。初めましてハロルド・ヘイワースといいます。クロスベル市で小さな貿易商を営んでおりまして、みなさんもひょっとして買い付けにいらっしゃったんですか？」

ロイド「い、いえ。私たちは」

ロイドは自分たちの身分を明らかにしてこの村に来た事情を伝えた。

ハロルド「警察の方だったんですか。これは失礼しました。しかし『特務支援課』どこかで聞いたような・・・・！そうです。クロスベル・タイムズ！」

ロイド「はぁ、やはり読まれていましたか」

エリィ「その、お恥ずかしい限りです・・・・」

ハロルド「そんなに恥ずかしがらなくても設立されたばかりと言うのに頑張っているみたいじゃないですか？あの記事だって少しは皮肉っぽいものでしたが、あなたがたの頑張りを好意的に捉えていたと思っていますよ」

ロイド「そうですか？」

ティオ「好意的に解釈をすればそう取れなくもないですが・・・・」

ランディ「書いた本人を知っているから素直には頷きにくいかもなぁ」

ハロルド「しかし狼型魔獣ですか。医科大学でも聞きましたが少しばかり心配ですね」

クロウ「ハロルドさんは医科大学のほうにも仕事で行っているんですか？」

ハロルド「ええ、病院のほうに備品を卸させてもらっているんです」

ハロルドからも魔獣の事を聞いたがあまり知らないみたいだ。それにかなり良心的な価格で特産品を買ったことについて、この村の特産品の価値が上がってきている事を理由に住民と仲良くできたらという打算もあったようだが悪い感じはしなかった。

一通りの聞き込みを終えて帰りはバスに乗って行こうとした時・・・。

クロウ・ティオ「っ！」

きょろきょろとあたりを見渡す二人。

ロイド「どうかした、二人とも？」

クロウ「何だか不思議な気配が・・」

ティオ「遠くから声がしたような。すみません、センサーを最大にしてみます。少し静かにしていてください」

ロイド「あ、ああ」

ティオ「アクセス・・・。すみません気のせいだったようです」

ロイド「いやそれは別に構わないけれど最初に聞いた声はどんな声だったの？」

ティオ「それが、なにかの遠吠えのような音が」

ランディ「そいつは・・」

エリィ「例の狼型魔獣？」

ティオ「いえ、聞き間違いかもしれません。センサーの誤動作と言う可能性もありますし」

エリィ「どうする？この付近を捜索してみる？」

ロイド「そうだな。ティオそのセンサーの感知範囲はどのくらいなんだ？」

ティオ「そうですね。およそ５０セルジュってところでしょうか。ただ音が風に乗っていた場合その倍になる時もあります」

ランディ「ヒュー！そんなにあるのか」

エリィ「そうなるとどこから聞こえたのか皆目見当もつかないわね」

ロイド「ああ、現時点では留めておくしかなさそうだな」

ティオ「・・・あの私が聞き間違えたとは考えないんですか？」

エリィ「でも聞こえたんでしょう？」

ティオ「私の主観ではそうです。でも普通の人には聞こえない音が私にだけ聞こえた。普通は嘘とか気のせいだって思わないんですか？」

ランディ「と言われてもなぁ。ティオすけが凄いのは俺たち全員が知っている事だし」

ティオ「え・・」

エリィ「それにあなたが嘘をつく理由なんてどこにもないでしょう？」

ロイド「まだ短い付き合いだけれどティオには何度も助けられている。俺たちが疑問に思う理由なんてこれっぽっちもないけれど」

ティオ「・・すみません。変な事を言い出しまして。今のは忘れて頂けると」

ロイド「あ、ああ？いいけれど」

第３４話～アルモリカ村～（後書き）

変なところで切ってしまって申し訳ないです。次はアルモリカ村からクロスベル市への道中の話です。

クロウがティオと同じ瞬間に感じ取ったのは気配だけ。神狼と何か通じ合うものがあったのでしょうか。ティオと同じ能力は持っていません。伏線にしたいですがどうなるか分かりません。

何かあればお気軽に聞いてください。

第３５話～車中～（前書き）

短めです。原作では車の中に５人と言う設定でしたがここでは６人です。
そこは入れないとか思わないでください。

言い忘れましたが“ミラ”は通貨です。

第３５話～車中～

男性の声「あれ、あなたたちは？」

背後から声をかけてくる男性の声が聞こえたので、振り返るとそこにはハロルドが立っていた。

ロイド「ハロルドさん」

ハロルド「もしかして皆さんもクロスベル市にお戻りに？」

エリィ「ええそうですけれど、もしかしてハロルドさんもお帰りですか？」

ハロルド「ええ、妻と息子へのお土産も確保しましたしね。そうだ、みなさんはバスをお使いですね。次の発車時刻はいつですか？」

ティオ「時刻表によるとあと３０分後と言うところでしょうか」

ランディ「俺たちと一緒にダベっていくかい」

ハロルド「ああ、実は・・・・そうだな６人ならギリギリ大丈夫か」

戸惑う支援課メンバーを横目に村の入口へと向かう。

ハロルド「もし宜しかったら私の車に乗って行きませんか？クロスベル市まで送りますよ」

ご厚意に甘えハロルドの車に乗せてもらう事にした5人だった。

～車中～

ロイド「すみません、送っていただいて・・・・」

ハロルド「はは、いいんですよ。ついでに送るだけですし」

ランディ「しかし、自分の車を持っているなんて相当スゴイよなぁ～。まだまだバカ高いんだろ？」

ティオ「このクラスの自家用車だとすると８０万ミラはするかと・・・・」

ロイド「８０万ミラ、そりゃあ凄いな」

ハロルド「一応、貿易商としての仕事の道具でもありますから、バスを使ってもいいんですがどうしても時間の融通が利かないことが多くて・・・・去年思い切って購入しました」

クロウ「それ以外にも理由ありそうですね。例えば・・・・愛しの家族に早く会うためだとか！」

ハロルド「はは、参ったな・・・・」

ランディ「お土産もマメに用意しているみたいだし」

ティオ「所謂（いわゆる）マイホームパパといったところですね」

ハロルド「いやぁとんでもない。出張が多くていつも妻と息子には寂しい想いをさせてしまうことが多くて・・・」

エリィ「息子さんはおいくつなんですか？」

ハロルド「今年で5歳になります。まだ日曜学校に入る前なんですが、好奇心旺盛で色々なものに興味を出しては妻の手を焼かせています」

ロイド「へえ・・・・」

エリィ「ふふ、お幸せそうですね？」

ハロルド「はは、それはもう。それに私たちは幸せでなくてはなりませんから」

ロイド・エリィ・ティオ・ランディ「？？？」

クロウ「・・・・！」

ロイド「えっ？」

ハロルド「いや、こっちの話です。おっと、古道が終わりますね。右に曲がりますので気を付けてください」

分岐点を右に曲がりハロルドが運転する車がクロスベルへと向かう。車が去った後を眺める白い狼。一体この正体は・・・・。

そして、クロスベル市の中央広場へ車は停止した。

ロイド「ありがとうございます。こんなところまで送っていただいて」

ハロルド「いいえ、それこそついでですしね。皆さんこそ捜査のほうを頑張ってください。応援させていただきますよ」

エリィ「ありがとうございます」

ティオ「応援していただけるのでしたら、今度何かあれば支援課（わたしたち）のほうに」

ランディ「できればギルドより先にお願いしますっ！」

クロウ「露骨すぎないか？」

ランディ「いやでも、売り込みはしておいた方がいいだろ」

ハロルド「分かりました。今度何かあれば支援課のほうにお願いします。それではここで失礼します」支援課の面々を降ろした車はそのまま走り去って行く。

ロイド「凄く良い人だったな」

ティオ「お人よしのレベルがロイドさんに匹敵しそうです」

クロウ「そうかもな」

ランディ「ただ貿易商を営んでいるぐらいだからお人好しで収まらないと思うがな」

エリィ「でもハロルドさんは地場産業ときちんと協力しながら堅実に商売やっているみたいね。クロスベルの貿易商は、国際取引で荒稼ぎをしている人も多いって聞くのにその中にあって貴重な存在かもしれないわ」

クロウ「なるほど・・・・」

ロイド「ああいう真っ当な人もいればルバーチェ商会のような連中もいる。それが今のクロスベル市か」

ロイド「さて今は昼過ぎか。このまま次の目的地に行こうか？」

エリィ「そうね。次は『聖ウルスラ医科大学』ね」

ティオ「・・・・確か南口でしたよね？」

ロイド「ああ、このまま南にまっすぐ抜ければバス停がある３０分ごとにバスが出るって聞いたな」

クロウ「・・・・」

ロイド【医科大学か、やっとセシル姉に会えるな】

第３５話～車中～（後書き）

話の中で疑問に思う語があればお気軽にどうぞ。
補足させていただきます。

第３６話～トラブル発生そして、また・・・・～（前書き）

【　】⇒小声もしくは思考の言葉

第３６話～トラブル発生そして、また・・・・～

クロスベル・南口バス停

ロイド「この時刻表によると、バスが来るまで１０分後ってところか・・・・」

エリィ「待っていればすぐに来るわね。ウルスラ病院か、行くのも久しぶりね」

ロイド「ああ、俺もそうだよ。ほんとは直ぐに行きたかったけれど、仕事が忙しかったからな」

エリィ「あら？」

ランディ「病院に行くって、どこか具合でも悪いのか？」

ロイド「いや、知り合いが勤めているんだ。ずいぶん世話になった人で戻った挨拶をしたかったんだけれど、お互い忙しかったから先延ばしになっていたんだ」

エリィ「なるほど、そうだったんだ」

ランディ「勤めているってことは医者か何かなのか？」

ロイド「いや、看護師をしている人だよ。若手のまとめ役で毎日忙しいみたいでさ」

ランディ「！看護師って事は・・・アレか？もしかしてナース服を着て優しく検温してくれるお姉さん？」

ロイド「へっ、まあ仕事着だからナース服は着ていると思うけれど」

ランディ「そのお姉さん、幾つ？」

ロイド「俺の５つ上だから２３歳かな。うちの隣に住んでいて姉さんみたいな人だったよ」

ランディ「美人？」

ロイド「うーん、綺麗な人ではあると思うけれど・・・・」

クロウ「美人だよ」

ロイド・ランディ「へっ？」

クロウ「前に見た時美人さんだったよ」

ロイド「面識あったの？」

クロウ「たまたま病院に療養している知り合いがいてね。その時に遠目で見た事があるだけさ」

ティオ「・・・・」

ランディ「２歳年上でナース服の美人さんか・・・・。ストライクど真ん中。よ～しみなぎってきたぜぃ！！」

ランディ「いやー俺は幸せだな。お前みたいな親友（マブダチ）と巡り会う事が出来て。というわけで紹介ヨロシク☆」

ロイド「あのな・・・・・」

エリィ「はあ・・・・これだから男子って」

ロイド「ちょ、そこで俺も入れないでよ」

エリィ「ティオちゃん。どうかしたの。さっきから黙っているけれど」

ティオ「いえ、病院は少々苦手で。消毒液の匂いとか、注射がちょっと・・・・」

ロイド「そっか。なんだったらティオは・・・・」

ティオ「問題ありません。少し苦手と言うだけで嫌いではないので。来なくても良いとか言ったら怒りますよ」

ジト目がロイドに突き刺さる。

ロイド「言わないって。【危ない、危ない。気をつけないと】」

ティオ「それに私もロイドさんの知り合いに会ってみたいですし・・・・。この前通信器で嬉しそうに話していた相手ですよね？」

ロイド「どうしてそれを」

焦るロイド。

エリィ「ロイドのお姉さんみたいな人か。会うのが楽しみになって来たわ」

ランディ「おお、どっちかっていうとメインイベントになりそうだぜ！」

ロイド「あ、あくまで捜査優先だからな」

クロウ「焦るとやましい事があるって思われちゃうぞ」

ロイド「そんなの無いって・・・・」

～３０分経過～

エリィ「来ないわね。どうかしたのかしら？」

ランディ「おいおい、ロイド～。１０分後に来るって言ってなかったっけ？」

ロイド「俺に言われても・・・・」

クロウ「でも妙だな。バスが来るのが遅すぎる・・・・」

青年の声「ああ、やっぱり来ていない。困ったなぁどうしよう。こっちから通信を入れても何の返事もないし」

ロイド「あの～どうかしたんですか？随分と遅れているようですが」

青年「どうもトラブルが起こったらしいんです。一度バスの運転手から連絡があったんですが、途中でブツリと切れてしまってそれっきりなんです」

青年「どうしようか。警備隊に連絡するのもなぁ。やはりここはギルドに頼もうか」

ロイド【みんな、いいか？】

エリィ【ええ、分かってる】

ティオ【ふう・・・仕方ないですね】

ランディ【ま、これも巡り合わせだろ】

クロウ【また歩きですか。まあいいですけど】

ロイド「あの、その役目自分たちに任せてくれませんか？」

青年「へ、君たちは・・・？」

ロイド「クロスベル警察、特務支援課の者です。これから捜査任務で医科大学に向かう所でした」

青年「えっ、君たち警察？そっか雑誌で見た事あるよ。警察がギルドみたいな市民サービス始めたって」

ロイド「厳密にはそうではないんですが。バスの様子を見るぐらいだったら出来ると思います」

青年「そっか。それだったらお願いしようかな。なんだったら遊撃士の支援も頼んでおくかい？」

ロイド「い、いや。大丈夫だと思います。みんな行こう！」

第３７話～再会～（前書き）

戦闘が紙で申し訳ない

第37話～再会～

医科大学に向かって徒歩で歩いていると遠くにバスが見えた。が・・・・。

ロイド「あれは・・・・？」

ランディ「チッ、予想通りか」

そこには今にもバスに襲いかかりそうになっている魔獣がいた。

運転手「ひぃっ、なんでこんな時に魔獣がっ。ああ女神（エイドス）よ。お守りください」

ロイド「大丈夫ですか・・・・！警察です。撃退するのでバスの中に入ってください」

戦闘態勢を整えて人間の2倍はありそうな魔獣に向かって行く支援課。

ロイドがトンファーで叩き、エリィが援護射撃をする。ランディも突っ込み斬りつける。だがあまり効果は無いようだ。魔獣が力を溜めはじめた。

クロウ「なにか嫌な予感がする。どうにかできないか？」

ロイド「なんとかやってみるっ。はぁぁ～タイガーチャージ！！」

闘気を纏ったロイドが一匹の魔獣に跳びかかる。少し怯ませる事が出来たようだ。

もう片方がアーツを唱え始めた。

クロウ「こちらは任せろ【力をセーブしてっと】」

黒い球体が眼前に現れ空間ごと抉り取る。部分的にではなく魔獣ごと消したので、グロテスクにはならなかったようだがメンバー唖然。

クロウ「えーっとやり過ぎちゃった・・・・？」

ランディ「うん、まあ助かった」【洒落になってねぇぞ】

ロイド「ふう、かなり手強かったな」

エリィ「かなり大きかったけれどどこから現れたのかしら？」

ティオ「どうやら森林地帯に生息する種らしいですが、何かのきっかけで街道に出てきてしまったのでしょう」

運転手「助かったよ～」

ロイド「今の魔獣で足止めを食らったんですね」

運転手「エンジントラブルで動かなくなってそれを修理しようとしたら襲われたってわけさ」

修理を始める運転手を横目に。

ロイド「これは時間がかかりそうだな。交通課に連絡した方がよさそうだ」

ティオ「これも運命ですね」

クロウ「！気をつけろ。まだ魔獣は全部倒したわけじゃない！」

ランディ「おい！」

さっきの魔獣が5体バスの近くに来ていた。

ランディ「さすがに無理があるぞ。ロイド各個撃破に持ってくぞ」

クロウ「・・・・！いやそれは必要無い」

ロイド「えっ・・・・」

元気な女の子の声「はあああああ～！」

棒術を駆使する女の子が登場。それに続くように黒髪の青年も支援課の前に飛び出す。

ヨシュア「エステル行くよ！」

エステル「うん！」

エステル・ヨシュア「「太極無双撃」」

ヨシュアが斬り込みエステルの連撃が魔獣の足を止め最後は二人

のクラフトで倒してしまった。

ヨシュア「ふう、何とか間に合ったね。エステルのほうは大丈夫？」

エステル「大丈夫。ヨシュアの切り込みのタイミングを作れてよかったわ。それはそうと・・・えっとクロスベル警察の人たちかしら？南口で交通課の人から話を聞いたんだけれど」

ロイド「ああ、その君たちは・・・？」

エステル「いきなり現れて混乱させちゃったみたいね。初めまして！あたしはエステル。エステル・ブライトよ」

ヨシュア「僕はヨシュアと言います。遊撃士協会クロスベル支部に正式配属になったばかりです」

ロイド【やっぱり遊撃士、か】

ロイド「自分たちはクロスベル警察、特務支援課に所属する者です。危ないところをありがとう。本当に助かったよ」

エステル「あはは、いいよ。あなたたちも結構やりそうだし余計なお世話かなってちょっと思ったんだけれども」

ロイド「いや助かったよ。僕はロイド。ロイド・バニングスだ」

エリィ「初めまして。エリィ・マクダエルです」

ランディ「うっす。ランディ・オルランドだ」

ティオ「ティオ・プラトーです」ぺこり。

クロウ「・・・・あっと、ひさしぶり」

エステル「なんでここにいるのよー。そしてクロウなら一人でも大丈夫だったはずでしょ！」

ヨシュア「騒ぎすぎ・・・・。久しぶり元気でしたか？」

クロウ「ああ、元気だ。働く場所は違うが近くにヨシュア達がいて心強いよ」

エステル「もう・・・・。支援課にいるとはアリオスさんから聞いていたからあまり驚かなかったけれど遊撃士辞めちゃったの？」

クロウ「辞めた訳じゃなくて一時休業、疲れた」

ゴキゴキと体中の骨を鳴らしアピール。

ヨシュア「変わっていないので安心しました。そういえばどうしてここに？」

エステル「あたしたちみたいに手配魔獣を倒しに来たとか」

ロイド「いや、そういうわけじゃないんだけれど」

エリィ「警察の任務でこの先にある病院に向かう途中だったの。そこで丁度この騒ぎに出くわしてしまって」

ヨシュア「この先にある病院、確か“ウルスラ医科大学”でしたね」

エステル「へえ～、そんな場所があるんだ。じゃあこの場はあたしたちが引き受けるわよ。用事があるなら先に行っちゃったら？」

クロウ「助かる。よろしく～」

ロイド「エステルさんにヨシュア君だっけ」

エステル「あ、呼び捨てで良いよ」

ヨシュア「お近づきの印にってことで」

ロイド「それじゃあエステル、ヨシュア。導力バスの事はお願いするよ」

ヨシュア「ああ、また今度・・・・」

閑話～その後～

エステル「そういえば『特務支援課』だったっけ？遊撃士と、似たような事をする部署って聞いたんだけれども」

ロイド「うっ」

エリィ「そ、それは・・・・」

ティオ「まあ、あながち間違いではありませんね」

クロウ「パクリって言うふうに思えるかもな～」

エステル「そっか～・・・・へへ、何だか嬉しいな」

ランディ「嬉しいって。そりゃあまたどうして？」

エステル「だって、似たような志で仕事してくれるんでしょ？それって要するにお仲間みたいなもんじゃない。えへへ、今後ともよろしくね」

ランディ【こりゃまた・・・・】

ティオ【お人好しはロイドさん以上ですね】

エリィ【何だか眩しいぐらいね】

ロイド「ははっ、ああ。こちらこそよろしく頼むよ」

クロウ「さすが“太陽の娘”だ。ヨシュア、エステルは変わっていないな？」

ヨシュア「そうですね。これに僕も助けられましたから・・・・」

クロウ「もう一人で消えるなんてことはしないようにな。エステルが一番悲しむだろうし俺も親友としていなくなったら悲しいからな」

ヨシュア「はい、心に刻んでおきます。ところでちょっと話良いですか？」

クロウ「どうした？」

ヨシュア「3カ月ぐらい前ですが僕たちと闘った事ありませんか？」

クロウ「ん？真剣勝負でってことか。クローゼにも聞かれたけれど・・・・どこでだ？」

ヨシュア「詳細は省きますがとある事件に巻き込まれた時に、黒騎士と言うのと闘ったのですがその横に対となる白騎士がいましてそれがクロウの闘い方にそっくりだったんです」

クロウ「ふむ、今のところ分からないな。誰かが模倣していたのかもしれないし」

ヨシュア「そうですね。でも凄くそっくりだったんです」

クロウ「わかった。今度また話そう。一緒に酒でも飲みながら・・・」

ヨシュア「ええ、そうですね。では気を付けてください。クロウには必要ない気遣いかもしれませんが・・・・」

クロウ「その気持ちだけで嬉しいよ。そっちも体に気をつけてな」

閑話～その後～（後書き）

外伝に対する伏線です。書くか書かないか微妙です

閑話～道中での会話～（前書き）

オリジナル会話

閑話～道中での会話～

エステルたちと別れた後、病院への道を歩いていたときの事だ。

ロイド「クロウってエステルたちの遊撃士仲間だったりするのか？」

クロウ「ああ、そうだよ。リベールでは一緒に活動したものだよ」

ランディ「かなりの使い手とみたがどのくらい強いんだ？」

クロウ「んーっ、大まかに言うとエステルの親が凄い強くてね。その影響を受けているのかもしれない」

エリィ「誰ですか？」

クロウ「名前を聞いた事があると思うがエステルはエステル・ブライトっていうと自己紹介の時に聞いたと思うが、あのカシウスを父に持つ子だ」

ティオ「驚きです。大きな事件を何度も解決へと導いた人物ですよね？」

クロウ「そうだ。【そしてティオの事件の総指揮者がカシウスだ】」

ティオ「っ、そうだったんですか・・・・」

ランディ「小さな声で聞こえなかったが・・・・何か言ったのか？」

クロウ「いや、そこは聞き流してくれ」

ランディ「分かった・・・・【色々と事情がありそうだ】」

エリィ「もう一人のヨシュアのほうはどんな人物なの？」

クロウ「ああ、詳しくは省くがカシウスがヨシュアの小さい時に養子に貰った子と聞いている。だから名前はヨシュア・ブライトだ」

ランディ「それだけじゃなさそうだが、これも聞かない方が良いのか？」

クロウ「そうしてもらえると助かる。こればっかりは本人の口から聞いた方がいいかもしれないな」

ティオ「遊撃士時代のこと教えて・・・・？」

クロウ「んっ？俺の事か・・・・」

ティオ「うん」

クロウ「そうさな・・・・。あいつらと初めて会ったのはエステルたちが正遊撃士の前の段階、準遊撃士の時だった。幾つもの事件を解決していって楽しかった事や悲しい事、辛い事を乗り越えてとうとう正遊撃士になったエステルたちがいる」

ティオ「クロウのことを教えてほしかったんだけれども・・・・」

クロウ「気持ちの整理が出来てからならいくらでも教えるよ。それでいい？」

ティオ「うん、分かった。待ってる」

クロウ「そうこうしているうちに、見えてきたぜ。ウルスラ医科大学が・・・・！」

ランディ「おおっ、ここにナース服の美人なお姉さんがいるんだな。ロイド、早く行こうぜ」

ロイド「おっおい、それがメインじゃないだろー」

エリィ「まったく、男って言うのは誰も同じなのかしら・・・・？」

クロウ「どうしてこっちを見る？俺にはいるから浮ついた気持ちは持っていないさ！」

エリィ「えっ、そうなの？硬派なのね」

クロウ「ああ、鈍感なのはロイドっぽいけれどもな。エリィも気をつけないとガブってやられちゃうぜ～」

エリィ「そ、そんなことはないわよ。【たぶん・・・・・】」

医科大学に着いた支援課メンバー。どのような調査が待っているのだろうか・・・・。

閑話～道中での会話～（後書き）

ガイとセシルは婚約者、これは原作どおりです。
これにクロウを付け足します。ガイとセシル、クロウは飲み仲間で親友という設定にしたいと思います。時期はガイとクロウがティオを元気づけようとした時期です。
そしてティオの事をセシルは知りません。初対面です

第３８話～ぐらまーなお姉さん～（前書き）

もう一人のグラマーボデイを持つ人物登場です

第３８話～ぐらまーなお姉さん～

自然に恵まれた空間にそびえ立つのは医科大学。

ランディ「ここが医科大学か。へえ、なかなか立派な施設だな」

ティオ「聖ウルスラ医科大学。大陸有数の総合病院にして医療研究機関として有名ですね」

ロイド「そんなに有名だったのか。確かにバスの本数が多いあたり利用者はかなり多そうだけど」

エリィ「元々は医療先進国であるレミフェリア公国の協力で設立されたと聞いているわね。周辺諸国から重病人を受け入れているって聞くわ」

ランディ「おっと、ナース服のお姉ちゃんたちがいるじゃん！いやあー眼福、眼福♪」

クロウ「ランディは元気だな・・・・」

ティオ「・・・・」

少し辛そうに顔を歪める。

ロイド「ティオ？大丈夫か・・・・」

ティオ「問題ありません。それよりも知り合いの看護師に会わな

くて良いんですか？」

ランディ「そうか、それもあったな。ロイド！早く行こうぜ」

ロイド「なんでランディがテンションを上げるんだよ」

かなり呆れ気味にランディに呟く。

ロイド「まあ、いいか。セシル姉だったら話もしやすいだろうし、受付で呼び出してもらおう」

クロウ「いよいよ・・・か。勝手に消えた事とか追及されそうで怖いわ。オーラが般若に見えるかもしれない・・・」

病院の正面玄関を通り、受付にロイドが話しかける。

受付嬢セラ「ようこそ、ウルスラ病院へ。今日は外来ですか？それともお見舞いですか？」

ロイド「あ。いえ。クロスベル警察、特務支援課のロイド・バニングスと言います。今日は捜査任務の為こちらに伺わせていただきました」

受付嬢セラ「あっ、警察の方だったんですね。捜査と言いますとやはり魔獣騒ぎの事でしょうか？」

ロイド「ええ、自分たちのほうでも調べるようにと警備隊から要請がありまして、関係者に一通り話を聞かせていただければと」

受付嬢セラ「ふふ、そうですね。病院長は留守ですし、看護師長

をお呼びしましょうか」

ロイド「そ、その実はですね。個人的な知り合いがここに勤めていましてその人がお忙しくなければ、案内してもらえればと思いまして・・・・」

ティオ【何だか緊張していますね】

ランディ【そりゃあ、ナース服のお姉さんで美人とくれば緊張するだろ！】

エリィ【それは貴方だけでしょう・・・・】

クロウ【ところがどっこい。美人さんだぜ～】

ランディ【マジですか？期待しても良いんですかっ！】

クロウ【おう、期待して待っとけ】

グッと親指を突き出して身振りする。

女性の声「ロイド・・・・？」

受付の横にある階段から降りてきた看護師がいる。それもかなりの美人だ。

看護師「・・・・」

ロイド「あっ」

ランディ「おおっ・・・・」

エリィ「綺麗な人」

ティオ「ぐらまーです・・・・」

クロウ「変わってないな【イカンイカン。俺はクローゼ一筋だってば！】」

受付嬢セラ「あら、セシルさん。こちらは警察の方たちで・・・・」

ロイドが一歩近づき看護師の女性に挨拶する。

ロイド「えっと、いきなりでゴメン。来る前に連絡を入れれば良かったかな」

看護師「・・・・っ・・・・」

ガバっとロイドに抱きつく。豊満な胸がロイドに埋まる。

ロイド「ちょ、セシル姉？」

セシル「やっと、やっと会えたわね。お帰りなさい。本当に久しぶりね、ロイド」

ロイド「う、うん。会いに行けなくてゴメン。しばらくずっと忙しくてさ。そ、それよりさすがに少し恥ずかしすぎるんですけれど」

セシル「いいからこのままお姉ちゃんに抱きしめられていなさい。

ふふっ、背もこんなに高くなって前に別れた時は同じぐらいだったのにね」

ロイド「そ、そりゃあ。育ち盛りの3年間だったし・・・・」

受付嬢セラ「あ、あの～」

エリィ【なんていうか・・・・】

ティオ【想像以上に甘々ですね・・・・】

ランディ【おのれ、ロイド！あんな素敵なお姉さんと・・・・！】

クロウ【はいはい、ランディはちょっと静かにしておこうね。せっかくの再会なんだからさ】

再会を喜ぶ二人を引き離した後、場所を変えて来た理由を話すのであった。

第３９話～暴走癖～（前書き）

セシルもいいと思う自分がいる・・・・。

第３９話～暴走癖～

セシル「初めまして。セシル・ノイエスと言います。ふふ、どちらかと思ったけどロイドの同僚さんだったのね」

エリィ「は、はい。エリィ・マクダエルです」

ティオ「どうも・・・・ティオ・プラトーです」

ランディ「ランディ・オルランドっす！お見知りおきを！」

クロウ「・・・・」

セシル「よろしくね。と・こ・ろ・で貴方はどうしてここにいるのかしら・・・・？」

クロウ「ロイドと同じ職場で働いているんだよ。偶然にも、ね」

セシル「音信不通なのはいただけないけれど、無事に元気な姿見れただけでも良かったわ。はあそれにしても、私って本当に慌てんぼうね。てっきりロイドが彼女を連れて遊びに来たのかと思っちゃったわ」

ロイド「ちょ、何を言い出すのさ？」

セシル「だって、３年ぶりでしょう？彼女の１人や２人は作ってお姉ちゃんに紹介してくれるのかな～って。・・・・はっ、ひょっとして本当に付き合っているけど仕事だから隠しているとか・・・・

ご、ごめんなさい。悪いことしちゃったわね？」

ロイド「あのね～」

セシル「それで、どっちと付き合っているの？エリィさん？ティオちゃん？それとも2人いっぺんにとか・・・・」

ロイド「だから違うって！」

セシル「はっ、もしかしてそこの彼と。ううん、私もそういうのには理解ある姉でありたいから全力で応援させてもらうわっ！」

ロイド「いや、そこは反対するところだから！」

クロウ「暴走するところは変わっていないんだな～」

エリィ「あれは昔からなの？」

クロウ「ああ、変わってない。あの時も・・・・」

セシル「コホン！クロウ～何を言おうとしたのかな？」

さっきは見えなかった般若が見え隠れしている。

クロウ「なんでもないです。ただ昔話にちょっと花を添えようとしただけです！」

セシル「それならいいのよ。それで魔獣騒ぎについて来たんだったわね？」

ロイド「あ、うん。詳しい話を聞きたいんだけれども被害者から話を聞ける？」

セシル「ちょうど休憩時間だから案内するわよ」

セシルに連れられて被害者の病室まで、案内してくれることになった。

第４０話～調査・前編～（前書き）

説明風なのは申し訳ないです

第４０話～調査・前編～

～被害者の病室～

医師「ふむ、経過は良好のようだね。うん、これなら明日にでも退院できそうだ」

研修医の青年「ほ、ほんとですか？」

医師「うん、嘘は言わないよ。ふふ、退院したら覚悟するといい。君にやってもらう仕事は山ほど用意してあるからね」

研修医の青年「！ちょ、ヨアヒム先生？病み上がりの人間にそんな殺生な・・・・」

医師「裂傷と打撲と捻挫ぐらいで情けない事言いなさんな。逆にしこたま休んで体力が有り余っているだろう？うんうん、これまで以上にバリバリと働けるだろうさ」

研修医の青年「先生ってよくＳって言われませんか？」

医師「うーん、僕としてはＭだと思うんだがね」

病室の扉が開きセシルらが入ってくる。

セシルの声「もう、二人とも何の話をしているんですか？」

医師「おや・・・・」

研修医の青年「あっ、セシルさん」

セシル「お2人とも、他の患者さんがいるので変な話をしてはだめですよ」

クロウ「それ以前にセシルも暴走していたような気がするが・・・・」

セシル「なにかおっしゃいましたか？」

クロウ「いいえ、何も！」

エリィ「クスクス・・・・」

医師「おや、そちらの方たちは？」

セシル「クロスベル警察の方たちです。魔獣騒ぎについて、リットンさんから直接お話しを聞きたいそうです」

医師「なるほど、そういうことか。となると僕はここらで退散したほうがよさそうだな。他の病室を回診してくるよ」

セシル「お疲れ様です。サボったら駄目ですよ。水辺で釣りとか・・・・」

医師「ギクッ。いやいや、滅相もない。それじゃあ失礼・・・・」

人のよさそうな医師がそう言ってロイドたちの横を通り抜けて病室を後にする。

ロイド「えっと、今の人は？」

セシル「ヨアヒム先生と言って准教授をされているかたよ。とても優秀な先生なのだけれど少し趣味人すぎるというか・・・。それでリットンさん、お時間を頂いても大丈夫ですか？」

研修医リットン「ええ、それは構わないけど。でもどうしてクロスベル警察の人が？警備隊が調べていたんじゃないの？」

ロイド「それが警備隊のほうでも手詰まりになったらしくて、自分たちも捜査協力することになったんです」

リットン「そうなのか。うーん、やっぱり僕が夢を見たと思われているのかな。それとも夢遊病？いやいや、そんなわけが」

エリィ「その、出来れば改めて詳しく聞かせて頂きませんか？」

リットン「あれは研修レポートを書きあげた深夜の事だった。その研修レポートと言うのが気難しいことで知られている教授の指導研修のものでさ、もう全神経を集中する勢いで徹夜で書いたもんだから正直、意識は朦朧としていた。意識は朦朧としているんだが気分はハイになっているというかそんな状況で夜風に当たっていると・・・あの声が聞こえてきたんだ」

クロウ「声・・・？」

リットン「記憶があるのはそこまでなんだ・・・。翌朝、用務員のおじさんがズタボロになって気絶した僕を発見してくれて、それで緊急入院して今に至ると言うわけさ」

ロイド「なるほど状況は把握しました」

ランディ「襲ってきた魔獣の姿ははっきりとは見ていないのか？」

リットン「いや、恥ずかしながらショックで気絶したらしく真っ赤に光る目と、白い牙、それと黒っぽい毛並みぐらいしか覚えてないんだ。ただ警備隊も確認していたけど狼っぽいと言われればそうかもしれない」

エリィ「その、傷のほうはどうだったんですか？」

リットン「右肩の所に牙で噛まれたような傷はあった。逆にそれ以外の傷は打撲とか捻挫ぐらいでね。多分噛みつかれた後にそのまま床に引き倒されたと思うけど・・・・」

クロウ「なぜかそれ以上魔獣はリットンさんを襲わなかった。つまりそういうことだね？」

リットン「そうなんだよ。普通なら食い千切られてもおかしくないのに。おまけに場所が屋上だろ。警備隊の人にも胡散臭い目で見られちゃって・・・・。しまいには夜中にフラフラ街道に出てそこで襲われたんじゃないかって疑われる始末で」

ティオ「でもあなたが倒れていたのは病院の屋上ですよね？」

リットン「襲われたショックでパニックになったとか・・・・」

ロイド「それは無理があるような」

リットン「でも自分の記憶が曖昧って思っていた方が気が楽って

言うか。というか本当に病院の屋上に魔獣が出たのならその方が怖くないか？」

ロイド「ご協力ありがとうございました。こちらでも襲われた現場を調査してみます」

リットン「ああ、よろしく頼むよ。原因が分かって対策をとれるならそれに越した事は無いからね」

病室を出て屋上の襲われたところまでセシルが案内してくれることになった。

第４１話～調査・後編～（前書き）

投稿できるときに纏めて投稿します。

第４１話～調査・後編～

～屋上～

ロイド「話を聞いた限りだと、この辺が現場になるのかな？」

セシル「ええ、リットンさんはそこのベンチ前で発見されたわ」

ロイド「セシル姉、案内ありがとう。何か分かるまで一通り調べてみるよ」

セシル「うん、わかったわ。それじゃあみんな、調査のほう頑張ってね」

ティオ「ありがとうございます」

ランディ「どうか朗報期待してくださいッス！」

セシル「クロウとはまたあとで話したいわね」

去り際小声で話しかけてくる。

クロウ「機会があればいつでもいいよ・・・・」

多分自分が居なくなったときの事でも尋ねられるんだろうなと思いつつ返事をする。

ロイド「とりあえず屋上を重点的に調べてみよう。狼型魔獣が現

れたという前提で侵入ポイントを何とか突きとめてみたい！」

クロウ「了解！」

調査の結果から言おう。高さがネックな場所。飛行型魔獣なら説明が付く高い場所を除外して行って何とか侵入したであろうポイントを発見する事が出来た。でも、そこでも不思議なことがあった。それは侵入したと思われるポイントにほこりがかかっていて、足跡を発見する事が出来なかったのだ。

それでも一通りの調査を終えたのでナースステーションに報告しに行くことにした。セシルを探していたロイドたちに看護婦長は3階にある病室に行くように勧めるので行くことにした。そこにいたのは・・・・。

コンコン・・・・。

ロイド「入っても良い？」

セシル「どうぞ」

ロイド「師長さんからここにいるって聞いてさ。そのお邪魔だったかな？」

セシル「フフ、大丈夫よ。シズクちゃん、この兄さんたちが今、話していた人たちよ。クロスベル警察に勤めている正義のお巡りさんなの」

ロイド「せ、正義のって・・・・」

エリィ「さすがにそれは過大評価だと思いますが」

少女「クスクス。えっと、そのお仕事お疲れ様です。私はシズク、シズク・マクレインと言います」

ロイド「はは、ありがとう。ってあれ？」

エリィ「どこかで聞いたような・・・・」

ランディ「マクレインって？」

セシル「ひょっとしたら面識があるかもしれないわね。シズクちゃんのお父さんはアリオスっていうんだけれど」

ロイド「ええっ！」

ティオ「“風の剣聖”」

ランディ「あのオッサン、娘がいたのかよ」

シズク「えっと、みなさんはお父さんの知り合いですか？」

ロイド「知り合いと言うか前に危ないところを助けてもらったんだよ」

シズク「そうだったんですか。うちのお父さん無愛想だからみなさん気を悪くしたりしていませんか？」

ロイド「そ、そんなとんでもない！こんな凄い人がいるんだなって身が引き締まったって言うか」

エリィ「厳しいけれど思いやりがあって頼りになりそうな方だったわ。素敵なお父様ね」

シズク「えへへ、ありがとうございます」

セシル「シズクちゃんはお父さんっ子だものね。そのくせお父さんが訪ねても、遠慮してあんまり甘えないし“お父さん大好き”って言って抱きついちゃえばいいのに」

シズク「セ、セシルさんったらぁ・・・・」

ランディ【あの凄腕のオッサンが娘に甘えられている構図か】

ティオ【少し想像しにくいですね・・・・】

クロウ「アリオスのことだからガチガチに緊張しそうだけれど・・・」

シズク「あなたはお父さんの事知っているみたいですけれど、どなたですか？」

クロウ「クロウっていうんだけれど、ひょっとしてアリオスから何か聞いていたりする？」

シズク「はい、『どうして遊撃士辞めたんだ』って愚痴をこぼしていました。“彼”がいればクロスベル支部も安泰なのにってこぼしていたので凄く印象に残っていました」

クロウ「そっか。アリオスには俺のほうから理由言っておくよ」

セシル「それで例の件なんだけれど実はここにいるシズクちゃんが何か気付いた事があるらしくて」

ロイド「気付いた事？」

シズク「えっと、リットンさんが襲われた夜の事なんですけど、私眠れなかったから点字の本を読んでいてその時、悲鳴のような声が聞こえてきたんです」

ロイド「悲鳴・・・・？」

エリィ「それでどうしたの？」

シズク「その少し気になったので、その窓を開けて耳を澄ませたんですけどそれ以上悲鳴は聞こえなくてそのかわりハッハッハッっていう息づかいみたいな音が聞こえて、しばらくしたらタンタンって何かはねるような音が聞こえて来てえっと、それで終わりです」

ロイド「そっか、その事は警備隊の人には？」

シズク「その私、ずっと夢を見ていたのかと思って・・・・。さっきセシルさんから話を聞いて初めてその事だって気付いて。ご、ごめんなさい。もっと早くに言っていれば」

クロウ「大丈夫だよ」

エリィ「言ってくれてありがとう」

ティオ「しかし屋上での調査を裏付ける決定的な証拠ですね」

ランディ「ああ、最初の悲鳴ってのがあの研修医が気絶した時の音。そして狼型魔獣の息づかいとあの木箱とやらに飛び乗って逃げて行った時の音みたいだな」

シズク「そ、それと。私の空耳かもしれないですが、さっきの音が聞こえている最中に何か、キーンってかすれた音がしたような気がしたんです」

ティオ「キーンとかすれたような音」

ランディ「ふむ、魔獣特有の独自の鳴き声か何かか？」

クロウ「・・・・・」

エリィ「その音はあの晩だけなのね？」

シズク「はい。あ、あのやっぱり私の空耳の可能性があるかも・・・」

ロイド「いや、貴重な証言をありがとう。セシル姉、色々と分かった事があるから報告させてもらうよ」

セシル「うん、わかったわ。それじゃあシズクちゃん。また夕食の時にね」

シズク「はい、お仕事頑張ってください。ロイドさんたちも調査、頑張ってくださいね」

ロイド「うん、ありがとう」

クロウ「また来るよ」

～廊下～

ロイド「セシル姉。その、彼女は・・・・？」

セシル「うん。数年前の事故で目の光をね。でもまったく希望がないわけじゃないの」

クロウ【あれか・・・・】

ロイド「そうだったのか」

セシル「でも健気な子でね。お父さん忙しい人だから滅多に会えずに寂しいでしょうにわざと明るく振る舞ってあなたたちも良かったら仲良くしてあげてね？」

クロウ「歓んで！」

エリィ「そうね、とっても良い子みたいですし」

ランディ「俺の素敵トークであの子を笑顔にしてやりますよっ！」

セシル「ありがとう。さてと、何か分かったんでしょ。改めて聞かせてもらうわ」

屋外の一時的資材保管場所から侵入した事を伝えると、防護用の柵が病院にあったのでそれを並べ緊急に対策を取る事が出来た。気が付くともう夕方・・・・。

～正面玄関～

セシル「お疲れさまでした。これでみんなも安心できるわ。本当にあなた達のおかげね」

ランディ「いや～そんな♪」

ロイド「あまりたいしたことはしていないよ。魔獣が入り込んだことを証明しただけだからね」

セシル「でもそのおかげできちんとした対策を取る事が出来たわ。あなたたちだったらいずれ、アリオスさんにも負けないくらいいい仕事をすることができると思うわ。お姉ちゃんが保証してあげる？」

ランディ「か、感激ッス！」

エリィ「ありがとうございます。とても励みになります」

ティオ「頑張ります・・・・」

セシル「ふふ、ロイド。お互い休みが取れたら改めてゆっくり会いましょう？お墓参りも一緒に行きたいしね」

ロイド「うん、そうだね」

セシル「あとは、エリィちゃんかティオちゃんのどちらかと付き合う事になったら報告してね。目いっぱいお祝いしちゃうから！」

ロイド「どうしてそうなるの？」

セシル「それじゃあ私はこの辺で。皆も気をつけて帰ってね。あとクロウとは早めに会いたいわ」

クロウ「りょ、了解です」

ロイド「それじゃあ、またねセシル姉」

帰りは復旧したバスに乗ってゆったりとした気分でクロスベル市に帰るのであった。その様子を一匹の白い毛並みの狼が見ていた事に気が付かず・・・・。

第４１話～調査・後編～（後書き）

シズクが光を失う原因になった事件についてクロウは知っています。

第４２話～新展開～（前書き）

説明口調で申し訳ありません

第４２話～新展開～

ロイドは朝目覚めるとセルゲイ課長からの端末通信により客人が来ている事を知らされた。そこにいたのは予想通りソーニャ副司令と護衛の女性隊員だった。事情が変わったらしくそれを伝えに来たみたいだ。

状況が変わったのはロクに仕事をせず接待ばかりやっている自称警備隊司令のせいだった。三週間経っても魔獣の正体が判明しないことと、広範囲であるにもかかわらず被害がそれほど深刻でない事があげられた。ついに副司令の護衛をしている女性隊員の正体が明らかになった。

ノエル・シーカーと言う女性隊員の中で期待のホープとされている人物だった。そして警察本部の受付をしているフランの姉でもある。ここからは当事者たちの会話に耳を傾けてみよう。場面は支援課の調査結果に副司令が目を通すところから始まる。

ソーニャ「・・・・」

課長「ふむ、なるほどな。どうだ、ソーニャ。うちの小憎どもの手際は？」

ソーニャ「期待以上ね。『神狼』の言い伝えに病院屋上に現れたルート。どうかしらノエル？」

ノエル「正直驚きました。やはり本職の捜査官は目のつけどころ

が違いますね」

ソーニャ「目の付け所と言うか発想法の違いでしょうね・・・・。うん、決めたわ。あなた達には引き続き鉱山町方面の調査をお願いします。この調子だと思いも寄らぬ新事実が見えてくるかもしれない」

ロイド「こちらはそのつもりでしたが・・・・」

ランディ「例の司令殿の命令を無視することにならないッスか？」

ソーニャ「貴方達への要請まで取り下げろとは言われなかったもの。魔獣の手掛かりが判明次第、直ぐに行動に移れるようにする、それなら問題ないでしょう？」

クロウ「へえ、やり手だねぇ～」

ノエル「どうも魔獣たちに私たちの動きが読まれているみたいなんです。大人数で行動するよりも少人数で行動する方が良いかもしれません」

ロイド「なるほど、とにかくこれから鉱山町へ行くつもりです」

ソーニャ「ええ、お願いね。何か分かったらタングラム門の副司令部へ連絡してちょうだい。それじゃあセルゲイ、例の話はまた後日にでも」

課長「ああ、了解した。あんまり無理するんじゃねえぞ？」

ソーニャ「ふふ、あなたこそ。ノエル、失礼しましょう」

ノエル「それでは失礼します」ソーニャとノエルは敬礼して課長室を後にする。

ロイド「それにしても忙しそうだな」

課長「ま、無能な上司に振り回されているみたいだからな。それでいて共和国方面への警戒も怠らない。相変わらず貧乏クジをひいてるぜ」

クロウ「そうか・・・・、課長と副司令は名前で呼び合っていたけど知り合いか何か？」

ランディ「そう言えばここに推薦してくれたのも副司令だったな」

課長「ま、昔馴染みってやつだ」

煙草をポケットから取り出し火をつけ一服。

課長「そう言えば昨日は大変だったらしいな。今日は鉱山町へ行くみたいだがまた歩いて行くのか？」

ロイド「いや、昨日は色々と偶然が重なりまして・・・・」

エリィ「さすがに今日はバスで行こうと思っていますが」

課長「そうなのか？ククク、てっきり遊撃士あたりに見習っているのかと思ったぜ」

ティオ「遊撃士を見習う・・・・？」

クロウ「まずは自分の足で歩いて周辺地域に慣れるってのが習慣になってんぞ。スタミナもつくし魔獣との実戦経験も積めて土地勘も得られると良い事づくしって訳だ！」

ティオ「もしかして昨日会ったエステルさんたちも・・・・？」

課長「クク、その二人だがどうやら大した経歴の持ち主らしいぞ。なんでも去年起きたリベールの異変を解決するためにかなりの貢献したらしいって話だ」

ロイド「リベールの異変って！」

ティオ「王国中の導力が動かなくなったっていう・・・・」

エリィ「それが本当なら相当の実力者なのも頷けますね」

課長「このクロスベルではお前たちより新米だが、あっという間に追い抜かれて引き離されちまうかもしれないな。」

ロイド「分かりました。全力で捜査に当たります」

第４３話～二度ある事は三度・・・・～

～マインツ山道～

ティオ「！・・・・あっ」

何かに気付いたかのように立ち止まる。

ロイド「どうかした？」

エリィ「もしかしてまた何か聞こえた？」

アルモリカ村でのセンサーに反応した事を踏まえて、ティオに聞いてみた。

ティオ「はい、センサーの感度を上げます！アクセス・・・・」

アオーォォォォン・・・・。何かの遠吠えが皆にも聞こえたようだ。

ロイド「今の声は・・・・？」

ランディ「微かだけど魔獣の遠吠えだろうな」

クロウ「ティオが気付かなかったら俺たちも聞き逃しているところだった。どこらへんからか分かる？」

ティオ「やはり、山道方面らしいです。北北西に４０セルジュと

いったところです」

ロイド「北北西に４０セルジュ、ってことは山道の途中あたりになるのか・・・・」

クロウ「ってことは、今日も・・・・」

ロイド「なあ、ティオにエリィ。昨日の今日で悪いんだけれど・・・」

エリィ「ううん、気にしないで。これも巡り合わせでしょう」

ティオ「私も大丈夫です。それに今の遠吠えは何か語りかけるかのような・・・・」

ロイド「語りかけてくる？」

ティオ「何かはっきりとした意志を感じます。すみません、はっきりと言葉にできません」

ロイド「そうか、どのみち警備隊が動けば、逃げられてしまう可能性も高そうだ。僕たちだけで何とか探し出すしかなさそうだ」

エリィ「そうね、頑張りましょう」

クロウ「なんだか、遊撃士のころに戻ったみたいだ・・・・はぁ」

腰に手をやりさすりさすりとする仕草は何だか年寄りっぽくってエリィの苦笑いを誘った。

ランディ「そういえばクロウもリベールの異変に協力したんだよな？」

山道を歩いて間もない頃、唐突に話しかけてきた。

クロウ「そだよ。まあ俺は遊撃士というより助っ人みたいな立場でサポートしたぐらいだな。だから詳しい事はあの二人に聞いたらどうだ？」

ティオ「はぐらかされた気がしますが、まあ今度根掘り葉掘り聞きたいと思います」

昨日とはまた違う山道を楽しい（？）ハイキングで歩いていると目の前に絶景が広がった。

ロイド「凄いな・・・・」

エリィ「絶景ね。私たちの住むクロスベルってこんなにも美しかったのね」

ティオ「ここまで歩いた疲れが一気に吹き飛んでしまいます」

ランディ「しかし、大都会から少し離れるとこんな自然が広がっているとはなぁ。なんつーか、変な自治州だよな」

ロイドとエリィは何かを考えるように黙ってしまう。それを見たランディは・・・・。

ランディ「おっと、悪い。けなすつもりではなかったんだが」

ロイド「いや、言いたい事は判る気がする。外国の町で2年ぐらい暮らしたけどそこと比べると、確かにクロスベルはアンバランスかもしれない」

エリィ「そうね、私の留学で色々な国を回ったけれどどこも伝統と美しい自然を大事にしている国ばかりだったわ」

ティオ「でも私はクロスベルが嫌いじゃありません。良い所も悪い所も含めて惹き付けられる感じがします」

ロイド「ティオ」

エリィ「ありがとう」

二人はティオに感謝の意を示す。

クロウ「まっ、いろんな意味で刺激的な町だとは思うけどな」

ランディ「そうだな。俺たちみたいな縁もゆかりもない連中が何故か集まっちまうくらいだし」

ロイド「確かにクロスベルあっての特務支援課（オレたち）なんだよな」

エリィ「そう考えると悪い事ばかりじゃないわね！」

和む雰囲気が辺りを包んでいると・・・・・。

アオーォォォォォォン・・・・・。

ロイド「また・・・・！」

エリィ「今度ははっきりと聞こえたわね」

クロウ「どっから聞こえたか判る？」

ティオ「待って下さい。アクセス・・・・。１０セルジュ北西です。地図と照らし合わせるとちょうど山道の分岐点ですね」

ロイド「わかった。行ってみよう」

クロウ「こりゃあ、ティオが言うように何かを伝えたいんだろうか【それにしても異常だな。何が起きている？何を伝えたい？・・・よ】」

支援課と神狼が出会う時何が明らかになるのか・・・・。

第４３話～二度ある事は三度・・・・～（後書き）

ティオが“アクセス”と言っている時は魔導杖を使って探索している時です。これから明らかになりつつある事ですが、あることが原因で感応能力が人よりすぐれています。これからに期待して下さい。

あとクロウは神狼を知っています。ご都合主義だとか言わないでください。

第４４話～仔猫～（前書き）

この話を投稿した後、登場人物の？？？の所に名前を入れておきます。

第４４話～仔猫～

マインツへの山道を歩いていると、荘厳な滝が流れているバス停近くまで歩いてきた。右側には何やら坂道がある様子。

ロイド「ここが山道の分岐点か・・・・」

ランディ「狼型魔獣の姿はどこにもないな」

エリィ「また他の場所に移動したのかもしれないわ。左のほうがマインツ鉱山町方面として、あちらのほうには何があるのかしら？」

反対側を見て一言呟く。

ティオ「データベースにも該当する情報はありません」

クロウ「・・・・【ヨルグ爺さんか】」

ロイド「クロウどうかした？」

考え込んでいるのを気にしたらしく訪ねてきた。

クロウ「いいや、なんでもないぞ。気になるんだったら寄り道すればいいんじゃないか？」

ロイド「そうだな。家があるなら狼型魔獣のことを注意すればいいし・・・・」

程よく続く坂道を登りきったところにあった建物は重厚な門に囲まれた大きな建物だった。

ロイド「ここは・・・・？」

エリィ「随分、雰囲気のある建物ね。廃墟と言う感じでもないし誰かが住んでいそうだけど？」

ランディ「おっ、そこに看板があるぜ」

『ローゼンベルク工房、関係者以外の立ち入りを禁ずる』

エリィ「ああ、ここが・・・・」

ロイド「エリィ知っているのか？」

エリィ「ええ、その筋では、有名な人形工房よ。高価なアンティークドールを手がける天才人形師がいると言われているわ」

ティオ「私も名前くらいは聞いた事があります。オークションで途方もない値が付けられるとか」

エリィ「ええ、幾つか見た事があるけどまさに芸術品と言う感じだったわ」

ロイド「天才人形師か。看板の警告といい、気難しそうな雰囲気だけど話を聞かせてもらえないだろうか？」

少女の声「おじいさんなら留守よ」

クロウ【やっぱりここにいたのか、レン・・・・】

ロイド「え・・・・」

エリィ【女の子・・・・？】

ティオ【この工房の子でしょうか】

ドレスの少女「うふふ、こんにちは。お兄さんたち、だあれ？この工房に何か用かしら？」

ロイド「俺たちはクロスベル警察の人間なんだけど」

ドレスの少女「あら、警察のヒトなんだ。警察のヒトって街でしか見たこと無いけど、こんな所にも見回りに来るの？」

ロイド「見回りってわけじゃないけど、この辺にいる魔獣について聞きたいと思ったんだ」

少女「どんな魔獣なの？」

エリィ「その、狼の姿をした魔獣なの。おじいさんから話を聞いた事は無いかしら？」

少女「ううん、でもさっき遠吠えみたいなのは聞いたけれど、それのこと？」

ロイド「そうだよ。おじいさんは留守って聞いたけど、ほかに工房に誰かいないの？」

少女「ええ、そうよ。夕方には戻ってくるって聞いたけど・・・・」

ロイド「そうか、さっきも言ったようにこの辺を危険な魔獣がうろついているみたいなんだ。おじいさんが帰ってくるまでおうちの中に居てくれるかい？」

少女「別に構わないけど、お兄さんたちに着いて行くのも楽しそうね」

ロイド「へっ・・・・」

少女「だってその狼さんとオニゴッコしてるんでしょう？それとも隠れん坊かしら？」

ティオ「確かにそう見えるかもしれませんが」

ランディ「面白いお嬢ちゃんだな」

ロイド「何があるか分からないから連れて行く事は出来ないんだ。だから家で待っててくれる？」

少女「もう、つまらないわね。“彼”が直っていればタイクツなのも紛れるんだけど。仕方がないから今日はあっちに潜ってソバカス君と遊んであげようかしら。それともガラスのお城に行って遊ぼうかしら」

エリィ「ガラスのお城・・・・？」

少女「うふふ、こっちの話よ。そう言えばまだ名乗っていなかったわね。レンって呼んでちょうだい。本当はもう一人紹介したい子がいるんだけど、あいにく右足を怪我していておじいさんの治療を受けているの」

ロイド「そ、そうなのか」

レン「その狼さん、凄く頭が良いみたいね。ちょっと遊んでみたいけどレンはもう大人だからあんまりワガママは言わないわ。頑張ってね、支援課のお兄さんたち！」

ロイド「ああ、ありがとう」

レンはそのまま工房の門をくぐって中に入って行った。

ロイド「あれ？なんで支援課ってわかったんだろうか？」

疑問は尽きないようだ。

クロウ「何かで見聞きしたのかもな」

ロイド「まあ、どっちみちこちらには狼型魔獣は来ていなさそうだ。一旦分岐点まで戻ろうか」

クロウ【ヨシュアに以前会った時レンを家族にしたいって聞いていたけど今の様子を見る限り二人から逃げているって所だろうか。いつか歩み寄れる時が来るのを願っているぞ、レン】

第４４話～仔猫～（後書き）

これからの話は少し内容を省いて書く場合もありますが、重要だなと思う箇所は省かないようにしながら書きたいと思います

第４５話～ファーストコンタクト～（前書き）

神狼登場

第４５話～ファーストコンタクト～

工房を後にした五人はそのままマインツ鉱山町へと向かった。その先には綺麗な滝が流れており、吸い込まれそうな雰囲気を漂わせていた。そこを過ぎるとトンネルだ。そこでも狼の遠吠えが聞こえたためティオに探ってもらった。

ランディ「トンネル道か、かなりしっかりした造りだな。こんな山中にあるって事は七耀石（セプチウム）の運搬用か？」

ロイド「ああ、そのはずだよ。たしかクロスベルが自治州として成立した前後に建造されたんじゃないかな」

クロウ「そうすっと、おおよそ７０年前ってところか・・・・」

ティオ「クロスベルと言ったらかつては、七耀石の産地として有名だったそうですね？」

エリィ「ええ、以前はそれをめぐって帝国と共和国が争ったぐらいよ。今でも産出量は減っていないからとても重要な資源ではあるけど、採掘技術が上がったことで他国に有望な鉱脈が見つかったから昔ほど注目はされていないみたいね」

ロイド「そうだな、今のクロスベルと言ったら貿易と金融だろうし・・・・」

アオォォォォォォン・・・・。トンネルで反響しながらも遠吠えが聞こえてくる。

ロイド「またか」

クロウ「反響してるっ！」

エリィ「ティオちゃんどこかわかる？」

ティオ「はい、いきます。アクセス・・・・。分かりました。トンネルを抜けた出口の先から聞こえたようです」

ロイド「分かった、行ってみよう！」

クロウ【この時期に現れるなんてやっぱりクロスベルが可笑しくなっているのだろうか。まっ、あとで・・に聞けばいい話だし・・・・】

トンネル内を徘徊している魔獣を倒しつつも出口を目指す。とうとう明るい光が差し込みトンネルを抜ける事が出来た。

ロイド「あっ！」

エリィ「いたっ！」

山道の崖の上から白い狼が一頭こちらを見下ろしていた。そして狼は悠然と五人の前に降り立つ。それをみてロイドとランディは自分武器を構えていつでも戦闘に入れる用意をする。

エリィ「白い毛並み、『神狼』の伝承のとおりね・・・・」

ランディ「へっ、ようやく会えたな。ここで会ったが百年目、と

っとと成敗してくれる」

ティオ「待って下さい。その子、敵意を発していません」

ロイド「へっ・・・・？」

クロウ「ロイドもランディも慌てすぎ・・・・」

苦笑いを浮かべるクロウがそこにいた。

ティオ「ここは私に任せてくれませんか？」

ランディ「お、おいっ。危ないじゃないかっ！」

ティオ「大丈夫です。やっと会えましたね。私たちに会いにきてくれたみたいですが、何か伝えたい事でもあるんですか？」

白い狼「ウォゥ・・・・」

ティオ「そう、やっぱり・・・・」

エリィ「ティ、ティオちゃん？」

ロイド「行っている事が分かるのか？」

三人はティオが狼と会話しているように見えて驚いている様子だ。

ティオ「言っていることが何となくわかるという程度ですが、それで何を伝えたいの？」

白い狼「グルルルル・・・・ウルゥ、グルルルルゥ・・・・」

ティオ「えっ、それって？」

言いたい事は言った、だからもう用は無いと言わんばかりに崖を駆けのぼりあっという間に視界から居なくなった・・・・。

ロイド「ティオ、“彼”は何て言ってたんだ？確かに俺たちに何かを伝えたいみたいだったけど」

ティオ「その、ニュアンスだけを伝えると『最後の欠片はこの先に後はお前たち次第だ』だそうです。聞き取れなかった所もありますが・・・・」

ロイド「最後の欠片？」

ティオ「ええ、そのようなニュアンスでした。信じるも信じないもロイドさんたち次第ですが」

ロイド「ああ、そう言う事を言っているんじゃないって。『最後の欠片はこの先に』つまり一連の魔獣被害で不足していた最後の情報が全部揃うって意味じゃないか？」

エリィ「ちょ、ちょっと待って。ティオちゃんが聞いた言葉が本当だとしてもあの狼が言った事そのまま信じても良いの？」

ランディ「ああ、各地を襲っていた張本人だ。そんな知能があるかはともかくダマしている可能性はねぇのかよ？」

ロイド「どうやらさっきの狼は各地の魔獣被害とは別物だろう」

ランディ「おいおい、どうしてそうなるんだよ？」

ランディとエリィは狼の言ったであろう言葉を信じ切れていないようだ。まぁ普通はそうなるよね。狼が違うって言ってたなんて言ったらどこぞの病院紹介されちゃうよ。だがロイドには確信があるようだ。

クロウ「ふむ、色と外見そして、遠吠えが違うというところだろうか」

ロイド「クロウは捜査官としてやっていけるんじゃないか？」

クロウ「買い被り過ぎ。詳しい補足をよろしく！」

ロイド「村と病院では遠吠えは聞かれなかった。それに病院では黒い外見の狼にリットンが襲われている」

ランディ「なるほど～色が全然違うってわけか・・・・」

ロイド「まあだからと言ってさっきの魔獣が犯人じゃないと断言はできないけどね」

エリィ「でも本当に違うのなら考えを改める必要があるわ。狼型魔獣は2種類いてそれぞれ別々に行動しているって」

ロイド「ああそうだな。そのうちさっきの彼も含めた白い狼が伝承にある『神狼』で」

ランディ「未だ尻尾を出していない黒いヤツが各地で悪さをして

た連中ってことか」

クロウ「いずれにせよ、白い狼の言う事を聞くならばこれから行くマインツに最後の欠片があるってことだろう?」

ロイド「そういうことだね、じゃあ急ごうか」

ランディとエリィとロイドが先を急ぐ中、ティオだけがクロウのそばを離れなかった。

クロウ「ん?ティオどうしたの?」

ティオ「クロウさんにはさっき、白い狼が最後に言った言葉分かりますか?私には何のことかさっぱり分からなくて・・・・」

クロウ「・・・聞き取れたよ。でも言っていいのか迷うところだ」

ティオ「それは悪い事ですか?」

クロウ「そうだね。神狼は古(いにしえ)からこの地に棲む神の使い手として知られている。だからその地にこれから起きるであろう良い事、悪い事をその都度教えているのだけれど・・・・今伝えられた事は・・・」

顔がくしゃっと歪む。

ティオ「悪い事なんですね・・・・?」

クロウ「ああ、神狼は『大きな鐘の鳴る時虚偽なる平和が到来す

る』と伝えた」

ティオ「漠然としていますね」

クロウ「今のところでは何も分からないから心に秘めておくといい」

ティオ「わかりました。そうします」

クロウ【鐘ね・・・・。クロスベル市の中央広場に一つあったっけな。あと郊外にもあるって聞いた気がしたが、何か関係があるのだろうか・・・・。よく分からないな】

第４５話～ファーストコンタクト～（後書き）

最後の部分はちょっと書きたくなった部分です。まぁ次回作で書くかもしれません。
読んで下さる皆様に感謝を表明します。

閑話～新たなる～（前書き）

オリジナルです。クロウにも部下がいればどうなるかと思い書きました。
時間軸はマインツに向かう途中です。

閑話～新たなる～

それは一本の連絡から始まった。巻き込まれたほうはたまったもんじゃないと思うかもしれない。

クロウ「はぁ？もう一度言ってみぃ・・・・！」

盟主「だから、貴方に一人部下を預けたいって言ってるの！」

マインツに行く途中で端末に電話が入ったから、取ってみると珍しい事に身喰らう蛇の盟主からだった。どうしてこうなったんだろうか？

～回想～

ＰＰＰＰ！おっ、電話だ。

クロウ「もしもし・・・・」

女性の声「久しぶりです。元気にしておりましたか？」

ちょっと硬い感じで電話に出たのは星辰の間で話したっきりの盟主の声だった。慌てて「ブチッ」と切ってしまったのは申し訳ないが、仕方ないだろう。切ってから汗がダラダラ出てきた。案の定もう一度かかってきた。

クロウ「ロイドたちは先に行っててくれないか？」

ロイド「ああ、いいけど」

ランディ「もしかして女性からのラブコールか？」

ちゃかしたかのようなランディの返事にもあまりうまく応対できなさそうだった。

クロウ「察してくれ・・・・」

尻すぼまりになりながらも、答えた。

ティオ「・・・・」

ジト目でこちらを見られた。どうすればよかったの。

鳴りやまない端末を見て深い溜息が零れた。よしっ、覚悟を決めてっと・・・・。

クロウ「もしもし・・・・」

盟主「どうして切ったの・・・・？もしかして私のこと嫌になった？」

やっぱり声が掠れて落ち込んでいるのがわかる。

クロウ「あーっ、つい切っちゃった。ごめん、それに嫌になってわけじゃないよ。昔のままだから・・・・」

盟主「・・・・いいですけど。あのー貴方にお願いがあるんです

が聞いていただけませんか？」

すごい低姿勢でそう聞かれた。聞く前から少し嫌な感じがしていた。

クロウ「どうした？」

意を決して聞いたら、良い事ではなかった。

盟主「あなたに育ててほしい部下がいるのですが・・・・」

クロウ「・・・・はぁ？」

寝耳に水状態だった。もう一度無かったことにして電話を切ろうとまで考えた。

盟主「無かった事にするのは無しです」

先回りされた。どうして気付いたんだろ。

そして冒頭に戻る・・・・。

クロウ「もう一度言ってみぃ・・・・・！」

盟主「貴方に一人部下を預けたいんです！」

クロウ「どうして俺に預けようとした？」

ちょっと感情が高ぶるのを抑えられなくなっている。

盟主「あのー、怒ってます？理由を言っても良いですか？」

クロウ「・・・・できるだけ簡潔に頼む」

盟主「純真無垢の子に基本的な常識を教えてください！」

クロウ「別に俺じゃなくても良くねぇ・・・・？」

呆れながらもそう言うと。

盟主「常識人がいないんですっ」

涙声で言い切った。

考えてみると亡くなった人を除いて・・・・ああいないな～と思った。

クロウ「期間は？」

盟主「えっ預けても良いんですか？」

クロウ「まだ詳細を聞いていないからなんとも言えないが・・・・？」

盟主「そうですね、孤児を拾ってきて執行者候補に育てようかと思ったんですが、世の中の事を知らなさすぎるのでクロウ様にお願いしようかと思いまして・・・・。期間はそれほど長くありませんが気に入ったらそのままでも構いません」

クロウ「それで、いいのか？・・計画も進んでいるんだろ？」

盟主「そちらは大丈夫です。貴方に被害が及ばないようにしていますので・・・・」

クロウ「分かった。で、いつ迎えに行けばいい？」

盟主「今からでも『星辰の間』でお待ちしておりますのでいつでも来てくださいっ！」

クロウ「同僚に断ってからそちらに跳ぶ」

盟主「分かりました。では失礼します」

丁寧な返事を聞いてから、電話を切る。そして少し前方を行くロイドたちに追いつくために走った。

クロウ「ロイドッ！用事が出来たからマインツには一緒に行く事が出来ないんだが、それでも大丈夫だろうか？」

ロイド「ん？あー、大丈夫でしょ。でも、何が起きたかぐらいはあとで教えてほしいな」

クロウ「了解だ。さってと・・・・」

その場で手を広げ、地脈に語りかける。

ランディ「おいおい、目なんか瞑っちゃってどうかしたんだよ？」

ティオ「ありえないぐらいの霊力がクロウさんのもとに集まってきています！」

慌てたようにロイドたちに伝える。

クロウ「よしっ、準備完了！ちょっとばかし“跳ぶ”だけだから・・・転位っ」

その言葉のあとにはクロウの姿がなかった。

エリィ「ティオちゃん、クロウは何をしたの？」

あり得ない様子に、おどおどしながら聞いた。

ティオ「・・・信じられない事ですが、クロウさんは転位したものとおもわれます。あたり一帯にクロウさんはどこにも感知できません」

ロイド「そうか・・・。クロウにはまだ隠された能力があるという事か。さて気を取り直してマインツに行こうか！」

ランディ「しゃーないか、あとで聞けばいいだろうし」

ランディはいつものように飄々としている。

ティオ「はい・・・。【クロウさんは人なのでしょうか】」

閑話～新たなる～（後書き）

書いちゃった感が漂っています。『転位』についてですが碧の軌跡に出ていたのでこれもアリなのでは・・・と思い、入れました。
次回は部下と初対面。【ロイドたちはマインツで調査開始と言った所でしょうか】

閑話～部下～（前書き）

オリジナルです。

閑話～部下～

一瞬のうちに星辰の間へと跳んだクロウは、正面にカンパネルラがいる事に気付いた。

クロウ「よっ、久しぶりっ」

クロウはカンパネルラを見つけると片手をあげて気楽に挨拶。

道化師「はい、お久しぶりです」

こちらは少しかしこまった様子で挨拶を返した。

クロウ「用件は判っているな？」

回りくどい事も面倒くさいのでそのまま用件に入る。

道化師「ええ、こちらの部屋でお待ち下さい」

来賓用の部屋に通されて少しの間一人になった。

勢いで決めてしまったが、今になってどうしようか迷ってきた。

がその思考も扉のノックの音で中断されてしまった。

コンコン・・・・。　クロウ「どうぞ」

道化師「準備が出来ましたのでこちらへどうぞ。この子です・・・

・」

ロビーのように広い空間にいたのは、１４歳ぐらいの女の子だった。異質なのを別にすると普通の子だった。

クロウ「この子が預かってほしい子・・・・か？」

道化師「はい、そうです。まだ名前はありません。？３５１０というのが執行者候補の候補として呼ばれていました。クロウ様が名をつけてください。あと盟主に会って下さい」

クロウ「分かった。この子も連れて行って構わないのだろう？」

道化師「ええ、クロウ様の者になった瞬間から少しだけ上位の立場ともなりますので・・・・盟主に会う機会も出来ました」

クロウ「そうか、行くぞ」

少女「分かりました」

俺の後ろを二歩ぐらい離れた所から着いてくる。

～星辰の間～

盟主「ようこそ、そしてありがとうございます」

姿は出せないようだが、声だけ聞こえる。その声は何だか嬉しさを含ませた声だった。

クロウ「礼はいらない。俺の気まぐれでこの子を預かる訳だ。ど

のくらいの戦闘能力を有している？」

盟主「えっと、あまり教えていませんが、元執行者ヨシュアの半分ぐらいかと・・・・」

クロウ「そうか。で、教えた後は結社で働かせるのか？」

盟主「それも自由にしてください。時折、カンパネルラが見に行きますが期間などは決めていませんし、最終決定は本人次第ということでお願いします」

クロウ「本当に執行者にする気があるのか疑わしいものだが、まぁ俺も戦闘にはあまり加わらせたくないしな。こいつの自由に任せるか・・・・。あと武器は何だ？」

盟主「カンパネルラからお聞きください」

クロウ「分かった。また来るよ、●●●！」

盟主「お待ちしております」

盟主の返事はそれっきりだった。忙しいのだろうか。

～クロウにあてられた部屋～

クロウ「しかし、名前、ねぇ・・・・」

ソファーに座る少女を見ながら、名前を付けようとしても何も浮かんでこない・・・・。

クロウ「名前、何がいい？」

少女「・・・・？皆からは３５１０って呼ばれてた」

首をかしげながら答える様子は普通だ。

クロウ「当て字にするか・・・・。３をミ。５をコ。１０をト。でミコトにしよう。今日から名前をミコトとする！」

少女「ミコト？私の名前はミコト・・・・。うん、ありがとう。それであなたのことは何て言えばいいの？」

クロウ「そう言えば自己紹介してなかったな。俺はクロウだ。年齢は２０歳を少し超えたぐらい」

ミコト「じゃあ、兄様って呼んで良い？」

クロウ「うーん・・・・、まぁいいか。分かった、これからよろしくな。ミコト！」

ミコト「うんっ、兄様！」

満面の笑顔で年齢相応の表情を見せる。本当に嬉しかったのだろう。

クロウ「そういえば武器は何を使う？」

ふと思い出したように尋ねる。

ミコト「私？私のはねぇ、これだよっ！」

腰から出してクロウに見せた武器は投擲用のチャクラムだった。

チャクラム：真ん中に穴のあいた金属製の円盤の外側に刃が付けられており、投擲武器としては珍しく斬ることを目的としている。投げ方は二通りあり、円盤の中央に指をいれて回しながら投擲する方法と、円盤を指で挟み投擲する方法がある。≪ウィキ使用≫

クロウ「そっか。じゃあ一つ約束すること・・・・！」

真剣な面持ちに緊張するミコト。

ミコト「な、なに？」

クロウ「無茶はしないことと。必ず迷った時は俺に聞く事。それだけ・・・・」

ミコト「無茶しないこと・・・・、兄様に聞く事・・・・うんっ、分かった」

クロウ「よし、良い子だ。さて戻るとしよう。マインツではどんな事が起きているだろうか。ミコトにとって初のお外だしな」

ミコト「マインツ？兄様それどこぉ？」

クロウ「これから知ればいいさ！あと結社の事は誰にも言わない事だ」

ミコト「はいっ、楽しみです」

新たな登場人物を入れたこの物語はどこへ続いて行くのだろうか。
それは今の所誰にもわからない。

『ミツケテ』

『ワタシヲミツケテ』

クロウ「ん?誰か呼ばなかったか・・・・」

ミコト「誰も言っていませんよ」

クロウ「そうか。気の、せいなのか?」

ミコト「ふふっ、変な兄様・・・・」

閑話～部下～（後書き）

名前の付け方は某アニメからパｋ・・・・参考にしました。安易とか言わないでください。

オリキャラの情報

名前：ミコト≪女性≫

年齢：１４歳

由来：？３５１０という呼ばれ方からクロウが当て字で名前をつける。

身長：１４０ｃｍ

体重：書こうとしたら怒られた・・・・。

性格：クロウに対して甘えっ子。戦闘中は一心不乱に動くが、争いは好きでない。

経歴：孤児だったころに結社に拾われそこで基礎的な戦闘能力を教えられる。柔軟であり教えられた事は一を聞いて十を知る、そんな感じで手のかからない候補の候補として育てられた。しかし結社だけでは十分でないと思いクロウに養育をお願いし聞き届けられた。このたび、部下と言うより義理の妹のように育てられる・・・・はず。？予定

武器：チャクラム≪前話参照≫三枚のチャクラムを器用に扱う。増えるかも。

戦闘能力：執行者時代のヨシュアの半分ぐらい。気配を隠すのが

上手で隠密にも役立てられると育てられもした。

その他：新しい候補だったゆえに、結社の中でもあまり知られていない存在。クロウの部下として初めて世に出る。

オリキャラの情報（後書き）

一心不乱：心をひとつに集中し、他の事のために心を乱されない。
わき目もふらない。

閑話～狼事件終了？＆顔合わせ～（前書き）

辻褄合わせで申し訳ないです。

閑話～狼事件終了？&顔合わせ～

あれからミコトを連れて転位したのは良かったのだが、時間が思った以上にかかってしまっていて狼型魔獣の事件はほとんど終息に向かっていた。と言うのも、白い狼がマフィアの操った狼を威嚇で動けなくしている所に転位したわけで・・・・。

クロウ「あちゃあ～もう終わりかけ？」ミコトの手を握りながら転位した眼下には神狼が事件を終わらせていた。

ミコト「終わっちゃったね・・・・。兄様の力が見れなくて残念」ショボーンと落ち込むミコトの頭を撫でながら、崖の上に座って見物していた。

男性の声「クロウがなぜここにいる？」

少女の声「どうしてここにおにーさんが・・・・？」二人の声が近くから聞こえて来てミコトは戦闘態勢を取るがそれをクロウが静める。

クロウ「ん？アリオスにレンか・・・・。俺としては二人がここにいること自体が不思議でどうしようもないんだがね。俺は用事を済ませてここに降りたら、お二人さんがいたってことだけだ」

アリオス「いや・・・・こちらも事の結末を眺めていただけですが・・・・」

レン「レンもここにいて見ていたらアリオスが来てたまたま一緒になっただけ」少しふてくされ気味でレンが呟く。

アリオス「ところでその女の子は誰ですか?普通の子ではないですよね?」訝しむのも無理はないだろう。チャクラムを構えてクロウを守ろうとしているのだから。

クロウ「貰った?いや、預かり物。んーっ、しっくりこないなぁ。ミコト・・・・一応挨拶しておきなさい」面倒くさいんだって感じで丸投げする。

ミコト「兄様にミコトという名前を付けてもらった候補の候補です」はきはきと言葉を紡ぐミコト。

レン「っ・・・・!」言った事が分かったらしい。

アリオス「なるほど、結社・・・・ですか」アリオスも信じられないという雰囲気を出しながらも納得する。

クロウ「結社からってのは違うとは言い切れないが、育てて最終決定は本人次第だ。だから普通の子として接してやってくれ」

アリオス「・・・・今のところ大丈夫そうなので信じておきます」

レン「レンも分かった」2人とも渋々ではあるが了承したようだ。これで当面の問題は解決した。あとは、支援課のメンバーと・・・・クローゼだ、はぁ・・・・気が重いっ。

クロウ「終わったようだな。そろそろ向こうと合流するわ。じゃっ!」短距離転位してロイドたちの近くに降りる。

クロウ「よっ、お疲れ様~間に合わなくてごめん。ちゃんと訳を

話すから・・・・」

ランディ「ったくよぉー、白い狼が来なかったら危なかったとこじゃないか！」ちょいと興奮気味なランディ。気持ちは分からないでもないが・・・・。

ロイド「まぁいいさ・・・・。ところで背中にくっついている女の子は誰だい？」

クロウ「あとで説明するさ・・・・」

～一夜が明けて～

ノエル「みなさん凄いです！まさか事件の真相を見抜いてそのまま解決するなんて！」

ソーニャ「ええ、正直驚かされたわ。出来れば大立ち回りする前に私たちを呼んでほしかったけど」

ロイド「その、すみません。警備隊の司令のほうからマフィアに情報が流れる可能性をつい考えてしまって・・・・」

ソーニャ「ふう、それを言われると辛いわね。でもあなた達、その白い狼に助けられなかったらどうしたの？」

ロイド「それは・・・・」

ランディ「正直危なかったッスね」

ソーニャ「そういうときはセルゲイに相談して私に直接話が行く

ようにするとか、色々やり方はあったでしょう。確かにクロスベルの現状には色々と難しい問題があるけど、それでも自分たちだけで解決しようとするのはただの思い上がりにすぎないわ」

ミコト【兄様、兄様！あの人怖いねー】小声で呟く・・・・。

クロウ【ソーニャ副司令の言う事も分かるからミコトにもそのうち分かるようになるよ】

エリィ「返す言葉もありません」

ソーニャ「まぁ、小言はこれぐらいにしましょう。本当によく無事でいてくれたわ。それと私たちの代わりに事件を解決してくれて感謝します」

ロイド「副司令・・・・」

ランディ「ハハ、改めて言われると何だかムズ痒いッスね」

ソーニャ「これからも支援課（あなたたち）の働きに期待しているわね。さあクロスベル市までうちの車両で送って行くわ。ノエル、出発の準備を！」

ノエル「イエス・マム！」

～クロスベル市内～

エリィ「さすがに眠いわね」

ティオ「もう限界です・・・・」

ランディ「何やかんやで、ほとんど完徹に近いからなぁ」

ロイド「とにかく帰ったら、ひと眠りしよう。課長への報告はそれからだ。それとクロウと一緒にいる子についても説明してもらうからな！」ちょっと最後のほうだけ言い方が強く感じたのは気のせいと思いたい。

クロウ「へいへい、俺も眠いんだけどなぁ・・・・【んっ！この雰囲気は神狼？】」

ミコト「兄様大丈夫？【あの古いビルの方角から清らかな風を感じるのですが】」

～支援課ビル前～

エリィ「あら？」

課長「よー、お疲れさん」煙草をプカプカ浮かばせる課長が外にいた。

ロイド「課長、どうしたんですか？」

ランディ「まさか、オレたちを出迎えてくれたとか・・・・？」

課長「ハッ、そんな気色悪い事をするかって。ただまあ、事件の結末はソーニャからの通信で聞いたぜ。初めての市外活動にしちゃあそこそこ頑張ったほうじゃねえか？」

ロイド「ど、どうも。【褒めているんだよな？】」

エリィ「それで課長は一体何を？」

ティオ「朝食後の一服にしては変な場所にいますね・・・・？」

課長「いや、無理だろ。あんなのがいきなり訪ねて来たら、さすがに落ち着いて一服できねぇよ」

ランディ「誰か訪ねて来てるんスか？」

課長「知らねえが、お前らの客じゃねえのか？妙に馴れ馴れしいというかふてぶてしい態度だったけどよぉ」

エリィ「中に入ってみましょう」

クロウとミコトを除く四人は中に入って行く。

課長「お前は入らないのか？」

クロウ「ええ、感じた気配で分かります。それより許可を下さい」

課長「・・・・その子か？普通とは違う子だってのは分かるが」

クロウ「ええ、預かって来たんですが義理の妹として世話したいんです」

課長「犬や猫じゃないんだからちゃんと最後まで世話するんだったら許可するぜ」

クロウ「そのつもりです。ミコト。この人がこの建物の責任者の

セルゲイさんだよ。挨拶は？」

ミコト「兄様から紹介されたミコトと言います。よろしくお願いします」クロウの背中に隠れるようにしていたミコトだったが、大丈夫そうなのを見てキチンと挨拶をした。これで課長の許可は取った。

中に入ると想定していた通り神狼が玄関に佇んでいた。ロイドたちは驚いてこれから仲間になるものの存在を眺めていたが、クロウは予想していたので神狼に“これからよろしく”と一言かけた。

ロイド「それで、クロウ？その子の事はどう説明するつもり？」

エリィ「あらっ、可愛い子ね。名前は？」

ミコト「・・・ミコトです」サッとクロウに隠れる。

クロウ「課長にはもう言ったんだが、妹のような存在だ。どう説明して良いもんだか、知人から世話を頼まれたから養育することに決めた。ただそれだけ！」説明短っ。

ロイド「ツァイト≪神狼≫が増えたばかりだというのに・・・何かあってもクロウが責任を取るんですよね！」

クロウ「そのつもりだ」揺るぎ無いクロウの様子にロイドも渋々頷いた。

エリィ「よかったわね？ミコトちゃん・・・・」

ミコト「・・・・ん」

クロウ「ほら、ミコト？挨拶をするんだよ！」優しく手で隠れていたミコトを前に出して四人＋一匹の前で挨拶させる。

ミコト「ミコトと言います。１４歳です。よろしくお願いします」

その挨拶をきっかけに次々にロイドたちから挨拶が返ってくる。

クロウはそのままビルの外に出て、一息ついた。

クロウ「やれやれ。ロイドも頭、堅いんだから・・・・。あとはクローゼか。秘密にはできそうにないし。まぁ聞かれたら答えよう。うん、それがいい」

中から俺を探すミコトの声がする。行ってあげなくては・・・・。

閑話～狼事件終了？&顔合わせ～（後書き）

≪神狼たちの午後≫終了です。
これからも力の限り頑張りますので応援よろしくお願いします

閑話～もう一人の難関～（前書き）

クローゼに会いに行く前の段階です。オリジナルだとよく手が動きます。
そしてこの話を書きながらニコ動であがってる【碧の軌跡】のＢＧＭ聞いていました。燃えた！！

閑話～もう一人の難関～

やっぱり、秘密はよくないよねっ！うん。って自分で完結しているけど私クロウはミコトの事をクローゼに言うか言わないかをすごく迷っていた。が、悲しませるような事をしたくないと心に決めていたので休暇を取って会いに行くことにした。

～課長室～

コンコン・・・・。

課長「おう、開いてるから入って来い」

クロウ「失礼するよ。ちょっと休暇願いを出したくて来たんだけれど・・・・」

課長「お前が休暇願を出すなんて珍しいな。何かあったのか？」

クロウ「恥ずかしい話、ミコトの事についてもう一人、話しておかないといけない人がいて遅くならないうちに伝えようと思ったんだが、その・・・・」

課長「ん？どうした」

クロウ「ああ、リベールまで戻らないといけなくて日帰りではいけないと思うから」

課長「そうか、分かった。お前も大変だな。許可しよう。だがロ

イドたちに一言かけて行くといい。これから行くのか？」

クロウ「ロイドたちにも苦労かけそうだし、これから・・・・行くよ。それじゃあ」

少し落ち込み気味に課長室の扉に手をかけて、ロイドたちがいるであろう場所に出て行く。

エリィ「どうかしたの？課長と話し込むなんて珍しいじゃない・・・」

クロウに気付いたエリィが話しかけてくる。

ミコトには部屋で待っているように言ってあるからここにはいなかったが、それ以外の同僚はいたので良い機会だし休暇について話しておこうと思った。

クロウ「ああ、休暇を取った。理由はリベールに一時帰宅するためだ」

ランディ「いきなりだな」

ロイド「何かあったのか？・・・・ミコト絡みか？」

クロウ「話が早くて助かる。その・・・・引き取った事を言わなきゃならない大切な人が最後に残っていてね、有耶無耶にするよりは早く伝えようと思ってね」

ティオ「大切な人・・・・ですか？あやしさ満点ですね」

ジト目で見られる。

ランディ「女か？」

ランディはいっつもエロい・・・・。

クロウ「そうだ！何か文句でもある・・・・？」

ちょっとぞんざいな言い方になってしまっただろうか。

エリィ「す、少しその女性について話してくれる？その・・・・出来たらでいいんだけど」

ロイドたちを見るとランディを除いて真剣な表情で頷いていた。

クロウ「公表しないんだったら・・・・」

そう告げると一応、同意してくれた。

クロウ「少し年下の上流階級の子なんだ・・・・」

これに皇族って付け足して言ったらどうなるだろうか。

ランディ「もう少し詳しく・・・・」

少しランディの位置が迫って来たような気がする。

クロウ「あー、えっと・・・・。皇族だ」

意をけっして言う。数秒たってもなんのリアクションもないので

四人のほうを向くと唖然としている表情を見せていた。

ロイド「皇族って・・・・。クロウが前住んでいた所はリベール・・・・えっ！」

エリィ「その、間違ったらごめんなんだけど」

エリィが、おそるおそる尋ねてくるので正解言った。

クロウ「正式な名前はクローディア・フォン・アウスレーゼだ。今ンところ内密に頼むな」

ランディ「言っても誰も信じないぞ。ってか何故に・・・・」

クロウ「遊撃士の時に出会った。そして両想いになった。ただそれだけしか言いようがない。あとは帰って来てから詳細言うから・・・」

と早口で言うと階段を駆け上がり自分の部屋で待っているミコトのところに行った。

クロウ「ごめんな。みんなの許可を得たから行こうか？」

ミコト「遅いよ～。でも兄様の大切な人に会えるから許すよ」

プク～っと膨らませた頬っぺたを見せながらも笑顔を振りまき、クロウの右腕にしがみつく。

クロウ「こっからリベールに転位するけど、超長距離転位だから・・・まぁなんとかなるさ？」

ミコト「どうして疑問形？」

クロウ「一人では経験があるんだけど同行者がいるのは初めてだからさっ。どういう結果になるか・・・・」

ミコトを腕に絡ませながら考える。

ミコト「だったら、さ！」

ふと何かを思いついたかのように閃く。

クロウ「どうかした？」

ミコト「中距離転位を数回繰り返せばいいんじゃない？」

・・・・あっ。それもそうだ。

クロウ「そうだな。ミコト、えらいぞ」

左手でミコトの頭を撫でると気持ちよさそうに目を細める。

クロウ「一報は入れとくか・・・・。えっとクローゼはエニグマ持ってたっけ？持ってないか。よし、サプライズでそのままリベールいりするか。ミコト、俺のどっちかの腕に両手でしがみついて」

ミコト「うんっ！分かった」

左腕にしがみついた。

そのままで階下へと移り、まだ呆然としているロイドたちに“いってきます”と一声かけて転位した。

閑話～もう一人の難関～（後書き）

・転位について。
クロウだけの移動アーツです。ＥＰ１０００～３０００ほど使います。そして７属性が複雑に絡み合っているのでＥＰだけあっても行う事が出来ないとしました。穴があり過ぎる設定で申し訳ないです。

碧の軌跡も書こうか迷い中。書きかけが二作あるので中途半端は良くないですよね・・・・。処女作は一時停止にしようかな。

やっぱりファルコムさんの作品が好きなので二次創作書きたいです。

閑話～到着～（前書き）

オリジナルです。

閑話～到着～

何度か転位を繰り返して、やっとのことで王都までたどり着いた。城が見えた時の高揚感は感無量だった。懐しさがこみ上げてくるというか・・・・。

クロウ「とうとう来たな、リベール・・・・！」少し興奮気味に言ったら近くにいた子供が引いたことは内緒だ。

ミコト「ここが前、兄様がいたリベール？」

クロウ「ああ、そうさ。これからグランセル城に行って会えるかどうか聞いてくるよ」

ミコト「うん、分かった」良い返事を返してくる。

～グランセル城～

親衛隊Ａ「止まれ！ここは一般の市民は立ち入り禁止と・・・・なって、おります・・・が。あれ？クロウ様ではないですか？お久しぶりです！」

クロウ「やぁ！思い出してくれたようでなによりだが、“様”は付けなくていいって何度も言ってるじゃないか・・・・？」

親衛隊Ｂ「ですが、クローディア姫の知り合いかそれ以上ともなりますと、色々と気になることがありましてクロウ様は堅苦しいと言いますがそう呼ばないといけないわけでして」

クロウ「・・・・堅苦しいってわかってるんだったら直して欲しいがな・・・・。今、クローゼには会えるか？」

親衛隊Ａ「午前中は公務の為、離宮にて仕事しておりますので会うことはできません。ですが午後からならば会えると思います。伝言伝えますか？」

クロウ「ふむ、そうか・・・・。いや、はっきりと伝えなくていい。それとなく午後の公務を無くしておくことは可能か？」

Ｂ「えっと、それは。内緒にしておいて驚かすということですか？」

クロウ「そうなるな。アリシア女王には伝えておくか・・・・。アリシアさんはいるか？」

Ａ「おります。庭園のほうでゆっくりしておられるはずです。どうぞ中にお入りください。それでクロウ様の後ろにいる人は誰ですか？」今気づいたかのようにミコトのほうに注意を向ける。

クロウ「この子は俺の家族になる子供だ。預かったが義理の妹になるかもしれないんでね、クローゼにも話を付けておこうと思ってさ・・・・」

Ａ「そうですか・・・・。それならば大丈夫ですかね。二人の入城を許可します。どうぞ」

城の正面に取り付けられた重厚な扉が開いていく。それに伴ってクロウとミコトは中に入る。

～城内～

ミコト「うわぁ～、すっごく広いですね～！初めて見ました」両手を広げてクルクルと回るミコト。

クロウ「そうだな・・・・。久しぶりに入るが何も変わっていないな」

？「あれっ、クロウではないですか？」どこかで聞いたことがあるような声が。

クロウ「おっ、リシャールか。久しいな・・・・。元気にしているようだね」

リシャール「ええ、陛下のおかげで順調に事が進んでおります。クロウは何故ここに？」

クロウ「クローゼに会いに来たんだが午前中はいないらしくて、だったら先にアリシアさんに会おうと思ってね」

リシャール「そうでしたか。後ろにいる子供は見たことがありませんが・・・・」

クロウ「結社からの預かりものだ。まぁ危険は無いがね」ミコトをクロウの前に出してリシャールに見せる。

リシャール「そうでしたか。クロウのことだから心配はしていませんがそのことでクローディア姫に会いに来たんですか？」

クロウ「察するのが早くて助かるよ。ミコトを紹介したくてリベ

ールに戻ってきたわけさ」

リシャール「あなたも大変ですね・・・・。さてと、久しぶりに会って話を聞きたいのは山々なんですがこれから会わなければならない客人がおりまして」

クロウ「そうか、少しの間だが話せてよかったよ。今度はR&Aリサーチに行くよ」

リシャール「ええ、お待ちしております。では失礼します」

ミコト「あの人は誰ですか？」

クロウ「ん？リシャールは少し前に起きたクーデター事件の首謀者だったが、恩赦を受けて許され違う民間の調査会社を立ち上げた人だよ」

ミコト「そうなんだ。でも凄く隙がなくてびっくりだよ」

クロウ「カシウスの弟子だからな。さってと、テラスに行きますか！」

～庭園～

入口にいる親衛隊に挨拶を交わしテラスへと続く階段を登っていってとうとう、目的の部屋へとたどり着いた。

コンコンッ・・・・。

？「どうぞ、おはいりになってください」中から年配ながらもと

ても優しい声が聞こえてくる。

クロウ「失礼します。クロウです」一言声をかけてから扉をくぐるとそこにはアリシア女王が椅子に腰掛けていた。

アリシア「あら?クロウさん。お久しぶりね。クロスベルに行ったと聞きましたがお元気そうでなによりですよ」

クロウ「ええ、私もアリシア女王の元気な姿を見れてよかったです。今日ここにきましたのはクローゼに会いに来た訳なんですが・・・」

アリシア「あの子はエルベ離宮で公務の真っ最中ですよ」

クロウ「はい、親衛隊の方々に聞きました。それで最初にアリシア女王に許可を得ようと思いまして・・・・」と言うと後ろに控えていたミコトをクロウの前に出して女王に見せる。

アリシア「あら?この子はどうしたの?」不思議そうな表情で、でも嫌な雰囲気でないのが目に見える。

クロウ「はい。この子は私が預かった子でして、妹にしようかと思ったのでクローゼにも会わせてみようかと思ったんです」

アリシア「・・・・でも、それだけじゃないでしょう?クロウさん。あなたは何かを隠していませんか?別に問いただそうと思っているわけではないのですが。よろしかったらお話できる?」

クロウ「隠そうとしたわけではないのですが、この子は結社の執行者候補でして預かりものです。しかし私としては結社に戻したく

ないというのもありまして・・・・」

アリシア「ふふふ、あなたはいつまでも変わらず優しいですね？私はこの子の事を許可します」

クロウ「いいんですか・・・・？」

アリシア「二言はありません。クロウさんはどうして呆然としているんですか？」

クロウ「あっさりと決まるとは思っていなかったものですから・・・・」額に付いた汗を拭って深呼吸。あとはクローゼだけか・・・・。

遠くの方から聞いたことのある動物の声が。クローゼが飼っている白ハヤブサのジークだ。ということはもう帰ってくるのか。

アリシア「クローゼが帰ってきそうですね。このままここにいますか？」女王も察しているようだった。

クロウ「おや？何も言わずとも分かったんですか？・・・・少しクローゼを驚かせようとしていたのに・・・・昼食の時にでもアリシアさんが上手いこと言って紹介してくれませんか？そこらへんは任せますので・・・・」

アリシア「ええ、よろしいですよ。何て言ったって未来の・・さんですからね」最後のほうは聞こえなかった。

クロウ「ミコト？クローゼにあわせようと思いますがその前にサプライズを思いついたので隠れていましょうか・・・・」

ミコト「うん、わかった。兄様が何かを思いついたのね。クローゼってどんな人？」

クロウ「見てのお楽しみだよ。アリシアさん。また後で・・・・」

擦り寄ってきたミコトの頭を撫でながらアリシア女王の部屋を後にする。

～クロウ去った後～

アリシア「それにしても。ふふっ。あの子はとてもクロウさんから大事にされているようですね。まるで本当の兄妹みたいでした。あらクローゼとユリアが戻ってきたみたいね。きっとクロウさんを見たら驚くでしょう。楽しみです・・・・」

閑話～到着～（後書き）

アリシア女王ってどんな口調だったっけ・・・？優しく温厚そうな口調を書いたらこうなりました。閑話がありすぎて申し訳ないです。あと二話ぐらい閑話を入れてそのあと戻します

閑話～あっさり・・・・～（前書き）

これで一応閑話を終えたいです。
クローゼって女王のことなんて呼んでいたっけ？

閑話～あっさり・・・・～

クロウが退出してまもなくユリアとクローゼがアリシア女王の部屋に入ってきた。

クローゼ「叔母様、ただいま帰ってまいりました」

元気よく部屋に入ってくる。その後ろからユリアも続けて入る。

アリシア「おかえりなさい。ユリアさんもご苦労様でしたね」

労い（ねぎら）の言葉をかけるのもいつものことなのだろう。

ユリア「はっ、ありがとうございます。何事も無くクローディア姫と帰還することができました」

堅苦しい挨拶を交わしているのはユリア・シュバルツであり、王室親衛隊の女中隊長だ。

その様子を気づかれないようにテラスの外壁のでっぱりに張り付いて観察しているクロウとミコトがいた。

クローゼ「それにしても、叔母様の様子がいつもと違っていますが何かいいことでもあったんですか？」

目ざといクローゼ。将来は良い女王になるだろう・・・・。

アリシア「ふふ、良いことですか・・・・。ありましたとも」

何やら期待を起こさせるような口調。

クローゼ・ユリア「??」

何が起こっているのか見当もつかないのか、頭の上に疑問符が見えるなら沢山浮いているだろう。

アリシア「今日は珍しいお客様が来てくださってるのよ。それで少し浮かれていたのかしら」

ユリア「珍しい、ですか?」

アリシア「ええ、入って頂戴!」

隠す気はないのだろうか。もっと焦らしてくれても言いのにと思いながらテラスに最初、クロウが降りる。

クローゼ「っ!ク、クロウ?」

目を見開いて久しぶりにあった両想いの男性に近づく。

クロウ「やぁ!クローゼ。元気だった?」

クローゼ「ええ、元気でやっております。クロウはどうしてリベールに来たのですか?」

クロウ「ちょっとクローゼに見てもらいたいものがあってね」

クローゼ「私にですか?」

クロウのはっきりしない態度が少し気に病むのだろう。段々と気分が冴えないのがわかるので早めに明かすことにした。

クロウ「ああ、事情が紹介したい子がいてね、ミコト？おいで・・・」

テラスの外壁から少女が降り立つ。

ミコト「・・・・・」

しかし、すぐにクロウの後ろに隠れてしまう。

クローゼ「この子は一体どうしたんですか？」

クロウ「預かった・・・・」

クローゼ「それだけでは意味が分からないのではっきりとおっしゃってくださりませんか？」

口調は丁寧だが少し怒ってきたのだろうか。

クロウ「えっと、結社から預かった。それで俺のところで育てて最終的にどうなるかはまだ未定だが今のところ、帰す気は無いしそれに・・・・」

クローゼ「それに、なんです？」

クロウ「それに気に入ったんだ。妹のような感覚があって守りたい存在が増えたって思った。勿論、クローゼは最初だけどね」

ちょっと照れ隠しをしながらクローゼ以外の誰にも話したことがない感情を伝えた。

クローゼ「そうでしたか。貴方の交友関係が広いことは知っていましたが結社まで知り合いがいるとは思ってもいませんでした・・・・」

クロウ「それでクローゼが良かったらなんだけど・・・・」

クローゼ「育ててもいいかって事？それなら良いわ！」

はっきりと言い放つ。

クロウ「・・・・はっ？クローゼもだが、アリシアさんも見極め早くない？」

アリシア「ええ、クローゼが選びそして貴方の存在を私も認めていますから心配はいりませんよ」

クローゼ「私もそうです。貴方だからこそって思うのもあるんでしょうね。うまく言えませんが大丈夫って考えています」

クロウ「ははっ・・・・」

一気に脱力した。テラスの床にベタッと座り込んでしまう。

ミコト「兄様（にいさま）、大丈夫？」

クローゼ「兄様って・・・・」

笑いをこらえているようだがそれには嫌な雰囲気が見られない。

クロウ「ほらっ。ミコト、挨拶しようね？」

クロウの肩にしがみつくようにいるミコトをクローゼ達に紹介する。

ミコト「えっと、ミコトです。１４歳です、よろしくお願いします」

ペコッと頭を下げてクローゼらに挨拶した。

クローゼ「うん、よろしくね。私はクローゼ。クロウの恋人・・・・よ」

ミコト「じゃあ姉様（ねえさま）って呼んで良い？」

クローゼ「勿論よ。そしてこっちが・・・・」

ユリア「ユリアといいます。クローゼの護衛をやっています。ミコト、よろしく」

ミコト「はいっ、よろしくお願いします。ユリア姉様っ！」

ユリア「姉様っ？」

カァッと顔が真っ赤っかになるユリア。これはレアだ・・・・。

アリシア「さて、一緒に食事でもどうですか？クロウさん、これ

からの予定はありますか？」

クロウ「いえ、ありません。休暇をとってきましたので大丈夫です。緊急なことがない限り・・・・」

クローゼ「では一緒に食事をとりましょうよ。クロスベルであったことを教えてください！」

クロウ「あまり大したことはしていませんよ？それでもイイなら・・・」

こうしてこのまま、リベールに少しの間留まりクロスベルで生じた出来事について話し、盛り上がったのだった。

～その後のこと～

クローゼ「そういえば、同僚の皆様にはどんな方たちがいるの？」

クロウ「個性的な同僚だよ。面白いし・・・・」

クローゼ「ふぅん。ねえ、ミコト。ホント？」

ミコト「ん？ホントだよ。胸がおっきなエリィや無口なティオ。それにエッチな話をするランディ。あとリーダーがね・・・・」

クローゼ「へぇ、エリィさんってどんな人なの？」

クロウ「ちょ、ちょっと。クローゼ？目のハイライトが消えているよっ。そんなに親しい間柄じゃないから、安心してっ」

クローゼ「ワタシモイコウカナ。クロウダケジャ、アンシンデキナイシ・・・・」

クロウ「いやっ、大丈夫だから。ミコトも変なふうに言わないのっ！」

ミコト「姉様面白いっ」

ミコトの言葉を聞いてようやく元通りになったクローゼ。

クローゼ「はっ！わ、私はいったい・・・・」

クロウ【やれやれ、一苦労だぜ。まっ、そんなクローゼも好きだが。俺がクローゼを捨てるなんてことは万に一つの可能性もないんだよ。このお姫様はそれが分かっているのかな】

クローゼ【もうっ、ミコトの冗談に引っかかったのかな。それにしてもクロウの事本当に好きになってよかった。でも、あの時“白騎士”に言われたことが少し心にチクリと残っているんだよね。クロウがどう思っているか知らないけど私は貴方と一緒にい続けたいよぉ・・・・】

閑話～あっさり・・・・～（後書き）

手抜きと思われても仕方がないですが、時間軸はロイドたちが市長秘書を捕まえる夜までクロウはリベールにいます。

いつ外伝を書くかわかりませんが、伏線からするに少し暗い内容を書きたいと思っています。

第４６話～えっと・・・・～（前書き）

題名手抜きです。そして場面は秘書逃走を図るところに出くわす、です。

第４６話～えっと・・・・～

楽しかったひと時というものはすぐに終わりを迎えてしまう。高揚感たっぷりにリベールからクロスベル市に超長距離転位をして支援課のビルに二人でたどり着く。

クロウ「ふぅ～。やっと帰って来れたね。どうだったリベール？」

ミコト「うんっ。すっごく楽しかったよ。お婆ちゃんと姉様が二人も新しく出来たんだもの」

クロウ「そうかそうか。俺もクローゼに認められるか少し不安だったけど杞憂に終わったね。それにしても・・・・ビルに人の気配がないね」

ミコト「何処かに遊びに行ってるのかな？」

クロウ「それはないと思うけど、課長に聞いてみようか？」

ミコト「そうしよう！」

ミコトが先に課長がいる部屋へと駆け足で入っていった。

～課長室～

ミコト「たっだいまぁ～。帰ってきたよ～」

課長「おう。おつかれさまだ」

タバコに火を付けながら資料を読む課長の姿がそこにはあった。

クロウ「戻りました。あれ？支援課のメンバーはどうしたんですか？」

課長「お前らがいない間に少し事件があってね、今は密かに“アルカンシェル”に行ってるんじゃないかな・・・・」

クロウ「意味が分かりませんが何か調書のようなものはないんですか？」

課長「おう。一応あるぞ。ほら、これだ」机の上に無造作に置かれていた紙をクロウに手渡す。

クロウ「ふむふむ・・・・。銀（イン）からの導力メールが届いて、それに着いて行ったら戦闘後アルカンシェルに送った脅迫文が自分じゃないと言う。それから真犯人の目的阻止するためにアルカンシェルに、潜入・・・・っと。こんな感じッスか？」

課長「ああ、銀（イン）のことは知っているか？東方の裏社会で伝説と呼ばれている暗殺者のことだけど・・・・」

クロウ「ええ、知っています。【というか正体も知ってるんだけど隠しておこう】」

課長「そろそろケリがつく頃じゃないか？クロウ、行ってみるといい」

クロウ「了解です。必要なら手伝ってきます。ミコト、行くよ」

ミコト「はいっ、兄様」

裏口から出ると西通りに出る。そこから屋根伝いに歓楽街のアルカンシェルへと急ぐ。ロイド達に端末から連絡を取ろうにも忙しいらしく出ない。それでティオにかける・・・繋がった。

ティオ「もしもし、クロウさん?今すごく忙しいんですが」

クロウ「今戻ってきてアルカンシェルに向かってるところだが、何か手伝えることはないか?」

ティオ「それなら、市長秘書が脅迫文の真犯人らしく追いかけているところです」

クロウ「よし、それなら少しでも足止めをする」

ブチッと端末を切って地上付近を覗く。すると残像が見えるぐらいの速さで秘書が行政区を駆けているのが見えた。

クロウ「ミコト、チャクラムを秘書の足に当てて足止め!」

ミコト「了解。逝くーよーっ!」

少し加減をしたであろうチャクラムは、円を描きながら秘書の両足をもつれさせる。

秘書アーネスト「ククク・・・こんなところで終わるものか、私は・・・私は次期市長になるんだァァ」

スパッ↑何かが切った音。ズテッ↑もつれて倒れる音。ゴロゴロ

↑転がる音。

秘書「い、いったい何が・・・・グハッ！」

事態を確認する間もなく神狼ツァイトが秘書の体を、押さえつける。

ツァイト「グルルル・・・・」

ロイド「ツァイト！」

ダドリー捜査官「くっ、例の狼か・・・・」

ティオ「お手柄ですね」

ランディ「やれやれ、美味しいところ独り占めかよ」

女性の声「ううん。独り占めは私よ」

オーバルカメラを片手にグレイス記者がロイドたちのもとにやって来てパシャパシャと撮る。

ロイド「い、いつの間に・・・・」

ダドリー「お、お前たちいい加減にしろ！」

秘書「ググ、離せ！私は、私は絶対に次期市長になるんだぁぁぁ・・・・」

ティオ「それにしても秘書の足をもつれさせたのは・・・・あ、

ミコト？」

図書館の屋根に見えるのはクロウとミコト。そしてミコトの手にはチャクラムが握られていた。そしてこちらを見ているのか、ミコトはピースサインをティオに見せていた。

～その夜～

クロウたちは先に戻り無事帰ったことをロイドたちに伝えて、冷やかされたりもしたがそのまま何事も無く就寝した。

～次の日～

≪クロスベル・タイムズ誌≫より抜粋

“『金の太陽、銀の月』プレ公演についての評価が高いこと。本公演も楽しみであることを伝えた。

・市長暗殺未遂事件：プレ公演の裏で着々と進んでいたこと。犯人は市長の第一秘書、アーネスト容疑者。動機は政治的向上を図ったものと思われるが、警察の取り調べは非公開で行われている。

クロスベル警察は独自にその情報を掴んでいたが、容疑者の偽装工作により操作情報が混乱に陥っていたが新設された特務支援課がこれを阻止。”

ティオ「アルカンシェルのプレ公演中の市長暗殺未遂ですから市民も困惑しているのでは？」

ロイド「市長に同情の意見が多かったのが不幸中の幸いだけど、

何か府に落ちない点もあるなぁ」

クロウ【あの秘書の身体能力の高さ、あれは異常だろ。クスリでもキメてたんだろうか。・・を使ったら、とにかく情報が少なすぎる。見守るしかないかな】

ミコト「？兄様どうかしたの・・・・？」

クロウ「いやなんでもないよ。」

わしゃわしゃと少し雑にミコトの髪の毛を撫でる。そして思考をロイドたちのほうに向ける。一課での容疑者の取り調べが上手くいっていないことについて話しているみたいだ。

ランディ「取り調べができる精神状態じゃないってことか？」

課長「ああ、ラチが明かないんで一旦留置所に送るらしい。教会のカウンセラーかウルスラ病院の助けを借りるつもりだそうだ」

ロイド「そうですか・・・・」

課長「クク、それにしてもお前たちは良くやったぜ。大金星ってとこじゃねぇか。今日、本部に行ったらあのキツネ（副署長）が猫撫で声で褒めてたぞ」

クロウ「ほう・・・・」

ティオ「なんだか想像しにくいですね？」

クロウは感嘆の声を、そしてティオはいつものジト目を・・・・。

課長「ま、一課は複雑だろうがこれで見る目も少しは変わるだろ。素直に喜べよ」

ロイド「そう、ですね・・・・」

ランディ「お嬢のことを考えると、素直に喜べないがね」

その後のことを少し載せよう。療養中の市長は心身ともに強かったようだ。秘書が市長暗殺未遂の容疑者として捕まったことと、5日の療養を終えた後業務に復帰するとしたそうだ。そしてエリィも。

エリィ「エリィ・マクダエル。明日をもって職場復帰し、より一層職務に励みます！」

第４６話～えっと・・・・～（後書き）

省きすぎでしょうか。少し雑になった感もあると思いますが、次話からは原作と絡めてゆきたいと思います。

えっ、銀（イン）の正体ですか・・・・？このまま伏せておいても“零の軌跡”では、大丈夫かなって思ってます。零の軌跡を知らない方は予想してください。今まで出た人物の中に？？＝銀です。

知っている方はニマニマしながらどうぞ読んでください。

見て下さる方に感謝の一言を加えて失礼と致します。

第４７話～市長の宣言～（前書き）

今回は市長のスピーチを丸々全部載せとオリジナル要素少なめです。

市長マジかっこよすぎ。

第４７話～市長の宣言～

市長「このクロスベルが自治州として成立して７０年。その７０年間はまさに激動の時代と共に在りました。幾たびの戦乱、そして導力革命。近代化という荒波に揉まれながら今やクロスベルは、大陸有数の貿易都市、そして金融センターとして発展しつつあります。また一昨年リベールにおいて締結された≪不戦条約≫の影響もあってか緊迫していた情勢も大幅に緩和されました」

パシャッ、パシャッ。カメラのシャッター音だけが響く。

市長「その一方で急速な都市開発や人口増加に起因する問題も出始めており、新たな政策と法整備が求められます。自治州およびその周辺諸国により良き未来をもたらすためにも、今こそ我々は一丸となって力を合わせ前に進む必要があるでしょう。ですが今はただ、７０年という大きな節目を祝い喜びを分かち合う事としましょう」

抑揚と強調を込めたスピーチは最高潮へと向かってゆく・・・・。

市長「わずか5日間ではありますが、今年は例年を遥かに超える観光客が訪れかつてない賑わいを見せております。かのアルカンシェルの新作を始め、多くの催しやイベントも企画されており必ずや充実した5日間となるでしょう。」

一息ついて右手を高く掲げ・・・・。

市長「大いなる女神（エイドス）の御名の下、今ここにクロスベル自治州創立７０年記念祭の開催を宣言します！」

これから5日間は面白くも、忙しい日々を送ることになるんだろうなと思いながら市長の宣言を聞いていたクロウとミコトだった。
それにしてもミコト・・・・、大あくびはいけないだろっ！

ランディはカジノで大勢の女性をはべらしての遊びざんまい。

ティオはハッカーのヨナと端末でゲームざんまい。

ロイドは？というと、セシルと一緒にアルカンシェルでの公演を見ていた。

課長は裏通りにあるバーでソーニャと飲み・・・・。

みんなそれぞれ、思い思いに楽しんでいた。クロウとミコトはと言うと何気にリーシャからアルカンシェルのチケットを貰って公演を鑑賞していた。

～回想～

ＰＰＰＰ！クロウの端末が鳴ったのは記念祭の数日前のことだった。

クロウ「はいもしもし・・・・」

リーシャ「あの～クロウさんですか？」

聞こえてきた声はなんと、新住居案内のときに出会ったリーシャだった。

クロウ「そうだよ。どうかしたの？」

リーシャ「記念祭の初日って何か用事を入れていますか？」

クロウ「いたって暇～。預かっている子と一緒に観光には行こうと思っていたけど」

リーシャ「アルカンシェルの新作を見に来てくれませんか？」

クロウ「えっ、いいの？是非見たいなぁ・・・・。リーシャのカッコイイところを見てみたいわ」

リーシャ「クスッ。では二人分のチケットをお渡ししたいと思いますので外に出てきてください」

クロウ「了解した・・・・」

と言うことがあって、クロウとミコトはアルカンシェルの新作を鑑賞することが出来たというわけだ。なぜ誘ったかについてリーシャ曰く・・・・。

リーシャ「案内してくれたのにお礼をまだ言っていなかったので・・・・」

～現在～

クロウ「いやぁ～、見に来てよかったなぁ。ミコトはどうだった？」

いつの間にか緊張していた体をほぐしながら、隣を歩いているミ

コトに聞いてみた。

ミコト「うんっ！凄く良かった。ストーリーも面白かったし何より主役の二人が輝いていたよ！」

目をキラキラ輝かせ、両手をブンブン振り回しつつ興奮気味に答える。

クロウ「そっか、リーシャに感謝しないといけないな、あれっ？」

視線の先にはロイドとセシルがいた。どうやらアルカンシェルから出てきたようだがロイドは別れたあと二人の女性に引っ張られていったみたいだ。

クロウ「攻略王さすが・・・・」

苦笑いを浮かべてロイドに黙祷・・・・。

ミコト「兄様なにしてるの？」

不可思議なクロウの動作を訝しんでいた。とそこに。

セシル「クロウ？それにその子は・・・・、クロウの隠し子ッッ？」

この天然さんは往来激しいところで何を口走っているのやら。恥ずかしいっ。

クロウ「違うわッ！預かってる子だってば・・・・。セシルはどうしてここに？」

セシル「新作を見たあとにイリアに呼ばれているから行くところだよ」

セシルとイリアは昔っから知っている仲らしい。親友と呼べる間柄かもしれない。

クロウ「へぇ、もしかしてロイドと一緒に新作を見てたの？」

セシル「ええ、そうよ。クロウも見てたの？」

クロウ「俺はリーシャからチケット貰って見に来てーって誘われたから・・・・」

セシル「そうなの？あらあらクロウには恋人がいるのに浮気？ダメだよ。知られたらどうする？はっ、もしかして二股かける気なの？それはそれで応援しちゃうよ」

久しぶりに会うセシルは変わっちゃいなかった。じゃなくてっ！

クロウ「セ・シ・ル？いい加減止めないと怒っちゃうよ？」

ピキピキと擬音がつきそうなぐらい怒り始めたクロウを見てセシルの暴走もやっと止まる。

セシル「じょ、冗談だよ？気にしないー、気にしない」

クロウ「それで、早く行かないといけないんじゃないの？」

セシル「あっ、そうね。クロウも一緒に行く？きっと歓迎してく

れるよ」

クロウ「いや、今日は止めておく。ミコトと一緒に観光したいから・・・・」

ミコトの頭に手を置いて優しく髪を整える。セシルは残念そうだったがクロウのその様子を見て諦めが付いたようだ。

セシル「少し残念だけど、まぁいいか。何か伝言ある？」

クロウ「イリアにまた今度会いたい、と。リーシャにはお疲れさま、って伝えてくれるかな？」

何気にイリアとも知人だったりするクロウだった。

セシル「そう伝えるね。じゃあミコトさんって言ったかしら？クロウとデート楽しんでね♪」

遠ざかりつつも何を言うか天然さんはっ・・・・。でも、ミコトの顔を覗くと熱を帯びて可愛かったのを一言伝えておこう。

そののちゆっくり、観光しつつ初日を終えた。追記するようなことは特に何も起きなかった。

ミコトが俺の手を握って離さなかったことや、風船を配る仕事をしていたのがカンパネルラなんて言えやしないよっ！

第４７話～市長の宣言～（後書き）

この作品はハーレムにしません。好意は持ちますし片思いにはなるかもしれませんがそれ以上にはなりません。

リーシャ→片思い

ミコト→家族愛

こんなかんじです。次回もどうぞご覧ください。

第４８話～釣りキチ～（前書き）

更新遅れて申し訳ないです。そして説明口調なのも申し訳ない

第４８話～釣りキチ～

記念祭中の休暇なんて無いに等しかったが、いつまでも休むわけにはいかなかった。支援課には要請が最初より、多く寄せられていたからだ。

その一つにウルスラ病院からいなくなったヨアヒム准教授の捜索たるものがあった。行方不明という知らせを受けて病院にやってきたわけだが、受付嬢セラは落ち着いていたことにギャップを感じていた。

それもそのはず、ふらりと消える・・・・いわゆるサボりというやつだ。身も蓋もない言い方をすればそうなる。今日も大量の仕事を残したままどこへ消えたやら。それで支援課に探して欲しいというわけだ。

ヨアヒム曰く「記念祭中に釣りの大会に出る」と吹聴して回っていたそうで、それが手がかりになるかもしれない。一行はクロスベル市の東通りに戻った。

～釣公師団・クロスベル支部～

ロイド「ごめんくださーい・・・・、誰もいないみたいだ。ヨアヒム先生の手掛かりをここなら見つかると思っていたんだけどな」

声をかけてから中に入るも人の気配がしなかった。

ランディ「もうその釣りの大会とやらに行ったんじゃないのか？」

エリィ「だとすると、手掛かりがなくなってしまうわね」

少し声の調子が下がり気味なエリィ。ふと何かに気づいたティオ。

ティオ「待ってください。まだ人がいるみたいです」

青年の声「ち、ちこくっす～」

少し慌てて二階から下の玄関に降りてくる青年の声がした。

コパン「あれ？警察のロイドさんじゃないですか～」

ロイド「ちょうどよかった、ちょっと聞きたいことがあるんだけど・・・・」

コパン「ダメっす。俺は今急いでいるんす。今からウルスラ間道の中洲で行われる『フィッシャー杯』に行かなきゃならないんす」

エリィ「フィッシャー杯？」

ランディ「それが例の釣りの大会ってやつか」

コパン「ご存知だったっすか。やっぱり釣り人だったら外せないッスよねー。急いで行かなきゃ先輩たちに良いポイント取られちゃう」

ロイド「ひ、一つだけ。釣り大会に向かった人の中に青い髪の毛でメガネをかけ白衣を来た男性を見なかったかい？」

コパン「んんんん?それって、ヨアヒムさんのことかなぁ。確か今日は来ていたはずっすよ」

クロウ「当たりだな」

ロイド「ああ・・・・」

コパン「もしかして皆さんも釣りに行くんっすか?だったらこれをあげるっす」

コパンが差し出したのは“竹竿”だった。

ロイド「えっ、これって?」

コパン「フィッシャー杯に参加する人たちに上げている竿っす。いわゆる参加賞ってやつっす」

ロイド【まだ参加するって一言も言ってないんだけどな。いいのかな】

コパンは本当に急いでいたようでロイドたちに竹竿を渡すと駆け足でそこを立ち去った。

クロウ「これからどうするんだ?」

ロイド「ヨアヒム先生はウルスラ間道の中洲に、いるみたいだからそこに向かわないか?」

ティオ「さっそく急ぐとするッス」

クロウ「ぷっ、ティオの口調が変わってる」

ティオ「・・・・・」

コパンの口調が移っていたことが恥ずかしかったのか、クロウから指摘を受けたことに少し顔を赤らめて黙ってしまう。

ミコト「も～ダメだよぉ。兄様は女性の感情を理解していないんだから・・・・」

クロウ「女性ったってミコトもティオも女性っていう年齢には程遠い気がするよ」

クロウにミコトとティオが肘うちと膝蹴りしてきた。

ロイド「と、とにかく行こうか」

収拾がつかなくならないうちにうまく纏めたロイドだった。

～ウルスラ間道・中洲～

そこには釣り人が沢山いてみなが楽しんでいる様子が見えた。

ロイド「ヨアヒム先生は・・・・っと」

ミコト「ねえ、みんな。奥のほうに青い髪の毛の男性が釣りをしているのが見えるよ！」

ミコトの指摘を受けて奥のほうに移動すると鼻歌交じりに釣りをしている男性の姿があった。尋ねると釣りに熱中しているが、ヨア

ヒム本人だということが確認取れた。

ロイドがどうしたら病院に戻ってくれるか聞くと、フィッシャー杯らしく釣果で勝負と言い出しそれにロイドも乗ったのでそのまま勝負と相成った。

結果だけを言うとロイドの勝ちだった。ヨアヒムは残念な表情を見せながらも釣りをやめて病院へと引き返した。

ティオ「目を離すとまたどこかにいなくなりそうですし、私たちもついて行ったほうがいいのでは」

ティオの言うとおりだ。サボられるといけないので一緒に病院まで同行した。

～病院～

受付嬢セラ「全く、今までどこでなにをなさっていたんですか？先生がいないせいでどれだけの人に迷惑が掛かったか・・・・」

ヨアヒム「ははは、実は『フィッシャー杯』という一大イベントに参加していてね、釣公師団に名を連ねる以上これを逃すわけにはいかないだろう？」

セラ「もうっ、いい加減真面目になってください。リットンさんはヨアヒム先生のかわりに今も仕事をやっているんですよ？」

ヨアヒム「おお、リットン君か。いやぁ、出来のいい教え子を持って僕は幸せ者だねぇ。彼の仕事に水を差すのも悪いから、何ならこのまま任せてみるのはどうだろう？うんうん、それがいい。きっ

と彼の成長にも繋がるだろうし・・・・」

セラ「お・仕・事・に・戻・っ・て・く・だ・さ・い！」

ヨアヒム「・・・・ハイ」

ロイド【この人っていつもこんな感じなのかなぁ】

ティオ【准教授の地位ならかなり優秀なはずですが・・・・】

ミコト【兄様、兄様。この人とってもおもしろいね！】

クロウ【そうだね、だけど・・・・この違和感はなんだろうか】

ランディ【天才となんとやらは紙一重っていうじゃない】

何気にランディは悪いことを言っているような気がする・・・・。

この後は何事もなかったので支援要請を終わらせてクロスベル市に戻ることにした。クロスベル市に着くとロイドの端末に港湾区に行って欲しいとの要請を受けた。何やら二つの不良グループが暴れているらしい。

さてさてこの出来事をロイドたちはどう解決へと進ませられるだろうか・・・・。

第４８話～釣りキチ～（後書き）

ヨアヒムに感じた違和感とは一体。

第４９話～勝負前～（前書き）

補足人物：アッバス『テスタメンツ』のＮｏ．２を務めるスキンヘッドの大男。

第４９話～勝負前～

事の発端はフランからきた一本の連絡だった。准教授の捜索を終えたロイドたちは、クロスベル市の駅前まで戻ってきた。とそこに・・・・。

フラン「あっ、ロイドさん。どうもお疲れさまです～」

ロイド「フラン、緊急要請か？」

フラン「そうなんです～。えっと、旧市街の不良さんたちがいるじゃないですか？ちょうど今その人たちが、港湾区で喧嘩をしているみたいで・・・・」

ロイド「本当か！あいつら性懲りもなく、観光客だって大勢いるだろうに」

なにやらロイドの顔が呆れ顔になる。どうも面倒くさそうな要請になるのだろうか。

フラン「そうなんですよ。それで警察に連絡が入ったんですが、巡回中の警察官はみんな忙しいみたいで誰も手を割けそうになくって・・・・それで彼らと面識のあるロイドさんたちにお願いできないかと」

ロイド「分かった、港湾区だな。今、街に戻ってきたからすぐに向かってみるよ」

フラン「よろしくお願いします」

エリィ「港湾区でなにかあったの？」

ロイド「ああ、ワジとヴァルドだよ。あの辺りで性懲りもなく喧嘩沙汰を起こしているみたいだ」

ティオ「それは・・・・」

エリィ「さすがに迷惑ですね」

ランディ「やれやれ。祭りの熱気に当てられちまったってとこか」

クロウ「ワジとヴァルドってマフィアに良いように使われた連中のことか？」

ランディ「そうだな。その前から少し面識があってな」

ロイド「事が大きくならないうちに急ごう！」

～港湾区～

ロイド「あっ、あれは・・・・」

バイパーA「おらっ、青坊主！気合入れてかかってこいやぁ～！」

テスタメンツA「言われるまでもないさ。行くぞ！」

激しくはないだろうが、それぞれの得物を持って殴り合いの喧嘩となっている。

エリィ「あれは何をしているのかしら？」

ティオ「それほど険悪な雰囲気ではなさそうですが・・・・」

ランディ「ただのタイマンってわけでもなさそうだが・・・・」

ロイド「とにかく事情を聞こう。幸い、ワジとヴァルドもいることだし」

ロイドが事情を聞こうとしたとき一人の娘の声がそこに響いた。

娘の声「ちょっとちょっと、あなたたち何をしているのよ？」

ヴァルド「あん？」

ワジ「へぇ・・・・」

エステル「全く、連絡を受けて見に来てみればゾロゾロと・・・・あなたたち旧市街のサーベルバイパーとテスタメンツね？喧嘩は終わり。とっとと解散しなさいよね！」

ヴァルド「なんだぁ。てめぇらは？」

ヨシュア「遊撃士協会に所属する者です。あなた方が喧嘩をしていると連絡を受けて、仲裁にやってきました」

ヴァルド「遊撃士だとぉ？」

ワジ「ヨシュア・ブライトにエステル・ブライトか。雑誌で何度

か見かけたね」

エステル「そりゃどうも。あなたたちが両チームのリーダーってとこ？」

ワジ「一応ね。僕はテスタメンツのワジ。こっちはサーベルバイパーのヴァルドさ」

ヨシュア「情報通りだね。見たところ喧嘩をしている訳ではなさそうだけど・・・？」

ワジ「フフ、単なるお遊びさ。せっかくの記念祭だからね。どうせだったら普段と違うことをやろうと思ってさ。それで勝ち抜きタイマンバトルをしようって事になったわけさ」

エステル「か、勝ち抜きタイマンバトル～？」

アッバス「両チームから5人ずつ出して1対1の勝負で勝ち抜き戦をさせる。大将はワジとそちらのヴァルド。最終的に負けた側が買った側の記念祭の飲食費を払う取り決めだ」

エステル「それなら構わないか・・・って違う違う！試合をするのはともかく、こんな場所でしちゃだめでしょ！ここは人通りも多いし、別の場所でやればいいじゃない！」

ヴァルド「ハッ、そんなのは俺らの勝手！しかしてめぇ、遊撃士だかなんだか知らないが随分と偉そうなクチ叩きやがるな。調子に乗ってるんじゃねぇか。アア？」

エステル「あのね、調子に乗ってるのはあなたたちの方でしょう。

あたしは常識的なことを言っているだけじゃない」

ヴァルド「このアマ・・・・」

エステルの言い方に腹を立てたのかヴァルドはエステルのほうに詰め寄る。

ヴァルド「どうやら少しばかり、痛い目に遭いたいらしいな?そこの黒髪の野郎と一緒に可愛がってもいいんだぜ?」

エステル「う、うーん。ヨシュア、どうしよう?」

ヨシュア「周りの目もあるし大人気無いことはしないほうがいいと思うけどね」

エステル「やっぱり?」

対するエステルとヨシュアは余裕の表情を見せていた。

ヴァルド「てめぇ、何ブツクサ言ってやがる。この“鬼砕き”のヴァルド・ヴァレス様が怖くねえこか・・・・?」

ワジ「やめておきなよ、ヴァルド。そのお姉さん、武術込みだったら君より強いよ?」

冷静に分析しヴァルドを止めにかかるワジ。

ヴァルド「なにぃ・・・・?」

エステル「へえ、わかるんだ」

ワジ「なんとなくだけどね。そちらのお兄さんは実力的には更に上なのかな？」

ヨシュア「はは、まだ修業中の身だけどね」

エステル「むー・・・・ヨシュアのほうが上って言うのは確かにそうだけど。決めつけられるとそれはそれで納得のいかないものがあるなぁ」

ヨシュア「まあまあ、遊撃士の仕事は何も戦闘だけじゃないんだし・・・・」

ヴァルド「ククク・・・・こんな小娘が俺より上だと？ハッ、だったら証明してみろや」

ヴァルドはエステルの前に拳を突き出す。

ヨシュア「エステル？」

エステル「大丈夫、任せて」

言い切ると片手を掴んで投げ飛ばし一回転させて地面に落とした。

見事・・・・。

ヴァルド「あ・・・・？」

何が起きたのか全然分かってない様子。

ワジ「ほら、言わんこっちゃない・・・・」

ワジは呆れ顔でほら見たことかと言わんばかりの表情を見せた。

バイパーの青年「ヴァ、ヴァルドさんが・・・・」

テスタメンツの青年「すごい・・・・！」

エステル「えっと、大丈夫？」

呆然としているヴァルドにエステルが声をかける。

ヴァルド「ククク、ハハハハハハッ・・・・。悪かったな。侮ったりして。だがよぉ、さすがにナメすぎじゃあねぇのか・・・・？」

ヴァルドの獲物、鎖付きの木刀をエステルに向けて振り下ろす。

エステルは咄嗟に回避する。

エステル「あ、危なっ・・・・」

ワジ「やれやれ君たちも調子に乗りすぎだよ」

ヨシュア「だからと言って謝るのもスジが違うと思うけど・・・・」

ワジはヴァルドの横に立ち、ヨシュアもエステルを庇うかのように斜め前に立つ。

ヴァルド「わかるぜ。てめぇはかなり強い。俺はそう言うヤツを叩きのめすのが好きでな。とっとと抜けや。アア？」

ヨシュア「・・・・」

エステル「ちょ、ちょっと。ヨシュア、あたしは大丈夫だから本気にならなくても・・・・」

一触即発の気配が濃くなりつつあったその時、目の前に突如として現れた人影があった。

クロウ「待った！」

縮地で移動し、ヴァルドとヨシュアにだけ殺気を出して即座の行動を制限した。そしてロイドたちも登場する。

ワジ「あれ？」

エステル「クロウさんにロイド君たち・・・・？」

ロイド「話は聞かせてもらったよ。まずは双方とも落ち着いてくれ」

ヴァルド「・・・・ハッ、ここまで、きて落ち着け・・・・だって？」

ヴァルドは息も絶え絶えになりながらロイドの言い分に反対する。

ワジ「ここまで来て、はい解散ってのもねぇ。お互い勝負するくらいしかスジは通せないんじゃないかな？」

ヴァルド「ククク、その通り、だぜ」

エステル「あたしもちょっと腹が立ってきた。そっちがその気なら決着を付けてもいいんですけど？」

ヴァルド「上等だ！」

ロイド「ああ、もう。ヨシュアからも何か言ってくれ・・・・・！」

ヨシュア「ごめん、ボクもちょっと退けられないかな・・・・・」

ロイド「うっ・・・・」

ワジ「フフ、それじゃあ僕はヴァルド側に加勢しようかな。さすがの君もその二人を相手にするのは厳しいだろうし」

ヴァルド「ケッ、勝手にしろや」

ロイド「だあああ～！だから何でそうなるんだって」

エリィ【困ったわね】

ティオ【このままだとどうかなりそうです】

ランディ「あのよぉ、そんなにやり合いたいんだったら別の方法でやればいいんじゃね？」

ワジ「ふぅん・・・・」

ランディ「せっかくの祭りだ。遺恨を残してもつまらねぇだろ。だったらスカッとする方法で決着を付けるっつーのはどうよ？」

エステル「えっと、ランディさんどういう事？」

ランディ「ああ、そいつはなぁ・・・・」

第４９話～勝負前～（後書き）

この後はロイド&ランディのコンビでやりあう場面を書きたいと思います。動きがあるシーンがうまく書けないので悲しくなってマス。なにか良い方法は無いものか・・・・？

第５０話～ルール説明～（前書き）

一度不注意で消えました（つД⊂）

第５０話～ルール説明～

ワジ「なるほどね、旧市街の地形を利用した追いかけっこ（チェイスバトル）か、なかなか楽しめそうじゃない？」

ヴァルド「ハッ、いいじゃないか。妨害アリ、何でもアリのケンカレースってわけだな！」

ヨシュア「スピード、パワー、テクニックそれに駆け引き一通りが必要になるってわけですね」

エステル「へえ～、面白そうかも！」

ランディ「ハハ、だろ？」

ロイド「だろって・・・ランディ、あのなぁ」

エリィ「喧嘩にならないのはいいけど結局周りの人に迷惑をかけるんじゃないかしら？」

ティオ「まあその割りに皆さん、見物に集まってきてますけど・・・」

ワジ「まっ、いいんじゃない？なんかお祭りっぽくてさ。それで本当にキミたちも参加するわけ？」

ロイド「仕方ないだろ。ここまで関わっておいて、今更知らん顔はどうかと思うし」

ランディ「やれやれ、真面目だねぇ」

ロイド「ランディの提案だろ！その代わり、完全に試合形式にしてルールから外れた行動はしないこと！決着がついたら遺恨は残さずそれ以上争わないこと！」

エステル「あたしたちはそれでいいけど・・・・」

エステルはヴァルドたちのほうを向く。

ヴァルド「ハッ、俺もそれでいいぜ。こうなったら警察も遊撃士も纏めて相手してやるよ。誰が一番か証明するためになぁ！」

エステル「あはは、それじゃあ正々堂々と戦いましょ」

ヴァルド「変な女だなぁ。まあいい。赤毛、ルールを説明しろや」

ランディ「さっきも言ったようにレースの基本は『追いかけっこ』だ。ワジ&ヴァルドの旧市街チーム。エステル&ヨシュアの遊撃士チーム。そしてロイド&俺の警察チームだ。この3チームで旧市街を3周して一番早くゴールしたチームが勝者となる」

ランディ「ただし各チームには毎周、3箇所のチェックポイントを押さえてもらう。チェックポイントは通りの奥にある路地。衝撃を与えると点灯する装置が置かれている。こいつを3箇所ぶっ叩かないと1周したと見なされないわけだ。この地形を利用することで一方的に逃げることは不可能になる。レース中は相手の妨害も可。つまりよほど先行していない限り相手からの妨害を受ける事になる」

ランディ「それを迎撃するも、何とか躱すのもチームごとの戦術

的判断になるわけだ」

ワジ「ふぅん。良く出来たルールだね。ちなみにトラップとかはアリなの？」

ランディ「アリ、としておこう。直接やりあうだけじゃなくて地形を活かした妨害なんかも可能になるわけだな」

ロイド「なるほど」

ヨシュア「・・・・」

エステル「どうしたの、ヨシュア？」

ヨシュア「いや・・・・大体ルールは分かりました。スタート順はどうするんです？」

ランディ「コイントスでいいだろ。ロイド、ヴァルド、エステルちゃんそれぞれ1ミラ硬貨を出して」

ロイド「ああ！」

ヴァルド「ハッ」

エステル「分かったわ」

ランディ「それぞれ弾いて手の甲に。表か裏か、揃わなかった方が一番手のスタートとしよう」

ロイド、エステル、ヴァルドはそれぞれコイントスをした。

ロイド「表」

エステル「表よ」

ヴァルド「裏。ハッ、俺たちが一番手か」

ランディ「よしっ、それじゃあワジにコイントスしてもらおうか」

ワジ「了解」

ワジはコイントスをした・・・・。

ランディ「ロイド、エステルちゃん。裏か表か選んでくれ」

エステル「それじゃあ、表で」

ロイド「俺は裏だ」

ワジは掌を開いた。

ワジ「裏。二番手はロイドたちだね」

エステル「ううっ、ゴメン。ヨシュア」

ヨシュア「はは、いいよ。今回のルールだったら最初の順番は重要じゃない」

エリィ「えっと、それじゃあ一通り決まったのかな？」

ランディ「ああ、そうだな。それじゃあ、レース前に各チーム作戦会議と行こう。一度レースが始まったら、タイムとか無しだからな」

ワジ「それじゃあヴァルド。仲良く打合せしようか？」

ヴァルド「ハッ、気色悪いんだよ」

それぞれ散って作戦会議が始まった。

クロウ「さてさてどうなることやら・・・・」

ティオ「よかったんですか？クロウさんも勝負に加わりたかったんじゃないですか？」

エリィ「そうね、クロウったらウズウズしてたもんね」

ミコト「兄様、どうして参加したいって言わなかったんですか？」

クロウ「ん？そうみえた。まぁやりたいのもあったんだけど、こう言う勝負（遊び）はちょっと好きになれないんだ・・・・」

どちらが本音か分からないが熱くなりすぎて、周りが見えなくなるのを避けたと言える。

ミコト「ふーん。兄様はどうなると思いますか？」

クロウ「そうだな、一番不利なのはロイド達だ」

ティオ「どうしてですか？」

クロウ「ワジ達は旧市街を知り尽くしていること。それにヨシュア達のポテンシャルは半端ないものと言える」

ミコト「それに比べてロイドさんたちは・・・ということですか？」

クロウ「そうなる。が、しかしロイドたちにも付け入る隙はある。それは運と役割分担と的確な状況判断にあるな。ロイドを前衛にランディが後衛になること」

エリィ「えっ、どうして。ランディのほうが足は速いのに・・・」

クロウ「それは、コンビの場合速いほうをフォローに回すことで連携を取りやすくする。あとはロイドの武器だ！」

ティオ「トンファーですね。防御の面に関して言うとロイドさんのトンファーが役に立つと」

クロウ「そうだ。これで七割ぐらいの勝率があるだろう」

ミコト「微妙かな・・・」

クロウ「もう少しあげられればいいんだけど、ロイド達の応援に行きますか」

ミコト「うんっ！」

会話を止めてランディたちのほうに行くとちょうど、作戦会議な

るものが終わったみたいだ。

～レース前～

エリィ「それじゃあ号令は私が務めさせてもらうわね最初の空砲で第1チームがスタート。5秒後の空砲で第2チームがスタート。更に5秒後、第3チームがスタート」

ティオ「タイムのカウントは私が担当します」

アッバス「では我々は見物人が巻き込まれないように配慮しよう」

ワジ「フフ、舞台は整ったようだね」

女性の声「いいえ、真打ちがまだよ！」

ロイド「グ、グレイスさん？」

ヨシュア「確かクロスベル・タイムズの・・・・」

グレイス「やっほ～。ボーイズ&ガールズ、何だか面白そうなことをやろうとしているみたいじゃない？お姉さんも一枚噛ませなさいよね！」

ロイド「噛ませなさいって」

ヴァルド「何をするつもりだ？」

グレイス「レースと言えば実況よ！カメラマンも連れてきたから思いっきり盛り上げてあげるわ！」

唖然とする面々を放っておいてレースが一望できる建物へと上がっていく。

ティオ「なんだか本当にお祭り騒ぎになったような気が・・・・」

エステル「あはは、いいじゃない。喧嘩より何倍も楽しいわよ♪」

ランディ「それじゃあ始めるとしよう」

ワジ「そうだね」

エリィに空砲を撃つ用意ができた。

ティオ「それでは、カウント始めます」

3（ドライ）、2（ツヴァイ）、1（アイン）、0（ヌル）

空砲が鳴りヴァルドたちのチームがスタートした。一体どんな結果が待ち受けているのやら。

第５０話～ルール説明～（後書き）

早めに上げたいです。誰か私に文才を（・―・；）

第５１話～アニキの本気～（前書き）

追いかけっこの様子です。勝負中は原作通りに書きそれに付け足しする感じで。

第５１話～アニキの本気～

グレイス「さあ、レースの開始です。第１組ワジ＆ヴァルドチーム、素晴らしいスタートを切りました。今、第１チェックポイントを通過し、第２チェックポイントへと向かいました！」

第１チェックポイントはテスタメンツの入口付近に置かれていた。それを叩いて反応させ、上手に次のポイントへと向かう。

グレイス「第２組ロイド＆ランディチーム、スタートしました。ランディ選手、軽快な走り！ロイド選手もなかなかの走りです。今、第１チェックポイントを通過」

ロイドが前衛でトンファーを使ってポイントを叩く。そして次のチェックポイントへと向かう。

グレイス「第３組エステル＆ヨシュアチーム、スタートです。チームワークは折り紙付き！遊撃士としての実力もＡクラス。今第チェックポイントを通過。先行チームの追撃を開始します！」

ヨシュアがポイントを叩きそのまま流れるように先行していった他の２チームを追いかける。

ロイドたちが、第２チェックポイントへと向かう先にはワジチームが待ち構えていた。ヴァルドがドラム缶を頭の上に持ち上げて迎撃用意していた。

グレイス「おおっと～！ヴァルド選手いきなりの大技だ！さあロ

イドチームどうする？」

ロイド【クッ】

ランディ【判断は任せた・・・・】

ロイド【そのまま突っ込む・・・・】

ヴァルド「おらっ！」

ヴァルドが投げ付けたドラム缶をロイドたちは左右に分かれ、ワジの追撃も何とか、かわして全てを避けることが出来た。

ワジ「ハハ、やるじゃない！」

グレイス「ロイド&ランディ選手、なかなかの度胸でドラム缶を回避！ワジ選手のアタックもかわし、第2チェックポイントを通過します」

第3チェックポイントを叩き終わったワジチームにロイド達が追いつく。振り返ったワジらにロイドは・・・・。

ランディ【どうする？】

ロイド【仕掛けよう！】

≪コンビクラフト≫発動！！

ロイド「行くぞ！ランディ」

ランディ「合点承知だぁ！」

中央に集めた二人をロイドとランディが斬り付け、そしてロイドとランディの位置を変えそのまま斬り抜ける。

ロイド・ランディ≪バーニング・レイジ！≫

ロイドたちの攻撃はヴァルドとワジの膝を地面につかせる結果になった。

ヴァルド「なっ・・・・」

ワジ「へえ、やるねえ～」

ロイド「悪いなっ」

ランディ「先に行くぜ！」

ロイドが第3チェックポイントを叩きワジらの横をすり抜けて先を急ぐ。

グレイス「さあ2週目です！ロイド&ランディ選手、順位を繰り上げて、第1チェックポイントを通過。おおっと、ここでエステル&ヨシュア選手がとんでもないスピードで追いかけてきた」

2週目の第1チェックポイントをロイドが叩き第2に向かおうとすると、最初3番手にいたはずのエステルたちが追い上げ2番手になっていた。

ロイド「くっ・・・・！」

ランディ「マズイな・・・・」

何かの異変に気づいたのだろうか。

ランディ「おい、ロイドっ」

ロイド「えっ？」

ロイドが第2チェックポイントを叩いた瞬間白い粉が、辺り一面に飛び散る。

グレイス「おおっと、何だ何だこの白い煙は～？ひょっとして、エステルたちが仕掛けたトラップだったのかぁ～？」

エステル「ゴメンね～」

ヨシュア「お先に～」

煙をものともせずにエステルが第2チェックポイントを叩き、ここで順位変動する。

ランディ「追いかけるぞ！」

第3チェックポイントにはヨシュアたちが待ち構えていた。

≪各個撃破≫

ロイドがヨシュアと斬り合い、ランディとエステルが斬り合い応戦する。結果は痛み分けだ。

エステル「ナイスファイト！」

ヨシュア「先に行くよ！」

ランディ「チェックポイントを押さえてとっとと行くぞ・・・・」

ワジ「よそ見厳禁だね・・・・」

ヴァルド「死ねやあああああ！」

後ろに注意していなかったロイドたちはワジとヴァルドの攻撃を受けて地に伏す。

ロイド「ぐはっ・・・・」

ランディ「がっ・・・・」

そのままヴァルドが第3チェックポイントを押し、ロイドチームを抜く。

グレイス「なんとなんと！追いついたワジ&ヴァルト選手、ロイドチームへの奇襲成功！そして第33チェックポイントを押さえ、エステル&ヨシュアチームの追撃に移ります」

ロイド「ぐっ・・・・」

ランディ「・・・・ハハハハハハ！おらぁっ！」

ロイド「ラ、ランディ？」

ランディ「いいねぇ、熱くなってきたよ。こうなりゃあ、とことん楽しませて貰おうじゃねえか！」

クロウ「あ～あっ、とうとうやっちゃったよ。ランディさん・・・・」

ミコト「なになに、今の。身体がビリビリ～って痺れたような感じがランディさんからしたんだけれども・・・・兄様教えて」

クロウ「今のは“ウォークライ”と言って自分へのゲキ飛ばしと考えたらわかりやすいかな。多分・・・・」

クロウ【力の片鱗をここで見せちゃう・・・・？まぁいいか。遊びだし、本気にはならないでしょう・・・・】

グレイス「さあエステル&ヨシュアチーム、広場を通過して3週目に突入！このまま独走を許すと彼女たちの勝利となりますが・・・・おっと～そうは問屋が卸さないようですっ！」

エステル「来たわね。ってあれ？なんで一人？」

そこにはヴァルドの姿しか見えない。

ヨシュア「っ！まさか・・・・」

ヨシュアは上を見上げる。そこには店の屋根の上から飛びかかろうとしているワジの姿があった。

ワジ「当たりっ」

そのままワジ&ヴァルドがエステルたちに襲いかかる。エステルがヴァルドと、そしてワジがヨシュアと斬りあった結果は引き分け・・・・。

エステルたちを追うワジ&ヴァルド。

グレイス「激しいデッドヒートを始めた両チーム。もうこれで、この2チームに優勝は絞られてしまうのでしょうか?」

ランディ「おおおお~!せいっ!」

掛け声一発。そのまま第1チェックポイントを叩き付けるランディ・・・・・。

グレイス「す、凄まじいパワーです。ランディ選手。というかあの装置・・・・完全に壊れちゃってない?」

エステルチームとワジチームはそのまま第2チェックポイントを通過し、第3チェックポイントへと向かう。

ヴァルド「な、なんだぁ?」

ヨシュア「ワイヤートラップ・・・・!」

第3チェックポイントへの道にピンと張られたワイヤーに四人は見事に引っかかった。

ロイド「引っかかったな!」

ロイドが右側の屋根伝いに疾走し、そして第2チェックポイントを押さえる。

エステル「くっ・・・・」

ヴァルド「行かせるか、こらぁ！」

エステルとヴァルドが行かせまいとロイドに立ち塞がる。

ヨシュア「待った・・・・！」

ワジ「もう一人は？」

ランディ「ひゃっほ～、油断大敵だぜ！」

左側の古いマンションから、ランディが四人目掛けて奇襲！そして成功した。

ロイド「ナイス、ランディ！」

ランディ「おお！このままゴールするぞ！」

グレイス「ゴールッ！激しいレースを最後に制したのはロイド＆ランディチーム。続いて他の2チームもゴールッ！あれ、どっちが先なのかしら・・・？まあいいや、とにかくお疲れさま～」

第５１話～アニキの本気～（後書き）

これが限界。分かりづらくて申し訳ないです。この後の会話も続けて書きたいと思います。

第５２話～勝負後～（前書き）

若干空気なオリ主・・・・。

第５２話～勝負後～

～レース後～

ロイド「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ・・・・・」

ランディ「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ・・・・・」

エリィ「ふふっ、二人ともお疲れさま」

ティオ「凄いレースでした。おめでとうございます」

ロイド「いや・・・・全部・・・・ランディの・・・・作戦勝ちだよ。はあっ、はあっ・・・・・」

ランディ「いや・・・・お前がいなきゃ・・・・最後の仕掛けは・・・・成り立たないさ。ぐぅ、さすがに飛ばしすぎたぜぇ・・・・」

エリィ「もう、これだから男の子は・・・・」

ティオ「単純というか、意地っ張りというか・・・・まあ女の子も一人いましたが」

エリィ「ふふっ、そうね。そうだ・・・・私、冷たい飲み物買ってくるわね」

ティオ「あ、私も付き合います。東通りの屋台でいいですよね？」

エリィ「二人ともちょっと待っててね」

二人はそのまま旧市街から東通りにある屋台へと行く。

ロイド「あー・・・うー・・・・、そういえばなんで俺たちこんなことしたんだっけ？」

ランディ「はは・・・どうでもよくなっちまったな……」

ランディは何かを考えるかのように片手を持ち上げてみる。

ロイド「・・・ランディ・・・・？」

ランディ「正直引いただろ？あんな風にキレちまってよ」

ロイド「あ・・・・」

ランディ「自分でも・・・よく分からねぇんだ。いつもヘラヘラ笑っている俺が“今”の本当の俺なのか、それともあんな風にキレちまうのが俺の本質なのか、この2年間ですっかり分からなくなっちまった」

ロイド「ランディ・・・・」

ロイド「その・・・警備隊に入る前はどこにいたんだ？クロスベル出身じゃないことは聞いているけど」

ランディ「ククク・・・どこにいたか。煉獄（れんごく）のように熱く・・・・冥府のように寒い所かね」

ロイド「えっ・・・・」

ランディ「血も魂も沸騰し、凍りつくような世界・・・・あらゆる生命（いのち）の輝きとクソのような汚泥が入り混じったようなところ。それが、俺のいた場所だ」

ロイド「ランディ・・・・」

ランディ「なーんてな」

そう言うと、起き上がる。

ランディ「はは、それっぽかったろ？俺の過去なんざ、そんな大層なものじゃねえさ。今はただの夜遊びが大好きなクールでハンサムなナイスガイだ。それ以上でもそれ以下でもねぇ」

それを聞いてロイドも起き上がってランディのほうを向く。

ロイド「・・・あのさ、ランディ。前にも話したけれど俺には兄貴がいたんだ」

ランディ「え・・・・」

ロイド「ガイ・バニングス。捜査一課に所属していた捜査官。とんでもなく破天荒で、ありえないぐらい前向きで事故で両親を亡くした後、男手一つで俺を養ってくれて、憧れていた女性（ひと）を取られても嫉妬すら沸いてこないようなとにかく“凄い男”だったよ」

ランディ「そっか。お前も大変だな。そんなスゲエ兄貴の背中を追いかけているってわけか」

ロイド「まあね。でさ、少し白状するとランディってさ、ちょっと兄貴に似ているんだよな」

ランディ「へっ・・・・」

ロイド「もちろん顔とかは“全然”似てないんだけど、いつも俺とかエリィとかティオをさり気なくフォローしてくれるだろ？そんなところがちょっと似ているんだ」

ランディ「お、おいおい。そんなこっ恥ずかしいこと言うなよ。お兄さん、顔が赤くなっちまうぜ」

ロイド「はは、そういう照れ隠しもちょっと似ているのかも」

ランディ「うっ・・・・」

ロイド「だから俺、ランディのことを尊敬している所があるんだよなぁ。ちゃんと“自分”を判っていて他人にも気を遣えるところ。同僚というより一人前の“男”としてさ」

ランディ「・・・・」

ロイド「正直、俺はまだまだだ。多分ランディの話を聞いても間の抜けた言葉しか、出てこないんじゃないかと思う。だからさいつか俺が。兄貴やランディと肩を並べられるようになったらその時は聞かせてくれないか？」

ランディ「ロイド・・・・ハハハ・・・・」

ランディはグリグリとロイドの頭を撫でる。

ロイド「ラ、ランディ・・・・？」

ランディ「いや～まいった。お嬢もこぼしてたけどお前は天性の女たらしかもな。おっと、この場合はアニキたらしかぁ？」

ロイド「な、なんだそりゃ？ていうか半人前なのは確かだが、子供扱いはさすがにやめてくれよ」

ランディ「ククク、はははははははっ・・・・」

意にも介さずグリグリと撫で続ける。

クロウ【オレら空気ですか・・・・】

ミコト【兄様！ファイトです～】

こんなやりとりがあったのは気づいていないらしい・・・・。

エリィ「まったく、何をやっているのかしら？はい、冷たい飲み物！」

ティオ「ラムネの屋台があったので買ってきました」

エリィがロイドに、ティオがランディにラムネを渡す。

ランディ「おっ、ありがたいね」

ロイド「ああ、マジで助かるよ」

そのまま二人はラムネに口を付け、ゴキュゴキュと飲み干す。

ランディ・ロイド「んくっ、んくっ・・・・ぷはぁ～」

エリィ「まったく男の子ときたら、消耗したばかりなんだからあまりじゃれ合わないの！」

ティオ「エリィさん、妬いています？」

エリィ「ちょ、そんなわけあるはずがないでしょう！それにその男同士になんで・・・・」

ティオ「聞いた話によると、そうした特殊な趣向（ジャンル）もあるそうですし、これはもうフラグが立ってしまったかもしれませんね」

エリィ「そ、そうなの？」

ランディ「フッ、悪いなお嬢。この世界は、弱肉強食。喰うか喰われるかが全てなんだぜ」

エリィ「あ、あなたねぇ・・・・」

ロイド「一体何の話をしているんだか」

少年の声「ふふ、賑やかだねえ」

ロイド「やあ、そっちはもう回復したのかい？」

ロイドたちのもとにワジやヴァルドの手下と一緒に来た。

ワジ「まあね、今日のところは素直に負けを認めようかな」

ヴァルド「けっ、ふざけた結果だぜ。おい、赤毛！今度はガチで勝負しろよ・・・？あの最後の爆発力・・・てめえ、猫かぶってやがったな？」

ランディ「あー、別にそういうんじゃないよ。あんだけ、一気に力を出すとその分消耗も激しくってな。奥の手みたいなもんだからあんま、やりたくねーだけさ」

ヴァルド「チッ、あの黒髪の小僧といい、まあいい。さすがに今日は疲れた。てめぇら、とっとと引き上げるぞ」

サーベルバイパーたち「ウーッス！！」

ワジ「フフ、それじゃあ僕たちも失礼しようかな。アディオス、なかなか楽しかったよ」

アッバス「撤収だ・・・」

テスタメンツたち「了解（ヤー）」

娘の声「は～“レイヴン”たちよりずっと統率されているわね～」

次にやって来たのはヨシュアとエステルたちだ。

エステル「お疲れさま～」

ロイド「そっちこそ、お疲れ」

ランディ「なんだ、もう帰るのか？」

ヨシュア「はい、元々仕事で来ていたこともありますし・・・・」

ティオ「それを言うなら私たちも同じですけれど・・・・」

エリィ「ふう、もう夕方になってしまったわね」

エステル「あは、せっかくのお祭りなんだし少しぐらいは楽しまないとね」

ロイド「げ、元気だなぁ」

ヨシュア「それがエステルの取り柄だからね。でもランディさん、体のほうは大丈夫なんですか？」

ロイド「え・・・・」

ランディ「へえ、同じ匂いはしなかったがお前もそっち絡みなのか？」

ヨシュア「いえ、正確には違います。ですが、多少知識のほうは・・・・」

ランディ「そうか。まっ、ガキの頃から慣れっこにはなってるからな。あとに残るダメージはないさ」

ヨシュア「そうですか。すみません、差し出がましいことを」

ランディ「いや、気にすんな」

一体何のことを話しているのか分からない他のメンバー。クロウは大体知っているが。

エステル「ちょっとちょっと、何二人で分かりあっているのさ？」

ヨシュア「はは、大したことでないよ。それよりもエステル、そろそろ帰ろう。アリオスさんも帰ってくることだろうし」

エステル「あ、うん。それよりもヨシュア、例の話！」

ヨシュア「ああ、そうだね。せっかくだから聞いてみよう」

ロイド「例の話・・・・？」

エステル「うん、あのね黒の競売会（シュバルツ・オークション）って知ってる？」

エリィ「黒の（シュバルツ）・・・・・」

ティオ「競売会（オークション）ですか？」

エステル「どうやらこのクロスベルのどこかで開かれる競売会らしいの。何でも毎年、記念祭の期間中に開かれているらしくって・・・・。で、ここが肝心なんだけど盗品ばかり扱っているという話なのよ」

エリィ「と、盗品・・・・・？」

ロイド「本当なのか？」

ヨシュア「いや、あくまでも噂だよ。途方もない価値の付いた表に出せない由来の品ばかりが出品されるという話だけど、でもその様子じゃ聞いたことないみたいだね？」

ロイド「ああ、初めて聞いたよ」

ティオ「警察のデータベースでも見かけたことがありませんね」

ランディ「黒の競売会（シュバルツ・オークション）か。なかなか洒落た名前だけどな」

エリィ「・・・・・」

クロウ「・・・・・」

エステル「そっか～、あなた達なら何か知っていると思ったんだけど、やっぱりただの噂なのかなぁ？」

ヨシュア「う～ん、そうだね。ナイアルさんの情報ソースだから確かだとは思うんだけどな」

ロイド「・・・・・」

エステル「あはは、ゴメンね。変なこと聞いちゃって。今日は楽しかったわ！負けちゃったのは悔しいけれど。今度は同じ事件か何かで一緒できるといいわね！」

ロイド「はは、そうだね」

ヨシュア「それじゃあ、僕たちはこれで。みなさんお疲れ様でし

た」

ランディ「おう、そちらもお疲れさん」

こうして記念祭二日目は過ぎていった。支援課に戻ってきたロイドたちは報告書を纏め、皆で夕食をとってから明日の為に早めに休むことにした。

第５２話～勝負後～（後書き）

記念祭２日目終了となります。次話は３日目から書きたいと思います。

第53話～3日目の朝～

～支援課の朝～

ランディ「は～、やれやれ。昨日はマジで疲れたぜ。こんなのがあと3日もあるかと思うと、ちょっとウンザリしてくるな」

ティオ「昨日の件は、自業自得では・・・？ああいうレースを提案したのはランディさん自身ですし」

ランディ「今になって後悔してるっつーの！俺もトシだし、若いのに混じってヤンチャするもんじゃねえな」

エリィ「まだ二十歳もそこらで何を言っているやら・・・・」

ロイド「・・・・」

クロウ「・・・・」

二人は話に加わらないで何やら考え中だ。多分二人とも同じことを考えているんだろう。

エリィ「ロイドとクロウどうしたの？」

ロイド「ん？ああ、昨日エステルたちが言っていたことが気になってさ」

クロウ「ロイドもか。俺も気になっていてね。情報ソースが・・・

・」

エリィ「あ・・・・」

ランディ「黒の競売会（シュバルツ・オークション）か」

ティオ「でも、ただの噂という可能性も高そうなんですよね・・・・？」

ロイド「ああ、そうなんだけどクロスベルの状況を考えるにあながち噂だけの話じゃ無さそうな気がするんだよな。クロウはどう思っている？」

クロウ「俺は情報ソースのほうが気になっている。ナイアルというのはリベールにいる記者の名前なんだが、今までの情報に偽りがなかったんだ。だから別の視点から噂よりも真実味を帯びているってところなんだ・・・・」

ランディ「確かに、クロスベルではマフィアが大手を振って歩いているような場所だしな」

ティオ「何があっても不思議ではない・・・・その通りかもしれません」

エリィ「・・・・実は、ちょっと前に気になる噂を聞いたの」

クロウ「気になる噂？」

ティオ「それはどういう・・・・？」

エリィ「私が以前、各国に留学していたという話はしたと思うけどその時知り合った貴族のお嬢さんから聞いたことがあるの。毎年クロスベルのある場所で秘密の社交会（パーティー）が開かれているって」

ロイド「秘密の社交会・・・・？」

ランディ「いかがわしい響きだなぁ。オイ！」

エリィ「どうやら各国の貴族や、実業家が秘密裏に集まるパーティーらしくてその時はただの噂としか思っていなかったけれどちょっと気になるとは思わない？」

ロイド「確かに。それが黒の競売会の可能性もあるということか・・・・。そうなると課長あたりはなにかを知っていそうだけど」

ティオ「課長は本部の方に行っていますね。なんでも外せない会議があるとか」

ロイド「そうだったな」

ランディ「しかしもし本当だったとして、俺たちにはどうしようもなくねえか？どう考えても議員の指示で警察本部に黙認されてそうだしよ」

ロイド「そうなんだよな。うーん、でも・・・・」

ロイドは諦めきれない様子だった。

エリィ「気持ちは分かるわ。一応、記念祭の間は気にかけておきましょう。何か情報があるかもしれないし」

ロイド「そうだな。よしっ、とっとと食べて今日も支援要請片付けますか！」

クロウ「それにしても・・・・黒の競売会ですか。面倒くさいことになりそうで怖いなぁ」

ミコト「私は兄様と一緒ならどこでもついて行くよぉ！」

可愛い事を言う義妹の頭を撫で、ロイドたちと別行動することに決めたクロウだった。

第５３話～３日目の朝～（後書き）

次話は閑話か、外伝のどちらかを書こうと思いますがその前に寝たいっ・・・・。

見て下さる方に感謝の意を表します

閑話～工房とミコト～（前書き）

オリジナルです

閑話～工房とミコト～

クロウ「ロイド、俺は別行動するから～」

そう言ったのは食事中ずっと表情を固くしていたクロウだった。

ロイド「どうかしましたか？」

クロウ「黒の競売会について聞いておきたい人物がいるからそこをあたってみようと思ってさ」

他のメンバーから柔らかい雰囲気が一気に消える。

ランディ「誰か、心当たりがあるんですか？」

クロウ「ああ、マインツに行く途中に寄った工房のじいさんだよ。個人的な理由から知り合いでね、そこを辿っていってなんとか聞き出せないかと思ってね・・・・」

ロイド「そうですか。何か分かったら教えてくださいね」

クロウ「約束する。ミコトはどうする？」

ミコト「ん～、着いていきます」

クロウ「分かった。じゃあロイド、ミコトと一緒に人形工房に行ってくるわ」

左手を肩より少し上に掲げてヒラヒラと振り、裏口から西通り、そしてマインツ山道へと出ていく。

ミコト「工房のお爺さんって結社関係ですよね？」

クロウ「そうだな。あまりかかわり合いを持たないが、≪殲滅天使≫のパテル＝マテルを造った人でもあるし裏の事情についても詳しいだろ・・・・」

ミコト「そうだと思います。でもどうやって黒の競売会について聞くんですか？素直に教えてくれそうにありませんが・・・・」

クロウ「そうだね。少しミラを持ってきたからそこから話していこうかな」

ミコト「よくわかりませんが・・・・」

～工房前～

重厚な門が閉じていて人気が全くない。だがクロウには確信があった。ヨルグ爺さんはここにいるという確信が・・・・。

クロウ「爺さん？いるんだろ・・・・。今日は近況報告に来たぞ」

・・・・ガチャッ、ギギギィィィ・・・・。

音がして門が開きクロウらを招き入れた。それから、自動で動く人形が案内をしてヨルグの元へといざなった。

クロウ「よぉ、久しぶりに会うが元気そうだね？」

ヨルグ「・・・ああ、随分と珍しいじゃないか。今日は槍でも降るかね・・・・・」

少し冗談交じりで話すクセは変わっていないようだ。

クロウ「またまた・・・・。今日は新しい子を連れてきたんだ。ミコトという結社の子供だ」

ミコト「ミコトと申します。よろしくお願いします・・・・」

ヨルグ「フンッ・・・・」

一瞥後、ギロリと睨みそのまま黙る。

ミコト「兄様、私はいけないことをしましたか?」

恐る恐るそう尋ねるミコトに安心させるため、優しく答える。

クロウ「ああ、大丈夫。いつも初対面にはこうだから・・・・」

ポンポンと頭を軽く手で叩き大丈夫なことをアピールする。

ヨルグ「それで、クロウは一体何をしにきたのかね?近況報告だけじゃないことは、確かだというのに。早う、本題に入らんか?」

クロウ「会いに来たのも本当なんだけれどな。まぁいいや、もう一つの話題は黒の競売会(シュバルツ・オークション)についてなんだ・・・・知ってるとは思っているが・・・・」

ヨルグ「っ！どうして・・・・」

クロウ「昨日聞いた噂のもとに、表には出すことが出来ないぐらいの価値のものが出品されるということから、爺さんのところで作った人形も出すんじゃないかなっと思ってね。どうだい？」

ヨルグ「ああ、そうだ。黒の競売会は実在する。そしてワシの所で作った人形も出品する事も過去にはあった」

クロウ「価格を聞いてもいいかい？」

ヨルグ「・・・・１０００万ミラから２５００万ミラと言ったところだ。祈年祭期間中までに、等身大ぐらいの大きさの人形を作って欲しいとの要望が一件から二件ほど発生する。だが、それ以降その人形が表に出回るということは無いことから・・・・」

クロウ「それは裏で取引される、つまり黒の競売会があるということを如実に表すものだ。っと」

ヨルグ「そうだ。クロウの考えはあっていると思うぞ。それでクロウはどうしたいんだ？」

クロウ「俺としては今の仲間のために助けになりたいってのが本音かな」

ヨルグ「・・・・ふむ、出来るかどうかは分からんが参加してみるか？」

クロウ「ああっ！本当に開催されていて、危険性があるならば入ってみたい！」

ヨルグ「分かった。クロウの意見を尊重しよう。フフ・・・・」

クロウ「爺さん、いきなりどうしたんだ？」

ヨルグ「ナニ・・・・。クロウが変わったのを見てとても嬉しかったんだよ」

クロウ「そうかもな。リベールからクロスベルに来て仲間が増えたからだろうよ」

ヨルグ「そうか・・・・。競売会についてはこちらに任せておきなさい。失敗しても恨まんようにな。あとレンの事も引き続きよろしく頼むよ？」

クロウ「ああ、頼む！レンの将来が明るくなるように手助けはするつもりさ」

それじゃあまた・・・・とヨルグと別れて工房を後にした。

工房を出るとその門の所で意外な人たちと出会った。それは昨日、ロイド&ランディたちと競った遊撃士のヨシュアとエステルだった。目的は何となくわかるけれど・・・・。

エステル「あれっ、クロウさん。どうしてここにいるんですか？」

クロウ「エステルにヨシュアか・・・・。どうしてってヨルグ爺さんに用があったからに決まってるさ。二人はどうしてここに？」

ヨシュア「えっと、その・・・・」

二人とも挙動不審だ。こちらから話を振るか・・・・。

クロウ「レン・・・・だな？その反応を見るに当たりってところか」

ビクッと体を震わせてこちらを伺う二人がいた。

クロウ「クロスベルにいることは分かっているんだろう？だが俺が干渉したら納得しないよな？」

ヨシュア「・・・・そうですね。何よりもレンが素直にならないといけないと思います」

エステル「ふとクロウさんがいれば万事うまくいくって思っちゃいましたが、ズルしているみたいで嫌ですね」

二人とも自分たちで解決しないといけないことは分かっているようだ。なので安心した。

エステル「それで、その子は誰ですか？多分見たことないと思うんですが・・・・」

クロウ「そうだっけ・・・・。まあいいか。ほらっ、自己紹介して」

後ろにいて少し警戒していたミコトを押し出して紹介させる。

ミコト「ミコト・・・・です。お姉さんたちは誰？」

エステル「あたしはエステル、エステル・ブライト。で、こっちが・・・・」

ヨシュア「ヨシュア、ヨシュア・ブライトだよ」

ミコト「っ！この人が・・・・・」

ヨシュアの紹介を聞いた瞬間、敵意が膨れ上がった。忘れていたがミコトが結社育ちだということは当然ヨシュアの事も知っていて、良くないことばかり吹き込まれていたのかもしれない。

クロウ「ミコトっ！この二人は大丈夫だから。クソッ、聞こえていないのか、だったらスマンな。ミコト眠っててくれ・・・・」

クロウの言葉も、聞こえないぐらい興奮していたのでツボを刺激して強制的に眠らせた。

クロウ「・・・・迂闊だった。少し考えればこう言う結果は目に見えていたのに・・・・」

エステル「ちょ、ちょっと。その子いったいどうしちゃったの？」

ヨシュア「ボクが原因ですね・・・・？」

クロウ「いや、俺が安心しすぎていたせいだ・・・・。ヨシュアはミコトが暴れた訳、わかるな？」

ヨシュア「・・・・ええ。多分ですが、結社でしょうか？」

エステル「えっ、どうして・・・・」

クロウ「この子は結社から預かった子だ。執行者の候補の候補で自由に育てて欲しいと言われたんだが、まさかヨシュアの事を覚えているとは・・・いや、違うな。確かあの時ヨシュアの戦闘力の半分って聞いていたからモデルがヨシュアだったということか」

ヨシュア「そう、でしたか。クロウさんはまだ結社と関係があるのですか？」

問いに頷きを返し、腕の中で眠らせたミコトを眺める。

エステル「えっ、えっ、どういうこと。クロウさんが結社と関係があるなんて。あれは犯罪組織よ？まさか今も犯罪に加わっているの？」

クロウ「知り合いがいるってだけだ。って言ってもエステルは納得してくれないよな？」

エステル「当たり前です。あ、あんな・・・」

準遊撃士の時からお世話になっている人が、実は結社と関係が深いと言われれば話を聞いても納得はしないだろう。

クロウ「今はお互い、気持ちの整理が付かないだろう。改めて話を聞きに来るといい。いつでも歓迎するよ？」

ヨシュア「そうですね。それがいいと思います。さっ、行こう。エステル」

エステル「・・・・」

エステルはクロウのほうを少し睨みつつもヨシュアに引きづられるようにしてマインツ山道へと降りていった。気がつくと空は夕日で赤く染まり、一日が終わりを迎えようとしていた。難しいことが多々ある中で、立ち止まってはいられないクロウだった。

明日は記念祭４日目。４日目はロイドたちと支援要請を片付けようとするクロウだった。ちなみにクロスベル市へ帰る途中ミコトは何事もなかったように目覚めたので、今度からヨシュアと会うときには少し気をつけようと思ったりもしたクロウだった。

続く

閑話～工房とミコト～（後書き）

数千万ミラという設定はハロルドさんの乗った自家用車が８０万ミラ。あとゲームをしているときに１００万ミラや１５０万ミラぐらいは稼げたので。だとしたら途方もない金額って一体・・・そうだ、これなら！と思ってこの金額をつけました。高かった気もしますが。

ミコトは潜在意識の中に暗示としてヨシュアが裏切り者という意識を植え付けられています。

第５４話～記念祭４日目～（前書き）

≪偽ブランド業者の摘発≫前編です。

第５４話～記念祭４日目～

～警察本部～

４日目の緊急要請には、偽ブランド業者の摘発という仕事があった。それでクロウを含めた五人は警察本部へと急ぐことになった。ミコトは疲れているのか、ベッドから起きることなく眠っていたので警察犬のツァイトに頼んでミコトを見ていてもらった。

本部へと着くと会議室へと案内された。そこにいたのは、ドノバン警部とレイモンド捜査官だった。文面を見る限り緊急性が高い内容だったのでそのことを尋ねるエリィ。

ドノバン警部「本日、クロスベルにやって来る『偽ブランド業者』の摘発を手伝ってもらうために支援課には来てもらった」

ロイド「偽ブランド業者ですか・・・？」

ティオ「有名ブランドの服飾品や導力器それらに使用されるロゴなどに、酷似したものを売りつけて顧客に売りつける悪徳商人のことですね。自治州法では軽犯罪にあたります」

レイモンド「く、詳しいね。だいたいそんなところだよ。例年、記念祭の観光客を装って多くの偽ブランド業者が、クロスベル入りしているんだ」

ティオの答えに驚きながらも説明を加えていくレイモンド捜査官。

レイモンド「ヴェルヌ社の高級腕時計に、ストレガー社のヴィンテージ物。そして七曜石細工、そういったものを知識のない客に売りつけて不当に利益を得ているんだよ」

ランディ「人様を騙して儲けようなんざ、気にくわねぇヤツもいたもんだ。要するにそいつらをフン捕まえるのを手伝って欲しいってわけか」

ドノバン「ウム、そのとおりだ。不甲斐ないが毎年、何件もの被害が警察に届けられている。それに偽ブランドの存在はメーカーや流通業者の信用にも繋がる大きな問題だ。警察としては今年こそ奴らのクロスベル入りを食い止め、市民の信頼を回復させたいんだ」

ロイド「なるほど、事情は概ね理解しました。俺たち特務支援課もできる限り協力させていただきます」

ロイドは何としても捕まえるという強い決意をあらわした。

ドノバン「感謝する」

エリィ「それで、私たちは何をすればいいのでしょうか？」

ドノバン「奴らが入ってくるルートは、クロスベル市の駅と空港。そしてタングラム門の3つが考えられる。駅と空港は俺たちで抑えるから、お前たちにはタングラム門での警戒に当たってもらいたい」

レイモンド「二課も人手不足でね、郊外にまでは手が回らないんだよ・・・。その点君らは警備隊副司令のソーニャさんとも面識があったよね？水際対策となると、現地での連携も必要だから君たちが適任だと思うんだ」

クロウ「そう考えると、他の警察官よりは俺たちの方が連携しやすそうだね」

ランディ「やれやれ、出来るなら会わずに済ませたいんだけどな」

ドノバン「よし！話はまとまったな。俺たちはこれから駅と空港方面を張ってみるつもりだ。お前たちもタングラム門に合流して警備に当たってくれ」

ロイド「分かりました。タングラム門に行きます」

ドノバン「頼んだぞ」

レイモンド「じゃあ、またね・・・・」

そう言うと二人は会議室をあとにして、残ったのは支援課のみだ。

クロウ「早速行くとしますか！」

ティオ「ソーニャ副司令に事情を話して協力していただかないといけませんね」

偽ブランド業者を捕まえるために、支援課が動き始める。果たしてタングラム門で行われる水際対策は功を奏するのだろうか・・・・。

第５４話～記念祭４日目～（後書き）

続きもすぐに書きます。

第５５話～タングラム門にて～（前書き）

≪偽ブランド業者の摘発≫続きです。

第５５話～タングラム門にて～

～タングラム門～

コンコン・・・・。副司令の扉を叩く。

ソーニャ「どうぞ、入ってください」

許可が出たので支援課のメンバーは部屋の中に入る。

ロイド「失礼します・・・・。お疲れさまです。ソーニャ副司令。ノエル曹長」

ノエル「お疲れさまです」

ソーニャ「お疲れさま。あなたたちのほうから、出向いてくるなんて何かあったのかしら？」

ロイド「ええ、実は相談したいことがありまして・・・・」

ロイドは偽ブランド業者への水際対策として、タングラム門へ来たことを説明した。

ソーニャ「なるほど、事態は理解できたわ。了解しました。タングラム門部隊も協力しましょう」

クロウ「ご協力感謝します」

ランディ「しかし、大丈夫なンすか?記念祭中、国境門はとんでもなく忙しいみたいだが」

ノエル「気にしないでください、先輩。水際対策は本来、門に詰める警備隊員の仕事ですから。多少無理してでも私たちには携わる義務があると思います」

ソーニャ「ええ、その通り。あなた達が気に病む事は一つもないわ。人手はあまり避けないからあなたたちのサポートという形にはなってしまいそうだけれど」

ソーニャ副司令は司令と大きく違って、とても仕事熱心な様子を垣間見せていた。

ティオ「それでも充分心強いです」

ロイド「それで早速なんですが、共和国からの旅行者を調べる機会はあるでしょうか?警察本部の得た情報によると、偽ブランド業者は本日の昼頃に到着するらしいのですが」

ソーニャ「そうね、確かそろそろ共和国からの旅客バスが到着する予定になっているわ。情報が確かなら、おそらく偽ブランド業者はそのバスに乗っているはずよ」

ノエル「旅客バスはクロスベル自治州内のバスへの乗り換えの間、少しですが時間が空きます。その間なら観光客は食堂で休憩することになるかと思います」

ランディ「んじゃ、作戦は決まりだな。曹長がそれとなく乗客を食堂に誘導する。その後、俺たちがさりげなく食堂に入って偽ブラ

ンド業者に目星を付ける。捜査官の腕の見せ所だぜ、ロイド！」

ロイド「ああ、任せてくれ。時間は短そうだけど、乗客たちを観察して当たりをつけるには充分そうだ」

クロウ「身分を明かさずに話すことができたら来た理由も聞けそうだし」

エリィ「な、なんだか緊張してきたわね・・・・」

ソーニャ「共和国からのバスが来るまで、少し時間があるわ。準備ができているなら部屋で休むこともできるけれども、どうするの？」

ロイド「では休ませてください」

ソーニャ「分かったわ。共和国からのバスが来たら連絡するわね」

ロイド「よろしくお願いします！」

共和国からのバスが国境のゲートをくぐり、タングラム門へと入ってくる。

ノエル「クロスベル自治州へようこそいらっしゃいました。クロスベル市行きのバス到着まで、少しの時間があります。よろしければ、食堂で休憩なさってください」

ノエル曹長がそれとなく乗客をバスから降ろし、食堂の方へと案内する。

ランディ「今ので乗客は全員か？」

ノエル「ええ、今ので全員です。こちらが乗客リストになります。目を通してください」

ノエルがロイドに乗客のリストを渡してくる。

ロイド「ああ、助かるよ。観光客は9人か。全員が共和国から来たのに間違いなさそうだ」

ティオ「このようなものを部外者に見せてもいいんですか？行ってみれば個人情報の漏えいに当たるのでは・・・・？」

ノエル「副司令に捜査の役に立ちそうな情報は、できるだけ渡すようにと言われているの。『名前や住所がわかるわけじゃないから、情報漏えいなんて大したモンじゃないわ』って」

エリィ「現場での柔軟な判断、さすが副司令ね」

ランディ「かーっ。なんつうか、ホント恐ろしいお人だぜ」

エリィは感嘆の声を上げ、ランディは冗談じみて副司令を茶化す。

ロイド「うん、ありがとう。ノエル曹長、このリストは返すよ」

ノエルに乗客リストを返した。

ノエル「はい、確かに。それでどうでした。怪しい人はいましたか？」

ロイド「うーん、どうだろう。最終的な判断は自分たちの目で見て下す必要がありそうだな」

クロウ「だったら、早いとこやっちゃおうぜ。クロスベル市行きのバスが来るまでそんなに時間はなさそうだものな。食堂にいる客から、話を聞いて偽ブランド業者を割り出そうぜ」

ロイド「ああ、やるぞ。皆！」

ランディ「おう！」

ティオ「合点承知」

ノエル「皆さん、健闘をお祈りします！」

第５５話～タングラム門にて～（後書き）

さ、寒い。部屋の中には暖房器具が無い（壊れた）ので温度は１０度ぐらいです。手がうまく動かないので打ち間違えが多い。

偽ブランド業者摘発までは書いて寝ようと思っています。

第５６話～偽ブランド業者探し～（前書き）

寒い。部屋ン中なのに吐く息が白いってどゆこと～・・・・。

第５６話～偽ブランド業者探し～

～タングラム門食堂内～

早速一人目の観光客に話を聞いてみる。

お婆さん「おやおや、かわいらしい坊やね。私の孫にそっくりで頭の良さそうな顔をしているわ」

ロイド「えっと、お婆さんはクロスベルの人？」

お婆さん「いえいえ、私は共和国人よ。息子夫婦がクロスベル市に暮らしているから記念祭を利用して遊びに来たの。クロスベルに来るのは3年ぶりかしら」

エリィ「嬉しそうですね、お婆さん」

お婆さん「おほほ、それはもう。なにせ、孫に会えるのは久しぶりですから。前に来たときに、孫と一緒にミシュラムのテーマパークで遊んだこと・・・まるで昨日のことのようだわ。あれからどれだけ大きくなったか楽しみでならないの」

二人目は食堂の壁に寄りかかっている女性だ。

女性「ねぇねぇ・・・あのお姉さん、ヘンだと思わない？」

ロイド「えっ？あのお姉さんというと・・・？」

女性「ほら、向こうに座っている黒髪のパンツルックの人。旅客

バスの中でも見てたけどさぁ、なんだかちょっと怪しい感じがするのよ。妙に落ち着き払っているというか、只者じゃない感じがするもの・・・・」

エリィ「ちょっと話してみないとわからないけれど・・・・。ところであなたはクロスベルには観光で？」

女性「ん、どっちかっていうと里帰りかなぁ。今まで共和国に旅行してて記念祭に合わせて、帰ってきたってワケ。って私のことなんかどーでもよくない？あなたもバスに乗るならあの人は気を付けたほうがいいわよ、きっと」

二人目に話を聞いた女性が、しきりに気にしていた黒髪の女性に話しかけることにした。

ランディ【うわっ、美人だぁ～】

黒髪の女性「あら。あなたたち、バスに乗っていた人ではないわね」

ロイド「えっ。え、えっと。昨日夜遅くに着いたのでここの宿泊施設に一泊したんです【そういうことにしておこう・・・・】」

黒髪の女性「フフ、そう。まぁよくよく考えれば大して不思議なことでもなかったわね」

ランディ「お姉さんはクロスベルに何しに来たッスか？」

黒髪の女性「強いて言えば、宝石を探しにと言ったところかしら」

ロイド「宝石・・・・？」

黒髪の女性「クロスベルの地にに眠る、魔性の宝石を探しにね。それを手に入れさえすれば共和国の民を熱狂の渦に巻き込むほどの力を持つわ。ただし、あらゆる手を尽くす必要があるけれど・・・・」

ロイド【この人・・・・】

黒髪の女性「フフ、あまり深く考えないでいいわ」

三人目に聞いた黒髪の女性は、ミステリアスな雰囲気を持ちクロスベルに来た理由は魔性の宝石探しというものだった。

四人目は貿易商。共和国での珍しい雑貨を売り、そしてクロスベルで雑貨を手に入れて共和国で売りたいなと陽気な男性だった。

次に声をかけた二人組は外見だけ見るとカップルに見えたが、話しかけてびっくり兄妹だった。よく間違われるらしくあまり気に病んでいなかった。二人揃って旅行好きなのでこうしてクロスベルに旅行しにきたというわけだ。

宿泊施設で休んでいた観光客にも声をかけてみた。まずは気難しそうな老人だ。

ランディの巧みな（？）会話でクロスベルに来た理由が分かった。それはクロスベルの淡水魚を釣るために記念祭にひとり寂しくきたわけだった。

最後は父親と子供の親子だ。普段出張が多い父親を子供が支えて

くれるので、バスでの旅行を企画したという話らしい。何とも子供想いの父親だろう。

これで話を聞き終えた・・・・。ちょうどノエル曹長がクロスベル市行きのバスが来たことを伝えに来た。ロイドの中で犯人は決まったのだろうか。

ロイド「引っかかる人物はいたよ。でもまだって言う感じがするからバスの中で考えをまとめよう」

クロウ「クロスベルに着いちゃったら乗客は散り散りになる。その前に考えをまとめなきゃならないな」

ノエル「私はここまでしか手伝えませんが皆さん、よろしくお願いします」

～導力バス内～

ロイド【まずは偽ブランド業者の情報を整理しよう】

ティオ【ルートは駅、空港、タングラム門の3ヶ所から来ている】

ロイド【ああ、その情報が確かなら容疑者はこのバスの中の誰かってことになる。そしてこれだけの情報があれば一つの事実が浮かぶ。それは人数についてだが】

クロウ【多分だが、単独行動しているとか・・・・？】

ロイド【うん、クロウもそう思ってたんだ】

クロウ【朧気だったから、確かだとは言えなかったけれど。ロイド、さすが捜査官】

ロイド【そして業者の中でも恐らくリーダー的存在・・・・】

クロウ【荷物運びなんて危ない仕事は下っ端にやらせておけば自分は、悠々楽々入れるってワケさ】

ランディ【なるほど、一理あるな！】

ロイド【単独犯となると容疑者候補は5人になる。しかしその中で一人だけ事実と違う嘘の証言をしていたヤツがいる。そいつが犯人だ。クロウわかるか？】

クロウ【・・・・んっ？一人だけ可笑しい話をしていた人がいるが・・・・俺は一人目に話しかけた婆さんだと思う】

ロイド【俺もそう思ってる】

エリィ【間違いない？】

ロイド【ああ！偽ブランド業者のリーダー的存在はあの婆さんだ】

ランディ【了解した。バスが到着次第声をかけてみるか】

クロウ【もうすぐ着く。逃げられないようにしないとな】

ロイド【ああ、用意をしよう】

黒髪の女性【・・・・】

ロイドたちは気付かなかったが、黒髪の女性が注視していたのにクロウだけは気づいていた。

クロウ【あれっ、あの人は・・・。あーっ、思い出した。でもどうしてココに。まぁ犯人捕まえてから聞けるものなら聞いてみよう】

ロイド【クロウ、用意できた?】

クロウ【ああ、問題ない。大丈夫だ】

~クロスベル市停留所~

婆さんが落ちたのを確認して後ろからロイドたちが声をかける。

ロイド「すみません、ちょっといいですか?」

婆さん「おや、何のようだい?」

ロイド「私たちはクロスベル市の警察の者です」

婆さん「・・・警察がわたしに一体何の用かい?」

ロイド「共和国からクロスベルにきた本当の理由は、偽ブランド品を売ることですね?」

婆さん「ええっ、その犯人が私だとでも言うのかぇ?」

お婆さんはしおらしくロイドに返事を返す。あたかも自分は何も

関係がないように、ただ孫に会いに来たお婆さんだという雰囲気を出す。これも芝居なんだと思うと何だか不思議だ。

ティオ「私にもその理由がわからないのですが・・・・」

クロウ「この婆さんとの会話の中でひとつだけ不自然な会話があるんだ」

エリィ「ええっと、3年ぶりに孫に会いに来たことと、ミシュラムのテーマパークで・・・・あっ、そういうことね！」

エリィは会話を思い出していきようやく、その会話の不自然さに気づいた。

クロウ「エリィは分かったみたいだな。一つだけ婆さんは致命的なミスをした」

婆さん「だからどういうことさね。孫とテーマパークで遊んだと言ったことのそれのどこが不自然と言うんだね」

クロウ「まだ分からないようだから、答えは3年前にミシュラムのテーマパークは存在すらしていなかったんだよ！婆さんはいるはずのない孫と遊んだというわけさ」

ランディ「そういうことか。ったく、人が良さそうな婆さんに騙されそうになったじゃねえか」

ロイド「あなたを偽ブランド品を売買しようとした罪で逮捕・・・・って、ええっ～」

一瞬の隙を突いて婆さんが逃亡を図る。それも年齢からは想像もできないような速さで。

婆さん「ふざけるんじゃないわよ。誰があんな青二才に捕まるかっていうんだ？山登りで鍛えた足で逃げ切ってやるさ！」

東通りまで順調に逃げていた婆さんだったが、黒髪の女性の出した足に引っかかって転んでそのまま御用となった。

ロイド「犯人逮捕にご協力いただきありがとうございました。簡単な手続き等がありますので、警察署まで来ていただけませんか？」

黒髪の女性「ええ、いいわよ。それにしてもあなたに会えるなんて思ってもみなかったわ。元気にしていた？」

クロウ「ええ、元気にしていたよ。キリカさん。あんたも元気そうで何よりだ」

ロイド「知り合いなのか？」

ランディ「だったら紹介してくれよ！」

キリカ「キリカ・ロウランと言うわ。クロウとは遊撃士の時に顔なじみだったわ」

クロウ「ああ、キリカさんは遊撃士協会の受付をしていたから、その時に知り合ったんだ。それでクロスベルには何しに来たの？」

キリカ「共和国で芸能プロデューサーをやっているの。そしてアルカンシェルを観るために来たってわけ。あわよくば、共和国で公

演をやってもらえないかと思ってね」

クロウ「だから魔性の宝石と言ったんだね」

キリカ「そうよ。クロスベルに眠る魔性の宝石と言えるものね。共和国を熱狂の渦に巻き込むかどうかを見極めるために来たのよ」

ロイド「ご協力ありがとうございました。何かあれば支援課のほうに連絡ください」

キリカ「フフ、機会があれば。それじゃあまた。クロウも共和国に暇があったらいらっしゃいな。歓迎するわよ？」

クロウ「機会があったら行かせてもらうさ。キリカも気を付けてな」

警察本部の取調室前でキリカと別れたロイドたちだった。警察署を出ると、ヨナから電話があった。なにやら協力して欲しいことがあるらしい。

報酬はロイドたちに関係のある記憶結晶（メモリークォーツ）だった。話だけを聞きにヨナの所へ行くロイドたち。今度はどんな事が待っているのか・・・・。

第５６話～偽ブランド業者探し～（後書き）

キリカってこんな性格だっけ・・・？あと犯人逮捕のところを短くし、ロイドの見せ場をクロウが奪っちゃったようになりましたが大目に見てネ。

それにしても寒い。ＡＭ２：００現在部屋の温度１１度。

見て下さる方に感謝の一言を添えて失礼します

第57話～ヨナの依頼～

～行政区・警察署前～

少し時間は戻って、ロイドたちが偽ブランド業者摘発を終えた時に遡ろう。ロイドの端末にヨナから連絡が入った。その一部始終をここに記そう。

ロイド「はい、ロイドです」

少年の声「おっ、ビンゴだな。いや～合ってて何よりだぜ」

聞き覚えのない声がエニグマから聞こえてくる。

ロイド「えっと・・・・どちらさま？」

少年の声「ハッ、ボクの声を聞いて分かんねーのかよ。ヨナだよ、天才ヨナ・セイクリッド」

ロイド「何だ君か・・・・っておい！どうして君がこの番号を知っているんだ？」

ヨナの声「ハッ、警察のデータベースから調べたに決まってんじゃん。いや～警察のセキュリティってちょっとザルすぎるんじゃん？まっ、トップシークレットなんかはデータベースには無いみたいだけれど・・・・」

ロイド「お、お前なぁ・・・・」

ランディ「誰からなんだ？」

端末の相手が普通じゃないと思ったのかランディが聞いてくる。

ロイド「ああ・・・・あのハッカーの坊主だよ」

エリィ「ええっ！」

ティオ「全くあの子ときたら・・・・」

ロイド「それで何の用なんだ？ハッキングの腕を自慢したいわけじゃないんだろ？」

ヨナの声「それなんだけど、ちょっとボクからの依頼を請けてくんないかな～って思ってさ」

ロイド「なに・・・・？」

ヨナの声「正確にはティオの助けが借りたいだけなんだけど、一応アンタたちにも話を通しておこうと思ってさ」

ロイド「あのな・・・・こっちは忙しいんだ。プライベートな話だったらさすがに断らせてもらうよ？」

ヨナの声「ま、プライベートっちゃプライベートな用事だけど・・・・報酬はたんまり弾むぜ？」

ロイド「俺たちは遊撃士じゃない。直接、そうした報酬を受け取るつもりはないんだが」

ヨナの声「ハッ、お高くとまっちゃって。ただまあ、報酬といっても直接ミラってわけじゃないさ。あんた達の欲しがっている情報をバックした情報結晶（メモリークォーツ）・・・・それだったら、どうよ？」

ロイド「・・・・」

ヨナの報酬の内容を聞いて一瞬、固まるロイド・・・・。

ヨナの声「ハッ、いい反応じゃん。ま、とにかくボクのところに来てよ。詳しい話はその時にするからさ」

ロイド「・・・・分かった」

プチッとエニグマを切るロイド。

エリィ「えっと、何だったの？」

ロイド「ああ・・・・」

ロイドはヨナからの話をエリィたちに説明した。

エリィ「なるほど」

ランディ「ったく、フザけたガキだぜ。しかも確実にこちらの足元を見てやがるな」

ティオ「・・・・でも、とりあえず行ってみた方が良さそうですね。私の助けが必要みたいですし逆にこちらが彼の足元を、見ることもできるかもしれません」

ランディはヨナの依頼に少し不機嫌になり、ティオはヨナとの駆け引きにはいろうとしていた。

クロウ「でも、ヨナはティオに直接連絡してこないんだ?ロイドを通してだったら二度手間になるのにさぁ・・・・」

ティオ「恐らく、悔しいんだと思います」

クロウ「悔しい・・・・?」

ティオ「落ちゲーで徹底的に負かしたばかりですから」

クロウ「そうなのか、何というか子供だなぁ」

ティオ「基本的に甘えん坊ですから。それはともかく他の用事が無ければヨナの所に行ってみませんか?」

住宅街の一角からジオフロント区画に入るための入口がある。そこからロイドたちはヨナのところへと向かうのであった。

第57話～ヨナの依頼～（後書き）

ノドに風邪菌がついたみたいで、キーボード打ちながら咳がゲホゲホ出るので打ち間違えが多くて困ります。誤字脱字があったら教えてください。

第５８話～ヨナの依頼内容～

～ジオフロント内・ヨナの部屋～

ヨナ「お、よく来たじゃん」

ヨナは座っていた椅子を回転させてロイドたちのほうを向く。

ロイド「よく来たじゃん、じゃないだろ」

ティオ「私の助けが欲しいみたいですが、一体どのような用件ですか？」

ヨナ「いや～じつはさ。ハッキングの手伝いをアンタにして欲しいんだよね」

ティオ「……帰ります」

ヨナの返事を聞いた瞬間、ティオは呆れた顔でヨナに背を向けた。

ヨナ「ちょ、ちょっと待ったぁ。どうしていきなり帰ろうとするんだよ？」

ロイド「そりゃ、当たり前だろ」

ランディ「ったく、ふざけたガキだな……」

エリィ「いきなり犯罪を手伝えというのは、少し乱暴すぎると思

うんだけど」

ヨナ「だから別に、今のところは犯罪じゃないんだってばっ！それに企業とかＩＢＣとかに仕掛けるわけじゃねーっての！ちょっと厄介な相手の尻尾を掴むってだけの話さ」

ヨナ必死の言い訳をして犯罪ではないことをアピールする……。

ティオ「厄介な相手……？」

ヨナ「おっ、喰いついたな？あのさ、とりあえず話だけでも聞いてくんねーか？アンタも絶対に興味がある話だと思うし」

ティオ「……分かりました。ただし、つまらない話の場合少し痛い目に遭ってもらいます。『ポムっと！』で２０連鎖くらい喰らってもらうとか」

ヨナ「本当にやられたら屈辱的すぎるんでマジでカンベンしてください」

ティオの言ってた落ちゲーと言うのは『ポムっと！』と言うゲームらしく、本当にヨナのトラウマとなっていたみたいで少し痛い目の内容を聞いて青ざめた表情を浮かべた。

ティオ「仔猫（キティ）……？」

ロイド「可愛らしい名前だけれど、本当にそんなハッカーがいるのか？」

ヨナ「ハッ、嘘ついても仕方ないだろ。幾つかの会社にハッキン

グしていたら、いきなり何者かに追跡（トレース）されたんだ。そんときは慌てて侵入経路を切断して、なんとか逃げてきたんだけれどその時に、こっちを小馬鹿にするように仔猫（キティ）っていうＨＮ（ハンドルネーム）を送り付けてきたんだ。それ以来たまにこっちの仕事にチョッカイだしてくるんだよ」

ロイド「う、うーん……」

エリィ「聞いた話だと、ハッカーというのはとても珍しい存在らしいけれど……本当にあなた以外にもクロスベルにそんな人がいるの？」

ヨナ「ああ、ぜってー間違いないね！」

ヨナの話を聞いてもロイドとエリィには真実味を帯びないらしくヨナは更に力説した。

ヨナ「そりゃあ、最初は驚いたぜ。ボクに匹敵するぐらいの天才ハッカーがもう一人いるなんてさ」

ティオ「……匹敵するというよりも、どう考えても仔猫（キティ）のほうが腕は上だと思いますが……」

ヨナ「うぐっ……」

ティオ「まあ、あなたの本来の専門はシステム言語の開発ですし、ハッキングで負けたからといって気落ちしなくてもいいのでは」

ヨナ「よ、余計な慰めはいいんだよっ！と、とにかくボクとしてはそいつに一矢報いてやりたいんだ。何とかアドレスを割り出してアクセスポイントを掴んでやる。その手伝いを頼みたいんだよ！」

ティオ「……ふむ」

ヨナの言葉に少し考え込み……。

ティオ「今日、仔猫（キティ）がネットに現れるという保証はあるんですか？」

ヨナ「こっちもそれなりに、分析と対策をしてきてるんでね。どうやら仔猫はいつもネットに張り付いているわけではないが、ヤツが興味を引きそうなネタをネットにバラ撒いておいたんだ。今までの傾向からして現れる確率は９０％。これを逃す手だけはねーだろ？」

ティオ「……なるほど。となると、どちらか片方が囮役になって仔猫をおびき寄せる。その間、もう片方が別のアクセスポイントから仔猫の侵入経路を割り出す。それを何度か繰り返して、仔猫を追い込んでいく……そういった段取りでしょうか？」

ヨナ「ハッ、さすがだぜ。２対１なら仔猫を捕まえられるだろ」

ティオ「２つ問題が……」

ヨナ「えっ」

ティオ「まず、ハッキングの支援をするのに、適当な端末が必要ということです。支援課の端末はリスクを考えると使用したくありませんし」

ヨナ「だったら、丁度いい場所がある。ジオフロントＡ区画の下

層に『第3制御端末』ってのがある。ここことはコアルーターが別だから挟み撃ちにはうってつけのハズさ」

ティオ「なるほど……」

ヨナとティオの会話について行けない四人と、何かを考え込んで今まで会話に加わらないクロウ。

ティオ「ただ、もう一つはこの忙しい時期にそれなりの時間を取られるということです」

ロイド「それは……」

エリィ「ちょっと問題ね」

ランディ「昨日のレースで午後の時間を取ってしまったしなぁ」

ヨナ「おいおい、そりゃあないぜ。支援要請ってのはいちいち受けなきゃならないモンなのか」

ロイド「うーん、でもなぁ……」

ティオ「なので、この件は私一人で受けます。役割分担を決めただけです。ロイドさんたちはこのまま支援要請を続けてください」

ランディ「だが、そのもう一つの端末ってのが、駅前のジオフロントの奥にあるんだろ？さすがにちょいと、危なくないか」

ティオ「まあ、なんとかなるのでは……」

エリィ「ティオちゃん……」

ロイド「……ならこうしよう。僕がティオに付き添うから、ランディとエリィは警察本部の手伝いに回ってくれないか？」

ティオ「え……」

ランディ「おお、それはいいじゃねぇか。さすがにティオすけ一人だけ行かせるってのもアレだしなぁ」

エリィ「そうね、私もそれは反対。本部も忙しいでしょうから雑用は幾らでもあるでしょうし」

ティオ「で、でも……」

ヨナ「いいじゃん別に。遠慮することねーだろ？アンタってそういうの気にするタイプだっけ？」

ティオ「……【キッ】」

ヨナ「わ、わっ、なんでそんなに怒った顔してるんだよ～？」

ティオ「……分かりました。では先にほかの用事を済ませてしまいましょう。一度始まったら夕方まで時間を取られそうですし……」

ロイド「ああ、そうだな。そういえばクロウはさっきから黙ったままだけれど調子悪かったりするか？」

クロウ「いや大丈夫だよ。考え事をしていただけさ。要請のほうに回ってるよ。ミコトの様子も見ておきたいし……」

ロイド「そうか、分かった。ランディはサボったりするなよ？」

ランディ「ギクッ。や、やだなぁ。そんなことあるわけないじゃないか」

エリィ「一応監視しておくから。ティオちゃんも気をつけるのよ」

ティオ「はい、エリィさんも……」

ヨナ「それじゃあ向こうの端末についたらエニグマに連絡くれよ」

ロイド「一般の人に迷惑かけないようにね」

ティオ「それは大丈夫かと。ネットという水面下で気づかれないように鬼ごっこをするだけですから」

第５８話～ヨナの依頼内容～（後書き）

クロウが空気なのは何回目でしょうか。当然の如く、仔猫の正体をクロウは知っています。

閑話～仔猫追跡・裏～（前書き）

オリジナル7割と原作3割です。後付設定でクロウもネットの凄腕ハッカーとかどうでしょう。

あと支援課のビルがどうなっているの？っていうツッコミも無しの方向で。

閑話～仔猫追跡・裏～

ロイドたちと別れた三人は、ジオフロントから住宅街へと移動した。

クロウ「さてと……」

エリィ「クロウ？あなたサボる気ね？」

クロウ「ミコトの様子を見に行こうと思っただけだが、なんなら一緒に見に行くか？三人で行動したほうがエリィも監視しやすそうだし……」

エリィ「そ、そうね。そうしようかしら」

ランディ「おいおい、仕事熱心なのはいいことだけどクロウと一緒にいてもなんにもならんと思うけど……」

エリィ「あなた……クロウの何を知っているの？」

ランディ「い、いやぁ、さて一緒に行こうか」

ランディはクロウの過去を知っているがエリィは、特務支援課としてのクロウしか知らないわけでこのままでは埒があかないと考えたランディは話を切り上げるのだった。

クロウ「まったくランディときたら……仕方がないんだから」

話しつつ支援課のビルまで戻ってきた三人だった。そしてクロウ

とミコトの部屋に入る。ミコトはクロウと一緒の部屋にいるわけでベッドは違うが、よく寝ていた。

エリィ「そういえば、クロウの部屋に入るのは初めてかもしれないわね」

キョロキョロと周りを見渡しながらエリィが呟く。

クロウ「珍しいもんなんてありはしないが……」

ランディ「どこかに隠してないか？アブナイ物とか……」

クロウ「それはそこのクローゼットの裏に……」

ランディ「えっ……」

冗談だと思ってクローゼットの裏を探すとそこにはもう一つの扉があった。

エリィ「これは一体……」

クロウ「開けてみるといいさ。ただしあまり言い広めない方向でならオッケーさ」

ギギギィーッと、重厚な扉を開けてみるとそこには、ヨナの部屋にあったような端末の束が重苦しい雰囲気を漂わせながらあった。

ランディ「こ、これは予想の遥か上を凌いでいるな……。ちなみに聞いておくがこれは？」

クロウ「ん？ハッキング用の端末だよ。気付かなかった……？」

二人は固まり、クロウはそれをあっさりと告げる。

クロウ「仔猫捜索の様子も見れるけれど……見てみる？」

更に衝撃発言を加える。

ランディ「俺はこれを見せられたときにもう驚かないぞって思ったが、他にも驚嘆することがあったとは……」

エリィ「私も、ティオちゃんとヨナがハッカーってだけで驚いているのに……。クロウもその類（たぐい）だったなんて」

ミコト「兄様……？帰ってきていたの？」

弱々しいミコトの声が扉の外から聞こえてくる。

クロウ「起こしちまったか？寝てみて気分はどう？」

ミコト「うん、万全まではいかないけれど大丈夫よ。それにしてもその端末……出来たんだ」

クロウ「ああ、完成した。これがヨナや仔猫（キティ）に勝てる端末だ」

エリィ「ミコトちゃん、大丈夫なの？」

ミコト「はい、大丈夫です。ありがとうございます、エリィさん」

エリィ「それにしてもミコトちゃんの具合の悪さは何が原因なの

？」

ミコト「……」

ミコトを気遣うエリィだったが、これは言っても大丈夫なことなの？と言わんばかりにミコトはクロウを眺める。

エリィ「あっ、もしかして聞いちゃいけないことだったかしら？」

クロウ「……ごめん。今はまだ。でもいつか言える時が来たら話すよ」

エリィ「うん、分かったわ」

ランディ「それにしてもこの端末でクロウの旦那もハッキングしていたとはね」

ちょっと重くなった空気を察してランディが会話を別の話題とした。

クロウ「はは……。まぁ昔、色々と手に職をつけないといけなかったからなぁ。知り合いに頼んだり自分でセッティングしたりしてたらこんな化け物級の端末の出来上がりというわけさ」

少し呆れ気味に加えて少し誇らしげに話すクロウ。

画面内ではロイドとティオが何やら会話しているところを映し出していた。

クロウ「ここの会話も聞けるが……」

ミコト「聞きたいっ……」

ミコトが身を乗り出して話に加わった。ランディとエリィのほうを向くと、二人も頷いたのでポチッと端末を操作して話を聞けるようにした。

～ジオフロントA区画・下層～

ヨナに指示された端末の前に辿り着き、待つロイドとティオ。

ロイド「そう言えば“みっしぃ”だっけか？随分気に入ったんだな。そんなストラップまで付けて」

ティオ「ええ……そうかもしれませんね。私はあまり物に執着しない性質ですけど、不思議とこれだけはずっと持ち続けていますね」

ロイド「これ、ここに来てから買ったものじゃないのか？たしかクロスベルのご当地キャラクターだろう？」

ティオ「これは貰ったものです。5年くらい前に、ガイさんから」

ロイド「……えっ！」

ティオがつけていたストラップがロイドの兄であるガイ・バニングスから貰ったものであることを知ったロイドは驚愕した。

ティオ「ガイ・バニングス。ロイドさんの兄さんですよね？」

ロイド「え。ああ、もちろんそうだけれど。ティオって兄貴と面

識あったのか？」

ティオ「はい」

ロイド「し、知らなかった。なんだよ、もっと早く言ってくれればよかったのに。でも確か、ティオはレマン自治州から来たんだろ？どうして兄貴と……」

その時ロイドにはある日のガイとの会話を思い出す。それは……

幼いロイド「しばらく旅に出るって……そんないきなり。いったいどこに行くつもりなのさ？」

ガイ「レミフェリア公国さ。二ヶ月ぐらいの旅に出る。実はな、とびっきり可愛い女の子をエスコートしながらの旅なんだ」

ロイド「あれはティオのことだったのか」

ティオ「多分、そうです。私が9歳の時レミフェリアにある実家までガイさんに送ってもらった時のことですね」

ロイド「レミフェリア……。ティオの出身はそこなのか」

ティオ「はい。といってもあまり思い入れがある故郷とは言えませんが……。もうほとんど捨ててしまった所ですし」

ロイド「えっ……。その、ティオのご両親は？」

ティオ「元気だと思いますよ……？3年前に家を出てからほとんど連絡を取っていませんが」

ロイド「……」

ところ変わってクロウの部屋。ロイドたちの観察をしている四人だが、その様子は重々しいものになりつつあった。

エリィ「私、少し後悔しているわ……」

ランディ「ああ、実は俺もだ……」

クロウ「そうか。二人はこのまま立ち去ることもできるがどうする？」

エリィ「……クロウは何も思わないの？」

あまりに淡白な言い方に、少しいらだちを隠せないエリィがクロウに詰め寄る。

クロウ「……あっ、そっか。俺もティオの過去を知る一人だからだよ。ガイと一緒に少しの間、過ごしていたからな……」

ランディ「……それにしちゃあ、クロウは暗い顔してるぞ？」

クロウ「それはそうさ。俺はガイとティオの前から逃げたからな」

少し、投げやりな言い方をすると三人は黙ってしまう。

クロウ「それはそうと、今なら聞かなかったことにもできるぞ？」

エリィ「……もう聞いてしまったわ。記憶から消すことはできないじゃないの！」

クロウ「暗示をかけてティオの過去話に蓋をすることは出来るが……？」

ランディ「それには副作用はないの……か？」

エリィ「ランディっ！」

クロウ「無い。俺がその記憶の蓋を外さない限り、思い出すことはない。偽りの記憶で二人は支援要請をしているとでも上書きしておこう。それでいいか？」

ランディ「俺は構わない。この話はティオすけから聞くときに最初にしたい」

エリィ「……私も構わないわ。ティオちゃんがいずれ話してくれるときに聞くわ」

エリィとランディがティオを仲間として考えていることが、よく理解できたクロウは暗示をかけることにした。

クロウ「こんな時にワイスマンの知識が活用できるとは。ハハハ……」

エリィ「……」

ランディ「……」

エリィとランディに暗示をかけた後、ビルをあとにして仕事をしにいった二人だった。

クロウ「……」

ミコト「兄様、これでよかったの？」

クロウ「ああ、俺が招いた結果だ。二人の意見を尊重すべきだよ。それはそうと仔猫追跡の様子を見ますか」

ミコト「うんっ」

ミコトはクロウの首にしがみついてそのまま部屋に向かった。そこではヨナとティオが仔猫（キティ）を追い詰め、一瞬の隙をついてヨナが掴んだ所を見ることしかできなかった。

ミコト「……最大の山場が見れませんでしたね？」

クロウ「そうだね。でも……」

ミコト「……？そう言えば兄様もハッカーなら呼び名は何て言うんです？」

クロウ「ん？言ってなかったっけ。昏睡（ノイジー）って言う名さ」

ミコト「……」

クロウ「俺が付けたんじゃないから！」

ミコトが生暖かい目で見るから少し、ムキになって言い返すクロウだった。

クロウ「それはそうとロイドたちと合流しようか。ミコトも具合良くなったみたいだし、一緒に行くかい？」

ミコト「ええ、そうします」

クロウ「それにしても……仔猫（キティ）の腕も落ちちゃいねえなぁ。ハッキングの仕返しか、さすがだねえ……レン」

ロイド達が支援課に戻ってきたが、その手には報酬の記憶結晶があった。この中にはどんな情報が収められているのだろうか。

閑話～仔猫追跡・裏～（後書き）

エリィとランディは知ってしまいましたが、クロウの暗示によって蓋をされた状態です。

クロウの暗示スキルは結社にいた時代にワイスマンと一緒に学んだ暗示。

ハッキングスキルは生きている時に磨いたと言う形をとりたいと思います。

第５９話～記憶結晶～（前書き）

まぁまぁ原作通りに進ませます。
最後はオリジナルですが……

第５９話～記憶結晶～

ロイドたちと合流した後、ヨナの報酬であるメモリークォーツを解析してみる。

カタカタカタカタ……。

【概要・沿革】

【武装・勢力範囲】

【マルコーニ会長】

【ガルシア・ロッシ】

【ハルトマン議長】

と言う項目が現れた。一つ一つ見てみることにした。

【概要・沿革】

クロスベル自治州に存在する最大のマフィア組織。その歴史は古く、自治州が成立した七曜暦１１３０年前後に遡ると思われる。『商会』の名を冠することからも分かるように当初は帝国―共和国間の密貿易で財を成し、自治州における暗部を一手に引き受けてきた。現在その非合法なビジネスは多岐に渡り武器の密貿易、盗品売買、地上げ、総会屋、ミラ・ロンダリング、各種風俗産業の運営、猟兵団の仲介斡旋などが確認されている。

有力議員との密接な関係を持っているため、その犯罪行為の多く

は摘発をまぬがれており、仮に構成員が逮捕されてもすぐに保釈されてしまう事が多い。

ロイド「よくまとまった情報だな……」

クロウ「しかし改めて考えるととんでもないことをやってきているんだな」

ランディ「ああ、非合法のビジネスで儲けまくっているみたいだし……」

情報がよく纏められていることと、知った情報がありえないことなのでかなり呆れ気味だった。

【武装・勢力範囲】

構成員はおよそ３００人。自治州内外の末端構成員も含めると５００人以上になると推測される。猟兵団や、周辺国の軍隊経験者も多く最新の導力兵器を密貿易しているため、相当の戦力を保持していると思われる。

広域暴力組織でないにも関わらずその影響力はクロスベルに留まらず、帝国・共和国の有力者との繋がりも深い。

最新の情報では、対抗組織である黒月（ヘイユエ）に押され気味だったが軍用犬を導入することで戦力を補強し、再び優位を取り戻したと目（もく）される。

ロイド「こうしてみるとずいぶんと大きな組織だ。軍隊経験者も多いみたいだし」

ランディ「ああ。前に下っ端と戦ったときに、かなり手強かった

のも納得だ」

ティオ「でもあの時の軍用犬をそのまま使用しているみたいですね。私たちがあの時捕まえたのは無駄になったわけですし……」

エリィ「そう考えると空(むな)しいわね……」

【マルコーニ会長】

ルパーチェ商会の代表にして、マフィア組織を支配している人物。ルバーチェの会長としては5代目だが正式な代替わりをしたのではなく、8年前謀略と裏切りによって4代目を追い落として組織を掌握した。

帝国系移民のためかどちらかというと、帝国派議員との関係を重視しており特にハルトマン議長との繋がりは深い。一方共和国方面のパイプも確保しておりその意味では、クロスベルという特異な地域で抜け目なく立ち回っていると言えるだろう。なお帝国貴族への憧れがあるらしく、悪趣味な成金趣味の服装・調度を好む模様。

クロウ「一度見たら忘れられない恰好なコト……」

ティオ「ユーモラスな外見ですが、やっていることはかなりえげつないです」

【ガルシア・ロッシ】

ルバーチェ商会の営業本部長にしてマフィア組織の若頭と目(もく)されている人物。猟兵団『西風の旅団』の部隊長だったが8年前、マルコーニが先代会長を追い落とすときに実行部隊として雇われた。

その後、マルコーニに引き抜かれる形で猟兵団を抜けてルバーチ

ェ商会に入社。マフィアの武装化・戦力強化に貢献する。猟兵時代は≪キリング・ベア≫と呼ばれその巨体を生かした軍用格闘術をもって数多の敵兵を屠(ほふ)ったとされる。

エリィ「あの若頭、猟兵団の出身だったのね」

ティオ「『西風の旅団』って聞いたことあるような……」

ランディ「……大陸西部において最強と謳われた猟兵団の一つだ」

クロウ「そこの部隊長をやっていたということは戦闘能力もかなり高いと見ていいだろう。≪キリングベア≫ってのも何度か聞いたことあるし……」

ロイド「そうか、でも二人とも詳しいんだね？」

ランディ「俺は昔、噂で聞いただけだ……」

クロウ「俺も旅をしていたときに、近くの地域にいると言う情報を聞いただけさ」

ミコト「兄様……」

【ハルトマン議長】

クロスベル自治州議会を議長を務めている大物政治家。自治州政府代表の一人でもあり、帝国派議員のリーダーも務めている。帝国貴族に連なる名門の出身であり、自治州にある保養地ミシュラムに贅を尽くした巨大な邸宅を構えている。

マルコーニ会長とは旧知の仲であり各種利権や密貿易、ミラ・ロ

ンダリングにおいて密接な協力関係にあるとされる。
なお昨年非公式ではあるが、帝国宰相ギリアス・オズボーンと会見し、その権威を内外に改めて見せつけた。

ロイド「この人はハルトマン議長……」

ランディ「なんつーか、議長というよりも帝国の大貴族って感じだ。しかしあの≪鉄血宰相≫と会見したというのはマジなのか？」

エリィ「ええ。非公式ではあるけど去年の春頃、オズボーン宰相がクロスベルを訪れたらしいの。おじいさまには会わずハルトマン議長とだけ会談して帰国したらしいけど……。一時期、各国の政界ではその話で持ちきりだったみたい」

ロイド「そんなことがあったのか。≪鉄血宰相≫……。相当有名な人みたいだけど」

クロウ「目的は何だったのか、はっきりしないことには何とも言えンが……」

ロイド「それにしてもこの情報を経て色々と分かってきたね」

エリィ「ええ。冷酷かつ抜け目のないトップと歴戦の猟兵だった若頭の存在……そしてハルトマン議長との関係ね」

ランディ「しかもその議長とやらは≪鉄血宰相≫と何かしらの関係があるんだろ？確かにクロスベルの警察が手を出せないってのも納得だぜ」

ロイド「そうだな……」

ティオ「……待ってください。渡された記憶結晶の中に隠されたデータがありました」

ここで何かに気づいたティオが端末に目をやりながら声を出す。

ロイド「隠されたデータ……？」

ランディ「隠したって言うならあのガキが隠したんじゃないのか？」

ティオ「ええ、どうやら私が気づくかどうか試そうとしたらしいですね。……あとでおしおきしないと」

クロウ「隠してあったデータの内容は見れるか？」

ティオ「ええ。お茶の子さいさいです」

カチカチカチ……。とスクロールしていった先には驚愕のデータが。そこには……。

【黒の競売会（シュバルツ・オークション）】の文字が記載されていたのだ。これには支援課の面々も驚いた。

エリィ「これは黒の競売会……？」

クロウ「へぇ……」

ロイド「ルバーチェ絡みで出てくるとは……。とにかく中身を確認してみよう」

【黒の競売会（シュバルツ・オークション）】

毎年、創立記念祭最終日にルバーチェが開催しているオークション。保養地ミシュラムにあるハルトマン議長の大邸宅を借り切って開催されている。出品される品はどれも一流のものばかりだが、盗品や賄賂・脱税・横流しなどに関連する美術品・絵画・装飾品であることが多い。

またクロスベルのみならず、周辺諸国の貴族や資産家も多く招待され、裏の社交界的な催しとしても機能している。ルバーチェにとっては貴重な資金源であり、ハルトマン議長にとっては各国の有力者と繋がりを持つ絶好の場となっているようだ。

なお、オークション会場の警備はルバーチェの構成員が厳重に行なっており≪金の薔薇≫が刻まれた招待カードがない限り中に入ることはできないらしい。

ロイド「こ、これは……！」

エリィ「こんなことが毎年行なわれていたなんて……」

ティオ「で、でもちょっとおかしいです。秘密にしている割にはかなり大規模な催しですけど」

ランディ「いや、警察とマスコミには厳重に規制がかかっているんだろ。でなけりゃこんなもん、すぐに表沙汰になっちまう……」

クロウ「そうだよ……。だよね、課長？」

課長「そのとおりだ……」

ロイド「……！？」

課長は二階の自室から降りてきて、ロイドたちの前に姿を現した。

エリィ「お、お疲れさまです」

課長「……やれやれ、まさか自力でそこまで辿り着いてしまうとはな。まぁいい。ここじゃなんだからそっちの部屋で一通り話してやろう」

～課長の部屋～

ロイド「それじゃあ、あのファイルに載っていたことは事実だと言うことですか？」

セルゲイ「ああ、そうだ。誰が調べたモンか知らんがなかなか的確にまとめてやがるな」

エリィ「で、でも警察の上層部では全て掴んでいるんですよね？」

セルゲイ「ああ、全員とまではいかないが。警部クラス以上はもちろん、一課の連中は全員知っているはずだ。遊撃士協会だって、受付やアリオスあたりだったらとっくに承知しているだろ」

ロイド「くっ、これも≪壁≫ってやつですか」

セルゲイ「ああ……とびきりデカイ≪壁≫だ。基本的に俺は、お前たちの行動に制限を付けるつもりはないが……黒の競売会（シュバルツ・オークション）にだけは手を出すのを止めろ。お前たちには荷が重すぎる」

ロイド「で、でも……」

ランディ「おいおい、課長。言葉間違えてんじゃねえよ。俺たちに荷が重いってより、警察そのものが動けねぇんだろ？」

セルゲイ「……」

エリィ「それだけの有力者を招待して、しかも実質的な主催者の一人があのハルトマン議長……そんなの動けるはずがないわ」

ティオ「民間人に危険が迫らない限り、遊撃士協会も動けませんし……誰も手が出せないというわけですか」

ロイド「だ、だからと言って……」

セルゲイ「……悔しい思いをしているのはお前たちだけじゃない。特に一課は毎年、歯軋りするような思いだろうさ。非人道的な催しだったら、それこそギルドに動かれる前に意地でも突っ込むところだがどうやら出品物が“黒い”以外は豪華なパーティーってだけらしいからな」

クロウ「……」

セルゲイ「実際、下手に手を出しちまったら支援課ごと潰される可能性は高い。だから今回ばかりは俺もお前たちを止めざるを得ない」

ロイド「……」

エリィ「……」

ランディ「ハッ……」

ティオ「やれやれです……」

四人の表情は晴れない……。

セルゲイ「納得しろ、とは言わん。だが現実を直視し、自分たちに何がどこまで出来るか見極めるってのも時には必要だ。そしてその悔しさを忘れない限り、いつかきっとチャンスは来るだろう。お前たちが諦めなければ、な」

ロイド「……わかり、ました。この件に関しては……手を出すのを止めておきます」

エリィ「ロイド……」

ティオ「ロイドさん……」

ランディ「やれやれだぜ……」

こうして記念祭3日目は過ぎていった。ティオの過去、ガイ・バニングスの話。仔猫という謎のハッカー、ルバーチェに関する詳細な情報。そしてクロスベルと言う歪みを体現したかのような“黒の競売会”それらがグルグルと頭をよぎり支援課のメンバーは眠りに落ちていった。

～真夜中・課長の部屋～

コンコンッ……。課長が寝ずに考え事をしていたとき扉がノック

された。

セルゲイ「おう、開いているぜ……」

クロウ「失礼するよ。課長の自室に行ったらまだいなかったから、もしかしてと思ってこっちに来たよ。今日はお疲れさん。これ飲む？」

コップを二つとウイスキーを持って課長を労いにきたクロウだった。

セルゲイ「スマンな……、。ちょうど煮詰まっていた頃だったからありがたい」

クロウ「記念祭……か。今年も競売会開かれるみたいだ」

トクットクッ……。コップに注ぎながら課長に告げる。

セルゲイ「そうか、それにしてもクロウの情報網は広いな。今回はどこからの情報だ？」

クロウ「ん、人形工房の爺さんからの情報だから確かなものだよ」

セルゲイ「へぇ～知り合いだったとはな。ンクッ……。おっこれ、旨いな」

クロウ「はは、どうやって知り合ったかは伏せておくが今回も大金が動きそうだ」

セルゲイ「どのくらいだ？」

クロウ「数千万ミラ……だ」

セルゲイ「そいつは……。まさかとは思うがクロウ。お前は……」

クロウ「都合が付いたら行くつもりだ。潜入というよりは堂々と真正面から行こうと思ってる」

セルゲイ「お前のことだから止めても仕方ないとは思うが、万が一ってこともあるし……俺としてはロイドたちにも言ったが止めておけと言いたい……」

クロウ「あんがとよ……。だがな、少し嫌な予感が働いているのさ。それに……」

セルゲイ「それに、何だよ？」

クロウ「あいつらもミシュラムに行きそうで……」

セルゲイ「なっ……あり得ないとは思いたい。だが何が起こるかわからないからな、クロウにそこらへん全部丸投げしてもいいだろうか？」

クロウ「ああ、良いよ。旧知の仲じゃないか……」

そう言うと飲みかけのコップをチリンと鳴らして飲み干した。

クロウ「これはここに置いておくから飲んでもいいが、飲みすぎないように……！」

セルゲイ「おうっ、おやすみ……」

半分ぐらい残っているウイスキーを、課長の机の上に置き部屋を後にした。

ロイドたちと合流する前に、ヨルグ爺さんから連絡があって競売会へのカードを手に入れたことを伝えられた。これでミシュラムで参加することができる……と仄(ほの)かに思っていたクロウだった。

最終日にはいったいどんなドラマが待ち構えているのだろうか。

第５９話～記憶結晶～（後書き）

肺炎の一歩手前まで逝きました。冬になりつつありますので、皆様も体調に気を付けてお過ごしください

第６０話～迷子の……？～（前書き）

人物紹介

ソフィア・ヘイワース＝ハロルドの奥さん。

コリン・ヘイワース＝ハロルドとソフィアの息子。

第60話～迷子の……？～

フランからの連絡で貿易商ハロルドさんの子供が、迷子になったという報告を受けたのでロイドたちは話を聞くため行政区の噴水広場にやってきた。そこには憔悴しきったハロルド夫妻がベンチに座っていた。

ハロルド「皆さん……！」

ロイドたちに気づいたハロルドが声を上げる。

ソフィア「あ……」

ロイド「どうもお久しぶりです。その、パレードを見物していたらお子さんとはぐれてしまったとか？」

ソフィア「そ、そうなんです……！私がしっかりしていなかったからあの子が……コリンが……」

ハロルド「落ち着きなさい。すみません……息子とはぐれたのは今から3時間ほど前。この広場でパレードが通過するのをちょうど見物していた最中でした。すぐに妻が気付いて2人でこのあたりをひと通り捜したんですが見つからなくて……。思い余って警察を頼らせていただきました」

エリィ「いえ、よく相談してくださいました。……どうやら私たちで手分けして捜したほうが良さそうね？」

ロイド「ああ、巡回中の警察官も今日ばかりは忙しそうだしな。

そうなると……割り振りを考える必要がありそうだ」

ティオ「そうですね……」

ランディ「別々に探して通信で連絡を取るのが一番だろ」

ソフィア「わ、わたしも手伝わせてください！でないと、あの子が……コリンがっ」

ハロルド「……落ち着きなさい。私たちはいったん、住宅街にある自宅に戻ります。その近辺の捜索は私たちがやりますので」

ソフィアが我が子を想うあまり興奮してしまうが、それを落ち着かせるためにも自宅のほうに戻ったほうがよさそうと判断するハロルド。

ロイド「なるほど……そのほうが効率的かもしれませんね。自分たちは手分けして他の街区を捜索してみます。それから……息子さんの手がかりになるものを何かお持ちですか？写真があれば一番ですけれど」

ハロルド「ああ、ちょうど記念祭で撮った写真を現像してもらったんです」

ハロルドは、自分の懐から写真の入った封筒を取り出した。

ハロルド「これです……」

エリィ「可愛い……」

ティオ「男の子なのに美人さんですね」

ソフィア「ううっ……コリン」

ハロルド「ほら、いったん家に戻ってコリンが帰ってくるのを待とう。ひょっとしたら家の方に戻っているかもしれないし……」

ソフィア「でも……でも……！あの時みたいなことがあったら……」

ハロルド「大丈夫だ。もう絶対にあんなことは……！」

ハロルド夫妻には何か事情があるみたいだ。

ハロルド「すみません、取り乱してしまって……。その、ちょっと事情がありまして」

ロイド「いえ、気になさらないでください。そうだ……写真の他に普段コリン君が持っているような品物はお持ちではないですか？うちには警察犬がいますので匂いで辿れるかもしれません」

ハロルド「おお……」

ソフィア「じゃ、じゃあこれを。あの子が持ってたヌイグルミです」

ティオ「あっ……みっしぃのヌイグルミですか」

ランディ「焦ったってしゃねえ。街の中にいる限りは安全だろうし、俺たちにドンと任せてくださいよ」

ハロルド「は、はい。それでは皆さんよろしくお願いします」

夫妻は一礼してベンチから立ち上がり、自宅がある住宅街へと向かって行った。

ティオは思念波でツァイトを呼び寄せこれで準備できた。クロスベルの捜索をどう分担するかに話は移った。

話の結果、ティオ&ツァイト。ロイドとランディ、エリィは他の街区を手分けして捜索にあたることにした。クロウはミコトと一緒に空港や駅の中など特殊な場所を捜索することになった。

第６１話～迷子の……？～

クロウ「……」

ハロルド夫妻と別れたあとのクロウは、何やら深い思考の中をまどろんでいるようだった。

ミコト「……様？……兄様っっ！」

耳元で大声を出されてはじめてクロウをミコトが呼んでいることに気づいた。

クロウ「っ。あぁ、ミコトか……。どうしたの？」

ミコト「ハロルドさんの捜索依頼の途中から、兄様の様子がおかしいことに気づいて……それで」

段々と声が小さくなっていくミコトを見てクロウは、顔の位置までしゃがんで話しかける。

クロウ「ごめんなぁ。ちょっと考えていたというか昔のことを思い出していたんだ」

ミコト「昔……ですか？」

クロウ「ああ、ハロルド夫妻の様子が途中おかしくなっていただろ？『コリンが…』って。あれはもう一人子供がいたんだ……」

ミコト「えっ……で、でも」

クロウ「うん、あの場所にはコリンしかいなかった。そう、昔起きた大惨事で一人の娘を失っているんだよ。いや、行方不明になったと言ったほうが正しいだろうか。その子は偶然にも助けられてクロスベルにいるというのに……」

ミコト「えっ、最後のほう聞こえなかったんですが……」

クロウ「いや、捜索を始めよう。まずは空港に行ってみようか？」

ミコト「……はい、兄様。見つかるといいですね」

ああそうだな。と頷いて空港内に入っていった。空港の中は閑散としていて利用者はほとんどいなかった。ちょうど暇なときなのかもしれない。受付の女性に尋ねてみることにした。

クロウ「あの……すみません」

受付嬢「はい、クロスベル空港へようこそ。何か御用ですか？」

クロウ「ええ、特務支援課の者なんですが小さな男の子を捜していましてね。こんな子です」

そう言って写真のコリンを見せた。

受付嬢「……申し訳ありません。そのような子は見たことがありません。小さい男の子が一人でここにいたら人目をひきますし、見落としたということもないと思います」

クロウ「そうですか。分かりました。今の子供を今後見つけたときには支援課のほうに連絡してくださるとありがたいです」

受付嬢「分かりました。ご苦労様です……」

空港にはいなかった。それで駅のほうに向かうことにした。駅に向かっているときにランディから連絡があった。

ランディ「よくわからねぇが、いったん支援課のビルまで集合だ。何か進展があったらしい」

クロウ「？よくわからんが了解した。すぐ戻る」

支援課のビルに戻ると、クロウにはよく見慣れた格好の女の子が端末で何かを検索していた。

ロイド「君は一体何者なんだ？有名な人形師のお孫さん……ってわけじゃなさそうだな？」

レン「私はこの地においてただの傍観者に過ぎないわ。仔猫（キティ）と言う名のね」

ロイド「……やっぱりか」

レン「うふふ、昨日の追いかけっこはスリルがあってドキドキしちゃった。ソバカス君も結構やるけれどあのお姉さんも相当なものね。でも……」

ロイド「どうかしたのか？」

レン「あのあと、誰かに見られている気がしてログを確かめたら昏睡（ノィジー）って言う名前だけ残されていたんだよね。レンより相当の凄腕……？まぁいっか……」

エリィ「ただいま。言われたとおり戻ってきたけれど……あら、クロウも戻っていたのね。全然気がつかなかったわ……」

ティオ「その子は……」

ランディ「確か人形工房の孫娘だったか？」

ロイド「ああ……ちょっと事情があってね」

レン「見つけた！“ライムス運送会社”の運搬車が３０分前に駐車しているみたいね。次の運搬先はベルガート門。運搬車の通信番号は……これでいいみたいね。この通信番号に連絡入れてみて。多分あの子の行方がわかるはずよ」

ロイド「……お見事」

エリィ「あの……どうなっているの？」

ティオ「なるほど……あなたが仔猫（キティ）なんですね？」

レン「昨日はどうも。でもそれは後回しにしたほうがいいんじゃないですか？」

ティオ「……まぁ確かに」

ロイドはレンが調べた運送会社の通信番号に連絡を入れてみる。

青年の声「もしもし、どちらさま？」

ロイド「えっと、クロスベル警察・特務支援課の者ですが……」

青年の声「よ、良かったぁ。警察かギルドのほうに連絡を入れようかと思ってたんだ。でもオレ、どっちの連絡先も知らなくてそれで親父に連絡して……！」

ロイド「お、落ち着いてください。慌てているみたいですけど、一体何があったんです？」

青年の声「そ、それが。お、男の子がどこかに行っちゃったんだ」

ロイド「え……」

青年の声「いまオレ、西クロスベル街道の途中で停車しているんだけど……物音がすると思って荷台を確かめたら、小さな男の子がいて……！なんかこのままベルガード門に行くのもアレだし会社に相談しようかと思ったんだけど、そしたら通信している間にその子、どこかに行っちゃって！！」

エリィ「どうかしたの？」

ロイド「ああ、まずいことになった」

ロイドは手短に状況を説明した。

ロイド「大至急そちらに向かいます。あなたはそこを動かないでください」

青年の声「わ、分かった。急いで頼む！」

ロイド「よし、西口に向かおう。それとレンちゃんは……」

レン「付いていく。足手まといにならないからレンも同行させてちょうだい」

ティオ「ここにいたほうが安全だと思いますが……」

レン「あの子の行方を突き止めたのはレンよ。それに最後まで見届ける必要がある。たとえどんな運命があの子に降りかかったとしても……」

ロイド「君が普通の子でないことは分かった。けれど無茶はしないこと。それだけは守ってくれ」

レン「分かったわ、それと私のことは呼び捨てで構わないわ」

ロイド「はは、了解だ。じゃあ西クロスベル街道に出てコリン君を捜すんだ」

クロウ「……了解だ」

レン「……」

第６２話～迷子の……？～（前書き）

人物紹介

ビリー：コリンが紛れ込んだとされる運搬車を運転していた人物。

今までクロウとミコトの技を放置していた結果がこれだよ。名前考えるのに２０分。内容決めるのに２０分。はぁ……。これから近いうちにちゃんとしたクラフトを決めます。

第６２話～迷子の……？～

迷子になった少年コリンを捜して、街道へと足を運ぶ支援課のメンバーとレン。

ロイド「ティオ。念のため周辺を探ってくれる？」

ティオ「了解です。……アクセス……」

魔導杖を使用して周辺を探索するティオ……。その結果は。

ティオ「……どうやら街の近辺にはいないようですね。６０セルジュほど先に運搬車の反応はありましたけれど」

ランディ「ってことは、先に運搬車の所まで行ったほうがよさそうだな」

レン「ふうん、魔導杖か。似たようなものを“教授”も持ってたけれど、エプスタインの人たちも面白いオモチャを作ったものね」

ロイド「教授……？」

ティオ「財団の最新技術の精華と、似たようなものを持ってた……あなた、ひょっとして」

クロウ「レン……これ以上は……！」

レン「っ……。そ、そうね。ごめんおにーさん……」

ロイド「クロウ、お前は何か知ってたのか？」

クロウ「研究段階だったが、ティオの魔導杖と似たものをレンと見た……というだけの事。特別何かを知ってたということではないさ。それよりも先を急いだほうが良いのではないのか？」

レン「ウフフ、そうね。可愛い可愛いあの子がかわいそうなことになる前に……」

ロイド「……もちろんだ」

エリィ「とにかく急ぎましょう……」

６０セルジュほど、進んだ街道の路肩に止まっていた運搬車を見つけた。

ランディ「おっ、いたいた」

ビリー「うううっ……早く来てくれよぉ……このままじゃあの子が……！」

ロイド「おーい！」

ビリー「来てくれたか。良かった……急いで来てくれたみたいだな」

ロイド「いえ、お待たせしました」

運搬車の横に立ち、支援課が来るのを今か今かと待っていた運転

手がそこにいた。

レン「ねえ、お兄さん。あの子がいなくなってから悲鳴や唸り声は聞こえなかった？もしくは何かが崖下に転がり落ちる音とか……？」

ビリー「えええっ！い、いやそんな音は聞いていないと思うけど……」

レン「……だったら、まだ無事の可能性は高いわね。先を急ぎましょう？」

ロイド「あ、ああ……」

クロウ「はぁ～、レン？もっと違う言い方があるだろ……どうして君は……」

レン「な、なによぅ……」

さっさと先を急ぐレンに追い付いてクロウが一言漏らすと、頬っぺたをぷく～っと膨らませて子供らしい表情を垣間見せるレン。そしてそれを見て嫉妬に駆られたミコトはクロウの脇腹を抓る。

クロウ「い、痛っ……！あっ。ミ、ミコト……お前どうして……。ははぁ～ん、嫉妬したか？」

最初、何が起こったか訳が分からない表情をしたクロウだったがレンに構いすぎていたことを見、ミコトがそれを見て嫉妬したことに気づいたクロウはニヤニヤしながらレンとミコトの頭に片手ずつを置き不公平にならないように撫で続けたのだった。

ミコト「もぅ！べ、別に嫉妬したわけじゃないからねっ……！」

レン「うふふ、レンは嬉しーわよ……。おにーさんが構ってくれて」

ミコトとレンはクロウに撫でられた頭を嫌がるわけでもなく、そのまま街道を進んだ。

ロイド「えっと……」

エリィ「いったいこれはどういうことなのかしら……？」

ランディ「幼女にモテモテじゃないかっ……！」

ティオ「……」

他の支援課の面々はいまいち事情が分からず、クロウ達のあとを着いていくがティオだけは何やら不満見え見えの表情をして少し遅れ気味に街道を歩いていた。

街道を歩いていくこと数十分……。警察学校へ行く分岐点へと差し掛かったところで、子供の声が微かに聞こえたような気がした。

子供の声「きゃはははは……」

ロイド「い、今の声は……」

ティオ「南のほうからです」

クロウ「警察学校のある方だな」

ロイド「よし……急ごう！」

レン【無事……みたいね】

クロウ【レン。良かったな……】

レン【おにーさん……うん……気にしてくれてありがとう】

警察学校の方向へ進んでいくとやっと子供の姿が確認できるまでとなった。

ランディ「いたぞ！」

そこには数匹の蝶々と戯れる男の子がいた。写真で見たハロルドさんちのコリン少年だ。みんなはその子が無事にいたことに安堵した。

ロイド「はあ、あれを追ってここまで来ちゃったのか……」

ランディ「ハハ、随分と好奇心旺盛なガキンチョだなぁ」

レン「……」

エリィ「ふふ、それじゃあ保護するとしましょうか」

クロウ「っ。待て、様子がおかしいぞ」

コリンが追ってた蝶々がいなくなり、代わりに現れたのは魔獣だ。

それもコリンを取り囲むように数十体、出現した。いや、数えると18体だ……。

コリン「ふえ……？」

ロイド「くっ、まずい」

ランディ「間に合うか……」

エリィ「この数だと牽制も……」

レン「……っ……！」

クロウ「足止めする。ミコトっ」

ミコト「うんっ……」

一瞬の間にレンは走り込み鎌を投擲して四体倒し、それに合わせるようにクロウは銃を乱射して六体絶命させ、ミコトが投射したチャクラムは四体の魔獣の息の根を止めた。

レン「カラミティ・スロウッ」

クロウ「瞬迅撃（しゅんじんげき）」

ミコト「天羽（てんう）」

そしてレンが自分の腕の中にコリンを抱きしめて魔獣から守る。

クロウ「あとを頼むっ！」

ロイド「任されたっ。いくぞ、みんな……！」

ランディ「おおっ」

ティオ「いきます。“サンダーシクリオン”」

ティオの放ったアーツが魔獣の間で雷（いかずち）となって暴れ回る。

ランディ「こいつはどうだい？“クラッシュ・ボム”」

ランディのクラフト技で魔獣の目を暗闇へと誘（いざな）う効果がある。

効果は絶大だった。目が見えなくては魔獣の攻撃も空（くう）を切るものとなる。すかさずロイドがアーツを放つ。

ロイド「“ヒート・ウェイブ”！！」

炎属性のアーツで地面から沸き上がる炎が魔獣の身を焦がした……。

エリィ「かなり弱ってるみたいね。これで決めるわ。気高き女神の息吹よ、力となりて、我が銃に集え・・・エアリアルカノン」

エリィの必殺技“エアリアル・カノン”が決まった。

第６２話～迷子の……？～（後書き）

≪技紹介≫

レン“カラミティ・スロウ”：大鎌を放り投げ直線上の敵を切り裂く。即死の効果あり。

クロウ“瞬迅撃”：高速で弾丸を撃ち込む。一度に１５体までなら狙いを定め撃ち貫くこと可能

ミコト「天羽」：４枚のチャクラムを同時に投擲し敵を滅殺。

第６３話～迷子の……？～（前書き）

この話は戦闘終了後から始まります。ではどうぞご覧ください。

第６３話～迷子の……？～

ロイド「ふう……」

ランディ「結構危なかったぜ……」

息を切らしつつも魔獣を撃退させることに成功した支援課メンバー。横を向くとレンがコリンを抱いているのが目に映った。

コリン「……」

呆然とし、レンの方向をむいているコリン。

レン「もう大丈夫よ……。コワイ魔獣はお兄さんたちが退治してくれたから……だから安心していいわ」

レンは少し俯き気味にコリンと話していた。

コリン「……ふえっ……うくっ……」

レン「ちょ、ちょっと……」

コリン「ううううっ……うわあああああん……！」

レン「ど、どうして泣くのよ。もう危なくないって言ってるのに。あなたなんか……あなたなんか本当は助けるつもりなんて……ゼンゼン無かったのに」

コリンの泣く声に感極まったのかそれとも……もらい泣きしたのか、レンの声も段々と涙声になってきた。

ロイド「レン……」

ティオ「レンさん……」

レン「バカみたい……！ほんとバカみたい……！見てるだけって決めていたのに……絶対関わらないって決めてたのに……。どうして、どうしてレンは……」

ロイド「……君の事情は知らない。でもきっと君は君の大切なものを守ったんだ。他ならぬ君自身の手で……。その腕に感じている温もりが何よりの証拠だよ」

レン「っ……」

ロイド「不甲斐ないけど俺たちは君の手伝いをしただけだった。でも光栄に思う。レン……君が君の大切にしているものを守る手伝いができて……」

ロイドはレンとコリンの横に片膝を付いて大切にしているものを守ることができ光栄だと言い切った瞬間、レンとコリンは二人とも大声で泣き出した。

ミコト「やれやれ……ですぅ」

クロウ「ああ、あとは……ハロルドさんたちか……。レンはどうするつもりなんだろうか」

ミコトとクロウの会話は四人には聞こえなかったようだった。

～支援課ビル～

ロイドの部屋でコリンは眠っていた。その傍らにはレンがおり、コリンを見守っていた。

コンコン……ガチャ……と言う音がしてロイドとクロウが入ってくる。

ロイド「……寝ちゃったか」

レン「ふふ……可愛い寝顔ね。何の罪も知らない無垢で純粋でまっとうな子。こんなに大きくなったんだ……」

ロイド「さっきその子の親御さんに連絡したよ。大急ぎで迎えに来るってさ」

レン「そう……」

何やら浮かない顔をするレン。

ロイド「君は一番の功労者だ。当然、紹介するのがスジだと思うんだけど……」

レン「必要ないわ。レンの名前も、存在も。その人たちに伝える必要はない」

クロウ「……想定していたとはいえやっぱりか……」

ロイド「クロウ……？まぁあとで聞くとして。レン、君が普通の物差しで計れるようなただの女の子じゃないのは分かった。あの大鎌を投擲する能力。仔猫としてのハッキング技術。その子の居場所を特定した論理的かつ多面的な推理力……あまりに多才すぎて現実味が無いぐらいだけど、君がいわゆる本当の意味で“天才”であることは分かったよ」

レン「ふふっ、お兄さん。やっぱりなかなか、見所があるわね。そう、レンの本質はそこにある。あらゆる情報を取り込み処理し、自らを含めた環境を適切に操作する。戦闘技術も、ハッキングも、博士論文も、人形の操作も、お茶会の作法も、全てはその本質に拠っていると言えるわ」

ロイド「博士論文？まぁそれはいいか。つまり君には分かるってわけだ。何をどうすれば、自分の望みを叶えられるのかを」

レン「クスクス、そうよ。どんな望みでもレンは叶えることができる。正確にはどうやったら世界にレンの望みを叶えさせればいいかが分かる。それがレンの力そのものだから……」

ロイド「……なるほどね。だったら君は一体何を望んでいる？」

レン「……え……」

ロイドの指摘に表情が固まるレン。

ロイド「どんな願いでも世界が叶えてくれるお姫様。でも今の君は、どこに帰ればいいか判らなくて途方に暮れている仔猫みたいに見える。いや……帰るべき場所は、本当は分かっているのかもしれない。なのに幾つもの大きな岩が帰り道を塞いでいて帰れない……

そうなんじゃないのか？」

レン「……」

ロイド「全ては俺の直感と憶測だ。見当違いだったら謝るよ。だが俺たちは特務支援課だ。困っている女の子がいたら、なるべく助けになってあげたいし一緒に帰ることはできなくても、岩を取り除く手伝いぐらいはできる」

レン「ふふっ……。お兄さんは推理だけじゃなくて妄想も得意なのね。あなたなんかに、レンのなにがわかるっての？」

ロイド「わからないさ。それに、君が頼りたいと思っている人は他にちゃんといるかもしれない。でも、転がっている岩は一つじゃないんだろ？俺たちにも任せられるような、そんな手頃なサイズの岩はないかな？」

レン「そんなの……そんなの……。……」

コンコンコンッ。ドアを叩く音が聞こえる。どうやらハロルド夫妻が到着したようだ。

クロウ「レン、どうする？」

ロイド「クローゼットの中に入るか？」

レン「……うん……」

そう言うと駆け足でクローゼットの中に入るレンだった。

ロイド「どうぞ、入ってもらって……」

言い切るか言い切らないかぐらいでハロルド夫妻が駆け込んできた。どうやら本当にいそいできたようだった。少し息が切れていたからだ。

ソフィア「ああ、コリン……」

ハロルド「本当に良かった……」

後からランディたちも部屋の中に入ってくる。

エリィ【あら、レンちゃんは……？】

クロウ【事情があってね、そこのクローゼットの中に隠れている……】

ティオ【どうして……】

ランディ【なんか事情がありそうだな】

ハロルド「皆さん、本当にありがとうございました。なんとお礼を言ったらいいか……このご恩は決して忘れません……！」

ハロルドは深々と頭を下げた……。

ロイド「そんな……どうか頭を上げてください」

エリィ「その、私たちも任務でコリン君を捜しただけですし……」

ソフィア「いいえ、いいえ！皆さんが見つけてくれたなかったらこの子は……コリンは……ううううっ……本当に良かった……」

ソフィアは涙を流してロイドたちに感謝を表した。

ハロルド「大丈夫……もう大丈夫だから……」

ランディ「ふむ……」

ティオ「どうしてそこまで……」

コリン「ん……」

コリンがベッドの中で身じろぎをした。

ソフィア「コリン……」

コリン「あれえ？どうしてパパとママがいるのぉ？」

ソフィア「ああ、コリン……」

ハロルド「……良かった、本当に良かった……！ダメだぞ……！ママたちに心配をかけたら」

コリン「？？？あのね～、あのね～。とってもたのしかったのー！みっしぃのクルマを追いかけて知らないトモダチもいっぱいできて！かくれんぼして、ニモッばっかりのクルマにのったらまっくらで～！おそとに出たらすごくキレイできいろいチョウチョウ見つけて！それで、それでね……。あれぇスミレ色のおねえちゃんは～？」

ハロルド「スミレ色の……？」

ソフィア「おねえちゃん……？」

コリン「うん！あのね、あのね！とってもつよかったのー！やさしくって、いいにおいがしてそれでね、パパとおんなじスミレ色のカミをしてたんだよ～！」

ソフィア「え……」

ハロルド「あの……その娘さんというのは……？」

ロイド「あっ、えっと……」

クロウ「私たちが捜しているときに、手伝ってくれた女の子がいたんです。外国の旅行者らしく身元は分からないんですけれど……」

ロイドが少し言葉に詰まったので、クロウがすかさずハロルドさんに答えた。

ハロルド「そうでしたか……」

ソフィア「そんなことって……」

コリン「もういちど会いたいなぁ……そうしたらもういちど……。すー……すー」

コリンはもう一度眠りに入ったようだ。

ハロルド「コリン……」

ロイド「寝かせたままで大丈夫です」

ハロルド「ありがとうございます。それにしても私と同じ髪の色の娘さんか。これも女神（エイドス）とあの子の導きかもしれないな」

ソフィア「ええ、私もそう思います……」

ロイド「その、何か事情がおありみたいですね？」

ハロルド「ああ、いえ……」

ソフィア「……あなた、私は大丈夫です。ここまでしていただいたのですから、少しは事情を話さないと……」

ハロルド「……そうだな」

数秒の黙想ののちハロルドが語る。

ハロルド「私たち夫婦には、かつて娘が一人いました。もう7年以上前のことです」

ロイド「あ……」

エリィ「その、いたというのはやはり……」

ハロルド「はい、不幸な事故で。いえ……事故ではありませんね。あの子は……私たちが殺したようなものだったんです」

衝撃の語り口に一瞬思考が止まった……。ハロルドの話は続く。

第６４話～ハロルド夫妻の過去～（前書き）

ハロルドさんが語った過去です。

第６４話～ハロルド夫妻の過去～

～ハロルド・語り手～

８年前。駆け出しの貿易商だった私は、拡大するクロスベルの貿易市場で何とか勝ち残ることに必死でした。その結果、共和国方面の危険な相場に手を出してしまい……多額の債務を負う事になったんです。幼い娘を連れながらの逃亡生活……。逃げども逃げども債務者に追われ私たちに安住の地はありませんでした。

このままでは悪名高いマフィアが出張ってきてしまうかもしれない。それを恐れた私たちは娘を旧(ふる)い友人の所に預けました。共和国に住む信頼できる友人です。すべて借金を片付けて完全に身奇麗になったところで娘を迎えに来るつもりだったんです。

幸い、頼りになる先生の助言で私たちは債務を整理する事が出来ました。コネやツテを生かして事業を立て直し、死にものぐるいで働いて何とか１年で、借金の全額を返済することに成功したんです。これでやっと娘に会える……。また一家３人で暮らすことができる……。そう思って預けた友人の元を訪ねたら……不審火だったそうです……。

その頃、組織だった放火強盗事件が共和国方面で頻発していたらしく……私の友人の家も被害に遭いました。友人の家は郊外にあったため当局による発見も遅れて、そして……預けていた私たちの娘もそれに巻き込まれてしまいました。

……私たちは半狂乱になって娘を探しました。ですが……遺体の

状況はどれも酷く結局、家にいた全員が亡くなったという検死報告しか伝えられませんでした。私たちの娘は……何物にも替え難い大切な宝物は永遠に失われてしまったんです。

私たちに残ったものは絶望しかありません。あの子を死の運命に追いやり私たちだけは生きているという現実、なんのために生きているのかも分からず、そのまま心中しようかとまで思いました。

そんな時判ったんです。妻があの子の弟を身篭っているということを……。現金なものでそれから私たちは生きる気力を取り戻しました。そののちコリンが生まれましたが、私たちは目をそらし続けていたんです。

自分たちの不甲斐なさのせいで、娘を亡くしてしまった痛みから、私たちが犯してしまった罪から。

オリ主たちの技設定（前書き）

今さら感が漂いつつありますがどうぞ。

ＣＰ＝クラフトポイント。いわゆる技を出すためのポイント。敵の攻撃を受けたり攻撃を当てたりすると増え最大２００まで増加する。

オリ主たちの技設定

クロウ

・瞬迅撃（しゅんじんげき）ＣＰ２０

高速で弾丸を撃ち込む。大円攻撃。最大１５体まで補足可能

・豪炎塵（ごうえんじん）ＣＰ１５

炎属性の弾丸を打ち出す。単体攻撃

・空雨烈破刃（くううれっぱじん）ＣＰ３５

空属性の弾丸を打ち込み身動きを取れなくして撃ち続ける。大円攻撃。最大８体補足可能。

・オーガクライ

体力を消費せずにＣＰを最大まで増加＋ＳＴＲ１５０％増加。その後即攻撃へと移れる。

・時空崩壊（じくうほうかい）ＣＰ１００～２００

時空の彼方に放り込んだ相手を異空間で切り刻む。即死確率７０％。単体攻撃

ミコト

・天羽（てんう）ＣＰ１５

４枚のチャクラムを同時に投擲。最大４体攻撃可能。混乱確率４５％。

・爆炎輪（ばくえんりん）ＣＰ２５

炎を纏ったチャクラムを投擲。単体攻撃。火傷確率４５％

・烈駆輪（れっくりん）ＣＰ２５

超回転するチャクラムを投擲。単体攻撃。封技確率５０％

・殺撃舞光輪（さつげきぶこうりん）ＣＰ１００～２００

瞬時に６枚のチャクラムを投擲し相手に反撃の隙を与えないまま死へと追いやる。大円攻撃。最大６体補足可能。即死確率８０％

アーツ技

クロウ

・ギガントレイジ：地属性最強のアーツ。全体攻撃。石化確率４０％

・エンドオブワールド：水属性最強のアーツ。全体攻撃。凍結確率６０％

・ロードインフェルノ：炎属性最強のアーツ。全体攻撃。火傷確率５０％。

・ラグナドリオン：風属性最強のアーツ。全体攻撃。封技＆封魔確率４０％

・ルシフェンウイング：時属性最強のアーツ。全体攻撃。即死確率４０％

・リーンカルナシオン：空属性最強のアーツ。全体攻撃。盲目確率４０％

・アルジェントアーク：幻属性最強のアーツ。全体攻撃。混乱６０％

ミコト

・ゴルゴンブレス：地属性攻撃。中円攻撃。石化確率３０％

・ハイドロカノン：水属性攻撃。直線攻撃。凍結確率４０％

・アラウンドノア：水属性。全体攻撃。凍結確率３０％

・アクアミラージュ：補助アーツ。中円補助。回避率７０％

・ティア：回復アーツ。単体回復。体力小回復＋火傷解除

・ティアオル：回復アーツ。単体回復。体力全回復＋火傷解除

・アセラス：回復アーツ。単体回復。蘇生＋体力７０％回復

・グロウライズ：補助アーツ。中円補助。暫くの間体力２０００＋ＣＰ３０回復

・ホーリーブレス：回復アーツ。全体補助。体力全回復

・デススパイラル：時属性攻撃。大円攻撃。即死確率４０％

・アヴァロンゲート：幻属性攻撃。全体攻撃。混乱確率６０％

オリ主たちの技設定（後書き）

本来のアーツには無い効果があったりしていますが間違えたわけじゃありません。あと載せてはいませんがクロウとミコトの装備は何気にゼムリアストーンで出来た武器・武具を着ています。ここは名前を考えられなかったので後書きにて失礼します。

第６５話～レンの気持ち～

ハロルドの過去話が終わった。

ソフィア「……」

ハロルド「これが私たち夫婦の背負った罪です。すみません……長々とつまらない話を……」

ロイド「そんなことが……」

エリィ「その……何て言ったら……」

ランディ「因果な話ッスね」

ティオ「……」

クロウ「……」

ハロルドの話を聞いたメンバーは、その場の雰囲気が暗くなるのを止めることはできなかった。

ソフィア「ですが……この子が大きくなり、娘の面影を次第に見せるようになるにつれていつしか私たちは罪悪感に苛(さいな)まれるようになりました。……あの小さな手を手放さなければよかった。苦しくても、辛くても親子で一緒にいればよかった。そんな後悔ばかりをするようになっていったんです……」

ハロルド「そこで私たちは改めてこう思い込むことにしました。コリンを授かることができたのは亡き娘と女神（エイドス）が導いてくれたから。だからこそ私たち一家は……絶対に幸せにならなくてはいけない。それが娘に報いることができるたった一つの方法なんだと……身勝手な理屈なのは百も承知しているのですが……」

ティオ「……それもまた一つの考え方ではないかと」

ランディ「ああ、変に悔やんで立ち止まるより遥かにいいぜ」

ハロルド夫妻の暴露話にティオやランディは同意の意を示す。

ハロルド「はは……ありがとうございます。しかし不思議なこともあるんですね。コリンを助けてくれたお嬢さん……私と同じ髪の色だったそうですが。……亡くなった娘もスミレ色の髪の毛だったんですよ」

クロウ「そうでしたか……」

ソフィア「ええ……まるでコリンを見守ってくれたみたいで。あの皆さん。そのお嬢さんを見かけたらどうか連絡をいただけませんか？改めてお会いして……心からのお礼を伝えたいんです」

ロイド「判りました。……もし連絡が付いたら、必ずあの子に伝えます」

それからコリンが目を覚ますまで、他愛もない話をしていた。夕方、コリンは目を覚まして両親に手をひかれながら支援課の裏口から自宅へと帰っていった。

～支援課ビル・ロイドの部屋～

ロイド「……帰ったよ。もう出てきても大丈夫だ」

ロイドたちは、いままでハロルド夫妻がいた部屋のクローゼットに隠れていたレンに声をかける。

レン「……」

話を聞いていたレンの気持ちは複雑なものだろう。黙ったまま俯き気味にクローゼットの中から出てきた。

ティオ「レン、さん……」

クロウ「……」

ロイド「……良かったのか？追いかければまだ間に合うと思うけれど……」

レン「ううん、いいの……。レンがこの街に来た理由の一つが無くなったから……。だからこれでいいの」

無理してロイドたちに笑顔を見せたレン。だけどその表情は痛々しい笑顔だったのは言うまでもないことだ。

ロイド「そうか……」

エリィ「そんな！本当にそれでいいの？レンちゃん、どう考えてもあなたは……」

ランディ「止めとけ、お嬢。世の中には真っ当な人間には想像も付かない事情だってある。他人が口出せることじゃねぇ」

エリィ「そ、それは……」

ティオ「……私も、同感です」

ロイド「……」

レン「ふふっ、そんな顔をしないで。ありがとう、お兄さん。レンの帰り道を邪魔している幾つもの大きな岩その一つを取り除いてくれて……」

ロイド「そっか、力になれたのなら光栄だよ」

レン「お姉さんたちにも感謝しているわよ。今日のお礼はいずれ、ちゃんとさせてもらうから。だからレンはこれで失礼するわね」

レンはそう言うと、ワンピースの裾をもち優雅にお辞儀をしてロイドの部屋を後にする。

ロイド「あ……」

レンの後を追ってロイドたちも部屋の外に出るがレンは、一度も振り返らず裏口から出ていった。

エリィ「……本当に良かったの？追いかけていって保護しなくて……」

ロイド「ああ、もちろんそれは考えたけど。でもそれは俺たちの

役目じゃない気がしたんだ」

ランディ「へえ……？」

ティオ「ロイドさんお得意の推理ですか……？」

ロイド「いや推理というか……」

？？？「あの～、ごめんください」

階下から誰かの声がする。どこかで聞いたことがあるような声だ。

第６６話～涙、新たな決意～

支援課の玄関に降りるとそこにいたのはエステルとヨシュアの二人だった。

エリィ「あら……」

ロイド「君たちは……」

エステル「えへへ……こんにちは。いきなりゴメンね？連絡も無しに訪ねちゃって」

ヨシュア「お邪魔かと思ったんですが、至急確認したいことがあって……少しだけお時間を頂けませんか？」

クロウ「……」

ロイド「それは構わないけど」

ランディ「一体全体、なんの話だよ？」

ティオ「黒の競売会（シュバルツ・オークション）の件でしょうか？」

突然来た来訪者の質問に疑問を隠せないロイドら。クロウは何やら来た意味を知っていそうだけれども……。

エステル「うーん、あれはちょっと保留中っていうか……。そ、それよりも今日の午後ロイド君がある人物と一緒に歩いていたって

目撃情報を聞いたんだけど……」

ロイド「ある人物……？」

ヨシュア「スミレ色の髪の女の子だよ。多分白いドレスを着ていたと思うけど」

ロイド「えっと、それって……」

エリィ「レンちゃんの事、よね？」

エステル「っ！！」

ヨシュア「やっぱり……！」

ロイド「ちょ、ちょっと待ってくれ。あの子は君たちの関係者だったのか？」

ヨシュア「ああ、そうだよ。僕たちも数ヶ月ほど、顔を合わせていないけど。でもやっぱりまだクロスベルにいるんだな……」

エステル「あ……ははは……」

エステルはレンがここにいると知って、ペタンと床に力無く座り込んだ。

ヨシュア「エステル……？」

エステル「だ、大丈夫……安心したら気が抜けちゃって……。よーし、こうなったら容赦しないわよ。徹底的にマークをかけて絶対

にとっ捕まえてやるんだから！」

ランディ「おいおい、あのお嬢ちゃんも大人気だなぁ……」

ティオ「ヨナといい、凄いモテっぷりですね」

ロイド「えっと、まさかあの子……遊撃士ってわけじゃないよな？さすがに若すぎるし……色々と危ないこととしてそうだし」

ヨシュア「遊撃士ではないかな」

エステル「でも、あたしたちにとっては身内同然の大切な子よ。この半年以上……ずっとあの子を追っていたわ。あの子を捕まえて一緒の“家族”になるために」

ロイド「か、家族……？」

エリィ「それは深い事情がありそうね……」

エステル「そりゃあもう……。あたしもクロスベル来てからひと通り知っちゃったし……」

段々と声が小さくなってくるエステル……。

ヨシュア「ほら、君がそこでヘコたれててどうするのさ。ヘイワース夫妻の情報も集まったし、あの子の心を開かせるんだろ？」

エステル「う、うん。そうよね！」

ロイド「ヘイワース夫妻……ハロルドさんたちのことか？」

エステル「えええっ！ど、どうしてロイド君たちがその名前を知ってるワケ？」

ロイド「いや、それはこちらの台詞なんだけど……」

クロウ「今日あったことを説明したほうがよさそうだな」

ロイドたちは今日、起きたことを説明していった。エステルの様子がおかしいのに気づいたのは話も終盤に差し掛かりつつある時だった。

ロイド「……という訳で、ちょうど君たちとすれ違いであの子は帰っていったんだけど……」

ロイドが何かに気づく。

ロイド「ちょ、エステル？」

エステル「あ……や、やだなぁ……どうしてこんな……うぐっ……ひっく……ううっ……あああああああっ……」

エステルは溢れる涙を抑えきれずそのまま号泣した……。ヨシュアは、エステルを気遣い手を伸ばし肩に置いて優しく撫でる。

ヨシュア「エステル……」

エステル「ご、ごめんね。ヨシュア……それにロイド君たちも……。でもあたし、なんて言ったらいいか判らなくて。捨てられたんじゃないって……ちゃんと愛されていたんだって。あの子がやっと

辛くて哀しくて……優しい真実にちゃんと向き合うことができて」

エリィ「辛くて哀しくて優しい真実……」

クロウ「ハロルドさんの過去か……」

ヨシュア「幾つもの哀しい偶然と、誤解があったんだ。その結果……とても過酷な道を歩いてきたあの子は自分自身を騙すことにしてしまった。偽物の両親（パテル＝マテル）を作り出すことで真実を突き止めるのを放棄したんだ」

ランディ「なるほど、幼いゆえの自己防衛か……」

ティオ「ですが、それでは前に進むことができない。それどころか、帰るべき場所にも帰れない」

ヨシュア「うん……だからこそ僕たちは、彼女が真実に向き合える勇気を持てるように手助けするつもりだった。調べた限り、真実は哀しいものだったけどそこには確かな愛情もあったから……だからきっと今の彼女なら乗り越えられると思った。でももうその必要はないみたいだね」

ロイド「ああ……少なくとも彼女は全てを理解したみたいだったよ」

ヨシュア「そうか……ありがとうロイド。それに支援課の皆さんも。何てお礼を言ったらいいか」

ロイド「はは……気にしないでくれよ。成り行きみたいなものだったし、あの子には世話になったからさ」

エリィ「ふふ、確かにそうね」

エステル「ぐすっ……うん、決めた！！」

今まで泣いていたエステルが何かを決意したようだ。

エステル「最大の障害が無くなった以上、もう手加減してあげないんだから！見てなさいよ～、レン！このまま外堀を埋め尽くした上で絶対にウチの子にしちゃうからね！」

クロウ「あはははは……」

ランディ「いや～何だか知らんがそれでこそエステルちゃんだぜ」

ティオ「なんというか……眩しすぎます」

ヨシュア「調子に乗った時のエステルほど怖いものはないからなぁ」

エステル「皆さん、改めてお礼を言わせてください。本当にありがとうございました」

エステルは深々と頭を下げた。

ヨシュア「今後、僕たちの力が必要ならいつでも遠慮なく言って欲しい。もうお互い警察とか遊撃士とかわだかまりなんて無いだろうしね」

エステル「うんうん！全力で協力させてもらうわ」

ロイド「はは……分かった。いざと言うときには本気でアテにさせてもらうよ」

その後、ロイドとエステルたちは東通りにある“龍老飯店”へと向かい夕食を共にして互いに親睦を深めた。故郷“リベール王国”で起こった『異変』の真相とその顛末。そしてレンという少女が属している“結社”という謎の組織について……驚きに満ちた様々な情報を聞きながら記念祭四日目の夜は更けていくのであった。

第６６話～涙、新たな決意～（後書き）

次話はオリジナルでその“龍老飯店”での親睦の様子を想像しながら書いてみようかと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7164w/

碧い空に向かって

2011年11月27日02時17分発行